

平成26年度指定スーパーグローバルハイスクール 第5年次

# 平成30年度研究報告書

平成31年3月

青森県立  
青森高等學校

## 報告書の作成にあたって

この報告書は平成26年度から文部科学省の指定を受けて取り組んでいるスーパーグローバルハイスクール（SGH）事業の5年間の活動成果をまとめたものです。本校生徒の学習・研究活動に御協力いただいた大学・企業・団体・行政機関等の皆様、並びに御指導御助言くださいました運営指導委員の先生方に衷心より感謝申し上げます。

Society 5.0 が訪れようとするグローバル社会の中では、文系・理系の分野を問わず、広い視野を持って批判的に物事を捉え、新たな価値を創出していける行動力を身につけた人材が必要となっています。幸い本校は全国でも珍しく、SGHの指定後にSSHの指定を受け、Generalist 育成の色が濃いプログラムの中に、先端技術を学ぶ理系のカリキュラムが効率的に融合されました。この文理融合の探究学習の枠組みの中で、既存の価値にとどまらず生徒個々の多様な興味関心に応じた学習プログラムを提供することが可能になりました。生徒は異分野の発表を見て、コラボレーションの可能性を探ったり、新たな物事にチャレンジするアントレプレナーシップを身につけたりしています。また、様々な事業を効果的に利用し、他者との調整力や想定外の事態への対応力、企画力、協働力、責任感も養っています。その意味で「ロジスティクス戦略を視野に入れた人材育成プログラムの研究開発」を研究開発構想の核として始めた本校のSGH事業は、この5年間の社会の変化に柔軟に対応しながら、幅広い分野を扱いつつ、さらに深化を遂げたと考えております。

SGH指定からの5年間で事業やカリキュラムの充実に加え、指導方針の統一や評価方法の確立も図ることができました。一方で数値化できない生徒の変容も数多く目にし、生徒主体で考えるならば、個々の事業から得られるアウトプットもさることながら、自発的な活動を通して得られたアウトカムこそが重要であり、それが生徒の今後の人生のうえで有用なものであるということを改めて感じています。将来どのような分野で生徒が社会貢献するのかは数年後の判断に委ねるところではありますが、現在、海外で挑戦を重ねるSGH一期生の活躍を耳にするにつけ、この事業の成果は大きいと感じています。

リージョナル型に近い本校が地理的・物理的制約がある中で地域社会や企業、NPO法人、諸大学の皆様にお力を借りながら、グローバル社会を見据えて開かれた教育活動を実践できたこと、さらに持続的・発展的なカリキュラムの構築ができたことはSGH事業の大きな遺産であると考えます。また、事業の目標である「多様性の理解に基づき課題を設定する力、グローバルマインドに基づく企画力、理論と実践を融合する力」の育成を成し遂げながら、学校全体として統一された指導体制を確立する契機をいただきました。御協力いただいた関係諸兄に心より重ねて感謝いたします。

結びに、地域の重点校として、グローバル社会を主体的に生きる人材の育成と指導法の普及にこれまで以上に取り組んでいく所存です。引き続き、皆様方の御理解御協力をお願い申し上げます。

青森県立 青森高等学校  
校長 宍倉 慎次

## 目次

Chapter 1 概要・年間の流れ	1
Section 1 学校の概要	2
Section 2 スーパーグローバルハイスクール事業の概要	2
Section 3 教育課程	4
1 プロジェクト学習 I, II, III の内容	5
ア プロジェクト学習 IA	5
イ プロジェクト学習 IB・IC	5
ウ プロジェクト学習 II A	5
エ プロジェクト学習 IIBF	5
オ プロジェクト学習 IIBD	5
カ プロジェクト学習 III	6
キ SDGs の概念の導入	7
Section 4 今年度の事業	8
1 実施時期と名称	8
2 事業の説明	9
Chapter 2 5年間の変遷	27
Section 1 対象生徒と教育課程	28
1 SGH 対象生徒の変化	28
2 教育課程上の特色	28
Section 2 中間評価	29
Section 3 改善点	29
1 事業の見直し	29
ア 視野を世界に広げる工夫についての改善	29
イ 講演会の数・目的の明確化	30
事業の変遷	31
ウ 評価の実施状況	32
エ ポートフォリオの導入	32
Section 4 プロジェクト学習の変化	33
1 平成 26 年度	33
2 平成 27 年度	34
3 平成 28 年度	35
4 平成 29 年度	36
5 平成 30 年度	37
Chapter 3 教材	38
1 教材開発数	39
2 教材の例	39
ア プレゼンテーション	39
イ 表現探究	40
ウ 地域・国際理解	41
エ 課題設定	42
オ プロジェクト学習 II BD	42
(1) 模擬国連	42
(2) バーチャルユースフォーラム	44
カ オリエンテーション	45
キ SDGs	47
Chapter 4 評価・実績	48
Section 1 英語技能試験	49
Section 2 アンケート結果	50
1 生徒・保護者・教員共通の質問	50
2 生徒対象の質問	62
3 海外研修参加者への質問	67

Section 3 CAN-DO リスト	73
1 青森高校 CAN-DO リスト	73
2 SGH の目的と CAN-DO との関連性	74
3 CAN-DO リスト自己評価の結果	75
4 CAN-DO リスト自己評価の分析と生徒像	77
Section 4 学びみらい PASS PROG-H	80
1 河合塾学びみらい PASS PROG-H スコア	80
2 PROG-H と本校 CAN-DO リストの相関	81
Section 5 青高力	82
1 「青高力」の導入	82
2 「青高力」と教育活動の紐付け	83
3 「青高力」ルーブリック	84
4 「青高力」ルーブリックを用いた自己評価	85
Section 6 卒業後の留学状況	88
Section 7 教員以外による客観的評価	89
Section 8 仮説検証	92
1 (仮説1)「多様性の理解に基づき課題を設定する力」の育成	92
2 (仮説2)「グローバルマインドに基づく企画力」の育成	93
3 (仮説3)「ビジネスモデル開発による理論と実践を融合する力」の育成	93
Chapter 5 運営指導委員会会議録	94
Chapter 6 総括	99
Section 1 概要	100
Section 2 経費	102
Section 3 平成 31 年度以降の事業	103
1 カリキュラム	103
2 探究学習	103
3 事業の精選	104
4 海外研修	105
5 新規検討事項	106
6 重点校事業	106
Section 4 課題	107
1 予算	107
2 ICT 活用の限界	107
3 大学受験とのバランス	107
4 ワーキングバランス	108
Section 5 SGH の有益性	108
1 精神力	108
2 思考力	110
3 コミュニケーション能力	111
4 進路選択	112
Section 6 運営指導委員の総括	114
同志社大学政策学部 教授 山谷 清志氏	114
城西国際大学経営情報部 客員教授 神田 正美氏	118
東京大学海洋アライアンス海洋教育促進研究センター 特任教授 日置 光久氏	120
岩手大学 准教授 木下 幸雄氏	121
和歌山大学経済学部 准教授 竹内 哲治氏	122
Chapter 7 資料	124
1 組織図・業務	125
2 生徒の研究テーマ	126
3 バーチャルユースフォーラム生徒成果物	132
4 安全対策	146
5 外部連携のための資料	148
6 外部講師リスト	148





## **Chapter 1**

### **概要・年間の流れ**

## Section 1

### 学校の概要

あおもりけんりつあおもりこうとうがっこう

- 1 学校名 青森県立青森高等学校  
校長名 宍倉 慎次
- 2 所在地 青森県青森市桜川8丁目1番2号  
電話 017-742-2411 (FAX017-742-6074)
- 3 課程・学科・学年別生徒数・学級数及び教員数

図表1

課程	学科	第1学年		第2学年		第3学年		計	
		生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
全日制	普通科	281	7	282	7	273	7	836	21

校長	教頭	教諭	養護 教諭	実習 講師	臨時 講師	非常勤 講師	事務 職員	技能 技師	技能 主事	ALT	計
1	2	50	2	1	3	1	7	0	2	1	70

## Section 2

### スーパー グローバル ハイスクール 事業の概要

#### 1 研究開発構想名

ロジスティクス戦略を視野に入れた人材育成プログラムの研究開発

#### 2 研究開発の概要

グローバル・リーダー育成のためには、「多様性の理解に基づき課題を設定する力」、「グローバルマインドに基づく企画力」、「理論と実践を融合する力」の3つの力が必要である。そこで、青森県ロジスティクス戦略を視野に入れ、「外国人との交流」、「外国人との協同学習や海外経験」、「ビジネスモデルの開発」に関する実践活動を通してグローバル・リーダーに求められる資質・能力と意志を身につける。今年度はSDGsとゼミ研究の関連付け、持続可能なグローバル教育の推進と連携方法の確立、表現探究（英語）の導入、つけたい能力と評価・指導場面の見直し、普及活動という五つの柱を軸に研究開発のさらなる推進を図った。

### 3 目的・目標

ア 目的 グローバル・リーダー育成プログラムの研究開発

イ 目標

- (1) 異なる価値観や文化的背景を理解することで課題を認識し、設定する能力を育成する。
- (2) グローバルマインドに基づく企画力を育成する。
- (3) ビジネスモデルの開発により、理論と実践を融合する力を育成する。

### 4 研究開発の仮説

(仮説1)「多様性の理解に基づき課題を設定する力」の育成

外国人との交流を通じて、異なる価値観や文化的背景を理解することで課題を認識し設定できる。

(仮説2)「グローバルマインドに基づく企画力」の育成

外国人との協同学習や海外経験を通じて、グローバルマインドに基づく企画力が育成される。

(仮説3)「ビジネスモデル開発による理論と実践を融合する力」の育成

大学教員、外国人、NPO等外部機関からの意見、助言を踏まえてビジネスモデルの開発を行うことにより、理論と実践を融合する力が育成される。

図表 2

### 5 対象生徒

学 年	人 数	所 属
3 学年	1 1 2	文型 3 クラスに分散し、青森発グローバルビジネスモデルゼミに所属
2 学年	1 1 1	文型 3 クラス全員を対象とし、海外研修グループ (IIBF・37名)と、国内研修グループ (IIBD・74名)にそれぞれ所属
1 学年	2 8 1	全員所属

### 6 学校設定科目

ア 「SGH プロジェクト学習 I」

- (1) 位置づける教科名：SG
- (2) 単位数：3 単位
- (3) 適用の範囲：1 学年生徒全員 (2 8 0 名)

イ 「SGH 世界史」

- (1) 位置づける教科名：地理歴史
- (2) 単位数：3 単位
- (3) 適用の範囲：2 学年文型生徒全員 (1 1 1 名)

※ 2 学年文型全員は総合的な時間 (プロジェクト学習 II) を 2 単位実施する。

※ 3 学年文型生徒は総合的な時間 (プロジェクト学習 III) を 1 単位実施する。

# Section 3

## 教育課程

入 学 年 度			30	29		28		
学 年			1	2		3		
教科	科 目	標準\類型	SGH	文型(SGH)	理型(SSH)	文型A(SGH)	文型B(SGH)	理型
国 語	国 語 総 合	4	5					
	現 代 文	B 4		2	2	2	2	2
	古 典	B 4		3	2	3	3	3
地 理 史	世 界 史 A	2			2			
	世 界 史 B	4				△	4	4
	日 本 史 A	2		○	2			
	日 本 史 B	4			○	2	△	○
	地 理 A	2		○				○
	地 理 B	4			○	△		○
	※ SGH 世 界 史				3			
公 民	現 代 社 会	2	2					
	倫 理	2				2		
	政 治 ・ 経 済	2				2		
数 学	数 学 I	3	2					
	数 学 II	4	1	4	3			
	数 学 III	5			1			7
	数 学 A	2	2					
	数 学 B	2		2	2			
	※ 数 学 探 究 I	5				5	5	
理 科	科 学 と 人 間 生 活	2						
	物 理 基 礎	2	2					
	物 理	4			○	2		◇
	化 学 基 礎	2		2	2			
	化 学	4			2			4
	※ 発 展 化 学 基 礎	2				2	2	
	生 物 基 礎	2	2					
生 物	4			○			◇	
※ 発 展 生 物 基 礎	2				2	2		
体 育	体 育	7~8	2	3	3	2	2	2
	保 健	2	1	1				
芸 術	音 楽 I	2	△					
	音 楽 II	2		△	△			
	美 術 I	2	△	2				
	美 術 II	2		△	1	△	1	
	書 道 I	2	△					
	書 道 II	2			△	△		
外 国 語	コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン 英 語 I	3	4					
	コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン 英 語 II	4		4	4			
	コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン 英 語 III	4				4	4	4
	英 語 表 現 I	2	2					
	英 語 表 現 II	4		2	2	3	3	2
家 庭	家 庭 基 礎	2	2					
情 報	社 会 と 情 報	2						
SG	※ SGH プロジェクト学習 I		3					
	※ 表 現 探 究			1				
SS	※ S S 探 究				2			
	※ S S 創 造							
総 合 的 な 学 習 の 時 間		3 ~ 6		2		1	1	1
合 計			32	32	32	32	32	32
ホ ー ム ル ー ム 活 動 ( 週 )			35	35	35	35	35	35

図表 3

※は学校設定科目である。○印は2科目から1科目、△印は3科目から1科目をそれぞれ選択する。◇印は2学年から継続して選択履修する。

1学年では数学 I 履修後、数学 II を、2学年理型では数学 II 履修後、数学 III を履修する。

1学年の総合的な学習の時間・社会と情報は「SGHプロジェクト学習 I」で代替する。

2年文型の「世界史A」は「SGH世界史」で代替する。

2年理型の「化学」は、先に化学基礎を、その後で化学を履修する。

2年理型の総学と保健の時間は「SS探究」で代替する。

## 1 プロジェクト学習 I, II, III の内容

### ア プロジェクト学習 IA (1～3 学年対象・1 単位)

これまでの学年縦断型のプログラムを廃止し、学年独立のシステムを導入。

1 学年：調査の手法を学ぶ。課題設定をする。

1 学期：SDGs の「貧困をなくそう」をテーマに、全員が調査活動・討論・解決策の発表を行い、様々な貧困の形態とそれを取り巻く多様な課題について認識を深めた。

2 学期：5 つの分野

Global

Good Health & Well-being

Quality Education & Well-being

Mathematics & Information & Integration

Ecology & Energy & Environment から一つ選択し、調査・討論・解決策の発表を行った。

3 学期：面談を通してテーマ（課題）を決定した。これら一連の活動により、「多様性の理解に基づき課題を設定する力」を身につけた。

### イ プロジェクト学習 IB・IC (1 学年全員対象・各 1 単位)

プロジェクト学習 IA との連動を強化。プロジェクト学習 IA の技術的支援の要素を濃くし、情報科教員、担任・副担任が常時指導にあたった。

### ウ プロジェクト学習 IIA (正式名称：「総合的な学習の時間」 2 学年全員対象・1 単位)

文理融合型の課題解決型学習。通称「ゼミ」。5 分野に分かれ、今年度は 80 のテーマのもと小グループで学習を行っている。教員はあくまでも生徒の補佐にとどまり、生徒はグループ単位でフィールドワークや、外部講師の招聘などを行い、11 月のポスター発表、2 月のゼミ代表発表会、3 月のゼミ内発表会を行った。調べ学習やグループ内の話し合いにとどまらず、フィールドワーク等で検証することで、「理論と実践を融合する力」と「グローバルマインドに基づく企画力」を身につけた。

### エ プロジェクト学習 IIBF (正式名称：「総合的な学習の時間」 2 学年文型・海外研修者 37 名対象・1 単位)

海外研修を行う生徒は、プロジェクト学習 IIA と連動し集中的に学習することで研究の深化を図った。

### オ プロジェクト学習 IIBD (正式名称：「総合的な学習の時間」 2 学年文型・国内研修者 76 名対象・1 単位)

国内にしながらグローバルな意識・能力を身につけるために次の事業を行った。一連の活動をとおして、SGH の目標である「異なる価値観や文化的背景を理解することで課題を認識し、設定する能力を育成する。」「グローバルマインドに基づく企画力を育成する。」「ビジネスモ

デルの開発により、理論と実践を融合する力を育成する。」を達成できたと考える。

#### 4月 バーチャルおもてなし

アメリカからイスラム教徒の女性がホームステイに来るという設定のもと、2泊3日のおもてなしプランを策定する活動。この活動をとおして、宗教の違いや生活習慣の違いに気づくとともに、企画力を養った。

#### 5月 模擬国連

50分の授業時間内で行えるよう、全10回に分割して実施した。核兵器の廃絶に関し、各国の代表として決議案の採択に向けて調査・交渉等を行った。この活動で社会問題に対する理解、論理的思考力、交渉力、リーダーシップ、スピーチ力を得た。

#### 10月 バーチャルユースフォーラム

青森県に世界各国から高校生を集め、フォーラムを開くための企画づくり。教員は条件書を提示するだけで、生徒が予算立て、人員配置、物品調達、スケジュール調整、外部（架空）とのやりとりを行う。クラス毎にプランを立て、2月のコンペ優勝を目指す。コンペでは外部の審査員と聴衆が投票を行い、順位をつける。活動の途中で青森中央学院大学の留学生9名からアドバイスを受け、より現実的なプランに近づけた。この活動はJICA職員や複数の大学教授から完成度の高いPBL学習であるという評価を得ている。この活動で「グローバルマインドに基づく企画力」、後述の③エ・カの実践学習では、「理論と実践を融合する力」の育成ができたと考えている。

#### コンテスト審査員感想

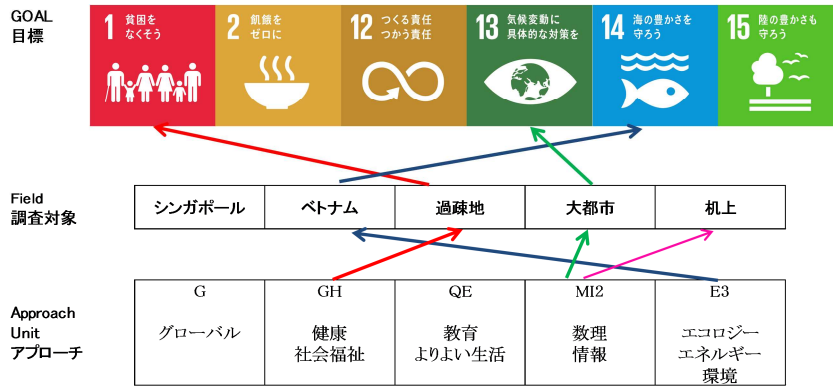
- ・プラン作成だけでなく、希望者対象でも実際に運営できる機会があるのはとてもよいことだと思います。また、先生方のアドバイスはなかったと伺い、大変驚きました。特に、予算書の作成は、大人のアドバイスなしには書けないだろうと思っていましたので。
- ・10分間の発表の中では話しかれないほど、たくさんのことを調べてきたのだろうと感じました。大学生や大人がやるような内容を、しかも先生方の支援なしにここまで企画されて、本当にすばらしいと思いました。
- ・外務省で、全く同じような作業を翌朝までやっていたのを思い出しました。将来、様々な国際舞台で企画・運営の仕事に携わる生徒さんも多いと思いますが、その練習にもなったかもしれません。内容に関してはこちらが質問するところは、ほんの一部分しかありませんでした。それくらい完成度が高いと思いました。
- ・スタッフマニュアルは、大変分かりやすく、県庁や企業の職員が作られたものとほぼ同じで本当に驚きました。発表をお聞きして、きめ細やかな配慮もなされていることも分かりました。

### カ プロジェクト学習Ⅲ（正式名称：「総合的な学習の時間」 3学年全員対象・1単位）

前年度までグループ単位で研究していた内容を個人レベルの研究に引き上げ、レポートを完成させた（別添生徒論文集参照）。海外フィールドワークに参加した生徒は英語でのレポート作成を行った。

## キ SDG s の概念の導入

生徒の幅広い興味・関心と SDG s を融合するため、次の概念のもと、ゼミ活動を展開している。



図表 4

## Section 4

### 今年度の事業

#### 1 実施時期と名称

図表 5

時期	名 称
4月	教員対象説明会
	オリエンテーション①
	オリエンテーション②
	ポスターセッション
5月	青森中央学院大学主催「青森の未来とSDGsをつなぐ」
6月	起業・ビジネスモデル策定ワークショップ①
	ALT留学生へのインタビュー
7月	1 学年テーマ研究発表会①
	即興型英語ディベート青森県交流会
8月	海外航路乗客へのインタビュー活動
9月	JICA主催 2018年度青年研修「アフリカ（仏語）・アグリビジネス/アグリエコツーリズム」
	第1回 運営指導委員会
	青森中央学院大学日本語スピーチコンテスト
	普及活動①平成30年度SGH事業に係る「模擬国連研究会」
10月	青森県青年国際交流機構主催 内閣府「国際青年育成交流事業」地方プログラム
	台湾教職員との情報交換
	普及活動②平成30年度SGH事業に係る「課題設定のための研究会」
	Jeju Youth Forum 参加
11月	2年ゼミによるポスターセッション
	青森中央学院大学留学生との交流会
	SGH・SSH2年海外フィールドワーク事前発表会
12月	普及活動③平成30年度SGH事業に係る「口頭による英語表現の研究会」
	起業・ビジネスモデル策定ワークショップ②
	バーチャル ユースフォーラム アドバイス会
	1学年テーマ研究発表会②
	青森県主催 グローバル実践力発揮プログラム シンガポール派遣
	2018年度スーパーグローバルハイスクール（SGH）全国高校生フォーラム
	三沢基地内エドグレン高校生との交流会 事前学習会
	パーラメンタリーディベート人財育成協会主催 第4回 PDA高校生即興型英語ディベート全国大会
	三沢基地内エドグレン高校生との交流会
青森県主催 グローバル実践力発揮プログラム 台湾派遣	
2月	海外フィールドワーク
	青森県主催 深い学び合同発表会
	TOEIC実施
	第2回 運営指導委員会
3月	ゼミ代表とSGH・SSH海外FW事後発表会、自然科学部によるプレゼンテーションコンクール
	バーチャルユースフォーラムコンテスト
	西東京国立三大学高校生グローバルスクール
	全国スーパーグローバルハイスクール課題研究発表会（SGH甲子園）
	2019 東北地区 SGH課題研究発表フォーラムin杜の都



## 2 事業の説明

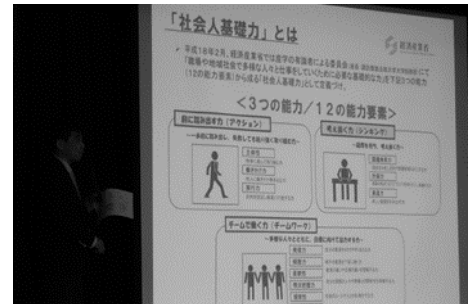
### April

ア 教員対象説明会 4月5日 於 青森高等学校会議室

年度初めに当たり、プロジェクト学習の展開や目的、社会背景等について情報と意識の共有を行った。教員48名参加。

### イ オリエンテーション①

4月11日 於 青森高等学校第一体育館  
探究学習の意義、身につけるべき力、プロジェクト学習 IA, IB, IC の内容、課題研究の特徴、社会貢献、SDGs、Society5.0 の概要、社会人基礎力について説明を受けた。1学年生徒280名参加。



### ウ オリエンテーション② 4月12日 於 青森高等学校第一体育館

今年度のグループ編成、身につけるべき力、プロジェクト学習 IIA, IIB, IIF の内容、SDGs、企業訪問について説明を受けた。

### エ オリエンテーション②

4月13日 於 青森高等学校第一体育館  
探究学習のスパイラルについて説明を受けたのち、市街地活性化をテーマに課題設定、仮説、検証方法の考察等のステップを模擬的に体験した。



### オ ポスターセッション 4月26日 於 青森高等学校第一体育館

3学年海外フィールドワーク参加者による英語によるポスター発表を1学年生徒が聞き、意見交換を日本語で行った。発表生徒は聞き手の理解度に合わせて英語を使いわけ、相手を意識した発表を行う機会となった。1学年生徒はポスター発表の仕方を学んだ。



## May

### ア 「青森の未来と SDGs をつなぐ」 第1回

5月26日 於 青森中央学院大学

青森中央学院大学主催のワークショップに参加。SDG カードゲームを通して、日常の人間の活動が環境に及ぼす影響と、協力の大切さ、身近でできることについて学んだ。講師：GiFT 鈴木大樹氏、辰野まどか氏。 本校2学年生徒1名、1学年17名のほか他校高校生、市内在住の留学生、ALT を合わせ約50名が参加。



## June

### ア 「青森の未来と SDGs をつなぐ」 第2回

6月9日 於 青森中央学院大学

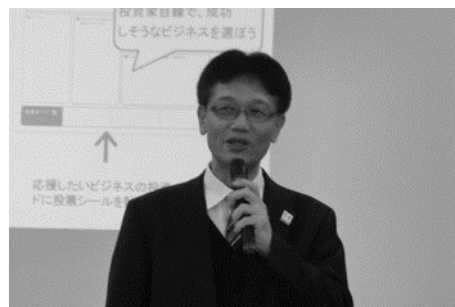
青森中央学院大学主催のワークショップに参加。海外で働くことや、留学の意義、新しいことに挑戦する志などについて意見交換を行った。講師：おひさまプロジェクト 菊池昌子氏、本校教諭他。本校2学年生徒1名、1学年17名のほか他校高校生、市内在住の留学生、ALT を合わせ約50名が参加。



### イ 起業・ビジネスモデル策定ワークショップ①

6月14日 於 青森高等学校

持続可能な社会事業をビジネスとして成立させるための手法とアイデアをワークショップを通して学んだ。2学年海外フィールドワーク参加者37名参加。講師：野村ホールディングス株式会社 コーポレート・シティズンシップ推進室 金融リテラシー推進課ヴァイスプレジデント 酒井 賢一 氏



## ウ ALT 留学生へのインタビュー

6月28日 於 青森高等学校

以下の目的のもと、英語による1対1の環境で、研究内容を披露し個別に意見を求めた。

①国籍にかかわらず、人によって考え方は違うということに気づく。②コミュニケーションギャップの存在に気づく。③外国の方から青森県産品・観光名所に対する意見を得る。④英語による説明が伝わるかどうかを確認する。(シンガポールでのフィールドワークに向けた実践練習を兼ねた。) 2学年海外フィールドワーク参加者37名、青森県・青森市 CIR、県内 ALT、青森中央学院大学留学生の計35名参加。

(協力：ストーン アビゲール カリスン氏、ロツツ リリー デラ氏、ヌエン ミンダオ クリストファー氏、ネポムセノ ジュニア ロウエル リガヤ氏、デルガド エンジェル ルイス氏、バンハトジェフ マーク氏、クラウリー サーシャ シャリーン氏、エングストローム ケルシー ベール氏、コ克蘭 アンナ エリザベス氏、フライ アリシヤ フェイ氏、ドルフィン ジョシュア マッケイ氏、ルーカス ケイレブ パトリック氏、バーンズティファニー アレクサンドラ氏、ニコラエワ マリア氏、アボット チャールズ氏、シュルツ ビクター ヘンリー氏、ファーマン アリソン ニコル氏、オルモ エレーナ マリー氏、アンディ・クリー氏、ピッツ・ジャスティン・サミュエル氏、カドーガン イファ氏、シッティショック ルンルタイ氏、タマパンヤー アシャピット氏、シースワン アピラーパー氏、シーワシッティヤーノン ウォンサトン氏、ショートシャワーラーノン ドウアンルタイ氏、グエン ゴック フオン チャン氏、ド ドック タム氏、レ チャン ニャット クアン氏、グエン ティ ミン ニャン氏、レ トウアン ラム氏、チン フオン ウエイ氏、クリントン ウィー ジャン ション氏、ピーター・クリヴァチョ氏)



## July

### ア 1学年テーマ研究発表会①

7月13日 於 青森高等学校

1学期を通して、SDGsの「貧困をなくそう」をテーマに調査活動、意見交換を行い、それらの活動をとおしてまとめた提言をクラス毎に発表した。1月年生徒280名参加。助言者：GiFT 木村大輔氏、JICA 大場由太氏。



## イ 即興型英語ディベート青森県交流会

7月28日、29日 於 青森高等学校

県内7校より1・2学年生徒37名参加。即興型の英語ディベートを行った。29日には参観の教員14名に対し、ディベートのルールとジャッジのポイントについて説明を行った。講師：一般社団法人 パーラメンタリーディベート人財育成協会 推進委員

長 大賀 隆次氏、PDA 推進員北田 瑞希氏、渋谷 哲平氏、安藤 孝太氏他。なお、ディベート大会は本校の運営方法を受け継ぎ、来年度からは青森県高教研英語部会が主催することとなった。



## August

### ア 海外航路乗客へのインタビュー活動

8月3日 於 新青森埠頭・市街地

旅客船の乗客に対し、英語で聞き取り調査を行った。のべ約220件の回答を得た。外国人と話す機会がない地方都市の高校生には必須の事業であり、生徒からは以下の感想があった。

- ・ダイヤモンドプリンセスの乗客への英語でのインタビューを通して、気持ちの面で大きく成長することができました。初めはなかなか自分から話しかけていけず、ためらいがちになっていましたが、話していく内に英語を使って話すのが楽しくなり、積極的に英語でインタビューしていけるようになったと思います。また、インタビューしていくうちに、日本と外国の人の考え方、コミュニケーションの違いにも気づきました。日本人は初めての人と話すのはあまり好まないような感じがしますが、外国の人たちは、インタビューされた時に笑顔で答えてくれて、初めて話すような人でも気にせず話しているような印象を受けました。このインタビューを通して、今後の課題として海外の国の配達制度についてより深く知りたいということ、英語でも不自由なく話すことができるようになりたいということを思いました。今回学んだことを今後の活動に生かしていきたいです。
- ・外国人と英語で会話するという行為はとてつもなくハードルが高いと思っていた。特に話しかける瞬間は恥ずかしかったり、自分の英語が伝わらなかつたらとさまざまな思いがあったが、一度話しかけてからは臆することなく話しかけることができるようになっていた。実際にシンガポールを訪れたときの予行として本当に良い経験だった。
- ・私は活動前、英語に不安があったので正直少し憂鬱でした。しかし実際活動して、自分の英語が予想以上に伝わったことに感動と喜びを感じました。英語が学校の勉強を越えて、相手と意思疎通を図るツールであるのだということを体感できたと思います。開始直後は自分から積極的に話しかけられませんでした。回数を重ねていくと恐れずどんどん声をかけられるようになりました。伝われば伝わるほど自信になったし、純粋に



会話が楽しくて、もっと色々な方と話したいと思えるようにもなりました。

## September

### ア JICA 主催 2018 年度青年研修「アフリカ (伝説) ・ アグリビジネス/アグリエコツーリズム」企画・運営

9月11日 於 青森高等学校

国内研修者向けのプログラムである「バーチャルユースフォーラム」の実践学習として実施。180分の文化交流の企画・運営を行った。教員は予算や実施日時等の条件を提示するのみにとどまり、生徒が予算立て、スケジュール調整等を含めた全てを担った。プロジェクト学習 IIBD で養った企画力を実際の場で十分に発揮することができた。1・2学年35名参加。JICA 青森デスク、プロワークス十和田との協働による。



以下は生徒の感想である。

- ・今回の JICA アフリカおもてなしプロジェクトでは、アフリカの文化や、コミュニケーション力の重要性を学ぶことができた。アフリカの人達は、お茶に砂糖を入れて飲むのが当たり前であるという文化を知った事、また、「アフリカの人達は、英語が通じず、フランス語しか通じない」と聞き、自分が上手にコミュニケーションを取ることができると心配になったが、実際は簡単な英語が通じ、意志疎通ができ、嬉しかった事が印象的だった。今回の経験を生かして、人とコミュニケーションを取るときは、笑顔で堂々とする事を意識しようと思った。また、海外の人達と円滑に意志疎通ができるように英語力や、その他の語学力をより身に付けられるよう、日々精進していきたい。
- ・JICA のこのプロジェクトはとても有意義なものであり、また自分を大きく成長させてくれたものになりました。本当にありがとうございました。準備期間はとても忙しいものとなり、途中でやりたくないなと思うときもありました。しかし私の仕事はタイムテーブルの作成と経理の仕事でありこの仕事はミスが許されないものでした。そのため、妥協はせずに、このプロジェクトを成功させ、アフリカの皆様に楽しんでいただけるようにと思い全力で活動してきました。途中、難しいことも数多くあり成功するのかどうか本当に心配でした。ですが、生徒達が協力して成功に向かって活動できたので今日は成功したと思います。今回の活動で私は大きく成長できたと感じています。一つ目はミスが許されない仕事をしたことで責任感がつきました。また、その



仕事の上でパソコンを多く使ったので情報処理能力も上がったと思います。二つ目は、仕事を人に頼む力です。私は1人で仕事をして忙しいことが多かったのですが、先生の助言もあり、仕事を任せられるようになりました。

- ・青高×JICAのプロジェクトを終えて、計画を立てるときに逆算して考えていくことがいかに大切かを学びました。当日のことですが、私達青高生とアフリカの方々の間にある言葉の壁は大きいと感じました。特にディスカッションでは、言葉が通じない分、実物を用意してどうにか伝えられた気がします。私達が伝えなかった日本の素晴らしさが彼らに伝わっているのであれば幸いです。また、英語の書く学習はもちろん、話す学習も強化していきたいと思いました。最後に、この企画を通して、次に繋がる要素やこれからの生活で活用できる事がたくさんつまっていると考えています。
- ・このプロジェクトに参加して良かったと、心からそう思います。それは知識を経験から得られ、また、自分の力を磨くことができたからです。例えば、時間の管理の仕方や自分の意見を言う大切さを知っているつもりだったけれど、まだまだ甘かったこと。連係を意識して時間を逆算すること、疑問に思ったことをその場で言わないと、後からその何倍にもなってダメージが返ってくることを知りました。
- ・今回のアフリカのプロジェクトに参加して、多くのことを学び、自分自身も成長することができたと思います。

このプロジェクトは1からのスタートだったので、初めは何をすればよいか分からず、話し合いが全く進まないこともありましたが、しかし、会議を重ね、いろいろな意見を出すことで、よりよい計画を立てることができたと思います。また、本番から逆算し、すべきことや用意しなければならない物の日程を決める逆算の考えも身につきました。

#### イ 第1回運営指導委員会 9月20日 於 青森高等学校

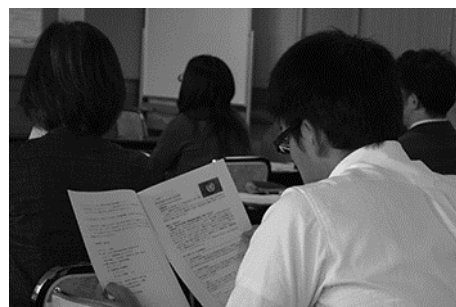
詳細は Chapter 5 に記す。

#### ウ 青森中央学院大学日本語スピーチコンテスト 9月22日 於 青森中央学院大学

留学生による日本語スピーチコンテストの審査員として1学年生徒2名が参加。マルチリンガルの重要性を学んだ。

#### エ 普及活動①平成30年度SGH事業に係る「模擬国連研究会」 9月28日 於 青森高等学校

県内7校より13名の教員が参加し、総合的な学習の時間等で実施できるように1時間ごとに模擬国連を分割する方法、必要資料、運営の仕方等を発表した。



## October

### ア 青森県青年国際交流機構主催 内閣府「国際青年育成交流事業」地方プログラム 10月4日

於 青森中央学院大学サテライトキャンパス、青森高等学校、青森市市街地。

180分の文化交流の企画・運営（プロジェクト学習 IIBD「バーチャルユースフォーラム」の実践型学習）。上記イに準じる活動を他校生を交えて行った。他校の生徒の意見を生かしつつ、プログラムを成功に導き、各生徒がリーダーシップを発揮した。1～3学年生徒13名参加。以下は生徒の感想である。

- ・今回の活動を通して学んだことが2つあります。1つは責任です。それはリーダーとしてのものでもあり、日本人としてのものでもあります。班のリーダーとしての責任については先述のとおりで、最低限自分の仕事は遂行しなければならないと思ったことからです。自分の行い1つで計画の方向性や未来が変わることもあると考えようになりました。日本人としての責任は、海外の方が日本に来た時、日本人の言葉や行動が全てになると感じたことからです。もし私が曖昧な情報をあたかも確実なもののように伝えたら、海外の方にはそれが正しいものになってしまいます。自分が日本の代表のようにみなされているということです。リーダーとしての責任は今までも考えることがありましたが、日本人としてはほとんど考えませんでした。今自分はどんな責任をもつべきなのかを今以上に考えていきたいです。もう1つは世界に対する姿勢です。今回、世界は狭いと改めて実感しました。今後は海外の方と関わる機会も増えていくでしょう。その中で気後れしているようではいけないと思いました。言ってみようか、どうしようかと悩んでいるうちに置いていかれることが分かりました。完璧な英語より伝えたい気持ち。その気持ちをもっと強くもてるようになりたいと思いました。
- ・プランを考える準備段階として、私達はオーストリアとチリについて調べました。オーストリアは海に接していないため人々は魚よりお肉を食べます。山が多く水力発電を原子力発電に替わるエネルギー供給手段として取り入れています。チリは南北に長い地形で、気候が場所により様々で食事も場所によります。ラピスラズリや蠟工芸で有名です。知っている情報はあっても、その影響で食事がに特色が出ていることやエネルギー供給の仕方も特徴があることを改めて知りました。中学校のテストに出る情報が暗記で終わ





っていたことが改めてわかり、関連付けてしっかりと知識として覚えておきたいと思いました。友人もいないし行ったこともないオーストリアやチリについて調べるのはとても面白かったです。もしこの国際交流事業に参加していなければ、関わりのない国について調べることはなかったと思うのでいい経験でした。

## イ 台湾教職員との情報交換

10月10日 於 青森高等学校

台北市の教育関係者に本校のプロジェクト学習やカリキュラムを説明。当日は理科・数学・英語の教科書の内容等にも多くの質問が出た。現在、本校と交流を希望する港南高校との交流を立案中である。地方都市にある高等学校として、地理的・経済的・時間的な制約が少ない点で台湾は有力な連携先であると考えている。



## ウ 普及活動②平成30年度SGH事業に係る「課題設定のための研究会」

10月26日 於 青森高等学校

課題設定期における「課題研究メソッド」の活用法についてと題し、啓林館第三編集部 廣田千佳氏を講師に招き、課題設定の仕方について講演会を開いたのち、本校の事例発表（探究活動の出発点となる課題の設定に関する指導について）を行った。県内高等学校より14名の教員が参加。



## エ Jeju Youth Forum 参加 10月31日～

11月6日 於 韓国济州道

県より選抜された1名が上記フォーラムに参加。SDGsに関する話し合いを世界29都市から集まった高校生と英語で行った。事前指導講師・引率：本校教諭



## November

### ア 2学年ゼミによるポスターセッション

11月8日 於 青森高等学校

80グループによるポスター発表。1・2学年生徒全員対象。SGHから派生した探究型学習（ゼミ）のテーマは多岐にわたり、生徒は関連性のあるテーマの発表を聞き、意見交換をした。1・2学年生徒全員対象。





## イ 青森中央学院大学留学生との交流会

11月7日 於 青森高等学校

生徒は事前に日本の文化紹介の準備。当日は発表に加え留学生の出身国との文化の違いについて話し合った。1・2学年生徒41名、タイ・ベトナム・マレーシアの留学生19名参加。



## ウ 2学年ゼミによるポスターセッション 11月8日 於 青森高等学校

2学年80グループによるポスター発表。 1・2学年生徒全員対象。 一般公開

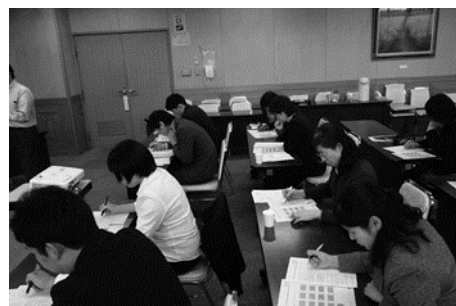
## オ SGH・SSH 2年海外フィールドワーク事前発表会 11月29日 於 青森高等学校

SGH 海外研修に参加する2学年生徒11グループ37名と、SSH 海外研修に参加する生徒25名が発表した。1・2学年生徒全員対象。 来賓24名、保護者約30名参観。助言者：青森県観光国際戦略局誘客交流課川村 睦氏、青森県観光国際戦略局国際経済課一戸 学氏、青森県教育庁学校教育課 ALT マリア・レイエス氏

## エ 普及活動③平成30年度 SGH 事業に係る「口頭による英語表現の研究会」

12月7日於 青森高等学校会議室

本校実施の「表現探究」指導の内容紹介・ワークショップ。次期「論理・表現」科目の概要、年間の流れ、教材の紹介、評価のしかた、生徒の反応についての紹介とワークショップを実施した。県内高等学校英語教員11名参加。



## December

### ア 起業・ビジネスモデル策定ワークショップ②

12月8日 於 青森高等学校

持続可能な社会事業をビジネスとして成立させるための基本的な手法とアイデアをワークショップを通して学んだ。また、世界で活躍する起業家たちのメッセージからグローバルな舞台で働くことの価値を知った。講師：野村ホールディングス株式会社 酒井 賢一 氏 1学年生徒40名参加。



## イ バーチャルユースフォーラム アドバイス会

12月13日 於 青森高等学校

プロジェクト学習 IIBD のカリキュラムの一部である、「バーチャルユースフォーラム」では、世界各国から高校生が集まるフォーラム実施のためのプランを生徒が立てる。プラン完成前に、日本に住む外国人の視点で不都合な部分やより良いプランにするためのアドバイスを留学生が行う。2学年76名・青森中央学院大学留学生9名参加。このカリキュラムは東京大学・同志社大学・和歌山大学等の教授より高い評価を得ているものである。(Chapter 1 Section 3-1 オ、Chapter 3 Section 2 参照。)



## ウ 1学年テーマ研究発表会② 12月13日 於 青森高等学校

Global、Good Health & Well-being、Quality Education & Well-being、Mathematics & Information & Integration、Ecology & Energy & Environment の5つの分野の代表者が調査や話し合いの結果導き出した提言を発表した。

## エ 青森県主催 グローバル実践力発揮プログラム シンガポール派遣

12月19日～12月23日 於 シンガポール

青森県の事業に応募し、1学年1名、2学年1名がシンガポール大学の学生にプレゼンテーションをしたり、グループ研修を行ったりした。参加した生徒はここで知り合った大学生と現在でも交流を続けている。

## オ 2018年度スーパーグローバルハイスクール (SGH) 全国高校生フォーラム

12月15日 於 東京国際フォーラム

「生まれ変わる余剰」と題し、英語によるポスター発表を行った。2学年生徒2名参加。

## カ パラメンタリーディベート人財育成協会主催

### 第4回 PDA 高校生即興型英語ディベート全国大会

12月22日、23日 於 東京大学 An 棟

即興型の英語ディベート大会に参加した。1学年生徒3名参加。



**キ 三沢基地内エドグレン高校生との交流会 事前学習会** 12月26日 於 青森高等学校

一般社団法人青森市国際交流ボランティア協会

(AIVA) 理事の斎藤誠子氏を講師に迎え、翌月に行われる三沢基地内エドグレン高校訪問のために、英語で言いたいことが言えない場合の回避策、話しかけるときのマナー、相槌の打ち方、話しの切り出し方等の英語指導に加え、訪問時の留意点、持ち物等の確認を行った。1学年生徒40名参加。



## January

**ア 三沢基地内エドグレン高校生との交流会**

1月13日 於 三沢基地内エドグレンハイスクール

本校生徒とエドグレン高校生で混合チームを作り、コミュニケーションを図りながら、協働してペーパータワービルディング等に挑戦した。発想力、思考力、実践力が試されるワークショップであり、本校生徒とエドグレン高校生と協力して取り組むことができた。英語によるコミュニケーションの楽しさ・難しさ・大切さを感じることができる貴重な機会となった。1学年40名参加。本事業の成功は一般社団法人 青森市国際交流協会 理事の斎藤誠子氏によるものである。



**イ 青森県主催 グローバル実践力発揮プログラム 台湾派遣**

1月6日～1月10日 於 台湾

青森県の事業に応募し、1学年2名が現地高校生と文化交流を持ったり、授業に参加したりした。帰国後は全体への報告会で文化の違いや台湾の歴史・生活様式等について発表を行った。

## ウ 海外フィールドワーク 1月13日～18日 シンガポール

### A 旅程

- |       |   |
|-------|---|
| 1月13日 | 青森空港発～仁川空港着～空港内フィールドワーク   |
| 1月14日 | シンガポール空港着～アラブストリートでのフィールドワーク(一部企業訪問を含む)～リトルインディアでのフィールドワーク            |
| 1月15日 | ナンヤン高校訪問(プレゼンテーション)～チャイナタウンでのフィールドワーク(一部企業訪問含む)～ホーカーズ視察～英語によるミーティング   |
| 1月16日 | ナンヤン高校訪問(授業参加)～商業地区視察～現地企業家による公演会                                     |
| 1月17日 | シンガポール大学訪問(1対1の意見交換会、インタビュー活動)～オーチャードストリートでのフィールドワーク(一部企業訪問)～シンガポール空港 |
| 1月18日 | 青森空港着   |

### B 日程詳細

#### ① 仁川空港フィールドワーク 1月13日 於 仁川国際空港 Transit ラウンジ

シンガポールへの乗り継ぎの際、4時間にわたり聞き取り調査を英語で行った。外国人に話しかけるためのウォーミングアップとして位置付けている。なお、海外フィールドワークの期間中はその日の日程終了後に毎日英語によるミーティングを行い、情報共有をした。仁川空港での調査に関する生徒の感想は以下のとおりである。



- ・仁川空港では、周囲の目が気になったり断られたりするものが怖くてなかなか話しかけることが出来ませんでした。勇気を出して話しかけても忙しいと言われてしまうこともしばしばで、メンタルが弱い私は心が折れそうでした。しかし場数を踏むたびに積極的に声を掛けられるようになってきました。

#### ② 1月14日～18日 街頭聞き取り調査 於 シンガポール チャイナタウン・リトルインディア・アラブストリート・オーチャードストリート

研究に関する街頭聞き取り調査を英語で行った。1グループ1日平均30件程度のサンプルを得ている。教員が準備した活動ではなく、自分から行動を起こさなければならない活動であるため、自主性と精神力の強さが要求される活動である。生徒は以下の感想を残している。

- ・リトルインディアとオーチャードストリートは他の地域よりも答えてくれる人が少なく、何度も「No」と言われました。もちろん少しだけショックではありましたが、私はこ

のおかげで度胸がついたのでいい経験ができたと思っています。日本では話しかけた瞬間に拒絶されるなんてことはまず有り得ません。しかしそれが普通ではなく、世界ではこうして冷たい反応をされることも常であるのだと身をもって知れたのは大きな発見とともに収穫であり、自分の成長の糧となる印象深い出来事でした。

- ・最初にフィールドワークをしたアラブストリートやリトルインディアでは8月の海外航路の乗客へのインタビュー活動のお陰でインタビュー自体に対しての抵抗はあまりなく仁川空港でも問題なく活動ができた。
- ・1日目の仁川空港では、緊張と不安から最初の数人に対しては声をかけるまでに時間がかかってしまいました。しかし、フィールドワークを続けているうちに「ためらっている時間ももったいない」と思うようになり、積極的に声をかけるようになりました。その結果、5日間で約200人から話を聞くことができました。また、質問の意味や日本での先行事例、研究内容について尋ねられるなど対応力が求められる場面も多々あり、フィールドワークを通して英語力やコミュニケーション能力が向上したと思います。
- ・最も印象に残っているのは、全日程最後のフィールドワークであるオーチャードストリートでの活動です。私たちは班員2人で事前にアポイントメントをとることができなかった Far East Organization を訪問しました。通行人やお店の店員、ビルのインフォメーションカウンターの人など多くの人に道を尋ねて会社を探し、たどり着くことができました。その後、警備の人や受付の人に事情を説明し、不動産に関連する部署を紹介していただきました。残念ながら、その部署の方は会議の時間が迫っていたため直接話を伺うことはできませんでしたが、質問があったらいつでもメールしてくださいと名刺をいただくことができました。この経験を通して、シンガポール研修で行動力や英語力の面で自分が大きく成長したと実感しました。

### ③ 1月14日～18日 シンガポール企業訪問

事前にシンガポールの企業に連絡を取り、グループ毎に訪問して専門家から助言を得た。事前にアポイントを取った訪問先は6-(2)④アに記しているが、そのほかにも多くの小売店や旅行代理店に聞き取り調査を行っている。毎年多岐にわたる新しいテーマを生徒が設定するため、訪問企業も新規に開拓する必要があるが、生徒の自主的な探究学習を活性化するにはこの方法が最適と考える。企業訪問に関する生徒の感想は以下のとおりである。



- ・企業訪問として伺ったフォーランドリアルティーネットワークシンガポールさんでは、多文化共生とは、家で暮らすとはどういうことかを教えていただきました。
- ・アポイントメントがとれなかった企業に行った時は自分たちの勢いに自分たちで驚きました。会議のために担当の方にはお会いできませんでしたが、その方の名刺を頂くことができ、挑戦の大切さを実感しました。同時に挑戦は楽しいのだと思いました。海外に行くこと、英語を話すこと、よりよいプランを作ること。日本にいる時も海外でも、こ

の研修に関わる全ての事柄が私にとっては挑戦だったように思います。

- ・4日目におもちゃ屋さんへアポ無しでの企業訪問をしました。突然の訪問にも関わらず丁寧な対応で、行って良かったと強く感じました。5日目も現地のおもちゃ屋さんに突撃で企業訪問を行い、個人営業のお店から日本にも店舗があるような大企業まで、多くのお店を巡りました。それぞれのお店でたくさんの商品を見て、色々なことを聞くことができました。

④ 1月15日・16日 シンガポールナンヤン高校  
訪問 於 ナンヤン高校

グループごとに研究内容を英語で説明し、意見交換を行った。また、授業に参加し日本の教育との違いを学んだ。ナンヤン高校での活動に関する生徒の感想は以下のとおりである。



- ・最も印象に残ったことはナンヤン高校の生徒と英語で会話をしたことだ。行く前は上手く会話できるか心配だったが、実際に話してみるとそんなことはなく自分の英語が相手につたわった時の喜びはとても大きいものだった。英語で会話をする時間はとても楽しくてあっという間に終わってしまった。もうすこし長く話していたいと思った。
- ・3日目、4日目のナンヤン高校では、バディの子の隣で授業を受けました。2歳年下のバディの子は日本語が上手で、驚きました。私たちは日本語と英語の二か国語だけですが、シンガポールの人たちは、それ以上の国の言語を学び、使いこなしていて、二か国語すら使えていない現実を突きつけられた気がしました。
- ・ナンヤン高校で授業を受け、教育レベルの高さに驚いた。2歳年下の子が高校レベルの科学を学んでいたのだ。日本にいたら、そんなことなど知らずに普段どおり科学の授業を受けていただろう。しかし、この事実を知り、のんきにははいられないなと感じた。とても良い刺激となった。

⑤ 1月16日 在星企業家との懇談

青森県出身でシンガポールで日本人向けフリーペーパーを発行する SingaLife 代表の飯田広助氏を講師として迎え、海外で働くこと、海外から日本を支援することの意味を学んだ。また、青森市・むつ市・外ヶ浜町の地場産業育成を海外でコーディネートすることのやりがいについてお話を伺った。以下は生徒の感想である。



- ・講話を聞いて最も印象に残ったのは、飯田さんの、新しいことに挑戦しようという姿勢です。海外で一から起業するという事は簡単ではなく、リスクもあります。それを成功させるためには、並ならぬ努力と周囲の人々の協力が必要なのだと思います。

- ・私は、飯田さんのお話にたくさん学ぶことができました。実際に起業して成功を収めた方のお話は貴重なもので、自らの人生において成功するためのヒントをいくつも教えていただいたような気がしています。飯田さんのお話を総じて考えた時に最も強く感じたのは「目標を立てて実現に向かって行動することが大切」ということでした。
- ・私は昨年、学校で開催された野村證券の起業セミナーに参加した時から、世の中のためになる新しい事業を自らの手で始められる起業に興味を持っていました。今回、飯田さんの話を聞き、ますます起業への興味が深まりました。また、社会のために働くことが大切だと気付かされました。

⑥ 1月17日 シンガポール大学生への聞き取り調査 於 シンガポール大学  
調査を2段階に分け、前半はラウンジで学生との1対1の話し合い、後半はキャンパス内でランダムに聞き取り調査を行った。前半の話し合いではKP法で研究内容に関する発表を行い、学生から質問や助言を得ている。

海外フィールドワークに参加した生徒の全般にかかわる感想(抜粋)は以下のとおりである。

- ・今回のシンガポール研修を終えて、自分にとって本当に良い経験になり、普段できないような体験をできたことを嬉しく思う。自分の中で、伸びた能力は多くあると感じている。そのなかでも、思考力、行動力、判断力の3つの力の伸び幅がとても大きかったと思う。自分達の研究テーマにそって自分の研究にはどんな情報が必要で、どんなことが予想されるか、答えのない問いに対して最後まで考え抜く力、すなわち思考力はこのゼミ活動を通して抜群に伸びたと思う。

普段外国人と接触したり、文化に触れたりする機会に乏しい高校生にとって、海外において少人数で行動し、英語でやり取りを行うこと自体が大きな刺激になっている。加えて自分たちの研究に対して専門家の意見を得たり、街頭でインタビュー活動したりするなど、研究内容の深化に加えて、「意味のある言語活動」を盛り込めたことは大きな成果であると考えている。

## February

### ア 青森県主催 深い学び合同発表会

2月3日 於 青森県総合学校教育センター

英語によるスライド発表:「ダンボールの防音壁」2学年4名、日本語によるポスター発表「地域コミュニティの活性化」に2学年1名、英語によるスライド発表「済州ユースフォーラム報告」に2学年1名が参加した。

### イ 第2回 運営指導委員会 2月13日 於 青森高等学校

詳細は Chapter 5 に記す。

ウ **TOEIC 実施** 2月4日 於 青森高等学校

昨年度より Speaking & Writing のテスト受験を行っている。結果は Chapter 4 に記す。

エ **ゼミ代表と SGH・SSH 海外FW事後発表会、自然科学部によるプレゼンテーションコンクール** 2月7日 於 青森高等学校

一般公開の上、海外フィールドワーク参加者・ゼミ代表・SSH 海外研修参加者がスライド発表及びポスター発表を行った。

生徒のゼミ活動にご協力をいただいた企業・団体を以下に記す。今年度は、生徒が長期休業を利用して独自に訪問先を見つけ、訪問の手配を行った。

JA 青森 営農販売部 営農企画課

JA 青森 中央南支店

JA 全農あおもり やさい部やさい花き課

mizuiro 株式会社

NPO 法人活き粋あさむし・浅めし食堂

ヤマト運輸青森主管支店

ローソン青森高校前店

協同組合 タッケン

住宅型有料老人ホームあうら浜館

赤帽青森県軽自動車運送協同組合

東青地域県民局 地域健康福祉部 保健総務室 生活衛生課

東北電力 青森電力センター 配電計画課

特定非営利活動法人 青森地域再生コモンズ 総合周産期待機宿泊施設 ファミリーハウス

日本赤十字社 青森献血ルーム

青森市 保健所 生活衛生課 生活環境衛生チーム

青森市新生町会

青森市総務部危機管理課

青森市立筒井小学校

青森商工会議所 地域振興部 観光交流推進課

青森大学ソフトウェア情報学部 TECH 道

場

青森地域広域事務組合 予防課 設備指導チーム

青森中央学院大学経営法学部

青森県 商工労働部 労政・能力開発課 就業支援グループ

青森県 東青地域県民局 地域農林水産部 農業普及振興室

青森県 防災危機管理課

青森県観光国際戦略局 国際経済課

青森県観光国際戦略局 誘客交流課

青森県教育庁 学校施設課 施設整備グループ

Alnoor Travel & Tours Pte.Ltd.※

AVA Agri-Food & Veterinary Authority of Singapore※

Far East Organization※

FLP YOMIKO Singapore Pte.Ltd. ※

Forland Realty Network※

Hamleys※

Park N Parcel※

supermama※

The Food Bank Singapore※

ジャパントアーズ※

※はシンガポール現地企業



## オ バーチャルユースフォーラムコンテスト 2月27日 於 青森高等学校

この企画は青森県に世界各国から高校生を集め、フォーラムを開くための企画に関するコンテストである。「バーチャルユースフォーラム」のプログラムでは教員が条件書を提示するだけで、生徒が予算立て、人員配置、物品調達、スケジュール調整、外部（架空）とのやりとりを行う。クラス毎にプランを立て、2月のコンテスト優勝を目指す。コンテストでは外部の審査員と聴衆が投票を行い、順位をつける。活動の途中で青森中央学院大学の留学生9名からアドバイスを受け、より現実的なプランに近づけた。この活動はJICA職員や複数の大学教授から完成度の高いPBL学習であるという評価を得ている。この活動で「グローバルマインドに基づく企画力」、前述の9月11日実施のJICA主催2018年度青年研修「アフリカ（仏語）・アグリビジネス/アグリエコツーリズム」企画・運営や10月4日実施の青森県青年国際交流機構主催 内閣府「国際青年育成交流事業」地方プログラムでは、「理論と実践を融合する力」の育成ができたと考えている。

### コンテスト審査員感想

- ・プラン作成だけでなく、希望者対象でも実際に運営できる機会があるのはとてもよいことだと思います。また、先生方のアドバイスはなかったと伺い、大変驚きました。特に、予算書の作成は、大人のアドバイスなしには書けないだろうと思っていましたので。
- ・10分間の発表の中では話しきれないほど、たくさんのことを調べてきたのだろうと感じました。大学生や大人がやるような内容を、しかも先生方の支援なしにここまで企画されて、本当に素晴らしいと思いました。
- ・外務省で、全く同じような作業を翌朝までやっていたのを思い出しました。将来、様々な国際舞台で企画・運営の仕事に携わる生徒さんも多いと思いますが、その練習にもなったかもしれません。内容に関してはこちらが質問するところは、ほんの一部分しかありませんでした。それくらい完成度が高いと思いました。
- ・スタッフマニュアルは、大変分かりやすく、県庁や企業の職員が作られたものとほぼ同じで本当に驚きました。発表をお聞きして、きめ細やかな配慮もなされていることも分かりました。

## March

### ア 西東京国立三大学高校生グローバルスクール 3月23日、24日 於 電気通信大学、東京農工大学、東京外国語大学

SDGsの目標である「陸の豊かさを守ろう」「海の豊かさを守ろう」の二つの分野に関し、3つの観点から考察を加え、生徒同士が意見交換をするワークショップ。2学年1名、1学年3名が参加した。

### イ 全国スーパーグローバルハイスクール課題研究発表会（SGH 甲子園） 3月23日 於 関西学院大学

「生まれ変わる余剰」のテーマで2学年生徒2名が英語によるポスター発表を行った。

ウ 2019 東北地区 SGH 課題研究発表フォーラム in 杜の都 3月23日 於 東北大学川内キャンパス

英語スライド発表：「Stay in Aomori」2学年生徒2名、日本語スライド発表：「出張子ども食堂」2学年生徒5名、日本語ポスター発表：「再配達問題」2学年生徒4名、日本語ポスター発表：「水耕栽培の可能性」2学年生徒4名、日本語ポスター発表：「地域コミュニティの活性化」2学年生徒3名が参加した。



## **Chapter 2**

### **5 年間の変遷**

## Section 1

### 対象生徒と教育課程

#### 1 SGH 対象生徒の変化 (図表 6 参照)

平成 26 年度

1 学年：全員

平成 27 年度

1 学年：全員

2 学年：選択者 35 名 (1 クラス)

平成 28 年度

1 学年：全員

2 学年：選択者 24 名 (複数クラスに分散)

3 学年：選択者 35 名 (1 クラス)

平成 29 年度

1 学年：全員

2 学年：文型全員 (うち海外研修の 23 名は複数クラスに分散)

3 学年：選択者 24 名 (複数クラスに分散)

平成 30 年度

1 学年：全員

2 学年：文型全員 (うち海外研修の 37 名は複数クラスに分散)

3 学年：選択者 23 名 (複数クラスに分散)

(図表 6)

	26年度	27年度	28年度	29年度		30年度		31年度	
3年			SGH 35名 ↑(1クラス)	SGHコース選 択 24名 (文型に分 散)	理型	文型全員 SGH	理型	文型	理型 SSH
2年 (海外フ ィルドワ ーク)		SGH 35名 (1クラス)	SGHコース選 択 24名 (2 クラスに分 散)	文型全員 SGH	理型	文型全員 SGH	理型 SSH	文型	理型 SSH
1年	全員SGH	全員SGH	全員SGH	全員SGH		全員SGH		全員SSH	

海外フ  
ィルドワ  
ーク  
はSGH  
クラス  
(35名)

海外フ  
ィルドワ  
ーク  
はSGH  
コース  
選  
択  
者  
(24名)

海外フ  
ィルドワ  
ークは  
文型  
の希  
望  
者  
(23名)

海外フ  
ィルドワ  
ークは  
文型  
の希  
望  
者  
(37名)

海外フ  
ィルドワ  
ーク  
(本校  
独自  
の海  
外研  
修を  
継  
続)

#### 2 教育課程上の特色

1 学年：「プロジェクト学習 I (3 単位)」(総合的な学習の時間と社会と情報の読み換え)

2 学年：「総合的な学習の時間 (2 単位)」

「SGH 世界史 (3 単位)」(世界史 A の読み換え)

3 学年：「総合的な学習の時間 (1 単位)」

※ 5 年間で SGH に関する教育課程に変更はない。

## Section 2

### 中間評価

#### 1 中間評価

「研究開発のねらいを達成するには、助言等を考慮し、一層努力することが必要と判断される。」

○学校全体としての取組や教員の意識の高さなど高く評価できる。一方で、内容がまだ国内に向けられており、視野を世界に広げるような工夫が必要である。

○講演会開催の目的が明確でなく、回数の多さや開催時期も集中している上、一方的なインプットにとどまっているため、生徒にとって効果的になっていない点は改善が必要である。

○今後、本取組で育成すべき資質・能力を具体的に確定し、それらの諸目標に対して、教員・保護者・協力企業や研究機関からの評価と、生徒自身の自己評価を実施する方策を検討する必要がある。

## Section 3

### 改善点

※図表中の「プロ」は「プロジェクト学習」を表す。

#### 1 事業の見直し

中間評価のポイントは、ア「視野を世界に広げる工夫について」、イ「講演会について」、ウ「評価方法について」の三点と整理する。

##### ア 視野を世界に広げる工夫についての改善

平成28年度：教材の開発・新規事業の立ち上げ

(1) アジア研究 教材<各国の現状と商品販売の方策> シンガポール研究で培った手法を他の国の調査にも使うことで、調べ方・考え方の汎用性を知る。グループ毎に違う国について調べるため、各国の共通点や相違点、国単位で論じられない問題点などに意識を向けさせる。生徒は30か国の中から一国を選ぶ。調べた内容と自分たちの考える商品との関連性について可能性を探る。

(2) 即興型英語ディベート青森県交流会の主催 「青森県即興型英語ディベート交流大会」  
7月30日(課外) 県内四校による英語ディベート交流大会に本校1年生から4名、2年生から4名参加した。講師：大阪府立大学 中川 千皓氏、一般社団法人パーラメンタリーディベート人財育成協会 大賀 隆次氏ほか

### (3) 他団体との連携

経済的・物理的な制約を受けずに、国内にしながらグローバルな探究活動をするための手段としてインターネットを介して生徒間での自発的なやり取りを行うことで以下の高校・大学と基本合意に至っている。前述のSDGsに関連した小グループが放課後の時間を利用して、自発的にやり取りをする考えである。アジア諸国が多いのは、時差がないことが大きな理由である。また、JICA 青森デスクや青森県青年国際交流機構の事業の一環で海外の青年団受入れ事業の一部を企画・運営した。

提携団体：

(日本) 青森中央学院大学 (アジアからの留学生・26年度から継続実施)

(シンガポール) ナンヤン女子高等学校

(台湾) 僑光科学技術大学、新店高校、彰化女子高校、ワシントン高校、

(日本) 弘前大学国際連携本部

(日本) JICA 青森デスク

(日本) 青森県青年国際交流機構

## イ 講演会の数・目的の明確化

インプット型の講演会は平成28年度より減らし、ワークショップやフィールドワークに移行した。(図表7参照)平成28年度から全校体制で「ゼミ」活動(後述)を導入し、ゼミ単位で講師を招聘したり、フィールドワークを実施したりしている。以下はゼミ毎の講師招聘・少人数制ワークショップの例である。

(1) 「ビジネスモデルに関する講義・ワークショップⅠ」 28年9月8日 ビジネスモデルの構築に関する基本的事項の確認。顧客の絞り込みや商品の利点のアピールに関しての講義とワークショップを行った。青森発ビジネスモデルコース選択者1・2年生計63名参加。

講師：日本政策金融公庫 角田 勝氏。

(2) 「ローカルな文化財について」(講演・ワークショップ) 28年10月13日 文学碑の保存と観光地の振興に関わる課題を例に取り、本県が有する文化財の理解を深めるとともに、一つの事象について、様々な角度から問題を見つめる姿勢を養った。「青森発グローバルビジネスモデルゼミ」、「多文化共生と日本人」ゼミ生徒計77名参加。 講師：青森県近代文学館 西谷 ともえ氏

(3) 「インバウンドツアー研究」(1・2年希望者31名) 29年10月22日 青森県国際経済部誘客交流課主催のインバウンドに関するモニターツアーに参加した。青森県西目屋地区にある世界遺産のブナ林に関するスタディツアーへの参加をとおして、地域について理解を深めることに加え、インバウンドツアーを企画する際に必要な事柄を学ぶことも目的であった。

(4) 「海外で活躍する芸術家による公演会」(1・2年希望者124名) 29年10月25日 白井光子氏、ヘルムート・ヘル氏による音楽講演会。難病の克服を経て、グローバルに活躍する白井氏のお話と歌を聴く機会に恵まれた。本校では芸術にも力を入れている生徒が多く、本来であれば実現できないはずの公演で多くの刺激を得た。

いずれも生徒の興味関心に応じて、ゼミ担当の教員が講師招聘やワークショップへの参加を申し込み、実施したものである。平成30年度になると、企業訪問や講師とのやりとりを生徒が行うようになってきている。

事業の変遷

(図表7)

分野	名称	対象		経費 ※1	外部 連携	形式	中間評価前		中間評価後		
		学年	範囲				H 26	H 27	H 28	H 29	H 30
国際理解	グローバル人材になるための資質とは	1	全員	○	○	講演会	○	○			
国際理解	世界の平和と安全	1	全員	○	○	講演会	○	○			
国際理解	Youth Marketing	1	全員	○	○	講演会	○	○			
国際理解	危機管理の立場から見たグローバル化	1	全員	○	○	講演会	○	○			
国際理解	国際的な視野に立ったキャリア形成のための心得	1	全員	○	○	講演会	○				
国際理解	青森県の観光	1	全員	○	○	講演会	○	○			
国際理解	青森県の産業	1	全員	○	○	講演会	○	○			
国際理解	グローバル時代の企業経営について	1	全員	○	○	講演会	○	○			
国際理解	国際的な経済活動について	1	全員	○	○	講演会	○	○			
国際理解	ビジネスマネジメントガイダンス	1	全員	○	○	講演会	○	○			
キャリア理解	極地での観測調査	123	全員		○	講演会					○
ビジネス	青森県ロジスティクスガイダンス	1	全員	○	○	講演会	○				
ビジネス	ビジネスモデルの基本形・発展形	1	全員	○	○	講演会	○	○			
ビジネス	青森県民が幸せになるビジネスモデルの検討	1	全員	○	○	講演会	○	○			
ビジネス	グローバリゼーション経済	1(2)	全員	○	○	講演会	○	○			
ビジネス	JETRO主催 企業対象貿易セミナー	2	海外研修者		○	講演会			○	○	
国際交流	海外高等学校受け入れ	2	海外研修者		○	交流		○			
国際交流	海外高等学校受け入れ	1	国内研修者		○	交流	○		○	○	
国際交流	ITを使った交流	2	国内研修者		○	交流	○			○※2	○
国際交流	青森中央学院大学留学生との交流会	1	希望者		○	交流	○	○	○	○	○
国際交流	三沢エドグレンハイスクール訪問	1	希望者	○	○	交流	○	○	○	○	○
発表	効果的なプレゼンテーションの方法	1	全員	○	○	WS	○	○			
発表	効果的なプレゼンテーションの方法	2	文型			WS			○	○	○
発表	英語指導 (大学教授)	1	全員	○	○	WS		○			
発表	英語指導 (授業「表現探究」)	2	文型			WS				○	○
発表	クラス発表会	1	全員			発表会	○	○	○	○	○
発表	生徒課題研究発表会	2	対象者全員		○	発表会	○	○	○	○	○
発表	海外フィールドワーク事前発表会	2	海外研修者		○	発表会		○	○	○	○
発表	1年生に対する英語ポスター発表	3	海外研修者			発表会			○	○	○
発表	東北SGHフォーラム生徒派遣	12	希望者	○	○	発表会			○	○	○
発表	SGH甲子園生徒派遣	2	海外研修者	○	○	発表会			○	○	○
発表	SGH全国フォーラム生徒派遣	2	海外研修者	○	○	発表会			○	○	○
発表	深い学び合同発表会(県主催)	2	海外研修者		○	発表会				○	○
WS	ALT・CR、留学生との意見交換	2	海外研修者		○	WS		○	○	○	○
WS	ゼミ単位での講師招聘	123	全員		○	WS			○	○	○
WS	英語ディベート交流会	12	希望者	○	○	WS			○	○	○
WS	バーチャルおもてなし	2	国内研修者		○	WS				○	○
WS	JICAとの協働プログラム(企画・運営)	123	希望者		○	WS					○
WS	内閣府との協働プログラム(企画・運営)	123	希望者		○	WS					○
WS	起業・ビジネスモデル策定ワークショップ	12	海外研修者		○	WS			○	○	○
WS	日本政策金融公庫ビジネスモデルグランプリ	2	海外研修者		○	WS			○	○	○
WS	西東京三大学グローバルスクール	12	希望者	○	○	WS				○	○
WS	青森県AL教育旅行モニターツアー	12	希望者		○	WS				○	
FW	効果的なフィールドワーク	1	全員	○	○	講演会		○			
FW	企業訪問	1	全員		○	FW	○	○			
FW	市内フィールドワーク	2	海外研修者	○	○	FW	○	○	○	○	
FW	海外航空客船へのインタビュー活動	2	海外研修者		○	FW		○	○	○	○
FW	海外フィールドワーク	2	海外研修者	○	○	FW		○	○	○	○
FW	クラス内FW	1	全員		○	FW			○	○	
FW	学年内FW	1	全員			FW			○	○	
FW	文化祭FW	1	全員			FW			○	○	
FW	県内FW	2	全員		○	FW		○	○	○	△※4
FW	グループ毎自主 企業訪問	2	海外研修者		○	FW			○	○	○
ゼミ	ゼミ活動	123	全員		○	WS			○	○	○
ゼミ	SGH枠の拡大(2・3年文型全員)	23	文型		○	WS			○	○	○
ゼミ	SDGs導入	123	全員		○	WS				○	○
ゼミ	模擬国連	2	国内研修者			WS				○	○
ゼミ	バーチャルユースフォーラム	2	国内研修者		○	WS				○	○
	日本語スピーチコンテスト審査員	1	希望者		○						○
	教員研修①(探究学習について)		教員			WS			○	○	○
	教員研修②(評価について)		教員	○		WS			○		
	普及事業		県内教員			WS				○	○

- ※1 「経費」は 5,000 円以上の経費を計上するもの
- ※2 SDGs をベースに海外の高校や大学とやり取りする体制の整備完了
- ※3 H31 年度より高教研外国語部会へ引き継ぎ
- ※4 ゼミ運営担当者の判断により、長期休業中に任意で実施

## ウ 評価の実施状況

Chapter 4 に記す。

## エ ポートフォリオの導入

平成 30 年度入学生より Benesse 社の Classi を導入し、デジタルポートフォリオで活動の記録を管理している。



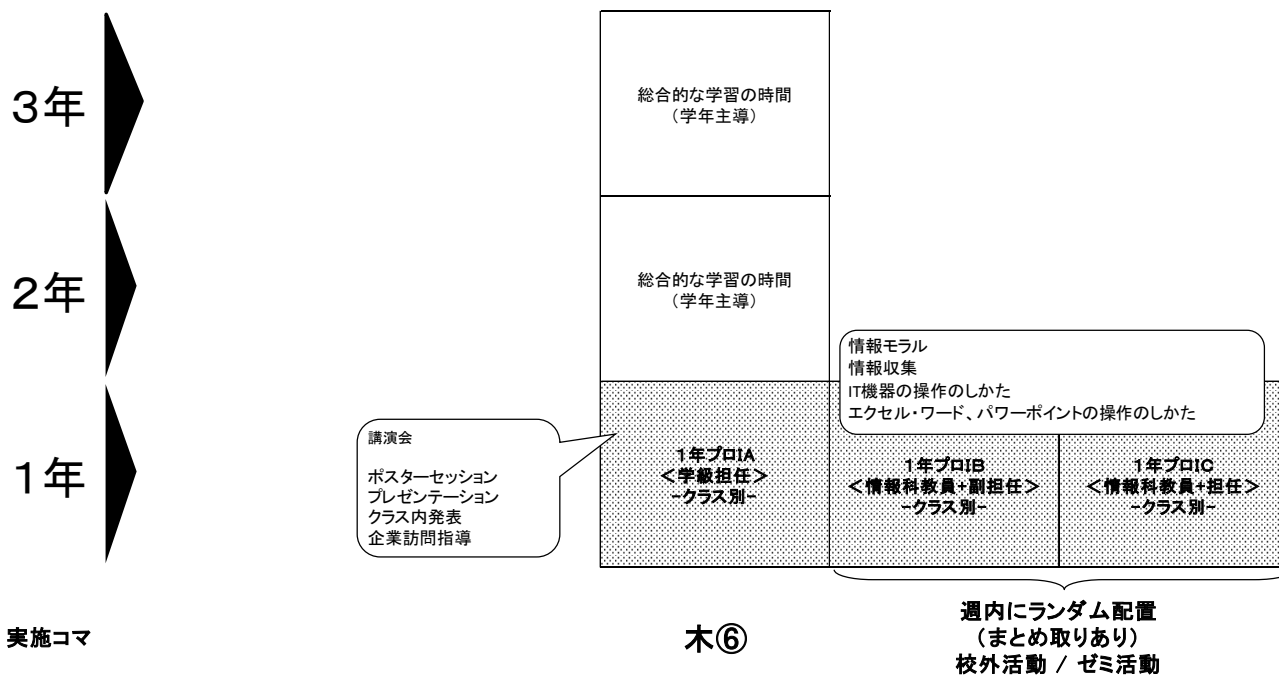
Section 4

プロジェクト学習の変化

※図表中の「プロ」は「プロジェクト学習」を表す。  
網掛けの部分が SGH 対象者である。

1 平成 26 年度

(図表 8)



ア 1 学年

(1) 概要

運用上、木曜日の 6 校時に学年共通で実施するプロジェクト学習 IA(「社会と情報」の読み換え)とクラス単位で実施するプロジェクト学習 IB,IC を設定。プロジェクト学習 IB,IC はそれぞれ情報科教諭と副担任、情報科教員と担任のティームティーチングの形を取った。10 月には集約日を設け、全員が企業訪問を行っている。全体への講演会を 14 回実施。

(2) プロジェクト学習 IA (1 単位)

対 象：1 学年全クラス

実施時限：木曜日 6 校時

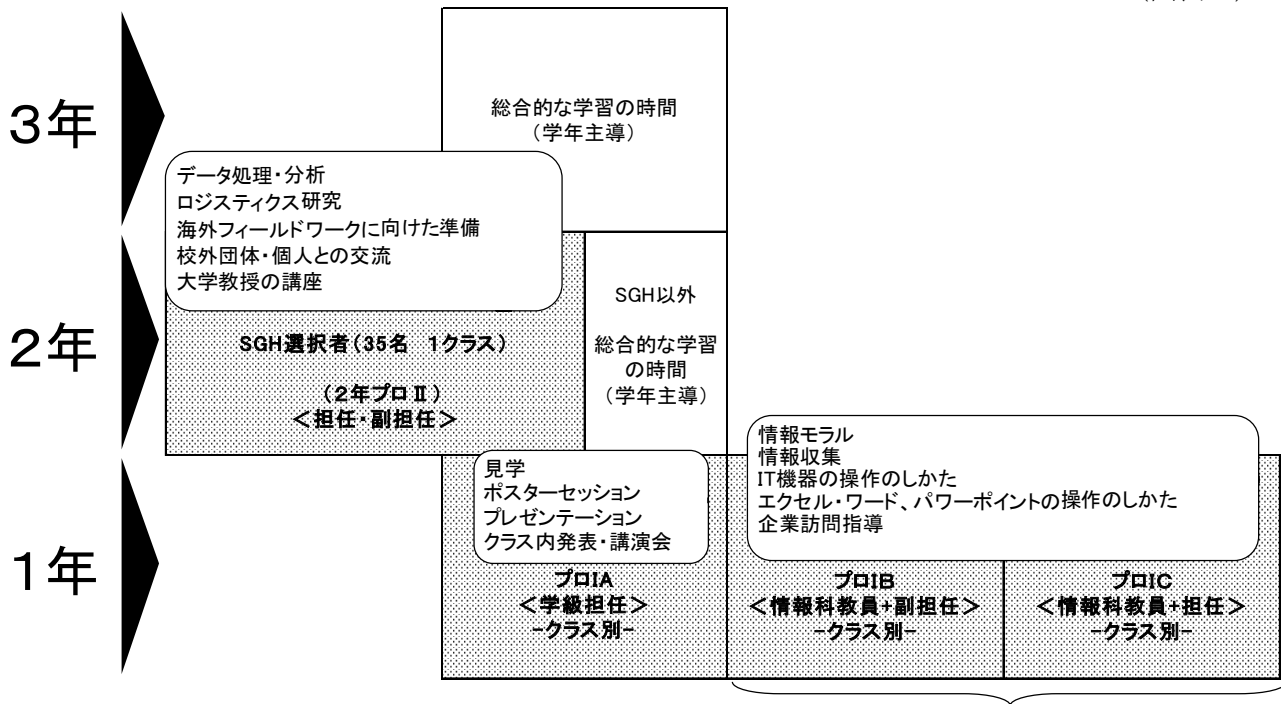
内 容：青森県の県産品や観光、街おこしに関する研究を行った。また講演会やグループ単位での話し合いの時間を設けた。

(3) プロジェクト学習 IB, IC (2 単位)

対 象：1 学年全クラス

実施時限：木曜日 6 校時

内 容：「講演会の振り返り」、「情報機器の習熟」、「プレゼンテーションの技法」、「フィールドワークの事前準備」、「フィールドワーク後のプレゼンテーションの準備」、「フィールドワーク後のまとめ」、「情報モラルについて」など、「社会と情報」の内容を盛り込みつつ、プロジェクト学習 IA の技術的支援と準備の時間にあてた。



実施コマ

木⑤

木⑥

週内にランダム配置

ア 1 学年

(1) 概要

基本的には前年度に準じた活動を行った。全体への講演会は 9 回実施。

イ 2 学年

(1) 概要

SGH クラス (35 名) を編成。この時点では別カリキュラムを扱う特別クラスという色合いが濃かった。1 クラスにまとめた利点として挙げられるのは、探究学習部と担任、副担任の少人数が指導を担当したため、臨機応変な対応が可能であり、フィールドワークや外部講師を招聘するワークショップ開催の際もスケジュール調整は授業変更を行うだけで済んだことである。反面、総合的な学習の時間は他クラスと違う内容を扱っているため、足並みをそろえるのに担任は苦勞した。また、学年・学校単位で受容はされているものの、指導内容の詳細については全体の理解が進んでいない状態であった。

(2) プロジェクト学習 II (正式名称:「総合的な学習の時間」2 単位)

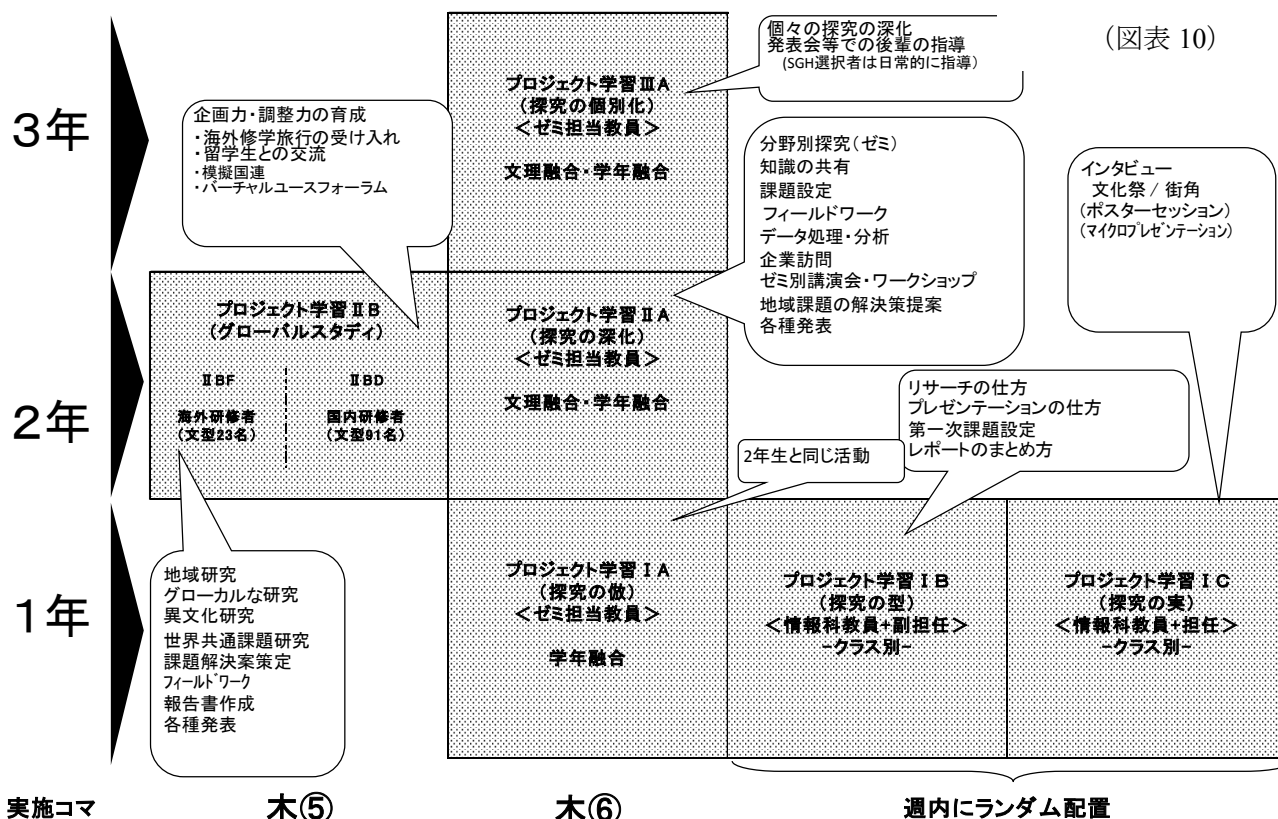
対 象: SGH コース選択者

内 容: 青森県の県産品や観光、街おこしに関する研究を行った。

(3) 備考

ビジネスモデル策定よりも、英語によるプレゼンテーション自体が目的と化した。この点で課題解決型の学習に踏み込めなかった部分も多かった。但し、長期休業中や放課後を活用し、前年度の経験を生かして、独自に企業訪問を行うグループがあり、自主性が芽生えてきた。ロジスティクスに関する研究テーマは Chapter 7 参照。

### 3 平成 28 年度



#### ア 1 学年

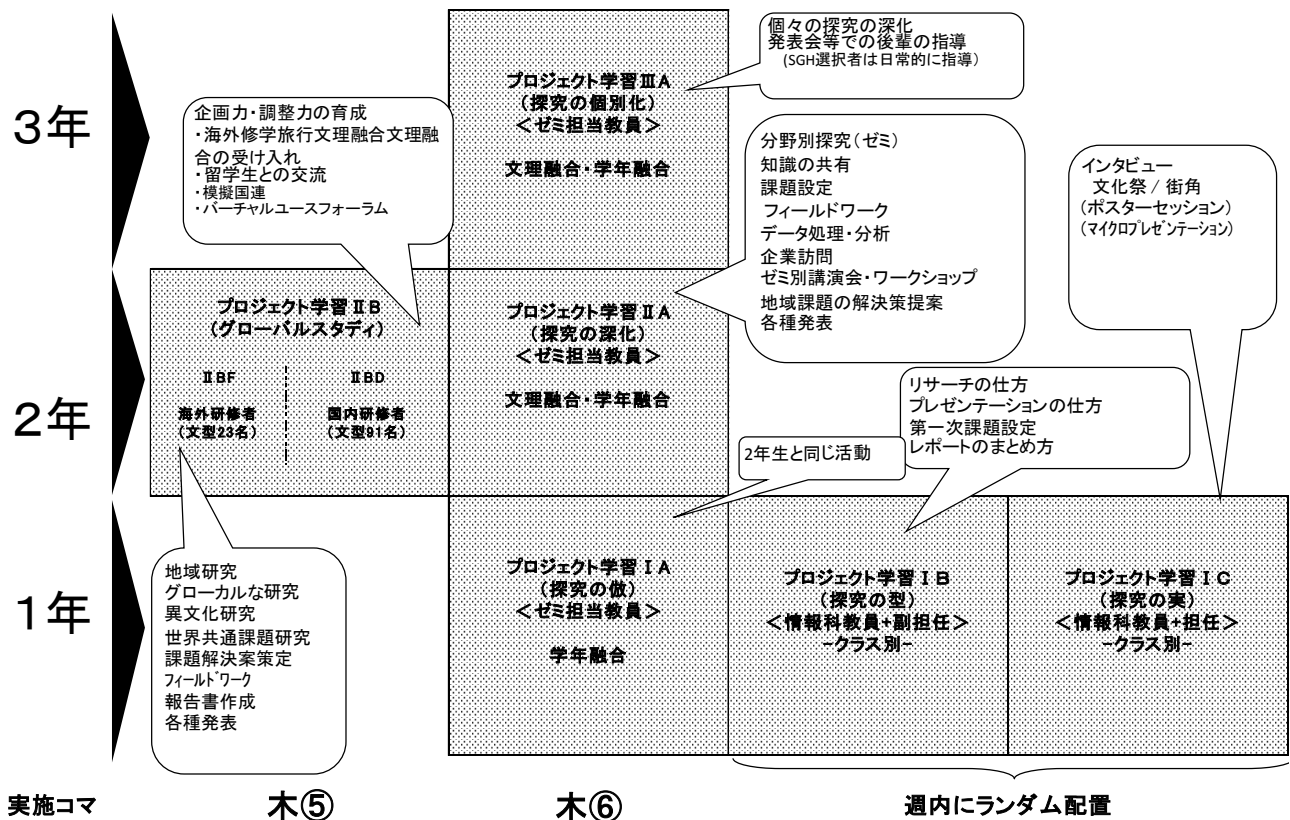
- (1) 概要  
全体に対する講演会実施は1回実施。
- (2) プロジェクト学習 IA  
文理・学年の枠にとらわれず、興味関心に応じて1 2分野のゼミに所属した。
- (3) プロジェクト学習 IB, IC  
前年度に準じたプロジェクト学習 IB, IC の学習内容。

#### イ 2 学年

- (1) 概要  
海外フィールドワーク選択者(26名)は2クラスに分散して在籍。SGH 選択者以外も文理・学年の枠を越えた探究型学習(ゼミ活動)に取り組む。
- (2) プロジェクト学習 II (正式名称:「総合的な学習の時間」2単位)  
対象: SGH 選択者  
内容: 青森発グローバルビジネスモデルゼミに所属し、青森県の県産品や観光、街おこしに関する研究を行った。
- (3) プロジェクト学習 II (正式名称:「総合的な学習の時間」1単位)  
対象: SGH 非選択者  
内容: 1 2分野のうちのひとつに所属し、興味関心に応じた研究を行った。

#### ウ 3 学年

- (1) 概要  
SGH 選択者は英語レポートの作成と並行し、下級生の指導にあたる。インタビューの際の留意点やそれまでの調査結果を後輩に継承した。
- (2) プロジェクト学習 III (正式名称:「総合的な学習の時間」1単位)  
対象: SGH 選択者  
内容: 下級生に対してポスターセッションを実施。また SGH の3年間の活動を英語レポートにまとめた。



ア 1 学年

- (1) 概要  
基本的には前年度に準じた活動を行った。

イ 2 学年

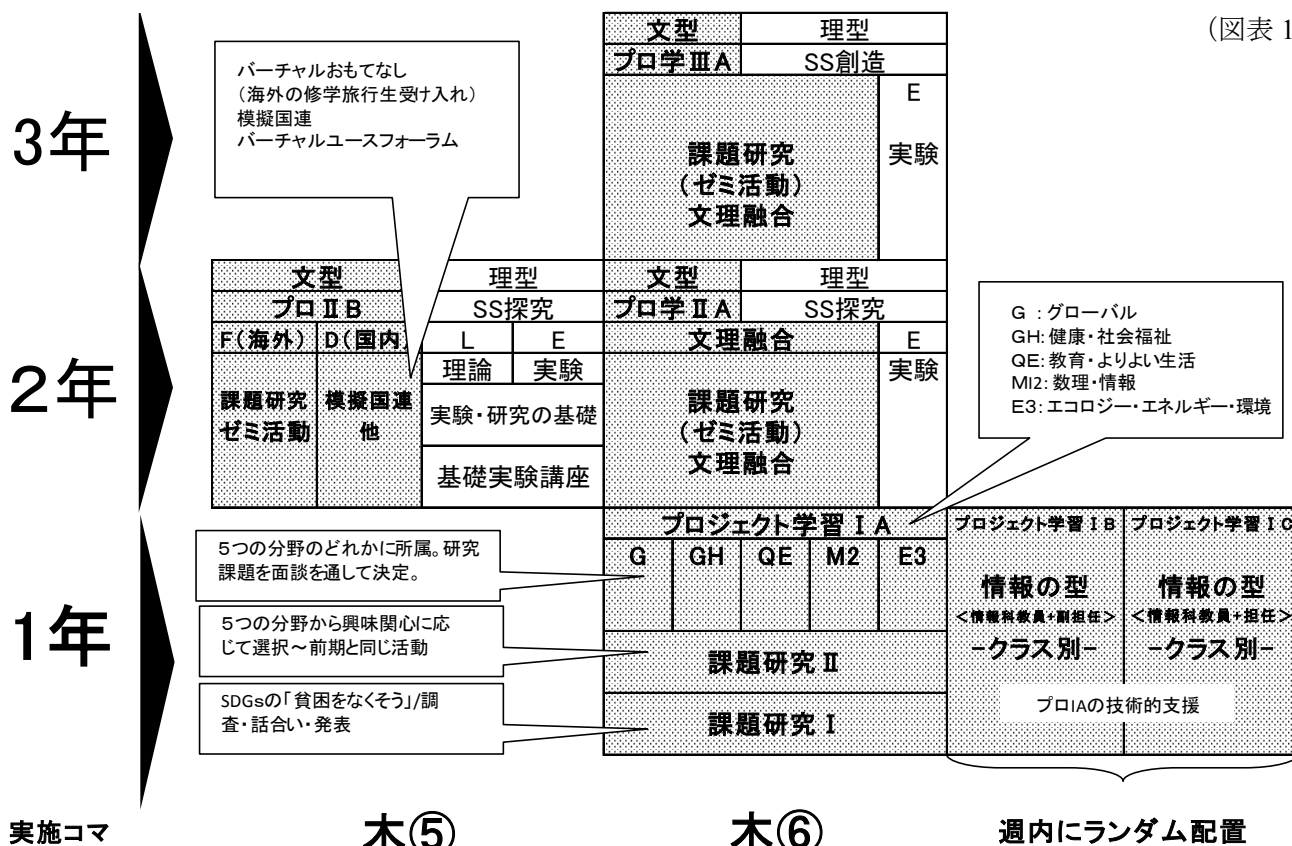
- (1) 概要  
2 学年文型全員が SGH コースに所属。
- (2) プロジェクト学習 IIA (正式名称:「総合的な学習の時間」 1 単位)  
対 象: 2 学年全員  
内 容: 海外研修者はグローバルビジネスモデルゼミに所属し、学年融合で青森県の県産品や観光、街おこしに関する研究を行った。国内研修者と理型の生徒は文理・学年融合で 1 2 のゼミに所属し興味・関心に応じた探究型学習を行った。
- (3) プロジェクト学習 IIBF (正式名称:「総合的な学習の時間」 1 単位)  
対 象: 2 学年海外研修参加者 (2 3 名)  
内 容: プロジェクト学習 IIA のグローバルビジネスモデルゼミと連動した学習を行った。
- (4) プロジェクト学習 IIBD (正式名称:「総合的な学習の時間」 1 単位)  
対 象: 2 学年国内研修者  
内 容: 台湾の高校生受け入れにともなう事業を生徒たち自身で企画し、実施。また模擬国連やバーチャルユースフォーラムの企画する学習を行った。

ウ 3 学年

- (1) 概要  
基本的には前年度に準じた活動を行った。

5 平成30年度

(図表 12)



実施コマ

木⑤

木⑥

週内にランダム配置

ア 概要

SSH 対象者（2 学年理型全員）のためのプログラムが木曜日 5 校時に新設された。プロジェクト学習 IIA は、一部（E：実験ゼミ）を除き、従来の文理融合の学習を行った。ゼミ活動開始（平成 28 年度）時期からの 2 年間で、課題設定に問題を抱える生徒が多いことが判明し、学年融合を一旦解消し、1 学年は課題設定のための時間に充てることにした。

イ 1 学年

(1) プロジェクト学習 IA (1 単位)

- 1 学期は「貧困をなくそう」について資料をもとにクラス単位で追加調査や話し合いを行い意見を集約したのち、クラス単位で発表を行った。
- 2 学期は本校設定の 5 つの分野（グローバル、健康・社会福祉、教育・よりよい生活、数理・情報、エコロジー・エネルギー・環境）に分かれ 1 学期と同じ活動を行い、調査・意見交換の姿勢を養うとともに、基礎知識の獲得を行った。
- 3 学期は面談をとおして今後 2 年間取り組む研究テーマの決定を行った。

(2) プロジェクト学習 IB, IC (2 単位)

基本的には前年度に準じた活動を行った。

ウ 2 学年

基本的には前年度に準じた活動を行った。

エ 3 学年

基本的には前年度に準じた活動を行った。

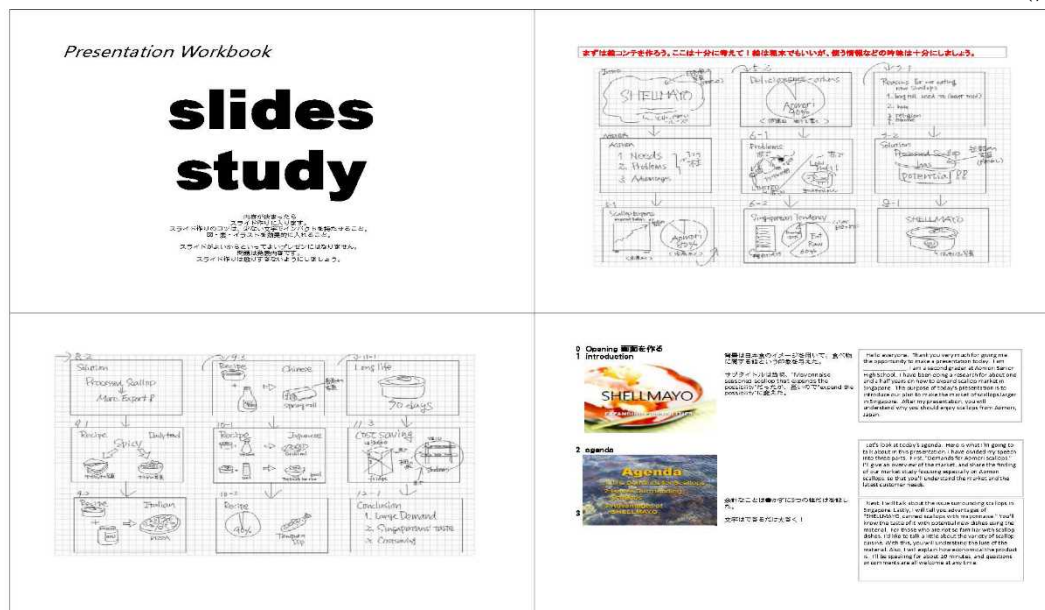


### **Chapter 3**

### **教材**



(図表 15)



イ 表現探究 (教材番号 3)

(1) 「質疑応答をする (アジア諸国の交通事情の共通点を探る)」の教材

(図表 16)

Document A

以下の話を簡潔にまとめてグループのメンバーに紹介しなさい。聞き手は質問を繰り返して詳細な情報を得て、自分の国の問題との共通点・相違点を見つけなさい。

■ タイの交通事情

バンコクでは各地で鉄道建設が行われているため、交通渋滞が起きています。また、バンコク都庁は高速輸送バスを 2017 年 4 月に廃止(abolition)を決定しました。この高速輸送バスは、道路に専用レーン(exclusive lane)が設置されているため、目的地(destination)に時間どおりに到着できるとしてスカイトレインと同じように利便性の高い(convenient)交通手段として導入(introduce)されていたもの。しかし、ルールを無視して(disregard)専用レーンに一般車両(private vehicle)が侵入する(break-in)ということが相次ぎ、時間どおりに移動ができないと、利用者が激減。やむなく廃止を決意したそうです。

人口が増加するとともに車の所有率(rate of ownership)も上がり、タイ政府自体も税金を安くするなどして車の購入(purchase)を奨励(encourage)しているのだとか。

交通量(amount of traffic)が多い場所で交通整理(control)を行うために信号機は重要だが、バンコクにおける信号機の本数は少なく、さらに赤と青の色の切り替えを交差点に常駐する(station(v))警察官が手動で(manually)切り替えを行っています。警察官の勘(hunch)によって切り替わる時間は 5 分にも 10 分以上にもなることがあるのだそう。

抜け道(shortcut)となる路地(passage)が少なく、あっても先はほぼ「行き止まり(dead-end)」。また、右折の際は信号で右折するのではなく、U ターンしてから右折してはなりません。そのため、ここでも大渋滞が発生しやすくなります。市内のあちこちにある道路の表面が陥没(fall in)し、この穴にタイヤがはまりパンク(have a flat tire)してしまう…ということも。

タイは 5 月中旬～10 月中旬が雨季(rainy season)とされ、1 日に数回激しいスコールが降るとい日が続きます。一日中降り続くことはありませんが、豪雨となるため視界(vision)が非常に悪くなりスピードも落ちます。それが渋滞の原因となるのです。

■ バンコクのバス新構想

バスよりも鉄道(rail way)を公共交通機関(public transportation)の主軸(main)に据えたい政府。新構想(frame work)で共存共栄(mutual benefit)の道を探る。

かつては 1 日 300 万人が利用する庶民(ordinary people)の足(way of transportation)だったが、BTS(Bangkok Train Service)に代表される都市鉄道の登場により、その数は半減。都内にはバンコク大量輸送公社 (Bangkok Mass Transit Authority) と民営(private)のバスが混在し、鉄道と同じルートも走るため一台あたりの利用客(user)が減り、営業状態(business status)もよくない。



(2) 「客観的なデータを用いて意見を述べる (高齢者独居問題解決)」の例

(図表 17)

青森県の高齢化の現状を考慮に入れ、高齢者の援助プランは1～4のどれがいいか話し合いなさい。

Facts About Aomori	2017-2021	2022-2027
<b>General Information</b>		
Population in Aomori	1,380 '1000 person	1,150 '1000 person
Individuals living alone over the age of 70	12 '1000 persons	16 '1000 persons
Population over 20	550 '1000 person	360 '1000 person
Dislocated work force over 20	22 '1000 person	28 '1000 person
<b>県収入</b>		
Prefectural Tax Income	138,686,304 '1000 yen	120,000,000 '1000 yen
Local transfer tax	220,434,420 '1000 yen	200,000,000 '1000 yen
Local Allocation Tax	211,632,000 '1000 yen	200,000,000 '1000 yen
National Treasury Disbursements	106,197,485 '1000 yen	80,000,000 '1000 yen
	<b>697,000,000 '1000 yen</b>	<b>600,000,000 '1000 yen</b>
<b>1 Building and Running 800 Apartment House (20 rooms each)</b>		
Construction Fee (Including land purchase, on a 15-year installment plan)	5,333,333 '1000 yen/year	5,333,333 '1000 yen/year
Salary for the staff	1,440,000 '1000 yen/year	1,632,000 '1000 yen/year
Social insurance	86,400 '1000 yen/year	823,200 '1000 yen/year
Allowance	144,000 '1000 yen/year	144,000 '1000 yen/year
	<b>7,003,733 '1000 yen/year</b>	<b>7,932,533 '1000 yen/year</b>
<b>2 Hiring 7,000 Care-takers</b>		
Salary 7000×225 million yen	12,600,000 '1000 yen/year	13,440,000 '1000 yen/year
Social Insurance	756,000 '1000 yen/year	823,200 '1000 yen/year
Allowance	1,680,000 '1000 yen/year	1,680,000 '1000 yen/year
	<b>15,036,000 '1000 yen/year</b>	<b>15,943,200 '1000 yen/year</b>
<b>3 Introducing a surveillance system</b>		
LAN Equipment purchase and instalment (10000rooms, on a 15-year installment plan)	2,133 '1000 yen/year	2,133 '1000 yen/year
Connection fees (800 buildings)	28,800 '1000 yen/year	28,800 '1000 yen/year
Maintenance and inspection fee (800buildings)	192,000 '1000 yen/year	192,000 '1000 yen/year
	<b>222,933 '1000 yen/year</b>	<b>222,933 '1000 yen/year</b>
<b>4 Utilizing volunteer staff</b>		
Insurance 20,000 '1000 yen per month	240,000 '1000 yen/year	290,400 '1000 yen/year
Traffic expenses 1000 yen per a time	4,380,000 '1000 yen/year	5,840,000 '1000 yen/year
	<b>4,620,000 '1000 yen/year</b>	<b>6,130,400 '1000 yen/year</b>
<b>5 Contracting with private business</b>		
Commission Fee 2h * 365 days * 1200 yen * cases	10,512,000 '1000 yen/year	16,352,000 '1000 yen/year
	<b>10,512,000 '1000 yen/year</b>	<b>16,352,000 '1000 yen/year</b>

ウ 地域・国際理解 (教材番号 5)

(図表 18)

エリアスタディ ポリビア(Bahia) 貧困

エリアスタディ ポリビア(Bahia) 貧困をなくそう

Facts

エリアスタディ ポリビア(Bahia) 貧困をなくそう

Facts

エリアスタディ ポリビア(Bahia) 貧困をなくそう

零細農家

経済活動人口の90～95%が零細農業に依存

エ 課題設定 (教材番号6)

課題検討シート (例)

(図表 19)

—ゼミ—班—年—組—番氏名—

<p>研究対象 (課題) は何か 私たちの身の回りに多く「待ち時間」が存在する。例えば、店のレジや銀行のATM、テーマパークのアトラクション、駅の窓口、病院の受付といったサービス機関や施設では、必ずと言っていいほど「待ち時間」があり、人々の精神面はもちろん、経済活動全般に与える影響も少なくない。そこで、私たちは待ち時間を減らすため、並び方の効率化 (対策) について、マクドナルドとスターバックスを例に検討することにした。</p> <p>店員が二人の場合のマクドナルド (左) とスターバックス (右) の並び方</p>	
<p>誰が困っているのか/誰にメリットがあるのか サービス機関や施設での「待ち時間」については、その都度ストレスに感じるものであり、それを解消することができる。</p>	
<p>いつ困っているのか/いつメリットがあるのか シブシブの待ち時間に関する意識調査によると我々の限界は、人気の飲食店 - 約半数が「30分」、商業施設の駐車場 - 「15分」が6割、「30分」が3割、スーパーやコンビニなどでのレジ待ち - 約半数が「2分」、昼時のメニューが運ばれてくるまで - 「10分」である。 わずかな「待ち時間」の蓄積が人々の気持ちや経済活動に与える影響は極めて大きく、深刻である。</p>	
<p>どの場所 (地域) で困っているのか 上述の通り「待ち時間」によるデメリットは、その規模や程度は異なるが、あらゆる場面で発生している。</p>	
<p>どう困っているのか/何が問題なのか サービスを受けたい ・何もしていない時間は長く感じる ・人とはかく何かに取りかかりたい ・不安があると、待ち時間は長く感じる ・待ち時間が分からないと、長く感じる ・理由もなく、待たたくない ・不平等な待ち時間は長く感じる ・価値あるものに対する待ち時間には寛容になれる ・独りの待ち時間は長く感じる</p>	<p>待ち時間が長い → 売る側...① 買う側...②</p> <p>双方にとつて” 効率が悪い”</p> <p>①について ・企業(店)・売り上げ(利益)に悪影響 → 病院の待ち時間 経済的損失3000 ②について ・時間の有効活用に悪影響 徳円/年といわれている ・買う側の”気持ちに”悪影響 ・交通渋滞による損失 12兆円</p>
<p>解決すると何がおきるのか フォーク並び (マクドナルドのように一列に並んでもらい、複数のレジに対応する。) の利点は個々の前に並ばないので、複数列による混雑がなく先着順にできる点である。またスペースもとらず所要時間も短縮される。待ち時間の短縮は客の満足度を高め、リピーターの増加や売り上げの向上につながる。店側と客側の相互により効果が生じ、経済面の成長が見込める。</p>	
<p>どれくらいの社会的意義があるのか (意義の大小) 待ち時間を短縮することによって、気持ちにゆとりをもって生活できるようになり、時間を有効に割り振ることができ。また経済的損失を解消することができる。直接的待ち時間の対策 (滞在している時間を短くしようとする発想)、間接的待ち時間の対策 (待っている時間を様々な工夫で飽きさせないようにする工夫) によって、待ち時間の不満を緩和し、客の満足度を高めることができる。</p>	

※ 必要に応じて課題の見直しをしましょう。  
YYNao aYoghY001 フロウ・線字Y003 フロム教材Y課題発見のヒントY課題検討ワークシート.xlsx

オ プロジェクト学習 IIBD (教材番号7)

(1) 模擬国連

模擬国連の Back Ground Guide の目次と第2章の冒頭である。

(図表 20)

# Background Guide

青森高校プロジェクト学習 IIBD 2018

**【設定会議】**  
国連総会軍縮・安全保障委員会 (第1委員会)

**The United Nations General Assembly, Disarmament and International Security  
Committee (1st Committee)**

**【議題】**  
核軍縮  
Nuclear Disarmament

## 目次

0	議題概説書について	2
0-1	議題概説書の構成	2
0-2	議題概説書の読み方	2
1	会議設定	3
1-1	設定会議	3
1-2	議題	3
2	核兵器の削減	5
2-1	戦略兵器削減条約 (START 条約)	5
2-2	戦略攻撃力削減条約 (SORT 条約)	6
2-3	新戦略兵器削減条約 (新 START 条約)	7
2-4	核兵器の削減に関する今後の課題	8
3	核兵器の不拡散	10
3-1	核兵器不拡散条約 (NPT) とは	10
3-2	核兵器不拡散条約 (NPT) に関する諸問題	11
3-3	今後の課題	12
4	核実験の禁止	13
4-1	部分的核実験禁止条約 (PTBT)	13
4-2	包括的核実験禁止条約 (CTBT)	14
5	非核兵器地帯	16
5-1	非核兵器地帯とは	17
5-2	非核兵器地帯の内容	18
5-3	構想中の非核兵器地帯	19
6	核兵器の使用禁止	21
6-1	国際司法裁判所 (ICJ) による勧告	21
6-2	先制不使用	21
6-3	消極的安全保証	22
7	核セキュリティ	24
7-1	核テロ	24
7-2	核セキュリティ	24
	その他…	26

## 2

### 核兵器の削減

この章では「核兵器の削減」という観点から核軍縮について見ていく。具体的には、戦略兵器削減条約 (START 条約)、戦略攻撃力削減条約 (SORT 条約)、新戦略兵器削減条約 (新 START 条約) の検討を通して、核軍縮条約の特徴と今後の課題を把握する。

#### 2-1 戦略兵器削減条約 (START 条約)

a)戦略兵器削減条約 (START 条約) とは

START 条約は、冷戦期の 1980 年代半ば頃から開始されていたアメリカ・ソ連間の戦略兵器削減交渉の結果として、1991 年に米ソ間で署名が行われ、1994 年に発効した。冷戦期には核兵器の数を制限することを目的とするいわゆる軍備管理条約が米ソ間で締結されることはあったが、戦略核兵

器<sup>※2</sup>の削減を具体的に規定した条約は START 条約が初めてであり、その点でこの条約の核軍縮における意義は大きい。なお、この条約は米ソ間の条約であるため、その規定はこの2カ国にしか適用されない。

START 条約が発効に至った要因としては、①宇宙空間にミサイル防衛システムを構築する「戦略防衛構想 (SDI)」をアメリカのレーガン大統領が放棄したことによって、ソ連にも核削減に応じる余地が生まれたこと<sup>※3</sup>、②「中距離核戦力 (INF) 条約<sup>※4</sup>」が 1987 年に米ソ間で署名され、核兵器削減の流れが生まれていたこと、などが挙げられる。

#### b)戦略兵器削減条約 (START 条約) の内容

START 条約では大きく分けて核弾頭と運搬手段の削減が規定された。米ロ<sup>※5</sup>はお互いの

※2 戦略的目標に対して使用される核兵器のこと。つまり、米ソ間で言えば直接相手の領土を攻撃できる大陸間弾道ミサイルなど射程の長い核兵器のことを指す。

※3 冷戦期には「相互確証破壊」理論が米ソの軍事戦略に大きな影響を与えた。相互確証破壊とは、核兵器による先制攻撃に対して、核兵器によって反撃を行い、先制攻撃を行った側にも壊滅的な被害を与えられる核戦力を、米ソ相互が保有している状態を維持することによって核使用の相互抑止が働く、という理論である。発射された核兵器を撃ち落とすことを目指すミサイル防衛システムは、この相互確証破壊を脆弱にさせる恐れがあるとして、ソ連は強く反発していた。

※4 射程が 500~5500km の中距離核兵器の全廃を定めた米ソ間の二国間条約。

※5 1991 年にソ連が崩壊したことによって、ソ連が保有していた核弾頭はロシア、ウクライナ、カザフスタン、ベラルーシにそれぞれ引継がれていた。そのため、1992 年に「START 条約議定書」が、アメリカとこの4カ国間で締結され、ロシアがそれぞれの核兵器を引継ぐことになった。

## (2) バーチャルユースフォーラム (教材番号 7)

Chapter 1 Section3 オの項に記されているバーチャルユースフォーラムの条件書の一部。生徒の成果物は Chapter 7 に記す。 (図表 21)

### バーチャルユースフォーラム

#### 1 概要

目的：バーチャルおもてなし、模擬国連で身につけた力を総合的に活用し、「企画力」「論理的思考力」「調整力」「コミュニケーション能力」「批判的思考力」「協調性」を高めます。これらは社会に出たときに必要となる力です。

内容：4泊5日の日程で世界各国の高校生が青森に集まり、分科会で話し合った内容を発表するユースフォーラムのプランを立てて下さい。クラス対抗のコンペとします。尚、本校生徒は企画運営を任されたスタッフという設定です。コンペは外部講師による審査になります。

審査対象：① スタッフマニュアルを含む関連書類一式 ② プランの説明

#### 2 企画条件

説明文中の A は\_\_\_\_先生、B は\_\_\_\_先生、C は\_\_\_\_先生を指します。統括教員は A 先生です。

原則として企画内容や条件に関する質問は受け付けません。ただし、重大な問題が生じた場合はA先生に申し出ること。公平を期すため、申し出の内容は後日全クラスで共有します。

### ■Schedule (日程関係)

2019年5月4日(土)～5月8日(水) の4泊5日で実施するものとする。  
 アイスブレイキングを2時間実施するものとする。  
 ウェルカムディナーを開催するものとする。  
 レクリエーションナイトを入れるものとする。  
 「エコ」or「平和」に関連したエクスカージョン(遠足)を実施するものとする。  
 フェアウェルディナーを開催するものとする。  
 最終日に結果発表会60分とクロージングセレモニーを行うものとする。  
 ワークショップ(80分)を最低4コマ入れるものとする。

### ■Workshop (ワークショップ関係)

UNESCOのSustainable Development Goalsのうち、"No Poverty"と"Responsible Consumption and Production"について参加者が討議し、全世界へ向けた提言を行うものとする。  
 6ヶ月前(第8回会議の日)までには二つの分野に関する背景説明(基礎知識)を盛り込んだA4四枚の資料とレポート課題を参加者全員に示すものとする。この課題は話し合いの方向性を決める重要な位置づけとなる。  
 参加者は二つのワークショップのうち、一つを選ぶこととし、レポートを4ヶ月前までに提出することとする。  
 提出されたレポートを冊子にまとめ(仮の印刷業者に依頼)、当日参加者を含め関係者(参加者数+100冊)に配布することとする。  
 それぞれのワークショップには4つの小グループ(A～D各5名程度)ができるようにする。  
 ワークショップ名簿を作成することとする。

### ■Venue (会場関係)

エクスカージョンの行き先は…

## カ オリエンテーション (教材番号10)

### (1) ワークショップスライド

(図表 22)

<p style="text-align: center;"><b>課題設定</b></p> <p style="text-align: center;">問1 誰が困っているのか？ 誰のためになるのか？</p> <p style="text-align: center;">グループで話し合い(2分)</p> <p style="text-align: right;">1</p>	<p style="text-align: center;"><b>課題設定</b></p> <p style="text-align: center;">問2 いつ困っているのか？ いつ貢献できるのか？</p> <p style="text-align: center;">グループで話し合い(1分)</p> <p style="text-align: right;">2</p>	<p style="text-align: center;"><b>課題設定</b></p> <p style="text-align: center;">問3 どれくらい困っているのか？ どれくらい貢献できるのか？</p> <p style="text-align: center;">グループで話し合い(2分)</p> <p style="text-align: right;">3</p>
<p style="text-align: center;"><b>仮説立案</b></p> <p style="text-align: center;">いきなり「解決策」ではない 「～すれば…するだろう」</p> <p style="text-align: center;">グループで話し合い(2分)</p> <p style="text-align: right;">4</p>	<p style="text-align: center;"><b>仮説立案</b></p> <p style="text-align: center;">いきなり「解決策」ではない 具体的なアクションは何か？</p> <p style="text-align: center;">グループで話し合い(2分)</p> <p style="text-align: right;">5</p>	<p style="text-align: center;"><b>データ収集計画</b></p> <p style="text-align: center;">先の3つの答えはどう入手する？ 他にどんなデータが必要？</p> <p style="text-align: center;">グループで話し合い(3分)</p> <p style="text-align: right;">6</p>
<p style="text-align: center;"><b>検証作業</b></p> <p style="text-align: center;">仮説が正しかったとどうやって説明する？ 実験・証拠・聞き取り・実行など ～ どうやれば検証できるか考える ～</p> <p style="text-align: right;">7</p>	<p style="text-align: center;"><b>まとめ</b></p> <p style="text-align: center;">分かった部分とまだ不明な部分を整理する。</p> <p style="text-align: right;">8</p>	<p style="text-align: center;"><b>課題の設定</b></p> <p style="text-align: center;">新しい課題の設定 課題の変更</p> <p style="text-align: right;">9</p>

## プロジェクト学習のねらい

平成28年4月  
青森高等学校探究学習部

### 1. プロジェクト学習とは

青森高校は平成26年度にスーパーグローバルハイスクール(SGH)に指定され、「総合的な学習の時間」をさらに発展させた形として「プロジェクト学習」という時間を設け、「探究型学習の場」を提供しています。

#### 1-1. 探究型学習とは

プロジェクト学習の時間では、「先生が教え、生徒が学ぶ」というスタイルの学習は行われません。「探究型学習の場」として、以下のようなことが行われます。

- a. 自分の興味・関心のある話題を扱う「ゼミ」に所属する。
- b. 「ゼミ」の中で、さらに関心あるテーマごとの「グループ」に分かれる。
- c. 「グループ」内で、テーマについて「課題」を見つけ出す。
- d. 資料などを各自用意し、「グループ」内で議論しながら結論を導く。
- e. ゼミ内でグループの結論を発表したり、他のグループと意見交換する。
- f. ゼミ内で質問し合ったり、先生から助言してもらったりして、自分たちの結論に対する新たな問題点や課題を明らかにする。
- g. dに戻る。

これが普段のプロジェクト学習・ゼミ活動の流れです。このサイクルを数回行って考えを深め、3年次に研究論文を書くことが最終目標です。

#### 1-2. 外部との交流による視点の拡大

c 課題設定、d 資料の収集に関しては、ゼミ活動だけでは不十分になることもあるでしょう。その際には専門家を招いて講演を聴いたり助言をもらったりすることが可能です。企業訪問や街頭インタビューを行う「フィールドワーク」の時間を校内ゼミ以外の時間に設定し、資料・データの収集を行う機会も設けます。また、他のゼミと共同で研究を行うことで、違う視点から新たな課題を見つけ出すことができます。

さらに、プロジェクト学習の時間は、他の学年とも共同で研究することで、先輩が手本となり、後輩が先輩に学びながら成長していけるように計画されています。

#### 1-3. 発表会・論文

1学年の2学期末、2学年の学年末には、全体の発表会があります。グループごとにポスターセッションなどの形で実施します。最終的には、発表会で出た意見や質問を踏まえて、研究論文を書きます。

以上が、青森高校「プロジェクト学習」の大まかな流れです。

### 2. プロジェクト学習の目標

#### 2-1. 学問の愉しみ

プロジェクト学習の最終形は、「研究論文」です。この論文は、必ずしも研究の完成形である必要はありません。むしろ、今後の課題を残すのが理想です。

もちろん、完成を目指して研究するのは言うまでもありません。「もはや不足はない」というものにさえ課題が見つかるのが学問です。学問は、やればやるほど楽しく、やればやるほど深まり、やればやるほど足りないと感じるものです。そんな「学問の愉しみ」をぜひ味わってほしいと思います。

#### 2-2. 質問することの意義

質問には、2つの意義があります。自分から質問する際には、能動的に相手の話を聞いている前提があります。他者に敬意を払い、積極的に受容しようとする行為を伴います。必然的に、自ら主体的に動くことをしていることとなります。しかも自己と異なる多様性を受け入れています。ここに、一つめの意義があります。

もう一つは、新たな視点です。自分の発表に対して、思いもかけない方向から質問を受けることがあるかもしれません。研究をまとめる過程では気づかなかった新しい視点です。ゼミ内での先輩・後輩を含めた生徒同士の質問、企業訪問や街頭インタビューでの質問、そして発表に対する質問を通して、新たな視点に気づき、研究は深化します。

### 2-3. チームによる研究の意義


グループは、同じ学年だけとは限りません。学年を越えて話し合いや研究を発表し合う機会もあります。的外れの質問をしたらどうしようという不安を克服し、お互いの意見・考えを尊重しながら研究しますから、コミュニケーション能力も育まれます。

企業訪問や街頭インタビューでは、当然初めて出会う人と対話することになります。物怖じせず、相手の立場を尊重しながら活動することで、望ましい人間関係が築かれます。

資料やデータを集めながら研究内容を高めていくことは、コミュニケーション能力を高め、良好な人間関係を築くまたとない学習の場でもあります。

(図表 24)

## キ SDGs (教材番号 1 1)

 <p><b>11 住み続けられるまちづくり</b> 都市と人間の居住地を包摂的、安全、レジリエントかつ持続可能にする</p>	<p>コミュニティのあり方 自給自足支援 空き家の活用(住民移動) 限界集落 自治体の財政 コンパクトシティ構想(再) 公民館活動(再) 町内会活動(再) 障害者支援(再) 介護離れ(再)</p>
 <p><b>12 つくる責任・つかう責任</b> 持続可能な消費と生産のパターンを確保する</p>	<p>産業廃棄物 トレーサビリティ もったいない運動(再) XXの新しい使い方 ゴミ処理(雇用を含め) 消費期限 保存方法 食品表示 スーパー・コンビニの廃棄(再)</p>



## **Chapter 4**

### **評価・実績**



## Section 1

### 英語技能試験

#### 1 実用英語技能検定

(図表 25)

受験者と準1級合格者の数が年を追う毎に増えている。

平成 30 年度

第三回	準一級 4 / 41 人合格	二級 82/126 人合格	準二級 36/40 人合格
第二回	準一級 3 / 14 人合格	二級 36/52 人合格	準二級 19/19 人合格
第一回	準一級 3 / 29 人合格	二級 29/58 人合格	準二級 6 / 7 人合格

平成 29 年度

第三回	準一級 6 / 31 人合格	二級 31/84 人合格	準二級 15/17 人合格
第二回	準一級 0 / 6 人合格	二級 41/60 人合格	準二級 12/15 人合格
第一回	準一級 3 / 21 人合格	二級 13/28 人合格	準二級 6 / 6 人合格

平成 28 年度

第三回	準一級 3 / 44 人合格	二級 62/89 人合格	準二級 27/28 人合格
第二回	準一級 2 / 22 人合格	二級 44/76 人合格	準二級 13/15 人合格
第一回	準一級 2 / 23 人合格	二級 43/91 人合格	準二級 7 / 7 人合格

平成 27 年度

第三回	準一級 1 / 12 人合格	二級 62/75 人合格	準二級 19/23 人合格
第二回	準一級 0 / 4 人合格	二級 41/51 人合格	準二級 12/13 人合格
第一回	準一級 0 / 0 人合格	二級 22/22 人合格	準二級 1 / 6 人合格

平成 26 年度

第三回	準一級 0 / 0 人合格	二級 7/16 人合格	準二級 5 / 5 人合格
第二回	準一級 0 / 0 人合格	二級 7/20 人合格	準二級 7/12 人合格
第一回	準一級 0 / 0 人合格	二級 16/18 人合格	準二級 2 / 3 人合格

#### 2 GTEC

一般に受験者数の増加に伴い平均点は下降するが、2 学年の成績を見ると英語力が上昇している。

(図表 26)

H30 年	(2 年) 141 人受験	平均 542.7 点 /	(1 年) 281 人受験	平均 469.6 点
平成 29 年度年		(2 年) 114 人受験	平均 532.3 点 /	(1 年) 278 人受験
		507.1 点		
H28 年	(2 年) 107 人受験	平均 552.6 点 /	(1 年) 267 人受験	平均 475.8 点
H27 年	(2 年) 49 人受験	平均 549.3 点 /	(1 年) 275 人受験	平均 496.6 点
H26 年	(2 年) 8 人受験	平均 570.1 点 /	(1 年) 270 人受験	平均 485.9 点

#### 3 TOEIC

GTEC と同様のことが TOEIC にも当てはまる。今年度は 1 学年生徒には積極的に受験は勧めなかったため、受験者数の減少があった。

(図表 27)

H30 年度 S&W	52 名受験 (うち海外研修 37 名)	Speaking 87.0 点	Writing 114.6 点
平成 29 年度 S&W	71 名受験 (うち海外研修 23 名)	Speaking 87.8 点	Writing 104.6 点
H28 年度 L&R	28 名受験 (うち SGH25 名)	Listening 255 点	Reading 193 点
H27 年度 L&R	40 名受験 (うち SGH35 名)	Listening 209 点	Reading 177 点

## Section 2

### アンケート結果

#### 1 生徒・保護者・教員共通の質問

平成26年度より継続しているアンケート調査の結果を経年比較する。5年間で事業が充実したことがうかがえる。

#### 1 地域が抱える社会問題に対する興味・関心 (図表 28)

「大いに高まった」と「高まった」の合算

##### 1 学年

	SGH	回答数
30年度	60.3%	272
29年度	55.6%	270
28年度	71.3%	279
27年度	71.4%	273
26年度	88.4%	276

##### 保護者

	全学年	回答数
30年度	38.4%	263
29年度	42.1%	247
28年度	39.5%	314
27年度	36.1%	294
26年度	22.2%	248

##### 2 学年

	SGH (海外)	国内・SGH以外	回答数
30年度	97.3%	69.4%	37/235
29年度	95.7%	72.8%	23/81
28年度	91.7%	調査なし	24/ 0
27年度	91.2%	調査なし	34/ 0
26年度			

##### 教員

	全教員	回答/対象
30年度	77.8%	36/50
29年度	調査なし	
28年度	79.1%	43/45
27年度	82.6%	46/47
26年度	91.7%	36/45

##### 3 学年

	SGH (海外)	国内・SGH以外	回答数
30年度	調査なし	調査なし	0/0
29年度	100.0%	調査なし	24/0
28年度	97.1%	調査なし	35/0
27年度			
26年度			

#### 生徒の経年変化

	1 学年	2 学年		3 学年	
	SGH	SGH (海外)	国内・SGH以外	SGH (海外)	国内・SGH以外
1 期生	88.4%	91.2%	調査なし	97.1%	調査なし
2 期生	71.4%	91.7%	調査なし	100.0%	調査なし
3 期生	71.3%	95.7%	72.8%	調査なし	調査なし
4 期生	55.6%	97.3%	69.4%		
5 期生	60.3%				

1 期生・2 期生の1 学年は特に地域の活性化について研修を行ったため、数値は高く出る。3 期生からは「ゼミ」の開始により地域課題から離れる生徒も増えた。5 期生1 学年での上昇は、SDGs をグローバルに捉えるアプローチに変えたためと考えられる。

(図表 29)

## 2 世界が抱える社会問題に対する興味・関心 「大いに高まった」と「高まった」の合算

### 1 学年

	SGH	回答数
30年度	73.2%	272
29年度	57.8%	270
28年度	76.7%	279
27年度	24.2%	273
26年度	75.7%	276

### 保護者

	全学年	回答数
30年度	39.9%	263
29年度	36.4%	247
28年度	34.7%	314
27年度	28.6%	294
26年度	24.6%	248

### 2 学年

	SGH (海外)	国内・SGH以外	回答数
30年度	100.0%	71.1%	37/235
29年度	100.0%	66.7%	23/81
28年度	91.7%	調査なし	24/ 0
27年度	97.1%	調査なし	34/ 0
26年度			

### 教員

	全教員	回答/対象
30年度	83.3%	36/50
29年度	調査なし	
28年度	79.1%	43/45
27年度	73.9%	46/47
26年度	77.8%	36/45

### 3 学年

	SGH (海外)	国内・SGH以外	回答数
30年度	調査なし	調査なし	0/0
29年度	100.0%	調査なし	24/0
28年度	97.1%	調査なし	35/0
27年度			
26年度			

## 生徒の経年変化

	1 学年		2 学年		3 学年	
	SGH	国内・SGH以外	SGH (海外)	国内・SGH以外	SGH (海外)	国内・SGH以外
1 期生	75.7%	97.1%	97.1%	調査なし	97.1%	調査なし
2 期生	24.2%	91.7%	100.0%	調査なし	100.0%	調査なし
3 期生	76.7%	100.0%	66.7%	調査なし	調査なし	調査なし
4 期生	57.8%	100.0%	71.1%			
5 期生	73.2%					

2 期生 1 学年の数値の低さについては、原因は不明であるが、このデータに含まれない「少し高まった」の割合は高い (42.1%)。5 期生 1 学年の上昇は前項と同様の理由によると考えられる。平成 28 年・29 年は文理融合・学年融合のゼミ活動、30 年度は学年分離ではあるが、文理融合のゼミ活動をおこなっている。国内・SGH 以外の生徒は各自の興味関心に応じた研究を行っているが、SGH 海外研修者はグローバルな視点で社会問題を扱っている。この SGH 海外研修参加者の数値を見ると、世界に関心が向いていることがわかる。この点より、「グローバルマインドに基づく(企画力)」に関する力と意識が身についたと言える。

3 異文化理解に対する興味・関心  
「大いに高まった」と「高まった」の合算

(図表 30)

1 学年

	SGH	回答数
30年度	69.1%	272
29年度	57.8%	270
28年度	85.3%	279
27年度	71.4%	273
26年度	69.9%	276

保護者

	全学年	回答数
30年度	49.8%	263
29年度	50.2%	247
28年度	48.7%	314
27年度	40.1%	294
26年度	31.0%	248

2 学年

	SGH (海外)	国内・SGH以外	回答数
30年度	100.0%	70.6%	37/235
29年度	100.0%	75.3%	23/81
28年度	100.0%	調査なし	24/ 0
27年度	97.1%	調査なし	34/ 0
26年度			

教員

	全教員	回答/対象
30年度	86.1%	36/50
29年度	調査なし	
28年度	81.4%	43/45
27年度	84.8%	46/47
26年度	80.6%	36/45

3 学年

	SGH (海外)	国内・SGH以外	回答数
30年度	調査なし	調査なし	0/0
29年度	100.0%	調査なし	24/0
28年度	97.1%	調査なし	35/0
27年度			
26年度			

生徒の経年変化

	1 学年		2 学年		3 学年	
	SGH	国内・SGH以外	SGH (海外)	国内・SGH以外	SGH (海外)	国内・SGH以外
1 期生	69.9%	97.1%	調査なし	97.1%	調査なし	調査なし
2 期生	71.4%	100.0%	調査なし	100.0%	調査なし	調査なし
3 期生	85.3%	100.0%	75.3%	調査なし	調査なし	調査なし
4 期生	57.8%	100.0%	70.6%			
5 期生	69.1%					

SGH (海外研修参加者) の 2 学年での伸びが著しい。他の生徒の伸びと比較すると、SGH プログラムは生徒の異文化理解を促していると考えられる。国内研修者の数値の低さは直接異文化に触れる機会が少ないこと、国内研修者の所属ゼミは「グローバル」以外のものが多いことが理由として挙げられるだろう。なお平成 29 年度以降、2 学年文型の国内研修者には「模擬国連」や「バーチャルユースフォーラム (Chapter 1 Section 3 - 1 才参照)」などの社会問題や異文化理解を促すカリキュラムが実施され、状況は改善されつつある。これに関して、生徒からは以下の感想が上げられている。

- ・ 宗教の違いで食 事を選ぶのがとても大変でした。それから仕事の都合などで時間が合わなくて、なかなか日程を決めることができませんでした。提示された要望に応える場所がなかなかわからず、自分たちも青森のことをよく知っていなかったんだなあと思いました。このことから、その土地をよく知ってからでないとおもてなしができないと痛感しました。決められている条件の中で 1 番良いプランを考えるのは難しかった。また条件だけでなく、無理のないように行動計画を立てることや、宗教などにも配慮することも大切だとわかった。考えたプランは穴だらけだったので、次に同じようなことをやるときは、視野を広くし物事を深い面まで見るようにしたい。

#### 4 英語学習への興味・関心

(図表 31)

「大いに高まった」と「高まった」の合算

##### 1 学年

	SGH	回答数
30年度	70.6%	272
29年度	59.3%	270
28年度	84.9%	279
27年度	42.5%	273
26年度	57.6%	276

##### 保護者

	全学年	回答数
30年度	56.7%	263
29年度	54.7%	247
28年度	59.2%	314
27年度	43.9%	294
26年度	41.1%	248

##### 2 学年

	SGH (海外)	国内・SGH以外	回答数
30年度	100.0%	67.2%	37/235
29年度	100.0%	75.3%	23/81
28年度	100.0%	調査なし	24/ 0
27年度	97.1%	調査なし	34/ 0
26年度			

##### 教員

	全教員	回答/対象
30年度	58.3%	36/50
29年度	調査なし	
28年度	74.4%	43/45
27年度	73.9%	46/47
26年度	58.3%	36/45

##### 3 学年

	SGH (海外)	国内・SGH以外	回答数
30年度	調査なし	調査なし	0/ 0
29年度	100.0%	調査なし	24/ 0
28年度	97.1%	調査なし	35/ 0
27年度			
26年度			

##### 生徒の経年変化

	1 学年		2 学年		3 学年	
	SGH	SGH (海外)	国内・SGH以外	SGH (海外)	国内・SGH以外	
1 期生	57.6%	97.1%	調査なし	97.1%	調査なし	
2 期生	42.5%	100.0%	調査なし	100.0%	調査なし	
3 期生	84.9%	100.0%	75.3%	調査なし	調査なし	
4 期生	59.3%	100.0%	67.2%			
5 期生	70.6%					

平成28年度1学年の数値の高さは、海外研修から帰ってきた当時の3学年生徒が英語でプレゼンテーションを行ったのを見たときのインパクトが原因と考えられる。当時の1学年生徒からは「たった1年間でこんなにも英語が話せるようになるのにはびっくりした。」という感想を得ている。28年冬から始まった英語によるプレゼンテーションは29年度には当然のこととなった。このことが教員アンケート30年度の数値の低さにつながるとも考えられる。また、「英語学習」が意味するものの曖昧さも原因の一つと推察する。受験のための英語なのか、使用言語としての英語なのか、その両方を指すのかは教職員の転勤もあり、意識の統一があるかどうか不明な部分がある。よって、平成30年度からは2学年生徒に限って、英語の4技能についてそれぞれ意識調査をすることになった（結果は後述）。

## 5 自主的に行動する力

「大いに高まった」と「高まった」の合算

(図表 32)

### 1 学年

	SGH	回答数
30年度	63.2%	272
29年度	70.0%	270
28年度	53.4%	279
27年度	56.8%	273
26年度	83.0%	276

### 保護者

	全学年	回答数
30年度	調査なし	0
29年度	調査なし	0
28年度	調査なし	0
27年度	調査なし	0
26年度	調査なし	0

### 2 学年

	SGH (海外)	国内・SGH以外	回答数
30年度	100.0%	86.1%	37/235
29年度	100.0%	72.8%	23/81
28年度	100.0%	調査なし	24/ 0
27年度	100.0%	調査なし	34/ 0
26年度			

### 教員

	全教員	回答/対象
30年度	83.3%	36/50
29年度	調査なし	
28年度	79.1%	43/45
27年度	78.3%	46/47
26年度	91.7%	36/45

### 3 学年

	SGH (海外)	国内・SGH以外	回答数
30年度	調査なし	調査なし	0/ 0
29年度	95.8%	調査なし	24/ 0
28年度	97.1%	調査なし	35/ 0
27年度			
26年度			

### 生徒の経年変化

	1 学年		2 学年		3 学年	
	SGH	SGH (海外)	国内・SGH以外	SGH (海外)	国内・SGH以外	
1 期生	83.0%	100.0%	調査なし	97.1%	調査なし	
2 期生	56.8%	100.0%	調査なし	95.8%	調査なし	
3 期生	53.4%	100.0%	72.8%	調査なし	調査なし	
4 期生	70.0%	100.0%	72.8%			
5 期生	63.2%					

平成28年度は学年融合のゼミ (Chapter 1 Section 3-1 ウ参照) が始まった年である。同年の1学年の数値の低さは、先輩と同じグループに所属し、言いたいことが言えない、したいことができないことによるものと考えられる。ゼミ担当の教員からは、「2年生の主導にまかせる傾向にあり、自分たちが設定したテーマではないので、意見を出しにくいようである。途中から1年生が加わるので言いにくい面もある。」という報告を受けている。

2学年海外研修参加者が毎年100%の値を出しているのは、このプログラム自体が自主的に動かざるを得ない状況を意図的に作り出しているためである。自主的に活動するためある程度の刺激は必要である。例として、長期休業後に夏休みフィールドワーク結果発表会を開催したり、各グループのインタビューのサンプル数を公にしたりするなどの工夫がある。調査に関するアドバイスは個別に行うなどの支援を行うが、「いつ」、「誰に」、「どうやって」の指示は避けるような工夫をしてきた。平成29年度になると、生徒が自主的に講師を探したり、企業訪問をするようになり、Student Autonomy が確立されつつある。

## 6 協働する力

「大いに高まった」と「高まった」の合算

## 1 学年

	SGH	回答数
30年度	69.9%	272
29年度	80.7%	270
28年度	69.2%	279
27年度	53.1%	273
26年度	79.3%	276

## 保護者

	全学年	回答数
30年度	調査なし	0
29年度	調査なし	0
28年度	調査なし	0
27年度	調査なし	0
26年度	30.2%	248

## 2 学年

	SGH (海外)	国内・SGH以外	回答数
30年度	97.3%	67.7%	37/235
29年度	100.0%	60.5%	23/81
28年度	95.8%	調査なし	24/ 0
27年度	100.0%	調査なし	34/ 0
26年度			

## 教員

	全教員	回答/対象
30年度	94.4%	36/50
29年度	調査なし	
28年度	83.7%	43/45
27年度	82.6%	46/47
26年度	83.3%	36/45

## 3 学年

	SGH (海外)	国内・SGH以外	回答数
30年度	調査なし	調査なし	0/ 0
29年度	95.8%	調査なし	24/ 0
28年度	91.4%	調査なし	35/ 0
27年度			
26年度			

## 生徒の経年変化

	1 学年		2 学年		3 学年	
	SGH	SGH (海外)	国内・SGH以外	SGH (海外)	国内・SGH以外	
1 期生	79.3%	100.0%	調査なし	91.4%	調査なし	
2 期生	53.1%	95.8%	調査なし	95.8%	調査なし	
3 期生	69.2%	100.0%	60.5%	調査なし	調査なし	
4 期生	80.7%	97.3%	67.7%			
5 期生	69.9%					

この段階では1年次のプログラムの効果は薄かった可能性がある。

上記の表には現れないが、この能力に関して本校 CAN-DO 評価と相関のある河合塾 PROG-H の結果(5点満点)は、1学年終了時点で本校 3.17 に対し、高校1年全国平均 3.22 である。また、この値は一般に年令を重ねる毎に下降する傾向がある(高校2年全国平均 3.1、高校3年平均 3.1、大学1年 2.9、大学3年 2.8)。

2期生1学年の値を見ると、53.1%と低いのが、注目すべきはその値ではなく、2学年の SGH プログラムに参加した後の 95.8%という数値である。また、CAN-DO 評価(後述)でも、28年度は協働力に 27.4 pts の上昇がみられ、以降 29年度 27.4 pts、30年度 24.5 pts と毎年上昇を維持している。加えて現在では9割を超える教職員からも力が高まったという回答を得ている。

全国的に数値が下降する傾向の協働力が本校 SGH 2学年プログラムでは上昇すること、さらに PROG-H と本校の CAN-DO リストの間に相関があることから、全国の流れとは逆に本校の2学年で協働力は大きく上昇していると言える。

## 7 独創的に発想する力

「大いに高まった」と「高まった」の合算

(図表 34)

### 1 学年

	SGH	回答数
30年度	57.7%	272
29年度	53.3%	270
28年度	41.2%	279
27年度	46.5%	273
26年度	79.3%	276

### 保護者

	全学年	回答数
30年度	調査なし	0
29年度	調査なし	0
28年度	調査なし	0
27年度	調査なし	0
26年度	30.2%	248

### 2 学年

	SGH (海外)	国内・SGH以外	回答数
30年度	97.3%	57.4%	37/235
29年度	91.3%	54.3%	23/81
28年度	95.8%	調査なし	24/ 0
27年度	91.2%	調査なし	34/ 0
26年度			

### 教員

	全教員	回答/対象
30年度	55.6%	36/50
29年度	調査なし	
28年度	51.2%	43/45
27年度	69.6%	46/47
26年度	88.9%	36/45

### 3 学年

	SGH (海外)	国内・SGH以外	回答数
30年度	調査なし	調査なし	0/ 0
29年度	91.7%	調査なし	24/ 0
28年度	82.9%	調査なし	35/ 0
27年度			
26年度			

### 生徒の経年変化

	1 学年		2 学年		3 学年	
	SGH	SGH (海外)	国内・SGH以外	SGH (海外)	国内・SGH以外	SGH (海外)
1 期生	79.3%	91.2%	調査なし	82.9%	調査なし	
2 期生	46.5%	95.8%	調査なし	91.7%	調査なし	
3 期生	41.2%	91.3%	54.3%	調査なし	調査なし	
4 期生	53.3%	97.3%	57.4%			
5 期生	57.7%					

教員の評価は他の力の評価と比べて著しく低い。PROG-H では右表の結果である。計画立案力はコンピテンシー（周囲の状況に上手に対応するために身につけた、意思決定・行動指針などの特性）に属し、構想力はリテラシー（新しい問題や、これまで経験のない問題に対して知識を活用して課題を解決する力）に属す。右表からリテラシーの値が高く、新しいものに取り組む力があると判断できるが、オリジナルな思考を展開するまでにはいたっていないと考えられる。生徒は情報の検索に終始しているか、既にあるものの焼き直

しで終わっている可能性もある。また、探究型学習がスパイラルなものでなく、リニアなものであった可能性も拭いきれない。新たな課題を見出し、独創的な思考を展開するにはまだ改善の余地があると判断できる。

	計画立案力	構想力
<b>本校</b>	<b>2.60</b>	<b>3.29</b>
高 1	2.65	2.74
高 2	2.63	2.92
高 3	2.70	2.87
高校全体	2.65	2.79
大学1年生	2.77	
大学3年生	2.76	



## 8 論理的に考え、分析する力

「大いに高まった」と「高まった」の合算

(図表 35)

### 1 学年

	SGH	回答数
30年度	64.7%	272
29年度	67.4%	270
28年度	58.8%	279
27年度	65.2%	273
26年度	81.2%	276

### 保護者

	全学年	回答数
30年度	調査なし	0
29年度	調査なし	0
28年度	調査なし	0
27年度	調査なし	0
26年度	33.9%	248

### 2 学年

	SGH (海外)	国内・SGH以外	回答数
30年度	97.3%	78.7%	37/235
29年度	100.0%	71.6%	23/81
28年度	95.8%	調査なし	24/ 0
27年度	91.2%	調査なし	34/ 0
26年度			

### 教員

	全教員	回答/対象
30年度	58.3%	36/50
29年度	調査なし	
28年度	53.5%	43/45
27年度	71.7%	46/47
26年度	80.6%	36/45

### 3 学年

	SGH (海外)	国内・SGH以外	回答数
30年度	調査なし	調査なし	0/ 0
29年度	100.0%	調査なし	24/ 0
28年度	94.3%	調査なし	35/ 0
27年度			
26年度			

### 生徒の経年変化

	2 学年			3 学年	
	1 学年	SGH (海外)	国内・SGH以外	SGH (海外)	国内・SGH以外
1 期生	81.2%	91.2%	調査なし	94.3%	調査なし
2 期生	65.2%	95.8%	調査なし	100.0%	調査なし
3 期生	58.8%	100.0%	71.6%	調査なし	調査なし
4 期生	67.4%	97.3%	78.7%		
5 期生	64.7%				

ここでは教員の評価と生徒の評価の間に乖離がある。SGH 海外研修の指導に直接携わる教員は限定的(3名)であるため、2 学年の評価に関しては教員評価が当てはまらない可能性が高い。「論理的に考え、分析する力」の多くは日頃の活動によって観察されうるもので、ポスターやスライドを用いた発表の観察だけでは判断が難しい事実が背景にある。

また、教員が考える論理力と生徒の捉える力との間に意識のずれがあると考えられる。生徒は CAN-DO リストのデスクリプタを参照しながら判断しているが、教員はそれぞれの基準で判断せざるを得ない状況である。これはアンケート実施側の不備であり、今後改善が必要な部分である。生徒の「論理的思考力」の自己評価については後述する。

この力の伸長が教員の評価どおり不十分であると仮定すると、論理的思考力育成のためのマインドマップ・バタフライチャート・SWOT 分析・マンダラート等の思考を深め論理的にまとめるための教材が活用されていない、ディスカッションの方向性に関する指示がないなどの可能性もある。

9 物事を国際的な視野で捉える力  
「大いに高まった」と「高まった」の合算

(図表 36)

1 学年

	SGH	回答数
30年度	67.3%	272
29年度	48.1%	270
28年度	45.5%	279
27年度	50.9%	273
26年度	54.0%	276

保護者

	全学年	回答数
30年度	調査なし	0
29年度	調査なし	0
28年度	調査なし	0
27年度	調査なし	0
26年度	34.3%	248

2 学年

	SGH (海外)	国内・SGH以外	回答数
30年度	97.3%	60.4%	37/235
29年度	100.0%	70.4%	23/81
28年度	95.8%	調査なし	24/ 0
27年度	94.1%	調査なし	34/ 0
26年度			

教員

	全教員	回答/対象
30年度	72.2%	36/50
29年度	調査なし	
28年度	62.8%	43/45
27年度	69.6%	46/47
26年度	52.8%	36/45

3 学年

	SGH (海外)	国内・SGH以外	回答数
30年度	調査なし	調査なし	0/ 0
29年度	95.8%	調査なし	24/ 0
28年度	94.3%	調査なし	35/ 0
27年度			
26年度			

生徒の経年変化

	1 学年		2 学年		3 学年	
	SGH	SGH (海外)	国内・SGH以外	SGH (海外)	国内・SGH以外	国内・SGH以外
1 期生	54.0%	94.1%	調査なし	94.3%	調査なし	
2 期生	50.9%	95.8%	調査なし	95.8%	調査なし	
3 期生	45.5%	100.0%	70.4%	調査なし	調査なし	
4 期生	48.1%	97.3%	60.4%			
5 期生	67.3%					

平成29年度よりゼミ活動にSDGsの概念を取り入れた。特に平成30年度は各グループのテーマとSDGsを紐づけるシステムにしている。30年度の1学年と教員の結果を比較すると、自分で感じているよりも国際的な視野で世界を見ている生徒が多いと判断できる。なお、生徒の意識は前年度比19.2ポイント上昇していることから、全体として、国際的な視野の育成が進んでいると考えられる。

1学年から2学年の1年間の変化はSGH(海外)の生徒の伸長がここでも著しい。外部評価との整合性が取れていない分野だけに、評価方法の確立を急ぎたい。

10 情報を収集し、活用する力

(図表 37)

「大いに高まった」と「高まった」の合算

1 学年

	SGH	回答数
30年度	80.1%	272
29年度	80.7%	270
28年度	62.7%	279
27年度	68.5%	273
26年度	81.2%	276

保護者

	全学年	回答数
30年度	調査なし	0
29年度	調査なし	0
28年度	調査なし	0
27年度	調査なし	0
26年度	調査なし	0

2 学年

	SGH (海外)	国内・SGH以外	回答数
30年度	97.3%	78.7%	37/235
29年度	95.7%	60.5%	23/81
28年度	95.8%	調査なし	24/ 0
27年度	100.0%	調査なし	34/ 0
26年度			

教員

	全教員	回答/対象
30年度	75.0%	36/50
29年度	調査なし	
28年度	76.7%	43/45
27年度	82.6%	46/47
26年度	77.8%	36/45

3 学年

	SGH (海外)	国内・SGH以外	回答数
30年度	調査なし	調査なし	0/ 0
29年度	95.8%	調査なし	24/ 0
28年度	94.3%	調査なし	35/ 0
27年度			
26年度			

生徒の経年変化

	1 学年		2 学年		3 学年	
	SGH	国内・SGH以外	SGH (海外)	国内・SGH以外	SGH (海外)	国内・SGH以外
1 期生	81.2%	100.0%	調査なし	94.3%	調査なし	
2 期生	68.5%	95.8%	調査なし	95.8%	調査なし	
3 期生	62.7%	95.7%	60.5%	調査なし	調査なし	
4 期生	80.7%	97.3%	78.7%			
5 期生	80.1%					

この項目は、生徒の自己評価 (CAN-DO リスト) と PROG-H の間に相関がある。後述の Section4 の PROG-H の結果でわかるとおり、本校生徒の情報分析能力が 1 学年終了時点で大学 3 年生を越えていることを考えると、本校教員がやや辛口であるかもしれない。

評価基準の差異は別にしても、問題はゼミの導入以降である 3 期生、4 期生に関して 2 学年の「国内・SGH 以外」の数値が前年度より下降していることである (62.7→60.5、80.7→78.7)。2 学年の活動が効果的でない可能性を示唆する。前述のように、1 学年終了時点では能力が高いのだが、情報収集や活用能力が伸びていない生徒が存在し、教員の印象を押し下げているのかもしれない。

情報収集に関する学習は 1 学年のプロジェクト学習 IB,IC で一旦終了している。その後の能力の伸張は 2 学年の学習状況に左右されると言える。一部のゼミが機能していない可能性は捨て切れない。

11 自分の考えをわかりやすく相手に伝える  
 「大いに高まった」と「高まった」の合算

(図表 38)

1 学年

	SGH	回答数
30年度	61.8%	272
29年度	65.6%	270
28年度	68.8%	279
27年度	58.6%	273
26年度	77.9%	276

保護者

	全学年	回答数
30年度	調査なし	0
29年度	調査なし	0
28年度	調査なし	0
27年度	調査なし	0
26年度	34.3%	248

2 学年

	SGH (海外)	国内・SGH以外	回答数
30年度	97.3%	74.0%	37/235
29年度	100.0%	54.3%	23/81
28年度	95.8%	調査なし	24/ 0
27年度	100.0%	調査なし	34/ 0
26年度			

教員

	全教員	回答/対象
30年度	83.3%	36/50
29年度	調査なし	
28年度	76.7%	43/45
27年度	91.3%	46/47
26年度	80.6%	36/45

3 学年

	SGH (海外)	国内・SGH以外	回答数
30年度	調査なし	調査なし	0/ 0
29年度	95.8%	調査なし	24/ 0
28年度	97.1%	調査なし	35/ 0
27年度			
26年度			

生徒の経年変化

	1 学年		2 学年		3 学年	
	SGH	SGH (海外)	国内・SGH以外	SGH (海外)	国内・SGH以外	国内・SGH以外
1 期生	77.9%	100.0%	調査なし	97.1%	調査なし	
2 期生	58.6%	95.8%	調査なし	95.8%	調査なし	
3 期生	68.8%	100.0%	54.3%	調査なし	調査なし	
4 期生	65.6%	97.3%	74.0%			
5 期生	61.8%					

2 学年の海外研修参加者と国内・SGH 以外の生徒で大きな差がある。これは発表回数に起因するものと考えられる。SGH 海外研修者の 2 学年での発表回数は各種大会等への参加も手伝って、平均 6 回である。それに対し、SGH 以外の生徒は少ないものでは年間 1 回の発表にとどまる。

改善策として、ゼミ単位での小規模な発表の機会を与えることに加え、教科・科目での言語活動の充実を図ることが考えられる。

12 コミュニケーション能力

(図表 39)

「大いに高まった」と「高まった」の合算

1 学年

	SGH	回答数
30年度	71.0%	272
29年度	73.3%	270
28年度	52.3%	279
27年度	53.1%	273
26年度	78.3%	276

保護者

	全学年	回答数
30年度	調査なし	0
29年度	調査なし	0
28年度	調査なし	0
27年度	調査なし	0
26年度	29.8%	248

2 学年

	SGH (海外)	国内・SGH以外	回答数
30年度	100.0%	80.0%	37/235
29年度	100.0%	79.0%	23/81
28年度	95.8%	調査なし	24/ 0
27年度	100.0%	調査なし	34/ 0
26年度			

教員

	全教員	回答/対象
30年度	75.0%	36/50
29年度	調査なし	
28年度	72.1%	43/45
27年度	82.6%	46/47
26年度	83.3%	36/45

3 学年

	SGH (海外)	国内・SGH以外	回答数
30年度	調査なし	調査なし	0/ 0
29年度	100.0%	調査なし	24/ 0
28年度	94.3%	調査なし	35/ 0
27年度			
26年度			

生徒の経年変化

	1 学年		2 学年		3 学年	
	SGH	SGH (海外)	国内・SGH以外	SGH (海外)	国内・SGH以外	
1 期生	78.3%	100.0%	調査なし	94.3%	調査なし	
2 期生	53.1%	95.8%	調査なし	100.0%	調査なし	
3 期生	52.3%	100.0%	79.0%	調査なし	調査なし	
4 期生	73.3%	100.0%	80.0%			
5 期生	71.0%					

ここでも「コミュニケーション能力」の定義があいまいな感拭えない。一部の生徒は自分の考えを正確に相手に伝えるための発表の力と捕らえ、一部の教員は傾聴および折衝の力と捉える。

本校の「コミュニケーション能力」は PROG-H の「円満な人間関係を築く」、「協力的に仕事をすすめる」「場を読み、目標に向かって組織を動かす」、また、社会人基礎力の定義になぞらえれば、「発信力」、「傾聴力」、「柔軟性」、「状況把握力」、「規律性」、「ストレスコントロール」にあたる。PROG-H での本校生徒の能力は上図の数値であり、あまり高いとは言えない。なお、本校の「コミュニケーション能力」に関するアンケート調査と

PROG-H の対人基礎力の相関はきわめて高い(R=0.9)ことから、本校生徒の自己評価が甘いと導き出される。また、別の評価基準である CAN-DO リストは PROG-H との相関が低く、CAN-DO リストの洗練が待たれるところである。

	対人基礎力
本校 1 年終了時(H28)	2.97
高校 1 年全国平均	2.97
高校 2 年全国平均	2.92
高校 3 年全国平均	2.97
高校生全体	2.96
大学 1 年生	2.82
大学 3 年生	2.79

## 2 生徒対象の質問

(図表 40)

### 13 自分の意見を整理する力

4: 大変向上した 3: 向上した 2: 少し向上した 1: 向上しなかった

#### 1 学年

	SGH			
	4	3	2	1
30年度	73	120	66	11
29年度	80	118	62	7
28年度	20	92	130	37
27年度	-	-	-	-
26年度	-	-	-	-

	「大変向上した」・ 「向上した」の割合
30年度	71.5%
29年度	74.2%
28年度	40.1%
27年度	-
26年度	-

#### 2 学年

	SGH海外				SGH国内				理型			
	4	3	2	1	4	3	2	1	4	3	2	1
30年度	11	20	6	-	12	46	17	-	48	82	30	-
29年度	11	8	4	-	22	42	15	-	-	-	-	-
28年度	5	14	4	1	-	-	-	-	-	-	-	-
27年度	10	19	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-
26年度	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

	大変向上した・向上したの割合		
	SGH海外	SGH国内	理型
30年度	83.8%	77.3%	81.3%
29年度	82.6%	81.0%	-
28年度	79.2%	-	-
27年度	85.3%	-	-
26年度	-	-	-

#### 3 学年

	SGH				文型				理型			
	4	3	2	1	4	3	2	1	4	3	2	1
30年度	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
29年度	13	7	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-
28年度	6	22	5	1	-	-	-	-	-	-	-	-
27年度	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
26年度	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

	大変向上した・向上したの割合		
	SGH海外	SGH国内	理型
30年度	-	-	-
29年度	83.3%	-	-
28年度	82.4%	-	-
27年度	-	-	-
26年度	-	-	-

#### 生徒の経年変化

「大変向上した」・「向上した」の割合

	1 学年	2 学年		3 学年	
	SGH	SGH海外	SGH国内	SGH海外	SGH国内
1 期生	-	85.3%	-	82.4%	-
2 期生	-	79.2%	-	83.3%	-
3 期生	40.1%	82.6%	81.0%	-	-
4 期生	74.2%	83.8%	77.3%	-	-
5 期生	71.5%	-	-	-	-

平成28年度は学年融合・文理融合が開始された年である。この年の1学年の数値が低いことは、「5 自主的に行動する力」と同様、2学年がグループを主導し1学年が言いたいことを言う機会自体が少なかった可能性がある。但し、翌年度の2学年にはこの傾向は見られない。ゼミ活動に慣れた、前年度の経験を生かして2学年が下級生から意見を引き出した、などのことも考えられる。

平成30年度は学年分割でゼミ活動を実施した。

2学年に着目すると、SGH 国内の生徒は理型生徒よりも数値が低い。また、29年度は海外、国内の生徒の間に差はないことを考慮すると、「自分の意見を整理する力」は他の場面でも育成されていると考えることもできる。

## 14 人の話を傾聴し、情報を受け取る

(図表 41)

4: 大変向上し 3: 向上した 2: 少し向上した 1: 向上しなかった

### 1 学年

	SGH			
	4	3	2	1
30年度	77	149	39	6
29年度	102	112	46	7
28年度	62	123	77	17
27年度	-	-	-	-
26年度	-	-	-	-

	「大変向上した」・ 「向上した」の割合
30年度	83.4%
29年度	80.1%
28年度	66.3%
27年度	-
26年度	-

### 2 学年

	SGH海外				SGH国内				理型			
	4	3	2	1	4	3	2	1	4	3	2	1
30年度	17	17	3	-	21	45	9	-	59	79	21	1
29年度	10	11	2	-	30	36	15	-	-	-	-	-
28年度	8	12	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-
27年度	13	17	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-
26年度	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

	大変向上した・向上したの割合		
	SGH海外	SGH国内	理型
30年度	91.9%	88.0%	86.3%
29年度	91.3%	81.5%	-
28年度	83.3%	-	-
27年度	88.2%	-	-
26年度	-	-	-

### 3 学年

	SGH				文型				理型			
	4	3	2	1	4	3	2	1	4	3	2	1
30年度	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
29年度	14	8	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
28年度	11	19	4	1	-	-	-	-	-	-	-	-
27年度	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
26年度	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

	大変向上した・向上したの割合		
	SGH海外	SGH国内	理型
30年度	-	-	-
29年度	91.7%	-	-
28年度	85.7%	-	-
27年度	-	-	-
26年度	-	-	-

### 生徒の経年変化 「大変向上した」・「向上した」の割合

	1 学年	2 学年		3 学年	
	SGH	SGH海外	SGH国内	SGH海外	SGH国内
1 期生	83.4%	91.3%	81.5%	85.7%	-
2 期生	80.1%	83.3%	-	-	-
3 期生	66.3%	88.2%	-	-	-
4 期生	-	-	-	-	-
5 期生	-	-	-	-	-

1 学年の 28 年度の割合が低い。ゼミが実施の初年度だが、上級生主導のゼミに魅力を感じなかった生徒がいた可能性も高い。同じ条件・展開方法で実施した 29 年度 1 学年とは差が開いている。

(図表 42)

## 15 仮説を立てる力

4: 大変向上した 3: 向上した 2: 少し向上した 1: 向上しなかった

## 1 学年

	SGH			
	4	3	2	1
30年度	54	136	67	12
29年度	60	100	83	19
28年度	-	-	-	-
27年度	-	-	-	-
26年度	-	-	-	-

	「大変向上した」・ 「向上した」の割合
30年度	70.6%
29年度	61.1%
28年度	-
27年度	-
26年度	-

## 2 学年

	SGH海外				SGH国内				理型			
	4	3	2	1	4	3	2	1	4	3	2	1
30年度	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
29年度	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
28年度	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
27年度	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
26年度	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

	大変向上した・向上したの割合		
	SGH海外	SGH国内	理型
30年度	-	-	-
29年度	-	-	-
28年度	-	-	-
27年度	-	-	-
26年度	-	-	-

## 3 学年

	SGH				文型				理型			
	4	3	2	1	4	3	2	1	4	3	2	1
30年度	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
29年度	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
28年度	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
27年度	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
26年度	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

	大変向上した・向上したの割合		
	SGH海外	SGH国内	理型
30年度	-	-	-
29年度	-	-	-
28年度	-	-	-
27年度	-	-	-
26年度	-	-	-

## 生徒の経年変化 「大変向上した」・「向上した」の割合

	1 学年	2 学年		3 学年	
	SGH	SGH海外	SGH国内	SGH海外	SGH国内
1 期生	-	-	-	-	-
2 期生	-	-	-	-	-
3 期生	-	-	-	-	-
4 期生	61.1%	-	-	-	-
5 期生	70.6%	-	-	-	-

「地域が抱える社会問題に対する興味・関心」や「世界が抱える社会問題に対する興味・関心」が高く、河合塾の PROG-H（後述）で示されるとおり、「課題発見力」が向上している中で、探究型スパイラル学習の次の段階である「仮説立案」と「研究計画」を評価する必要性が生じてきた。そのため平成29年度より、「15 仮説を立てる力」と「調査・研究の計画を立てる力」の二つをアンケートに追加している。4期生と5期生の数値の差は平成30年度は「問題の定義→仮説立案→調査→意見交換→意見集約→発表→質疑応答」のサイクルを1学期・2学期に各1回ずつ繰り返し行ったためと考えられる。



## 16 調査・研究の計画を立てる力

(図表 43)

4: 大変向上した 3: 向上した 2: 少し向上した 1: 向上しなかった

### 1 学年

	SGH			
	4	3	2	1
30年度	64	113	80	10
29年度	70	107	77	12
28年度	-	-	-	-
27年度	-	-	-	-
26年度	-	-	-	-

	「大変向上した」・ 「向上した」の割合
30年度	66.3%
29年度	66.5%
28年度	-
27年度	-
26年度	-

### 2 学年

	SGH海外				SGH国内				理型			
	4	3	2	1	4	3	2	1	4	3	2	1
30年度	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
29年度	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
28年度	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
27年度	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
26年度	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

	大変向上した・向上したの割合		
	SGH海外	SGH国内	理型
30年度	-	-	-
29年度	-	-	-
28年度	-	-	-
27年度	-	-	-
26年度	-	-	-

### 3 学年

	SGH				文型				理型			
	4	3	2	1	4	3	2	1	4	3	2	1
30年度	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
29年度	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
28年度	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
27年度	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
26年度	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

	大変向上した・向上したの割合		
	SGH海外	SGH国内	理型
30年度	-	-	-
29年度	-	-	-
28年度	-	-	-
27年度	-	-	-
26年度	-	-	-

### 生徒の経年変化 「大変向上した」・「向上した」の割合

	1 学年	2 学年		3 学年	
	SGH	SGH海外	SGH国内	SGH海外	SGH国内
1 期生	-	-	-	-	-
2 期生	-	-	-	-	-
3 期生	-	-	-	-	-
4 期生	66.5%	-	-		
5 期生	66.3%				

前項と同じ理由で追加されたこの調査項目であるが、年度による違いは見られない。1年生の段階では労力や時間の費用対効果の概念がまだできていなく、ただ一生懸命取り組む生徒が多い可能性もあり、計画の必要性を感じていない場合も多いと推察する。しかし、探究型学習を深化させるためにも、この計画性は育てる必要がある。

なお、平成31年度のゼミ活動では、2学年1学期に改めて研究計画を立てる活動が盛り込まれている。

(図表 44)

## 17 英語を読む力

4: 大変向上した 3: 向上した 2: 少し向上した 1: 向上しなかった

## 2 学年

	SGH海外				SGH国内				理型			
	4	3	2	1	4	3	2	1	4	3	2	1
30年度	11	20	4	1	10	35	24	4	26	54	46	26
29年度	10	8	5	-	10	39	27	2	-	-	-	-
28年度	4	15	4	1	-	-	-	-	-	-	-	-
27年度	5	14	11	2	-	-	-	-	-	-	-	-
26年度	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

	大変向上した・向上したの割合		
	SGH海外	SGH国内	理型
30年度	86.1%	61.6%	52.6%
29年度	78.3%	62.8%	-
28年度	79.2%	-	-
27年度	59.4%	-	-
26年度	-	-	-

## 18 英語を書く力

	SGH海外				SGH国内				理型			
	4	3	2	1	4	3	2	1	4	3	2	1
30年度	11	20	3	2	11	39	18	6	19	56	46	29
29年度	12	9	2	-	9	35	33	2	-	-	-	-
28年度	6	8	7	3	-	-	-	-	-	-	-	-
27年度	8	12	10	2	-	-	-	-	-	-	-	-
26年度	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

	大変向上した・向上したの割合		
	SGH海外	SGH国内	理型
30年度	86.1%	67.6%	50.0%
29年度	91.3%	55.7%	-
28年度	58.3%	-	-
27年度	62.5%	-	-
26年度	-	-	-

## 19 英語を話す力

	SGH海外				SGH国内				理型			
	4	3	2	1	4	3	2	1	4	3	2	1
30年度	23	11	2	-	17	32	18	6	23	54	47	28
29年度	18	4	1	-	22	33	23	1	-	-	-	-
28年度	10	12	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
27年度	20	8	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-
26年度	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

	大変向上した・向上したの割合		
	SGH海外	SGH国内	理型
30年度	94.4%	67.1%	50.7%
29年度	95.7%	69.6%	-
28年度	91.7%	-	-
27年度	84.8%	-	-
26年度	-	-	-

## 20 英語を聞く力

	SGH海外				SGH国内				理型			
	4	3	2	1	4	3	2	1	4	3	2	1
30年度	21	14	-	1	14	34	23	3	30	55	47	21
29年度	14	7	2	-	16	37	24	2	-	-	-	-
28年度	14	7	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-
27年度	12	11	9	1	-	-	-	-	-	-	-	-
26年度	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

	大変向上した・向上したの割合		
	SGH海外	SGH国内	理型
30年度	97.2%	64.9%	55.6%
29年度	91.3%	67.1%	-
28年度	87.5%	-	-
27年度	69.7%	-	-
26年度	-	-	-

英語の4技能についての調査は2学年だけを対象に実施している。

話す能力と聞く能力の海外研修者の数値の高さには特筆すべきものがある。これは実際に試行錯誤しながら外国語を運用して身につけたという実感が表出したものと捉えている。

なお、平成29年度から2学年文型生徒全員に口頭による英語表現に特化した「表現探究」(1単位)を導入し、社会問題に関する討論やディベート、ネゴシエーションをとおして、ツールとしての英語力の伸長を図っている。

### 3 海外研修参加者への質問

#### 1 課題研究のための講義・ワークショップ

(図表 45)

	SGH海外				「大いに役立った」 ・「役立った」
	4	3	2	1	
30年度	16	13	5	1	82.9%
29年度	-	-	-	-	-
28年度	5	10	8	-	65.2%
27年度	-	-	-	-	-
26年度	-	-	-	-	-

#### 2 青森市内フィールドワーク

(図表 46)

	SGH海外				「大いに役立った」 ・「役立った」
	4	3	2	1	
30年度	16	12	8	-	77.8%
29年度	6	10	6	1	69.6%
28年度	3	13	8	-	66.7%
27年度	6	18	5	5	70.6%
26年度	-	-	-	-	-

#### 3 海外航路乗客へのインタビュー

(図表 47)

	SGH海外				「大いに役立った」 ・「役立った」
	4	3	2	1	
30年度	24	7	1	1	93.9%
29年度	8	7	1	1	88.2%
28年度	9	9	6	-	75.0%
27年度	13	15	4	1	84.8%
26年度	-	-	-	-	-

質問2の青森市内フィールドワークは、それまでと違い、それぞれのグループが任意で行ったものである。SGHが始まって5年が経ち、最大の変化は生徒が自主的に外部に働きかけるようになったことだと感じられる。

質問3の海外航路乗客へのインタビューに関しても、有益だったという回答が過去5年間でもっとも多かった。

#### 4 国内企業訪問

(図表 48)

	SGH海外				「大いに役立った」 ・「役立った」
	4	3	2	1	
30年度	22	7	5	-	85.3%
29年度	16	4	1	-	95.2%
28年度	16	5	3	-	87.5%
27年度	-	-	-	-	-
26年度	-	-	-	-	-

#### 5 空港での調査

(図表 49)

	SGH海外				「大いに役立った」 ・「役立った」
	4	3	2	1	
30年度	26	6	3	1	88.9%
29年度	10	7	6	-	73.9%
28年度	2	6	13	2	34.8%
27年度	-	-	-	-	-
26年度	-	-	-	-	-

#### 6 ナンヤン女子高校での交流

(図表 50)

	SGH海外				「大いに役立った」 ・「役立った」
	4	3	2	1	
30年度	23	13	-	-	100.0%
29年度	17	5	1	-	95.7%
28年度	14	8	2	-	91.7%
27年度	-	-	-	-	-
26年度	-	-	-	-	-

項目4の「国内企業訪問」は平成30年度からより自主的なものになった。それまでは教員が企業訪問を促し、関連企業を紹介していたが、平成30年度は教員からの企業訪問の紹介はしていない。生徒たちがテーマにあった企業を自分で探し出し、アポイントをとり、長期休業中や放課後を利用して企業を訪問し、専門家から助言を得ている。

項目5の空港での調査活動は、シンガポール本国へのトランジット空港で行われる。海外に実際に行く前に旅行者に英語で話しかけ、メンタルレディネスを涵養している。今年度のインチョン空港での調査では、日本のことをあまり知らない旅行者と多く出会えたことが大きな収穫でもあった。高校生にすれば日本は有名な国との認識があるが、単なる世界の一国であるという認識を持つことができた。

項目5のナンヤン高校では初日が各グループの発表と意見交換、2日目は授業参観という日程である。同校の活発な授業の雰囲気やレベルの高さを目の当たりにし、認識を新たにされた生徒も多かった。

## 7 現地企業訪問

(図表 51)

	SGH海外				「大いに役立った」 ・「役立った」
	4	3	2	1	
30年度	24	5	-	-	100.0%
29年度	18	1	-	-	100.0%
28年度	21	2	1	-	95.8%
27年度	-	-	-	-	-
26年度	-	-	-	-	-

## 8 市街地でのリサーチ

(図表 52)

	SGH海外				「大いに役立った」 ・「役立った」
	4	3	2	1	
30年度	23	10	1	-	97.1%
29年度	15	5	2	-	90.9%
28年度	9	13	2	-	91.7%
27年度	-	-	-	-	-
26年度	-	-	-	-	-

## 9 NUSカレッジ学生とのディスカッション

(図表 53)

	SGH海外				「大いに役立った」 ・「役立った」
	4	3	2	1	
30年度	30	5	-	-	100.0%
29年度	10	7	-	-	100.0%
28年度	21	2	-	1	95.8%
27年度	-	-	-	-	-
26年度	-	-	-	-	-

項目7の現地企業訪問はこの5年間でもっとも変化した事業である。初回（27年度）はあらかじめ設定された企業2社を訪問するのみだったが、昨年度は9社、今年度は8社にグループごとに訪問している。いずれも生徒たちが企業を探し出し、現地での移動も生徒が主体で行う。教員は先方と連絡を取り、訪問に同行するのみとしている。出国前に先方と研究テーマについて情報共有を行い、現地で面談をした後、帰国後もメールでやり取りを行っている。

項目8の市街地でのリサーチはその目的を行動力と精神力の向上と位置づけている。アラブストリート、リトルインディア、チャイナタウンなど、シンガポールならではの多民族文化を直接体験することも大きな収穫となっている。

項目9のシンガポール大学の学生とのディスカッションは1時間半にわたる1対1の意見交換の形式をとる。研究内容を説明したのち、多角的に問題を見直し、新たな可能性の発見や問題点の洗い出しにつ

ながっている。大学には3時間滞在し、残りの1時間半はキャンパス内で聞き取り調査を行っている。グループ単位の行動だけであれば、他人に頼る場面も出てくるが、この活動では自分がすべてを行わなければならないため、精神力と行動力、臨機応変な対応が要求される。

質問には盛り込まれていないが有益だと生徒が判断しているものに、ア 青森県出身の現地起業家との懇談会、イ 英語によるミーティングがある。

ア 青森県出身の現地起業家との懇談会：Chapter 2 Section 4 1月の海外フィールドワークの項目参照。講演会の感想は以下のとおりである。

- ・私は昨年、学校で開催された野村證券の起業セミナーに参加した時から、世の中のためになる新しい事業を自らの手で始められる起業に興味を持っていました。今回、飯田さんの話を聞き、ますます起業への興味が深まりました。また、社会のために働くことが大切だと気付かされました。私にはまだ、将来何をしたいかという明確なビジョンがありません。周りがどんどん将来の夢を見つけていく中で、自分だけ見つけられていないことに焦りを感じるようになっていました。そんな中で飯田さんの起業までの経緯を聞いた時、自分に足りていなかったことに気が付きました。飯田さんはなんの事業を始めようか考える時、自分がやりたいこと・自分ができること・自分がやるべきこと、という3つの条件を大切にしているとおっしゃっていました。私はいつも進路情報の雑誌を漠然と眺めているだけだったような気がします。これからは、飯田さんのように大切にしたい条件を設定して、自分が本当に将来やりたいことを考えていきたいと思います。
- ・海外で仕事をするということに興味はありつつも、あまり知らないために具体的なイメージも持てていなかったのですが、海外で活躍されている飯田さんのお話を聞いて前よりもイメージが強くなるようになり、興味もより強まりました。自分は会社を起業するというのがどういう事なのか、どのようにするのかというイメージが一番もてていなかったのですが、銀行員という仕事を通して様々な業種の経営者の相手をする事で起業の勉強ができることを知り、将来を見据えた職業選択の仕方を学ぶことが出来ました。青森から飯田さんのように世界で活躍しながら青森のためにも事業を行っている方がいるのを知って、自分も形は違えども飯田さんのような人間になれるよう頑張ります。ありがとうございました。

イ 英語によるミーティング：その日学んだことを英語で発表する時間を毎晩1時間程度設定した。初日はグループが全体へ向けて発表し、全体から質問を受ける形式、2日目は全体を2つのユニットに分割し、グループがユニットに向けて発表する形式、3日目以降は関連のありそうな研究をしているグループ同士のディスカッションの形式である。発表前の準備時間は10分程度とし、メモだけを頼りにその場で発表するよう指示した。ミーティングに関する生徒の感想は以下のとおりである。

- ・この研修では毎日、一日の終わりにミーティングがありました。そこでは各班が集まり、インタビューの結果や今後の研究の方向性など1日で学んだことを発表し合いました。また、質問や意見をしてそれぞれのプレゼン内容の質を高め合うことができました。1日目のミーティングでは一方的に報告する形が多く見られましたが、最終日には質問や意見がとて多く時間が足りないうらいでした。話している途中でも疑問があったら聞いてみたり、英語で冗談を言って全員が笑っているなど、振り返ってみると自然と英語が上達していたと思います。

次に記載するのは海外研修全般に関する生徒の感想である。

- ・今回のシンガポール研修を終えて、自分にとって本当に良い経験になり、普段できないような体験をできたことを嬉しく思う。自分の中で、伸びた能力は多くあると感じている。そのなかでも、思考力、行動力、判断力の3つの力の伸び幅がとても大きかったと思う。自分達の研究テーマにそって自分の研究にはどんな情報が必要で、どんなことが予想されるか、答えのない問いに対して最後まで考え抜く力、すなわち思考力はこのゼミ活動を通して抜群に伸びたと思う。
- ・私が今回の研修で1番印象的だったのは、毎晩行われたミーティングです。初日は原稿どおりに話して質問も出来ず終わりましたが、2日目以降、徐々に話せるようになり、質問することも出来ました。最後のミーティングでは、ミーティングを苦に感じず、むしろまたやりたい！と思うほど楽しんでいる自分がありました。自分の意見を英語で討論するのはとても面白い事だと思えました。
- ・私は、研修の前後で英語に対する意識が変わったと自分で実感しています。先程述べたように、私は研修前は英語に対して不安がありました。この不安は「正しいかどうか分からない下手な英語を話すなんて恥ずかしい」、「通じなかったらどうしよう」といった、主に羞恥心から来るものでした。ですから当然、いきなりシンガポールに行ったところで自分が英語を使って外国人と会話するビジョンが全く見えなかったし、コミュニケーションを取る事に消極的でした。しかし、実際シンガポールに行き、一週間英語に浸って過ごしたことで、その考えは180度変わりました。強制的に英語を話さなくてはならない状況に身を置いたことで英語に対する恐怖心が消え、「間違ってもいいや」、「とりあえず単語だけでも言ってみよう、それが通じたら嬉しいな」というある意味では楽観的な考え方ができるようになったのです。このように肩の力を抜いてリラックスしていたことで、相手との会話を楽しむ心の余裕も生まれ、研修の終わりごろにはもっと英語でコミュニケーションが取りたいとまで思うようになりました。たった一週間でここまで変わったことに自分が一番驚いています。そして、やればできるんだ！と思い、自信がつかしました。
- ・インタビュー活動自体は海外航路の乗客への経験もあったため、スムーズに行うことができました。時には冷たく断られることもありましたが、それによってメンタルが強くなったと思います。毎日その活動があったので、研修の後半の方は、自分から店員さんに英語で話しかけたり、場所がわからなくても、近くの人に英語で尋ねたりすることが、自分1人でできるようになっていました。1人で話しかけるなんて行く前には想像できなかったのも、成長を感じました。また、ミーティングは行く前からずっと不安で緊張もしましたが、人前で話し、質問を受けることで得た情報が整理でき、次の日の活動がより有意義になりました。また少人数でのミーティングでは、英語で活発に意見交換が行われ、お互いにお互いのためになるようなアドバイスをされていて、研修前よりもよくなっていると感じました。また私個人としては、異国の地で少人数で行動したために、度胸が付き、強くなったと実感しています。また、何度も外国人のみなさんの優しさに触れ、助けてもらったので、もし日本でそのような観光客を見かけたら、自分から話しかけていきたいと思うようになりました。
- ・最も印象に残ったことは、日本に居る時と比べて、一個人として扱われる傾向にあることだ。どういうことかと言うと、日本では高校生であれば子どもとして見られることも多く、優しくしてもらいが多い。だから、シンガポールで通りすがりの人に話しかけた時に無視されたり、怒られたりすると、少し傷つく。現地のコンビニにはトイレが無いので、店員にトイレはどこですか。と訊

ねても、知らない。と言われたりもした。だが、それがシンガポールでの当たり前なのだ。私は正に、井の中の蛙であった。日本から離れてやっと、日本人の優しさに気付いた。

- ・初めて日本を出て海外に来てみると、いかに自分が家族や友人、学校の先生方などたくさんの方々に支えて頂いて平穩無事に生活できているのかが本当に身に染みました。初めての海外で戸惑うことが多い中、周りの人に頼りすぎないように気をつけていてもやはり行き詰まってしまうことがたくさんありました。そんな時の仲間からの暖かい手助けは本当にありがたいものだと改めて感じました。また、誰かに見られている場面でなくとも気を抜かずしっかりと自分で考えて行動することの重要性についても再確認できました。高校生の今は困った時には誰かが手助けをしてくれたり、影から見守ってくれていたりします。それに加えて誰かの後に続いていけば大きな失敗は免れることができることも少なくありません。しかし、これからの社会で上手くやっていくためには人任せにせず協力する姿勢を崩さないことが不可欠なので今回の経験は本当に勉強になりました。また、海外へ出ることによって青森を含む日本での暮らしの良さを改めて知りました。いつもは当たり前だと思っているもののありがたみは一度離れてみないとわからないものだと身をもって実感し、日常をより大切にしたいと思わせてくれたこの研修に感謝したいと思いました。

- ・最も印象に残っているのは、全日程最後のフィールドワークであるオーチャードストリートでの活動です。私たちは班員2人で事前にアポイントメントをとることができなかった **Far East Organization** を訪問しました。通行人やお店の店員、ビルのインフォメーションカウンターの人など多くの人に道を尋ねて会社を探し、たどり着くことができました。その後、警備の人や受付の人に事情を説明し、不動産に関連する部署を紹介していただきました。残念ながら、その部署の方は会議の時間が迫っていたため直接話を伺うことはできませんでしたが、質問があったらいつでもメールしてくださいと名刺をいただくことができました。この経験を通して、シンガポール研修で行動力や英語力の面で自分が大きく成長したと実感しました。

以上の海外研修者向けのプログラムについての質問1～9の数値と生徒の感想から判断すると、本校海外研修は有益だったといえる。



Section 3

CAN-DO  
リスト

1 青森高校 CAN-DO リスト

レベル8は英語による高校生の国際会議に参加できる程度の能力を想定している。

(図表 54)

	論理的思考力(LG)	情報処理能力(N)	批判的判断能力(CR)	発信力(OP)	協働能力(CO)
	【高力：論理的思考力】 CAN-DO	【高力：原因分析力】 CAN-DO	【高力：課題発見力、課題解決力】 CAN-DO	【高力：発信力】 CAN-DO	【高力：受信力、協働力、行動力】 CAN-DO
1	文章中で、それぞれの特徴を持つ役割を説明することができる。	与えられた単独のグラフや図表から必要な情報をとりだすことができる。	日常的に社会事象に目を向け、積極的に情報を得ることができる。	自ら進んで話しかけられることができる。/ 教室内の対人の関係の中で積極的に相手に話しかけて、相手の意見を聞くことができる。	友好的な雰囲気と礼儀を持って相手に話しかけることができる。
2	必要に応じて、得た文字情報を図式化できる。	与えられた複数の情報を、目的に応じて取捨選択できる。	一つの課題に対して、多角的な観点から意見をのべることができ、(※ 論理的判断能力と同一)	わからないことや不明なことを相手に確認することができる。/ 教室内の対人の関係の中で積極的に自分の意見を述べることができる。	相手の意見を尊重しつつも、自分の意見をはっきりと述べることができる。
3	多角的な意見を分野毎にまとめたり、関連づけることができる。(※ 批判的判断能力と同一)	与えられた複数の情報の関連性を読み取ることができる。	多角的な意見を分野毎にまとめたり、関連づけることができる。(※ 論理的判断能力と同一)	相手が得たい情報を大まかに推測することができる。/ 学校内の対視数の関係の中で積極的に自分の意見を述べることができる。	ともに相違のある方向を模索しながら話し合いを進めることができる。
4	与えられた一連の情報を論理的にまとめ、述べるることができる。	与えられた複数の情報と自分の知識を組み合わせて、関連性を読み取ることができる。	得た情報をもとに、課題を設定することができる。	目的に応じた情報発信の形式を選択することができる。/ あらかじめ対象が設定された学校外の環境で相手と日本語で意見交換やインタビューができる。	それぞれ別の意思や得意分野を生かし、機能的に役割分担することができる。
5	周囲の手助けがあれば、与えられた例に含まれる論理的な具合いに気づき、指論することができる。	自分の仮説を支持するために必要な情報の大まかなイメージをつかみ、それを入手することができる。	課題に対して、仮説を立てることができる。	論理的に意見を構築し、アウトラインを作成することができる。/ 対象が設定されていない学校外の環境で自ら話しかけ、日本語で意見交換やインタビューができる。	複雑な問題について、少人数のグループ内で話をまとめることができる。
6	与えられた例に含まれる論理的な具合いに、自力で気づき、指論することができる。	情報を伝えやすいように加工して提示することができる。	自分の仮説に対して、どんな反論があり得るのかを想定できる。	アウトラインを参照しながら、意見発表をする。/ あるいは学校外の環境で相手と外国語で意見交換やインタビューができる。	簡単な問題についてグループの代表として、他のグループとの折衝を行うことができる。
7	ある事実に対する論理的な説明文を作成することができる。	事前に得た多量の情報を処理し、必要に応じて活用することができる。	事前の準備があれば、相手の主張に対して合理的な反論を出すことができる。	図表などを効果的に用いながら、説得力を持った意見発表ができる。/ 対象が設定されていない学校外の環境で自ら話しかけ、外国語で意見交換やインタビューができる。	様々な要素が絡み合う複雑な問題について、グループ同士で折衝を行うことができる。
8	自分の考えを、得た情報と融合させて論理的に説明することができる。	提示された比較的多量の情報をその場で処理し、必要に応じて活用することができる。	話し合いの中で他者の主張の論理的な不備に気づき、その場で指論することができる。	議論の中で、有力な根拠を示しながら適宜自分の意見を補強することができる。/ 文化の違いや外国語での意見交換やインタビューができる。	様々な要素が絡み合う複雑な問題について、他のグループとの折衝を行うことができる。/ 文化の違いや外国語での意見交換やインタビューができる。

## 2 SGHの目的とCAN-DOとの関連性

平成28年度よりCAN-DOリストのレベルとSGH事業を関連づけている。

### SGHの目的とCAN-DOとの関連性

(仮説1)「多様性の理解に基づき、課題を設定する力」の育成・外国人との交流を通じて、異なる価値観や文化的背景を理解することで課題を認識し設定できる。

#### 目的

外国人との交流を通じて、異なる価値観や文化的背景を持つ人々を理解する。  
外国人との交流を通じて、対等な立場で話し合う力を育成する。  
外国人との交流を通じて、青森県が抱える課題をグローバルな視点で認識し、研究課題を設定する。

#### 実施内容

ア 三沢市内のエドグレンハイスクールの高校生との交流・意見交換  
イ 主に英語を母国語としない、県内大学(青森中央学院大学、弘前大学等)の留学生と英語での交流・意見交換  
ウ ICTを活用した海外協力校の高校生との交流  
実施方法  
ア 英語を母国語とする青森県三沢基地のエドグレンハイスクールを希望者で訪問する。青森県に関するテーマを設定して意見交換し、青森県についての外国人の立場からの認識を調査する。  
イ 青森中央学院大学、弘前大学の留学生と英語で交流する。青森県に関するテーマを設定して意見交換し、青森県についての外国人の立場からの認識を調査する。  
ウ ICTを活用し、海外協力校の高校生等との交流やディスカッション等の場を設けて異文化交流を行う。  
エ 探究型学習に取り組んでいる高校を訪問し、情報交換を行う。(先進校視察)

論理的思考力(C)	情報処理能力(N)	批判的思维能力(N)	非目的思维能力(NCR)	発信力(OP)	協働能力(CO)
	1,2,3,4	1,2,3,4		1,2,3,4,5,6	1,2,3
				1,2,3,4,5,6	1,2,3

				6	5
				6	5
				6	5
				4,5	4

(仮説2)「グローバルマインドに基づく企画力」の育成・外国人との協同学習や海外経験を通じて、グローバルマインドに基づく企画力が育成される。

#### 目的

グローバルマインドに基づく先入観にとらわれない企画力を身につけた人材の育成を目指す。  
外国人との協同学習や海外経験を通じて、柔軟な発想で問題を認識し、その解決に向けて相手と交渉していくコミュニケーション能力を身につける。  
協働性・柔軟性・寛容な態度をもって、異なる文化や価値観を持つ者と共生していく力をもった人材が育成される。

#### 実施内容

ア 情報の収集・分析手法の習得  
イ 外国人との協同学習  
ウ 海外でのフィールドワーク  
エ 大学の留学生等とのグループディスカッション  
オ プレゼンテーション能力向上のためのワークショップ  
実施方法

ア 連棟大学の教員や大学院生を講師に迎え、情報収集方法、分析手法等について講義を受ける。  
イ 英語を母国語とする三沢基地内のエドグレンハイスクール高校生と県産品の良さや、その海外へのアピール方法等について話し合いをする。外国人にとって魅力のある観光地についての意見交換をする。  
ウ 主に英語を母国語としない県内大学(青森中央学院大学、弘前大学等)の留学生と、英語で各国の文化を紹介しながら、青森県のアピール方法について意見を聞く。  
エ 夏休みを利用してニューヨーク州での協同学習のいずれかに参加する。同時に、現地における県産品のマーケティングリサーチや青森県についての意識調査を行う。  
オ 連棟大学の英語を母国語とした留学生と、青森県のビジネスモデルの可能性について、ディスカッションを行う。  
カ 連棟大学の教員や大学院生を講師に迎え、プレゼンテーション能力の向上のためのワークショップを行う。

論理的思考力(C)	情報処理能力(N)	批判的思维能力(N)	非目的思维能力(NCR)	発信力(OP)	協働能力(CO)
	1,2,3,4,5,6			1,2,3,4	1,2,3,4,5
				1,2,3,4,5,6,7,8	1,2,3,4,5,6,7,8
				4,5,6,7	1,2,3,4,5,6,7,8

				1,2,3,4,5,6,7,8	
				1,2,3,4,5,6,7,8	1,2,3,4,5,6,7,8
				1,2,3,4,5,6,7	1,2,3,4,5,6,7,8
				1,2,3,4,5,6,7	1,2,3,4,5,6,7,8
	6				7,8

(仮説3)「ビジネスモデルの開発による理論と実践を融合する力」の育成・大学教員、外国人、NPO等外部機関からの意見、助言を踏まえてビジネスモデルの開発を行うことにより、理論と実践を融合する力が育成される。

#### 目的

従来の枠にとらわれないビジネスモデルの開発を目指す。  
内外関係機関等からの指導を受けて、実践に対応できる力を身につける。

ウ 世界で活躍できるグローバル・リーダーに必要な、理論と実践を融合する力を身につけた人材が育成される。

#### 実施内容

ア 海外フィールドワークでのマーケティングリサーチ  
イ 県産品の海外への販路拡大や青森県への観光客誘致のためのビジネスモデルの開発  
ウ 校外の会場で、各関係機関の他、広く県民を対象とした発表会を開催する他、マスメディア等を通して研究成果の発表  
実施方法  
ア TSGHプロジェクト学習Ⅱ・Ⅲの時間を利用して実施する。  
イ 連棟大学と緊密に連絡を取り、大学教員の指導のもと、海外フィールドワークでのデータをまとめ、分析し、レポートにまとめる。  
ウ 県内の観光地へ赴き、調査・情報収集をし、データをまとめる。  
エ 海外フィールドワーク、県内観光地調査の結果等を踏まえ、ビジネスモデルの開発に着手する。  
オ 様々な機会をとらえて、開発したビジネスモデルに対するフィードバックを受け、実践に耐えうるプログラムへと進化させる。

論理的思考力(C)	情報処理能力(N)	批判的思维能力(N)	非目的思维能力(NCR)	発信力(OP)	協働能力(CO)
				8	
				8	

	4,5				
5,6,7					5,6,7,8

(図表55)

3 CAN-DO リスト自己評価の結果

(図表 56)

分野	レベル	能力記述	2年生終了時到達割合						平均到達率(1~8)						一年生終了時点からの伸び					
			H30年度		H29年度		H28年度		H30年度		H29年度		H28年度		H30年度		H29年度		H28年度	
			国内(73)	海外(36)	国内(91)	海外(23)	国内(24)	海外(24)	国内(73)	海外(36)	国内(91)	海外(23)	国内(24)	海外(24)	国内(73)	海外(36)	国内(91)	海外(23)	国内(24)	海外(24)
論理的思考力(LG)	1	文章中でのそれぞれの文の役割を説明することができる。	80.8%	83.3%	91.9%	76.2%	79.2%							5.5 pts	11.1 pts	12.8 pts	-23.8 pts	19.0 pts	-12.5 pts	
	2	必要に応じて、得た文字情報を図式化でき	86.3%	100.0%	87.2%	85.7%	75.0%							8.2 pts	22.2 pts	11.6 pts	19.0 pts	-12.5 pts		
	3	多角的な意見を分野毎にまとめたり、関連	68.5%	83.3%	87.2%	71.4%	83.3%							6.8 pts	27.8 pts	34.9 pts	33.3 pts	29.2 pts		
	4	与えられた一連の情報を論理的にまとめて	56.9%	66.7%	68.6%	71.4%	70.8%	5.11	5.61	5.59	5.91	6.79		26.0 pts	50.0 pts	30.2 pts	28.6 pts	50.0 pts		
	5	周囲の手助けがあれば、与えられた例に	52.1%	63.9%	69.8%	66.7%	79.2%							20.5 pts	22.2 pts	29.1 pts	33.3 pts	66.7 pts		
	6	自力で気づき、指摘する。指摘すること	27.4%	41.7%	29.1%	42.9%	87.5%							19.2 pts	30.6 pts	22.1 pts	23.8 pts	79.2 pts		
	7	ある事象に対する論理的な説明文を作成	19.2%	33.3%	20.9%	38.1%	50.0%							5.5 pts	25.0 pts	7.0 pts	28.6 pts	50.0 pts		
	8	自分の考えを、得た情報と融合させて論	12.3%	25.0%	19.8%	33.3%	25.0%							8.2 pts	19.4 pts	11.6 pts	28.6 pts	25.0 pts		
情報処理能力(IN)	1	与えられた単独のグラフや図表から必要	89.0%	100.0%	94.2%	85.7%	75.0%							-4.1 pts	8.3 pts	3.5 pts	9.5 pts	-16.7 pts		
	2	与えられた複数の情報を、目的に応じて	89.0%	94.4%	94.2%	81.0%	83.3%							1.4 pts	11.1 pts	18.6 pts	19.0 pts	0.0 pts		
	3	与えられた複数の情報の関連性を読み	83.6%	94.4%	83.7%	66.7%	83.3%							17.8 pts	33.3 pts	29.1 pts	28.6 pts	12.5 pts		
	4	与えられた複数の情報と自分の知識を	61.6%	72.2%	73.3%	66.7%	79.2%	5.14	6.25	5.83	6.35	6.25		19.2 pts	27.8 pts	40.7 pts	33.3 pts	29.2 pts		
	5	自分の仮説を支持するために必要な情	50.7%	77.8%	64.0%	81.0%	75.0%							24.7 pts	47.2 pts	41.9 pts	42.9 pts	66.7 pts		
	6	情報を伝えやすいように加工して表	41.1%	66.7%	55.8%	66.7%	70.8%							8.2 pts	30.6 pts	31.4 pts	23.8 pts	66.7 pts		
	7	事前に得た多量の情報を処理し、必要	26.0%	58.3%	34.9%	38.1%	29.2%							15.1 pts	41.7 pts	25.6 pts	19.0 pts	29.2 pts		
	8	提示された比較的多量の情報をその場	1.4%	11.1%	2.3%	23.8%	8.3%							0.0 pts	5.6 pts	0.0 pts	14.3 pts	8.3 pts		
批判的判断能力(CR)	1	日常的に社会事象に目を向け、積極	75.3%	83.3%	86.0%	76.2%	75.0%							13.7 pts	5.6 pts	16.3 pts	19.0 pts	19.0 pts	-12.5 pts	
	2	一つの課題に対して、多角的な観点	71.2%	88.9%	87.2%	71.4%	87.5%							16.4 pts	47.2 pts	29.1 pts	19.0 pts	25.0 pts		
	3	多角的な意見を分野毎にまとめたり、	56.9%	75.0%	69.8%	66.7%	83.3%							8.2 pts	27.8 pts	32.6 pts	28.6 pts	37.5 pts		
	4	得た情報をもとに、課題を設定する	80.8%	94.4%	86.0%	81.0%	79.2%	5.21	6.33	5.98	6.43	5.75		11.0 pts	44.4 pts	30.2 pts	33.3 pts	54.2 pts		
	5	課題に対して、仮説を立てることが	56.2%	91.7%	75.6%	81.0%	79.2%							20.5 pts	66.7 pts	37.2 pts	38.1 pts	62.5 pts		
	6	自分の仮説に対して、どんな反論が	42.5%	55.6%	45.3%	66.7%	50.0%							19.2 pts	33.3 pts	32.6 pts	38.1 pts	41.7 pts		
	7	事前の準備があれば、相手の主張	20.5%	41.7%	41.9%	66.7%	29.2%							8.2 pts	19.4 pts	26.7 pts	42.9 pts	29.2 pts		
	8	話し合いの中で他者の主張の論理	4.1%	30.6%	9.3%	33.3%	12.5%							1.4 pts	19.4 pts	7.0 pts	23.8 pts	12.5 pts		

(図表57)

分野	レベル	能力記述	2年生終了時到達割合						平均到達値(1~8)						1年生終了時点からの伸び					
			H30年度		H29年度		H28年度		H30年度		H29年度		H28年度		H30年度		H29年度		H28年度	
			国内(73)	海外(36)	国内(91)	海外(23)	国内(24)	海外(2)	国内(73)	海外(36)	国内(91)	海外(23)	国内(24)	海外(2)	国内(73)	海外(36)	国内(91)	海外(23)	国内(24)	海外(2)
発信力 (OP)	1	自ら進んで話しかけることができる。/教室内の1対1の関係の中で積極的に相手に話しかけ、相手の意見を聞くことができる。	83.6%	91.7%	83.7%	85.7%	91.7%							5.5 pts	16.7 pts	20.9 pts	23.8 pts	0.0 pts		
			87.7%	94.4%	88.4%	85.7%	95.8%								8.2 pts	16.7 pts	23.3 pts	28.6 pts	29.2 pts	
	2	わからないことや不明なことを相手に確認することができる。/教室内の1対1の関係の中で積極的に自分の意見を述べることができる。	54.8%	72.2%	62.8%	66.7%	70.8%							31.5 pts	27.8 pts	31.4 pts	28.6 pts	25.0 pts		
			47.9%	88.9%	59.3%	66.7%	95.8%								15.1 pts	38.9 pts	39.5 pts	28.6 pts	79.2 pts	
	3	目的に応じた情報発信の形式を選択することができる。/あらかじめ対象が設定された学校外の環境で相手と日本語で意見交換やインタビューができる。	17.8%	80.6%	34.9%	52.4%	70.8%	3.76	7.06	4.13	6.22	6.38			4.1 pts	66.7 pts	22.1 pts	14.3 pts	62.5 pts	
			13.7%	88.9%	14.0%	61.9%	54.2%								8.2 pts	83.3 pts	12.8 pts	42.9 pts	50.0 pts	
	4	図表などを効果的に用いながら、説得力を持った意見発表ができる。/対象が設定されていない学校外の環境で自ら話しかけ、外国語で意見交換やインタビューができる。	4.1%	72.2%	8.1%	57.1%	54.2%							0.0 pts	69.4 pts	7.0 pts	42.9 pts	54.2 pts		
			2.7%	33.3%	3.5%	47.6%	33.3%								2.7 pts	33.3 pts	3.5 pts	42.9 pts	33.3 pts	
協働能力 (CO)	1	友好的な雰囲気と礼儀を持って相手に話しかけることができる。	90.4%	100.0%	94.2%	95.2%	75.0%							-5.5 pts	8.3 pts	8.1 pts	9.5 pts	-25.0 pts		
			86.3%	94.4%	93.0%	85.7%	100.0%								11.0 pts	19.4 pts	18.6 pts	28.6 pts	20.8 pts	
	2	ともに利益のある方向を模索しながら話し合いを進めることができる。	76.7%	75.0%	88.4%	76.2%	75.0%							16.4 pts	41.7 pts	44.2 pts	33.3 pts	20.8 pts		
			61.6%	86.1%	73.3%	76.2%	70.8%								23.3 pts	47.2 pts	44.2 pts	33.3 pts	41.7 pts	
	3	複雑な問題について、少人数のグループ内で話をまとめることができる。	56.2%	80.6%	66.3%	71.4%	62.5%	4.61	5.67	5.21	6.00	5.83			31.5 pts	41.7 pts	41.9 pts	33.3 pts	45.8 pts	
			19.2%	41.7%	31.4%	38.1%	41.7%								6.8 pts	22.2 pts	22.1 pts	19.0 pts	37.5 pts	
	4	様々な要素が絡み合う複雑な問題について、グループ同士で折衝を行うことができる。	12.3%	41.7%	16.3%	52.4%	37.5%							6.8 pts	33.3 pts	11.6 pts	42.9 pts	37.5 pts		
			5.5%	5.6%	4.7%	19.0%	16.7%								2.7 pts	5.6 pts	4.7 pts	19.0 pts	16.7 pts	

## 4 CAN-DO リスト自己評価の分析と生徒像

### ア 論理的思考力

海外：文の意味や役割を理解し、それをフローチャートのようにビジュアライズし、4割の生徒がヒントがなくても論理の不具合に気づくことができる。

国内：文の意味や役割を理解し、それをフローチャートのようにビジュアライズすることはできるが、ヒントがなかったり、グループの支援がなければ論理の不具合に気づかない。

A 論理的不具合に「周囲の手助けがあれば気づく（レベル5）」と「自力で気づく（レベル6）」の間には大きな差がある。2学年はグループ活動であるため、レベル6の到達度が若干低いことは納得できる。普段の授業や教育活動が知識の伝達中心か、過剰支援のものに偏ると自力で気づく力につながらないため、留意が必要である。今後この能力を伸長するにはディスクリプターに記載されているとおり、「説明する」機会を多く設定する必要がある。校内での発表で説明する機会はあるが、実施回数が限られているため、積極的に外部の発表会に応募する等の取組が必要である。

### イ 情報処理能力

海外研修生の数値はこの項目でも高い。

海外：仮説を立て、検証作業の一環として大量の情報を収集し、必要に応じてそれを活用できる。

国内：与えられたものに自分の知識をある程度付け加えて（課題を発見し）、イメージどおりの情報を収集できるが、それをうまく利用できる生徒は半分しかいない。

- A レベル6・7と PROG-H との相関はそれぞれ、0.764、0.727 と非常に高い。海外研修に参加した生徒の「5人に3人が大量の情報を必要に応じて活用することができる」のに対し、国内研修の生徒は4人に1人にしかその能力が備わっていないと感じている。
- B 後述の PROG-H の結果から本校の「情報収集力」と「情報分析力」は大学3年生の全国平均を上回っていることもわかっている。このことから、情報処理までは得意であるが、それをどのように活用するかの方策（仮説）立案の力が不足していると言える。また、情報を「与えられる」姿勢から、「入手する」姿勢への転換が急がれる。

## ウ 批判的判断能力

海外：社会の課題を見いだして仮説を立てることができ、半数の生徒は別の角度からも仮説を検証しようとする。

国内：社会事象に興味を持ち、様々な情報から課題を見いだすことはできるが、そこから前に進めないか、仮説を立てられるとしても単眼的な仮説にとどまる。

国内研修生徒はレベル4と5の間が分岐点になっている。情報処理能力の項でも触れたとおり、仮説を立てられるか否かがこの数値を左右している。各ゼミにおいて質問の細分化を促し、仮説が立てやすいように支援する必要がある。

## エ 発信力

海外：対象や媒体を問わず様々な環境で自分の意見を論理的に述べるができるが、有力な根拠を持って説得力のある発表をするには至っていない。

国内：相手の聞きたいことに合わせて、情報や自分の意見を述べるに留まる。自分から話しかけたり、論理的に発表したりするのは苦手であり、やりとりは日本語に限られる。

海外研修生と国内研修生の分岐はレベル5で始まる。アウトラインの概念や、校外での活動の有無がこの数値に反映されていると思われる。これらの能力は経験によって伸長するものであり、機会を与えない限りはこのままの状態が続くと考えられる。実際、国内研修生は外国人にインタビューする（自分から話しかける）機会がなく、平成29年度、30年度の国内研修生徒のレベル7の伸びは0であった。SGH海外プログラムのような何らかの機会を設けない限り、伸びは期待できないことがわかる。

## オ 協働能力

この能力は河合塾 PROG-H の「対人基礎力」とやや相関があり、全国の高校生と比べても数値が低い。CAN-DO の結果から導かれる生徒像は以下のとおりである。

海外：複雑な問題について、グループ内で意見をまとめることができる。それを基に代表として他団体と折衝できる生徒が各グループに複数名いる。

国内：仲間同士では意見をまとめることができても、他団体と交渉する能力はまだ低いか、交渉を経験したことがない。

A CAN-DO 上での「できる・できない」の分岐点はレベル5と6の間である。この間には「グループ内でまとめる」と「他のグループと折衝する」の違いがある。

B 河合塾 PROG-H の協働力にあたる「対人基礎力」は

「円滑な人間関係を築く（親和力）」、

「協力的に仕事を進める（協働力）」、

「場を読み、目標に向かって組織を動かす（統率力）」

の3つの総合スコアとなる。ちょうど本校のレベル1～3と「親和力」、レベル4・5と「協働力」が重なることになる。

**Section 4**  
**学びみらい**  
**PASS**  
**PROG-H**

1 河合塾学びみらい PASS PROG-H スコア

(図表 58)

	リテラシー 総合	情報収集力	情報分析力	課題発見力	構想力
本校 1 年終了時 (H28)	<b>4.49</b>	<b>3.16</b>	<b>3.46</b>	<b>3.25</b>	<b>3.29</b>
高校 1 年全国平均	3.19	2.54	2.63	2.51	2.74
高校 2 年全国平均	3.57	2.78	2.82	2.73	2.92
高校 3 年全国平均	3.40	2.65	2.70	2.67	2.87
高校生全体	3.30	2.61	2.69	2.57	2.79
大学 1 年生		2.82	2.79	2.89	
大学 3 年生		2.79	2.83	2.94	

	コンピテン シー総合	対人基礎力	対自己 基礎力	対課題 基礎力	親和力
本校 1 年終了時 (H28)	<b>2.86</b>	<b>2.97</b>	<b>2.77</b>	<b>2.68</b>	<b>3.15</b>
高校 1 年全国平均	2.80	2.97	2.77	2.58	3.24
高校 2 年全国平均	2.74	2.92	2.71	2.57	3.15
高校 3 年全国平均	2.82	2.97	2.81	2.63	3.18
高校生全体	2.78	2.96	2.75	2.58	3.21
大学 1 年生	2.65	2.82	2.79	2.89	2.97
大学 3 年生	2.65	2.79	2.83	2.94	2.90

	協働力	統率力	感情制御力	自信創出力	行動持続力
本校 1 年終了時 (H28)	<b>3.17</b>	<b>2.75</b>	<b>2.68</b>	<b>2.75</b>	<b>2.86</b>
高校 1 年全国平均	3.22	2.72	2.76	2.69	2.88
高校 2 年全国平均	3.14	2.73	2.71	2.66	2.80
高校 3 年全国平均	3.15	2.78	2.81	2.75	2.87
高校生全体	3.19	2.72	2.74	2.68	2.86
大学 1 年生	2.88	2.61	2.75	2.71	2.82
大学 3 年生	2.84	2.63	2.78	2.77	2.82

	課題発見力	計画立案力	実践力
本校 1 年終了時 (H28)	<b>3.09</b>	<b>2.60</b>	<b>2.69</b>
高校 1 年全国平均	2.71	2.65	2.79
高校 2 年全国平均	2.77	2.63	2.75
高校 3 年全国平均	2.82	2.70	2.78
高校生全体	2.73	2.65	2.78
大学 1 年生	2.87	2.77	2.94
大学 3 年生	2.96	2.76	3.04

1 学年で身につけた能力を測るために、河合塾学びみらい PASS の PROG-H を翌年 4 月上旬に実施している。「リテラシー総合」、「情報収集力」、「情報分析力」、「課題発見力 (リテラシー)」、「構想力」、「課題発見力 (コンピテンシー)」が同学年・大学生と比較しても優れていることがわかる。



この結果より、本校の研究開発概要である「(多様性の理解に基づき)課題を設定する力」と「(グローバルマインドに基づく)企画力」が身についたと言える。なお、本校では実践的な検証作業やインタビュー、企業訪問等を2学年で行うため、「実践力」の伸長は今回の調査には反映されていない。

参考：河合塾による定義

リテラシー：「新しい問題や、これまで経験のない問題に対して知識を活用して課題を解決する力」(習得した知識を現実の問題に活用することで育成される)

コンピテンシー：「周囲の状況に上手に対応するために身につけた、意思決定・行動指針などの特性」(経験を振り返りモデルを意識して行動することで育成される)

この「リテラシー」と「コンピテンシー」は、机に向かって書物を読めば得られるものではなく、「実践」「体験」「経験」によって身につくものである。

「PROG-H」では、「リテラシー」を問題解決のプロセスに即して6つの能力(情報収集力、情報分析力、課題発見力、構想力、表現力、実行力)に整理し、表現力、実行力を除く4つの能力を測定。また、「コンピテンシー」を社会人として成果を上げるために必要な能力として、「対人基礎力」「対課題基礎力」「對自己基礎力」の3つの能力に整理している。さらに「対人基礎力」は親和力、協働力、統率力から構成され、「対課題基礎力」は課題発見力、計画立案力、実践力、「對自己基礎力」は感情制御力、自信創出力、行動持続力で構成されている。

<https://www.keinet.ne.jp/gl/16/11/03report.pdf>

## 2 PROG-H と本校 CAN-DO リストの相関

(図表 59)

### 1 本校「情報処理能力」とPROG-H

レベル	PROG-H 情報収集力	PROG-H 情報分析力
1	0.169	0.259
2	0.251	0.298
3	0.341	0.148
4	0.371	0.022
5	0.586	0.205
6	0.764	0.031
7	0.727	0.131
8	0.210	-0.205

### 2 本校「批判的判断能力」とPROG-H

レベル	PROG-H 情報処理能力	PROG-H 発信力	PROG-H 協働能力
1	0.093	0.236	0.307
2	0.247	0.191	0.211
3	0.388	0.226	0.292
4	0.392	0.258	0.485
5	0.391	0.368	0.569
6	0.484	0.507	0.473
7	0.270	0.383	0.392
8	0.239	0.253	0.232

### 3 本校「発信力」とPROG-H

レベル	PROG-H 発信力
1	0.026
2	0.208
3	0.280
4	0.746
5	0.677
6	0.728
7	0.475
8	0.456

### 4 本校「協働力」とPROG-H

レベル	対人基礎力
1	0.148
2	0.299
3	0.023
4	0.228
5	0.403
6	0.285
7	0.323
8	-

5 本校CAN-DO「論理的思考力」と相関のあるPROG-Hの項目はなかった。

## Section 5

### 青高力

#### 1 「青高力」の導入

SGH の評価方法の開発・ルーブリックの概念の普及を受けて、身につけるべき力を学校として明確化することになった。「青高力」と呼ばれる10の資質・能力を定義し、探究学習のみならず、各教科のルーブリックも整備されている。以下はホームページや配布物で生徒に提示しているものである。

(図表 60)

## グランドデザインの具体化

### 青高力 - 10の資質・能力とは？

- 知力・学力 …各教科の内容を理解し、それを活用する力及び技能
- 課題発見力 …複数の統計や資料から、改善・克服すべき課題を設定する力
- 論理的思考力…客観的データや先行研究をふまえ、自らの理論を筋道立てて構築する力
- 課題解決力 …解決のための仮説を立て、それを実証するために行動する力
- 原因分析力 …課題の背景や要因を、複数のデータに基づいて多角的な視点でとらえる力
- 受信力・発信力…人の話を傾聴し様々な情報を受け取る力、自分の考えをわかりやすく相手に伝える力
- 協働力 …他者の価値観を尊重しつつ他者と協力し、一つのものを成し遂げる力
- 行動力 …自分の掲げる目的を達するために、主体的かつ計画的に実行する力
- 自己管理能力…基本的な生活習慣を確立し、健康と安全を意識して行動する力
- 自己実現力 …社会の中で生きる自分を想像し、多くの情報を活用して実現させようとする力

2 「青高力」と教育活動の紐付け

(図表 61)

主な行事・活動	○:育てたい力 ◎:もっとも育てたい力													
	体育祭	職業ガイダンス	大学ドリーム講座	青高祭	遠足	芸術教室	修学旅行	定期考査	実カテスト・校内模試	ゼミ活動	講演会	Sプロジェクト	Mプロジェクト	部活動
実施月・学年	6月・全	6月・1年	6月・2年	7月・全	9月・全	10月・全	12月・2年	通年・全	通年・全	通年・全	通年・全	通年・全	通年・全	通年・全
知力・学力						○	○	◎	◎	○		◎	○	
課題発見力		○	○							◎	○		◎	
論理的思考力								○	◎	○		◎	○	
課題解決力				○			○	○	○	◎		○	◎	
原因分析力								○	○	◎		○	◎	
受信力・発信力		○	○	◎		◎				○	○		○	○
協働力	◎			◎	◎		◎			◎		○	◎	◎
行動力	◎			◎	○		○			○		○	○	○
自己管理能力	○				○		◎	○	○					◎
自己実現力		◎	◎							○	◎	◎	◎	○

学校全体の総意として上図のようなマトリックスが完成した。

ゼミ活動で最も力をつけたいと考えているのは、◎のついた「課題発見力」、「課題解決力」、「原因分析力」、「協働力」である。

### 3 「青高力」ルーブリック

以下のルーブリックを用いて生徒はこの1年を振り返った。

(図表 62)

三つの柱	段階	A (活用Ⅱ)	B (活用Ⅰ)	C (習得)	D (未達成)
	青高力				
知識・技能	知力・学力	各教科・科目の学習内容を深く理解し、それらを活用しながら論理的に思考したり、主体的に課題を探究することができる。	各教科・科目の学習内容を十分に理解し、教師の助言やグループ討議等を経ながら意欲的に学習活動に取り組むことができる。	各教科・科目の学習内容の基礎・基本を理解し、教師に指示された学習活動に取り組むことができる。	各教科・科目の学習内容の基礎・基本を理解できず、学習活動に消極的である。
	課題発見力	自らが出した成果から、次の課題を支援を得ずとも設定できる。	教員の支援があれば、社会的・学問的意義がある検証可能な課題が設定できる。	教員の支援があれば、必要な情報を収集し5W2Hの問いに絞り込んだ問いを立てることができる。	教員の支援を得ても、必要な情報を収集し5W2Hの問いに絞り込んだ問いを立てることができない。
	論理的思考力	主題を自ら発見し、結論に至る論理展開に科学的な説得力がある。周囲への影響力もあり、研究活動を主導できる。	結論に至る論理展開に合理的な説得力があり、十分な水準にある。人の意見を参考にして向上できる。	結論に至る論理展開に説得力が加わるようになり、より深く考察することができる。	説得力に欠ける論理展開が多く、強引に結論を求めた。十分な思考に基づく問題解決ができない。
	課題解決力	他分野との連携や、その後の発展性を示唆する解決策を提示できる。	教員の支援があれば、仮説を裏付けるための十分な証拠を伴った具体的な解決策を提示できる。	教員の支援があれば、仮説を支持できる程度の根拠をもったオリジナルな解決策を提示できる。	教員の支援を得ても、根拠を伴う解決策が提示できない。
	原因分析力	自ら課題を設定し、原因・背景を考察して裏付けとなるデータ・資料を探し出し、あきいちは自ら調査してデータを得ることで多角的にとらえ、自論を構築することができる。	ある現象や事柄について、与えられた複数の資料を読み解き、そこからわかることを導き出して、その原因・背景について自分の意見をまとめることができる。	ものごとの因果関係のつかみ方についての知識を有し、原因分析にとって必要な文献や、図表、グラフなどの与えられた課題や資料の読みとりができる。	ものごとの因果関係をつかむ思考力をはたらかせようとせず、複数の資料を読みとって関連づけることができない。
思考力・判断力・表現力	受信発信力	目標を達成するために必要な内容を前向きに理解できる。相手の立場を尊重した適切な言動で周囲とのバランスを考えた自らの意見や考えを発信することができる。	教員の支援により、相手からの適切な情報を前向きに理解し、その内容を他者にも理解しやすいうに、自らの意見や考えを明確に説明することができる。	目的や課題について、他者から与えられた情報を読み取り、目標達成のための課題について理解することができる。	目的や課題に対して意見を受け入れることはできるが、自分の意見を他者に対して伝えることができない。
	協働力	あらゆる活動の中で、社会に出てからも協働力の大切さを意識した行動を示すことができる。一つの物事を達成するために関わりの大切さを理解して、仲間と協力しながら目標に向かって行動することができる。	教員の支援により、仲間の立場や意見、価値観を受け入れ、尊重しながら協力して諸課題を解決・成功するための行動をとることができる。	教員の支援があり、仲間の意見や価値観を尊重して、互いに協力することの重要性を理解することができる。	協力的な言動で周囲と活動することはできるが、自らの考えや行動が浅く、他人の価値観を尊重して協力することが難しい。
	行動力	あらゆる活動を通して、社会に出てからも自分の掲げる目標を達成するために、主体的かつ計画的に考えて臨機応変に行動することができる。	教員の支援により、自らの課題の解決や目標達成のために必要な行動を計画を立てて実行することができる。	目的を達成するためにどのように行動すればよいか理解し、計画を立てることができる。	目的を達成するためにどのような行動をすべきかの理解が浅く、主体的に計画を立てて行動することができない。
	自己管理能力	基本的な生活習慣が確立されており、あらゆる活動を通して、社会に出てからも通じる健康・安全を意識した行動が主体的にでき、他者の安全・健康にも気遣った言動をすることができる。	基本的な生活習慣が確立されており、教員の支援により、健康・安全について必要な知識を理解し、健康・安全を意識して行動することができる。	基本的な生活習慣が確立されており、教員の支援により健康・安全に関する知識を理解することができる。	基本的な生活習慣を確立することが難しく、日常生活における自らの健康・安全に関する意識が乏しく、自らの言動をコントロールすることができない。
	自己実現力	自己実現のために必要な資質・能力を深く追究し、主体性を遺憾なく発揮して活動に参加、あるいは主催するなど、社会に貢献する視点を持ち能動的に活動することができる。	これまで得た知識・情報を活用しながら自己実現の展望を描き、内外の諸活動に積極的に応募・参加するなど、必要な資質・能力を身につけるべく行動に移すことができる。	自己実現の展望を描くために必要な知識・情報は何かを理解してその取得に努め、それに伴って、求められる資質・能力はどのようなものであるかを理解している。	自己実現について展望を描こうとせず、その手がかりとなる知識・情報の取得にも消極的で、その用い方についても理解していない。

#### 4 「青高力」ルーブリックを用いた自己評価

結果は以下のとおりとなった。「課題発見力」に関し、1学年で活用Ⅱに達している生徒が2学年よりも多い。また、ゼミ活動が「論理的思考力」の伸長に大きく寄与していることも判明した。

(図表 63)

##### A 全体（1・2学年）

	A 活用Ⅱ	B 活用Ⅰ	C 習得	D 未達成
知力・学力	36	212	255	46
課題発見力	156	283	100	8
論理的思考力	65	284	176	19
課題解決力	108	244	183	11
原因分析力	114	306	118	7
受信発信力	155	216	152	22
協働力	292	198	45	10
行動力	137	232	152	22
自己管理能力	163	192	142	45
自己実現力	80	208	232	20

##### B 1学年

(図表 64)

	A 活用Ⅱ	B 活用Ⅰ	C 習得	D 未達成
知力・学力	15	112	123	28
課題発見力	87	133	52	4
論理的思考力	39	133	86	16
課題解決力	64	116	87	8
原因分析力	70	142	57	5
受信発信力	80	96	82	16
協働力	153	87	28	6
行動力	55	113	90	15
自己管理能力	86	86	73	30
自己実現力	46	95	120	11

##### C 2学年

(図表 65)

	A 活用Ⅱ	B 活用Ⅰ	C 習得	D 未達成
知力・学力	21	100	132	18
課題発見力	69	150	48	4
論理的思考力	26	151	90	3
課題解決力	44	128	96	3
原因分析力	44	164	61	2
受信発信力	75	120	70	6
協働力	139	111	17	4
行動力	82	119	62	7
自己管理能力	77	106	69	15
自己実現力	34	113	112	9

# 1学年 力をつけた活動（複数回答・10%以上を抜粋）

(図表 66)

知力・学力		課題発見力		論理的思考力	
①授業・定期テスト	251 (90%)	①ゼミ活動	207 (75%)	①ゼミ活動	189 (69%)
②ゼミ活動	69 (25%)	②授業・定期テスト	130 (47%)	②授業・定期テスト	157 (57%)
③部活動	56 (20%)	③部活動	90 (33%)	③部活動	56 (20%)
④進路行事	44 (16%)	④進路行事	49 (18%)	④進路行事	33 (12%)
		⑤青高祭	37 (13%)		
課題解決力		原因分析力		受信発信力	
①ゼミ活動	190 (69%)	①授業・定期テスト	178 (65%)	①ゼミ活動	173 (63%)
②授業・定期テスト	136 (49%)	②ゼミ活動	170 (62%)	②授業・定期テスト	134 (49%)
③部活動	90 (33%)	③部活動	86 (31%)	③部活動	89 (32%)
④青高祭	41 (15%)	④進路行事	28 (10%)	④青高祭	63 (23%)
⑤進路行事	31 (11%)			⑤体育祭	36 (13%)
				⑥遠足	29 (11%)
協働力		行動力		自己管理能力	
①部活動	183 (67%)	①部活動	170 (62%)	①授業・定期テスト	128 (47%)
②青高祭	180 (66%)	②授業・定期テスト	156 (57%)	②部活動	122 (44%)
③体育祭	155 (57%)	③ゼミ活動	104 (38%)	③青高祭	36 (13%)
④ゼミ活動	125 (46%)	④青高祭	97 (36%)	④体育祭	31 (11%)
⑤遠足	118 (43%)	⑤体育祭	66 (24%)		
⑥授業・定期テスト	81 (30%)	⑥遠足	52 (19%)		
		⑦進路行事	36 (13%)		
自己実現力					
①授業・定期テスト	129 (47%)				
②進路行事	108 (40%)				
③部活動	107 (39%)				
④ゼミ活動	105 (39%)				
⑤青高祭	38 (14%)				

## 1学年 ゼミ活動がどの力の伸長に寄与しているか（複数回答・10%以上を抜粋）

①課題発見力	207 (75%)
②課題解決力	190 (69%)
③論理的思考力	189 (69%)
④受信発信力	173 (63%)
⑤原因分析力	170 (62%)
⑥協働力	125 (46%)
⑦自己実現力	105 (39%)
⑧行動力	104 (38%)
⑨知力・学力	69 (25%)

(図表 67)

2 学年 力をつけた活動（複数回答・10%以上を抜粋） (図表 68)

知力・学力	課題発見力	論理的思考力
①授業・定期テスト 229(85%)	①ゼミ活動 188(69%) ②授業・定期テスト 41(15%) ②部活動 41(15%)	①ゼミ活動 184(68%) ②授業・定期テスト 45(17%) ③部活動 26(10%)
課題解決力	原因分析力	受信発信力
①ゼミ活動 187(69%) ②部活動 45(17%) ③授業・定期テスト 29(11%)	①ゼミ活動 172(63%) ②授業・定期テスト 46(17%) ②部活動 46(17%)	①ゼミ活動 164(61%) ②部活動 51(19%) ③授業・定期テスト 34(13%) ④青高祭 29(11%)
協働力	行動力	自己管理能力
①青高祭 121(45%) ②修学旅行 118(44%) ③部活動 107(39%) ④体育祭 75(28%) ⑤遠足 59(22%) ⑥ゼミ活動 55(20%)	①部活動 98(36%) ②修学旅行 65(24%) ③ゼミ活動 59(22%) ④授業・定期テスト 57(21%) ⑤青高祭 49(18%) ⑥体育祭 35(13%) ⑦遠足 26(10%)	①修学旅行 105(39%) ②部活動 81(30%) ③授業・定期テスト 53(20%)
自己実現力		
①進路行事 136(51%) ②部活動 41(15%) ③ゼミ活動 38(14%) ④授業・定期テスト 35(13%) ⑤Mプロ・Sプロ 27(10%)		

2 学年 ゼミ活動がどの力の伸長に寄与しているか（複数回答・10%以上を抜粋）

(図表 69)

①課題発見力	188(69%)
②課題解決力	187(69%)
③論理的思考力	184(68%)
④原因分析力	172(63%)
⑤受信発信力	164(61%)
⑥行動力	59(22%)
⑦協働力	55(20%)
⑧自己実現力	38(14%)

## Section 6

### 卒業後の 留学状況

#### 1 概要

SGH 1 期生を対象に留学に関するアンケートを行った。大学入学直後は留学する者がほとんどいなかったものの、年々増加する傾向にある。以下は調査結果である。(調査期間 平成 31 年 2 月 1 日～2 月 13 日、回答数 53 人 / 274 名)

#### 2 質問項目と回答

「高校卒業後に留学したか」

留学済み	15.1%	8 人
予定	9.4%	5 人
いいえ	75.5%	40 人

「どこにどれくらいの期間留学したか/する予定か」

サセックス大学(イギリス)	3 年 9 か月
シドニー工科大学(オーストラリア)	11 ヶ月
マンハイム大学(ドイツ)	11 ヶ月
香港大学(中国)	8 ヶ月
VIA University College(デンマーク)	6 ヶ月
マサチューセッツ工科大(アメリカ)	2 週間
シドニー大学(オーストラリア)	1 ヶ月
アーヘン言語アカデミー(ドイツ)	1 ヶ月
カヴィラム大学(フランス)	1 ヶ月 (予定)
アメリカ	1 ヶ月 (予定)
ウプサラ大学(スウェーデン)、ラトビア大学(ラトビア共和国)	1 ヶ月 (予定)
ベルビューカレッジ(アメリカ)	7 ヶ月 (予定)
高麗大学(韓国) 又は梨花女子大学(韓国)	2 年 (予定)

「今後留学をしたいと思いますか。」

はい	52.5%	28 人
いいえ	42.5%	22 人
わからない	2%	1 人
できれば	3%	2 人

「SGH 等、同級生の渡航経験を見て、海外経験をすることが身近に感じられましたか。」

はい	81.1%	43 人
いいえ	11.3%	6 人
わからない	7.6%	3 人



## Section 7

### 教員以外 による 客観的評価

#### 1 学校評議員

- ・SGH や SSH の活動のように、生徒が自主的に課題を立てて、発表し、指摘する力は非常に大事。受験指導だけではなく、そこから先（知識+知恵）の指導の兼ね合いが難しいが、これからもやってほしい。
- ・ゼミ発表については、年々プレゼン能力も上がってきている。
- ・昨年度は SGH での取組をきっかけに、経営（人事、人を動かすこと）に興味をもち、志望大学とその理由を明確にする者もいたと聞く。SGH で書いたレポートを出願の際に活用しているとも。
- ・SGH の活動が体験できる生徒は幸せであり、それを誇りにしてもらいたい。活動を通じて問題意識を持てば、生徒の刺激も増えるだろうし、それを次の学年への指導へも活かしてもらいたい。

#### 2 保護者

- ・日本とシンガポールの文化・食生活・生活習慣など、あらゆる面での違いを体験することができたので、改めて日本の自分たちのことを客観的に見るすることができたようです。良い経験になりました。
- ・今まで興味を示さなかった海外留学に行き、もっと異文化を知りたいと思っているようです。将来、メディア関係の仕事に就きたいと考えているようですが、SGH の活動を通して、別の道も考えるようになってきていると話しています(漠然とですが、外国とつながるような・・・)。自分の思っていることを十分に伝えられるような英会話力を身に付けたいようです。
- ・すばらしい取組だと思います。今後ご指導宜しくお願いいたします。
- ・いい企画です。重要な企画（時間）だと思います。大人の私も受けたい授業です。
- ・海外フィールドワーク事前発表会を参観した方の評判も大変良かったです。課外でどのくらいの時間をかけているのかが話題になっていました。全学年にとってプラスになる活動であると考えます。
- ・学校内では学ぶことのできない、社会との関わりや広い視野で物事をみるということを考えるきっかけになるなど、大変有意義な活動だったと感じています。ありがとうございました。
- ・SGH の事業が大学進学という目先の目標でなく、大学進学を経て、何を目標とするかを考えていくことが大切だと思います。今、大学進学に直結しなくてもいいと思います。
- ・子どもの将来にとってもよい影響を与えて頂いたと思いました。貴重な体験ができたことが感謝でした。
- ・SGH ご担当の先生には、本当にお世話になり、感謝申し上げます。地域に根ざしつつ、地球的規模で探究的に学習し、その成果を全国的な大会に参加して、発表する機会を得ましたことは、大変ありがたく、これら貴重な人生経験が必ずや将来の糧となるものと信じております。

#### 3 助言者

私は海外に携わる県職員の一人として、シンガポール渡航前の発表会と渡航後の発表会でアドバイザーを務めました。生徒たち自身でテーマを設定し、プレゼンテーションの資料や原稿を準備し、練習を重ねて発表する、それだけでも高校生にとっては一つの達成であると思いますが、SGH では英語

での発表が求められ、内容も深める必要があるため、生徒には少なからぬ「負荷」がかかったのではないかと推察します。そしてこの「負荷」が、生徒たちにこれまで出したことのない力を発揮させたのだと思います。

現代社会ではプレゼンテーションをする機会が少なくありません。近い将来、そのような社会で活躍する生徒たちにとって、SGHでの発表は非常に有益なトレーニングになったのではないかと感じています。

SGHの成果として、多くの生徒が英語力の向上や精神面の強化などを挙げていました。その中で、ある男子生徒が言った「世界観の広がり」という言葉が特に印象に残りました。これはつまり、県内での調査やシンガポールでの活動を通して、視野が大きく広がり、想像すらしていなかった新しい価値観が自分の中に芽生えた、ということだと私は解釈しています。

このようなラディカルな変化は、生徒たちの将来の生き方や働き方に強い影響を及ぼすにちがいません。SGHでの貴重な経験を通して学問的・能力的・人間的な成長を遂げた生徒たちの、今後の活躍に期待します。

青森県観光国際戦略局国際経済課 一戸 学

#### 生徒の変化について

事前発表会では、何を目的にテーマを選んだかが明確ではなかったり、海外研修（シンガポール）で行うことも検討の余地があるグループが多かったりしたと感じましたが、事後発表会では、研究目的が明確になり、当初予定していた以上のことをシンガポールで調査してきたグループが多かったと思います。また、発表も事前に比べて堂々とした分かりやすいものになっていました。グループワークを重ねることで意見の集約ができるようになり、シンガポールでの経験でより広い視野を獲得したことが伺われます。また、どのグループも、事前発表会より事後発表会で研究は深くなっており、シンガポールでの実践が生かされたことが感じられます。

#### 青森高校 SGH プログラムが育てる力の実社会における有用性

課題解決型学習はビジネスや行政の施策につながるため、生徒が自分の興味のある分野を見極め、社会人として事業に取り組むのに有用であると思います。また、限られた時間で課題の決定から発表までをグループワークで作上げる力、英語を手段として使う力、プレゼン力、フィードバックを次へつなげる力も実社会で必要な能力であり、これらも育むことができたと思います。

青森県観光国際戦略局誘客交流課 川村 睦

As always, it's been a great pleasure to see the work of the students. On my previous visit, I watched presentations on the proposals students have made for their fieldwork project and offered suggestions for improvement. (I even had the opportunity to see some of the students' presentations again at the Education Center for a separate event.) Thus, on the second day of presentations, I was looking forward to how they improved.

Last week I advised on the presentations on Cardboard Box Shelters, Keeping Crows Away from Garbage, and Preventing Food Waste with Kids. What I admire about the teams is that they took the suggestions to heart and displayed more confidence in delivering their content in their

non-native language. I especially appreciated how the students handled set-backs in research and the challenge to use English abroad.

Overall, the projects have been a success. Having the material emailed to my offices was a great help. I was able to review the students' research, and make notes during the presentation. Some suggestions I have include the following.

- 1) Have Peter conduct a native English check on some of the powerpoints.
- 2) Encourage audiences (students) to be participative in asking questions
- 3) Have presenters practice answer critical thinking answers in English. It's also important for presenters announce "Please give us a few seconds as we discuss it as a team"

A great job to the students! It's because of inspiring students like the SGH participants that ALTs are motivated to fulfill their roles. I see a bright future for the participants as they apply themselves globally.

青森県教育庁学校教育課 マリア・レイエス

#### 4 シンガポール大学 JSS (Japanese Studies Society)代表

National University of Singapore's Japanese Studies Society (NUS JSS) is glad to have hosted Aomori High School's students on 17 January 2019. The collaboration consisted of small group presentations by the students of Aomori High School and followed by a feedback session by the students of NUS JSS.

Based on the post-event feedback from participating NUS students, all NUS students felt that Aomori High School students have a good command of the English language. This enabled all students to share and critique ideas with ease in a friendly atmosphere.

The projects were impressive as their ideas were innovative, fresh and well thought out. The careful consideration and planning undertaken by Aomori High School students displayed maturity of thought and critical thinking. Furthermore, their ideas were very substantial and marketable. It was clear that thorough research had been done to consider the views and interests of relevant stakeholders.

We also observed that Aomori High School students were self-motivated learners. They readily asked questions and were receptive to our suggestions, highlighting their passion for learning.

Overall, I would say that this session was highly successful as it facilitated the exchange of ideas and knowledge between NUS and Aomori High School. Through mutual understanding, cooperation and innovation, all students shared ideas and learnt from one another. Once again, we would like to thank you for involving us in this programme.

by Teresa Tan

President of 36th Executive Committee of Japanese Studies Society  
National University of Singapore

## Section 8

### 仮説検証

- 1 仮説1「多様性の理解に基づき、課題を設定する力」の育成  
外国人との交流を通じて、異なる価値観や文化的背景を理解することで課題を認識し設定できる。

検証①は海外研修を行った生徒と国内研修を行った生徒に対するアンケートとCAN-DO自己評価の値(再掲)、並びに自由記述の内容を用いる。CAN-DOリストは2学年年度末(2月)、学びみらいPASSのPROG-Hは年度始め(2学年4月)、言い換えると1学年終了直後の結果である。

- ・項目1～4はアンケート調査の結果であり、「かなり高まった」と「高まった」の合算を上げている。
- ・項目5はCAN-DOリストの批判的判断能力レベル4「得た情報をもとに、課題を設定することができる。」と自己評価した割合である。
- ・項目6と7は「学びみらいPASS・PROG-H」のレベル3以上の割合である(最高レベル5)。このPROG-Hは2学年4月に実施され、海外研修者と国内研修者のカリキュラムの差別化が図られていない時期の調査結果であるため、海外・国内の合算値とする。

検証① 2学年での定点比較		30年度	29年度	28年度	27年度
1 地域が抱える社会問題に対する興味・関心	(海外)	97.3%	95.7%	91.7%	91.2%
	(国内)	69.4%	72.8%		
2 世界が抱える社会問題に対する興味・関心	(海外)	100.0%	100.0%	91.7%	97.1%
	(国内)	71.1%	66.7%		
3 異文化理解に対する興味・関心	(海外)	100.0%	100.0%	100.0%	97.1%
	(国内)	70.6%	75.3%		
4 論理的に考え、分析する力	(海外)	97.3%	100.0%	95.8%	91.2%
	(国内)	78.7%	71.6%		
5 CAN-DO 得た情報をもとに、課題を設定することができる。	(海外)	94.4%	86.0%	79.2%	
	(国内)	80.8%	81.0%		
6 PROG-H「課題発見カリテラシー」3以上		86.9%	82.3%		
※本校の平均値は3.25。全国の大学生3年生の平均は2.94である。					
7 PROG-H「課題発見力コンピテンシー」3以上		96.1%	94.6%		
※本校の平均値は3.09。全国の大学生3年生の平均は2.96である。					

海外研修者の9割以上が地域・世界の社会問題に関心を持ち、課題を設定できると考えている。また、PROG-Hの値も非常に高いことから仮説1は立証されたと考える。

## 2 (仮説2)「グローバルマインドに基づく企画力」の育成

外国人との協同学習や海外経験を通じて、グローバルマインドに基づく企画力が育成される。

②は海外研修を行った生徒と国内での研修を中心に行っている生徒の2学年での定点比較である。ここでは企画力を、1 独創的な発想力、2 構想力、3 協働力の指標で判断することとする。1はアンケート結果の「大いに向上した」と「向上した」の合算値であり、2、3はPROG-Hで3以上の値(最大5点)を示した生徒の割合である。なお、河合塾による構想力の定義は「様々な条件・制約を考慮しながら問題解決までのプロセスを構想し、その過程で想定されるリスクや対処方法を構想する力」であり、協働力の定義は「協力的に仕事を進める(役割理解、連携行動・相互支援・相談・指導・他者の動機づけなど)」である。

検証② 2学年での定点比較		30年度	29年度	28年度	27年度
1 独創的な発想力	(海外)	97.3%	91.3%	95.8%	91.2%
	(国内)	57.4%	54.3%		
2 PROG-H 構想力		72.4%	68.4%		
3 PROG-H 協働力		75.3%	76.0%		

検証1で世界や地域の社会問題や異文化理解に関心があるグローバルマインドを持った生徒が1学年終了時にある程度の構想力を持っていることがわかった。この構想力が2学年で伸びたと生徒は感じていることから、「グローバルマインドに基づく企画力」の育成ができたと判断する。

## 3 検証3 (仮説3)「ビジネスモデルの開発による理論と実践を融合する力」の育成

大学教員、外国人、NPO等外部機関からの意見、助言を踏まえてビジネスモデルの開発を行うことにより、理論と実践を融合する力が育成される。

③は海外研修を行った生徒(外国人との交流や企業訪問等を頻繁に行っている)のための諸活動に関するアンケート結果(「大変役に立った」と「役に立った」の割合)及びPROG-Hの「情報分析力」と「実践力」の結果である。なお、河合塾による情報分析力、実践力の定義はそれぞれ、「事実・情報を思い込みや憶測ではなく、客観的にかつ多角的に整理・分類し、それらを統合して隠れた構造をとらえ、本質を見極める力」、「効果的な計画に沿った実践行動をとる(実践行動・修正・調整・検証・改善など)」である。

検証③ 2学年での定点比較		30年度	29年度	28年度
1 国内企業訪問		85.3%	95.2%	87.5%
2 課題研究のためのワークショップ		82.9%		65.2%
3 現地企業訪問		100.0%	100.0%	95.8%
4 市街地(国内)でのリサーチ		97.1%	90.9%	91.7%
5 NUSカレッジ学生とのディスカッション		100.0%	100.0%	95.8%
6 PROG-H 情報分析力		72.7%	69.5%	
7 PROG-H 実践力		58.5%	56.0%	

「実践力」の数値はほかの項目より低めに出ているが、この原因は実践する場が限られていたことに起因する。これは地理的、時間的要因によるものである。そのほかの数値は高いことから外国人や外部機関からの助言と実践的フィールドワークが生徒の能力伸長に寄与したと言える。また助言者のコメント(Chapter 4 Section 7-3参照)、により、仮説3「大学教員、外国人、NPO等外部機関からの意見、助言を踏まえてビジネスモデルの開発を行うことにより、理論と実践を融合する力が育成される。」が立証されたと考える。



## **Chapter 5**

### **運営指導委員会 会議録**

## Section 1

### 第1回

#### ■ 第1回 運営指導委員会 会議録

- 1 目的 SGH 事業推進体制について協議を行い、指導・助言・評価により本校の SGH 事業の円滑な推進を図る。
- 2 期 日 平成30年9月20日（木）13時30分～16時00分
- 3 場 所 青森県立青森高等学校 2年文型教室・会議室他
- 4 出席者 運営指導委員  
山 谷 清 志（同志社大学政策学部 教授）  
神 田 正 美（城西国際大学経営情報学部 客員教授）  
日 置 光 久（東京大学海洋アライアンス海洋教育促進研究センター特任教授）  
竹 内 哲 治（和歌山大学経済学部 准教授）  
青森県教育庁学校教育課  
渡 辺 学 副参事  
小 田 桐 崇 指導主事  
青森高校職員  
宍 倉 慎 次（校長） 吉 田 信 治（教頭） 大 瀬 幸 治（教頭）  
松 岡 隆 正（教務主任） 當 麻 進 仁（探究学習部主任） 山 田 昭（探究学習部副主任）  
阿 部 知 樹（探究学習部） 田 中 孝 幸（探究学習部） 相 内 菜 摘（探究学習部）  
中 野 渡 静（3年 SGH コース担当） 白 坂 淳 美（2年 SGH コース担当）  
鳴 海 亮（1年 SGH コース担当）
- 5 内容 （1）授業参観（2年文型教室他）  
（2）事業実施状況説明  
（3）指導・助言
- 6 発言内容
  - ・ JICA アフリカの企画について、青森デスクがあることは大変魅力的。JETRO とも連絡を取ってみてはどうか。
  - ・ SDGs は日本全体で盛り上がりをみせており、学習に取り入れるのは有効的であると思う。1 学年基礎ゼミの課題文テーマとして貧困を取り上げた理由は何でしょうか。また、日本人にとって貧困は少しイメージしにくいのではないか。  
〈回答〉 貧困問題の解決として、教育面やインフラ整備、医療・衛生問題など様々な切り口からのアプローチができ、文理融合で物事を考えられる点から、幅広い見解を持つための導入として適切な内容と考えたためである。また、今回は発展途上国などにみられる絶対的貧困に関する課題文に取り組みさせた。
  - ・ 模擬国連について、スピーチで何を主張したいのかが見えにくかった。また、ロビー活動の仕方だが、慣れていないせいか、グルーピングがうまくいっていないような気がした。教員側からある程度まとまる国を指定して取り組ませるのはどうか。
  - ・ プロ II BF について、青森中心の話題から、もう少し広げて世界の他の地域との比較な

どをしてほしい。

- ・模擬国連について、観点の説明などもう少し論点を絞り、必要であれば教員側から提示するなど、補助をした上で進めるべきか。特に、今回のような議題（核軍縮）の場合、幅広い議論が必要な内容であるため、進行の仕方についてももう少し検討が必要であると感じた。
- ・模擬国連について、スピーチの主語が三人称である国が多かった。自分事として考えるためには一人称を使わせる方法もよいのではないか。
- ・模擬国連について、実際大使が使っている話し方の例を提示してはどうか。意見を持つ場合、なぜそう思うのか、まで説明できるように考えさせることが必要であると思う。
- ・生徒の知的好奇心について、SGH 事業を始める前、現在ではどのような変化が見られたか。

〈回答〉

3年：海外組は意欲を持って取り組んでいた。全体で見ると、温度差はあるように感じる。

しかし、やることが多い中でよくこなしている。

2年：自分から調べたいという意欲はあまり強く見られない。自分で何を調べるかを決めるのはやはり難しい。

1年：活動内容的にも、まだ意欲を伺う機会が少ない。

SSH 担当：一部の生徒には好奇心が見られるが全体的な姿勢は弱い。

- ・以上の結果で、この SGH 事業がどう役に立ったのかを評価に提示してほしい。

〈回答〉筑波大付属高校の主催で本校卒業生及び、全国の SGH 校卒業生にアンケート調査を実施している。本年度中に結果が出る予定である。本校主体の評価も企画したい。

- ・指定解除後の活動の仕方について、成功事例をしっかりと伝えていくことが必要であると思われる。県内への普及活動において、各校でも扱えるような仕様の変更や説明をしてほしい。事業結果などを比較できるような形が望ましい。
- ・豪華客船入港時のアンケートやおもてなしは最近かなり盛り上がりを見せている。青森高校はその先行事例として成功しており、継続・普及に努めてほしい。
- ・ジェンダーについて取り上げる計画はあるか。

〈回答〉シンガポールのナンヤン女子校との交流があるため、少し投げかけてみたが、生徒の反応は薄かった。今後検討したい。

- ・TOEIC の実施について、今後大学入試の英語の試験はこのような外部業者へ委託になる見込みである。大学卒業の条件として取り上げられている事例も多く聞いている。継続してほしい。
- ・統計を学ぶ機会を計画してほしい。
- ・県内の特産品は近年海外で大変人気があり、経済も大きく動いている。このようなシステムを学び、研究することでロジスティクスについての知識を深めるのはどうか。
- ・SGH 事業解除により実施できなくなる事業もあるだろうが、事業の一つ一つの評価をした上で選別をしてほしい。また、必要であれば予算の確保に努めてほしい。
- ・弘前大学の文型学部との連携を進めて共同研究の形をとってみてはどうか。
- ・次のプログラムでリスクマネジメントを入れてはどうか。トラブルにどう対応するか、今後大学の授業内容もこのような傾向になる予定であり、高校生にも経験をさせたい。
- ・青高力について、次期学習指導要領の内容そのもの。評価方法について進めてほしい。



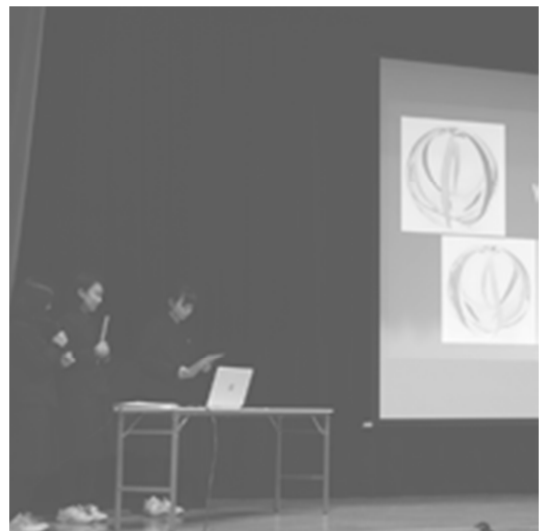
## Section 2

### 第2回

#### ■第2回 運営指導委員会 会議録

- 1 目的 SGH 事業推進体制について協議を行い、指導・助言・評価により本校の SGH 事業の円滑な推進を図る。
- 2 期日 平成31年2月12日（火）13時00分～16時00分
- 3 場所 青森県立青森高等学校 会議室
- 4 出席者 運営指導委員  
山 谷 清 志（同志社大学政策学部 教授）  
神 田 正 美（城西国際大学経営情報学部 客員教授）  
日 置 光 久（東京大学海洋アライアンス海洋教育促進研究センター特任教授）  
木 下 幸 雄（岩手大学農学部准教授）  
竹 内 哲 治（和歌山大学経済学部 准教授）  
青森県教育庁学校教育課  
長内 修吾 課長  
小田桐 崇 指導主事  
青森高校職員  
宍倉 慎次（校長） 吉田 信治（教頭） 大瀬 幸治（教頭）  
松岡 隆正（教務主任） 當麻進仁（探究学習部主任） 山田 昭（探究学習部副主任）  
阿部 知樹（探究学習部） 田中 孝幸（探究学習部） 相内 菜摘（探究学習部）  
中野渡 静（3年 SGH コース担当） 白坂 淳美（2年 SGH コース担当）  
鳴海 亮（1年 SGH コース担当）
- 5 内 容（1）授業参観（2年文型教室他）  
（2）事業実施状況説明  
（3）指導・助言
- 6 発言内容
  - ・1 学年1 学期で実施する活動のテーマに「貧困」を挙げているがこの時期に取り扱うには難しいのではないか。指導者側の不安も多いのではないか。
  - ・テーマ設定の質について、個人的に大学の生徒を見ていると、5年前と比べて落ちてきているように感じるが、本校ではどうか。
  - ・今後はどの活動をメインに進めていくか。  
<回答>ゼミ活動（プロ A）を主として、多岐にわたるテーマについてや調査方法などの指導をプロ B・C と連携して続けたい。
  - ・SGH 海外組のテーマの中で荷物の再配達についてシンガポールで調査を行ったようであるが、日本国内の先進的事例は調べているか。都会などで取り入れられている方法をもう少し学ぶべきだ。
  - ・SGH 海外組のテーマの中でゴミ問題を扱っているグループがあったが、ゴミとビジネスをつなげて考えることに違和感を持つ地域もある。外部への発信を考え、差別などの社会的背景を深く学ぶ必要もあるだろう。

- ・大学入学直後に行われている授業よりも充実した内容であり、大変魅力を感じる。
- ・CAN-DO リストについて、文言の作成担当は誰か。自己評価だけでは過小評価が多いように見える。授業参観ではもう少しよい評価があってもいいのではないかと感じた。楽しかったという思いや、積極性などの評価は教員側がしてあげてもよいのではないかと。CAN-DO リストだけでは生徒本人の自信は見えにくい。
- ・発信力や協働力の伸長は評価できる。他の3つの観点について、今後どのように伸ばすかという目標が大切になってくる。近々文科省からも学びに向かう態度に対する評価の詳しい説明があるため、参考にして欲しい。学びみらいパスとの整合性もとりたい。
- ・大学で推薦・AO入試が増えているが、より社交性などを含めた人間を見たいと考えている。大学1・2年次はある程度センター入試の学力で乗り切ることができるが、主にゼミ活動などが始まる3・4年次からは発想力やコミュニケーション能力が求められるため、詰め込みの勉強方法で進んできた学生は大変苦勞しているように見える。SGHカリキュラムを経験した生徒は積極的に推薦入試を検討すべきだ。
- ・進学先について、変化が見られないことをどうポジティブに受け取るか。実際に国際系に偏っていないことは自分の活動を他の業界に生かすことを考えた、よい方向性と捉えられるのではないかと。
- ・アンケートについて、卒業生で大学進学後、留学した学生にも調査を広げるべきである。留学した理由にSGH事業との関連があるかなど。
- ・教員へのアンケートについて、転勤などもあるため、変遷としてのデータとはなりにくいが、記述式での気づきは評価として使用できるのでは。
- ・他の指定校はある一定の生徒に対して事業を展開しているが、本校は全体に広めてやっているのは一つのスタイルと言える。業務の量は増えるように見えるが、魅力的である。
- ・推薦入試の結果を見てみると、SGH事業の活動を経験して出願してくる生徒はしっかりと自分の将来についてビジョンをもっている。本校でもAO入試をもっと活用すべきである。
- ・学力も大切だが「大学に何をしに行くのか」を考えさせたい。
- ・青森高校から見たSGH事業のプログラムはどうだったか。現場の声として文科省へのフィードバックがあると今後の活動に役立つ。  
 <回答>5年で予算の打ち切りは苦しい。SSHと同時展開を2年経験したが、SGH事業の目的は漠然としていた。
- ・地域などからの社会的評価はとらないのか。応援コメントがあってもいいのではないかと。  
 <回答>保護者のみでとどまっている。昨年度までお世話になっている訪問先企業、発表会などの助言者、講師の先生方にも依頼を検討したい。
- ・資金について、持続可能なファンドを見つけたい。教育への資金提供は多い。
- ・SGH事業において、青森高校独自のスタイルを端的に表すと何か。  
 <回答>他校のようにSGHクラスなどを作らず、全体で取り組んでいるところである。学年融合を残したかった。基礎ゼミや個人のゼミ活動におけるテーマなどはもう少しSDGsと絡めていきたい。
- ・全体で取り組むことで、消極的なグループは少ないように見え、課題研究活動の底上げの要因となっているように感じる。
- ・一期生から共通して、研究を深めていく部分で生徒は苦勞しているように見える。教員として刺激を与えきれない。難しい。
- ・SGH事業は、教育理念としての残し方もできる。自律自啓はまさにSGH事業の目的そのものであると言える。
- ・報告書には良い点だけでなく、失敗例を載せるべきであると思う。それらを事例集としてまとめると、話題性もあるのでは。大学の教員側としては、高校教員の指導方法を学べる資料は魅力的である。AO・推薦入試を行っている学部を中心に周知してみることも検討して欲しい。ゼミのテーマについても、これだけ多岐にわたるものは見たことがなく、素晴らしい。



## **Chapter 6**

### **総括**

## Section 1

### 概要

#### 1 平成26年度

SGH 指定を受けたこの年は SGH の対象は1学年のみであった。SGH 自体が新しい概念で先行事例がないため、本校では一つ一つの事業を立ち上げて、それを逐次遂行することに専念せざるを得なかった。青森県ロジスティクス戦略を視野に置いて「多様性の理解に基づき課題を設定する力」、「グローバルマインドに基づく企画力」、「理論と実践を融合する力」の育成を目指し、その手段としての「外国人との交流」、「外国人との協同学習や海外経験」、「ビジネスモデルの開発」を主たる事業として実施していった。この年は中間報告で指摘されたように1学年全員への講義とその振り返りの活動が多かった。

#### 2 平成27年度

それぞれの活動にしっかりとした意味づけをする動きが強まった。外国人との交流、協働学習や海外経験、ビジネスモデルで何を身につけさせるのかを明確にする必要が生じた。初年度利用されたルーブリックはどの活動でも利用できるものであったが、それゆえに同じ観点（つけるべき力）を同じ基準で毎回評価することになり、生徒の伸びや何の力をつければよいのかが明確でないという不都合が生じていた。このルーブリックから脱却し、CAN-DO リストを導入することが提案されたのがこの年である。また、初の海外フィールドワークが実施されたが、当時は海外フィールドワークがひとつの目標と捉えられていたことも否めず、あくまでも研究の一手段であり、一つの過程であるという確認が必要であった。この段階では SGH の対象は1学年全員と2学年のークラスに限られ、全校への波及効果はまだ充実していない状態であった。海外フィールドワークではシンガポールの明治屋、伊勢丹 Scotts の2社を訪問し、お世話いただいた。

#### 3 平成28年度

この年の SGH コースは1学年全員と、2学年の希望者23名、3学年の1クラス（35名）で構成されていた。3学年の生徒は後輩の指導をしながら、レポートの作成を行った。また、この年は探究型学習を全校で実施するための「ゼミ」活動が導入された年である。文理融合・学年融合で生徒は興味関心に応じて12の分野に所属し、課題解決型学習を行うこととなった。転勤の多い公立高校ではゼミ担当の教諭が変更になる可能性があり、その場合でも生徒同士で知識の共有・伝承が行われれば持続可能であること、上級学年のリーダーシップを育てられるという趣旨に基づく学年融合であった。当時、本県ではゼミによる学習形態自体がほぼ初めてのことであり、他県の先進校視察等で得た情報を紹介したり、弘前大学人文社会科学部渡辺 麻里子教授のお力をお借りしてゼミ運営の研究会を開いたりした。しかし、この時点ではゼミの概念を全校に理解してもらった上で合意を得るのは時期尚早の感もあった。SGH の探究型学習が一部生徒に限定されて実施される場合と全校で実施される場合とでは、運営上の難易度に大きな差があることも判明した。多種多様なテーマでゼミやグループが組織され、専門家不在の中で生徒を導くのは容易なことではなく、負担感が募

った時期である。また、生徒の意識の温度差も大きく、ゼミ活動の活性にはまだ時間が必要であった。一方で海外フィールドワークの内容には充実が見られた。前年度は既存の青森県産品の海外進出のプラン策定にとどまっていたものが、新商品の開発を含めて企業と連携するなどの活動が多く見られるようになった。現地の訪問企業数は前年度は2社だったが、この年は生徒の研究テーマに合わせて小グループで個別に企業を訪問した結果、8社に増加した。この企業訪問は研究テーマに直結した助言を専門家からいただくよい機会となった。JR シンガポール、JTB シンガポール、HIS シンガポール、Super Mama、明治屋、Atomi、高島屋シンガポール、伊勢丹 Scotts の皆様には大変お世話になった。

#### 4 平成29年度

この年から2学年のSGH対象生徒が文型生徒全員に拡大され、2学年文型の総合的な学習の時間は2単位に拡大された。それに伴い1単位は従来のゼミ活動、残る1単位は海外研修者用のプログラムと国内研修者用のプログラムで差別化が図られることとなった。海外研修者用のプログラムは従前のものを洗練していく方向で、国内研修者には新たなプログラムを開発した。国内研修者用のプログラムは経済的・物理的に制約がある中でもグローバルな人材を育成することを趣旨に、「バーチャルおもてなし」、「海外修学旅行生受け入れ企画」、「模擬国連」、「バーチャルユースフォーラム」の4つのカリキュラム（Chapter 3 Section 2 参照）を実施した。この企画は運営指導委員の諸氏より高い評価を得ている。また、この年の海外フィールドワークは現地起業家との座談会を含め、更なる内容の充実が進んだ。訪問企業は9社となる。

#### 5 平成30年度

前年度後半に学年融合型のゼミの温度差が拡大し、一部のゼミが機能しなくなる恐れが出てきた。先輩から後輩への知識や経験の継承がうまく進まないこと、モチベーションが高まらないこと、手法が確立されないことが主な原因である。この年はそれらの問題を解決すべく学年分離型（文理融合は維持）のゼミに移行した。大きな変化があったのは1学年のプログラムである（Chapter 1 Section 4 参照）。基本的な手法を学び、今後2年間の研究に耐えられる課題を設定することを主眼に置いた。県内フィールドワーク（29年度まで全員に課していた企業訪問）は、生徒の研究テーマが多岐にわたり、集約日での統一が難しくなったこと、遠方への訪問を希望する生徒も増え、平日には実施できないなどの理由により、集約日を設けず長期休業中に自主的に行う方向に変更した。それにもかかわらず、グループによっては独自に講師を招聘し、学校でワークショップを開くなどの独立した活動が展開され、ゼミの活性化がうかがえる年となった。

海外フィールドワーク参加者に関しては、例年に増して自主性の伸長が著しく、国内企業、海外企業ともに生徒が自ら開拓し、訪問を成し遂げるグループがほとんどであった。現地シンガポールにおける活動も教員の先導ではなく、グループ主体で活動するようになり、初めての地でも公共交通機関を利用して移動し、密度の濃い調査活動を行った。今年度、アポイントメントを取って訪問した現地企業は8社であるが、現地で直接交渉の上、許可を得て調査するグループも半数程度あり、自主性も育成されたフィールドワークであった。

平成30年度に全校体制での探究型学習の素地が固まったと言える。

## Section 2

### 経費

平成28年度より、SGH指定解除を見据えて事業の見直しを重ねてきた。下図は生徒に直接関係のある事業についての経費の比較である。なお、27年度は海外フィールドワークが始まった年である。平成28年度から重視したのは、生徒の多種多様な興味関心に応じられるシステムを構築すること、生徒の体験を優先すること、経済的負担が少なく教育効果の高い事業に注力することの3点である。その中で後述の外部講師リストの作成や外部団体の連携の強化、講演会の見直しが進められた。

SGH指定解除後の平成31年度以降は、表3の予算規模で事業を継続していく予定である。詳細については次のSectionに記す。

#### 1 平成27年度（概数）

項目	金額	原資	備考
海外フィールドワーク経費補助	¥3,500,000	SGH	生徒35名・引率4名
発表会参加旅費	¥450,000	SGH	2件(生徒6名・引率3名)
国際交流事業	¥210,000	SGH	5件(生徒27名・引率5名)
外部講師招聘	¥670,000	SGH	
消耗品	¥95,000	SGH	
他校対象勉強会主催	¥0	SGH	実施なし
ICT機器活用	¥2,500,000	SGH	教育用タブレット賃貸
国際交流事務・運営費	¥20,000	SGH	

SGH ¥7,445,000

#### 2 平成30年度（概数）

項目	金額	原資	備考
海外フィールドワーク経費補助	¥2,600,000	SGH	生徒37名・引率3名
発表会参加旅費	¥240,000	SGH	2件(生徒6名・引率3名)
発表会参加旅費	¥900,000	外部調達	5件(生徒27名・引率5名)
国際交流事業	¥90,000	SGH	1回(バス借り上げ代)
外部講師招聘	¥40,000	SGH	
消耗品	¥15,000	SGH	
他校対象勉強会主催	¥480,000	外部調達	ディベート勉強交流会
国際交流事務・運営費	¥20,000	同窓会・後援会	

SGH ¥2,985,000  
SGH以外 ¥1,400,000

### 3 平成31年度予算（概数）

項目	金額	原資	備考
海外研修	¥1,300,000	同窓会・後援会	生徒10名・引率2名
各種発表会派遣旅費	¥650,000	同窓会・後援会	5件(生徒10名・引率5名)
国際交流事業	¥50,000	未定	1回
国際交流事務・運営費	¥50,000	同窓会・後援会	

**SGH指定解除後の事業予算                      ¥2,050,000**

## Section 3

### 平成31年度 以降の事業

#### 1 カリキュラム

ア「SGH プロジェクト学習Ⅰ」1学年全員対象・3単位

「総合的な探究の時間（1単位）」と「社会と情報（2単位）」の読み換えで「プロジェクト学習」の名称で学校設定科目とする。内容は従来どおり。

イ「総合的な学習の時間」2学年文型生徒対象・2単位

1単位は従来どおりゼミ活動を行い、残る1単位を従来のプロジェクト学習ⅡBD（国内研修用カリキュラムとする。2学年理型生徒は「SS探究・2単位」でそのうちの1単位は文理融合のゼミ活動、残る1単位は従来どおり実験等を含む理数系探究活動を行う。

ウ「総合的な学習の時間」3学年文型対象・1単位

従来どおりの活動とする。3学年理型生徒は「SS創造」の名称で研究内容を深化させる。

エ「SGH世界史」2学年文型生徒対象・3単位

「世界史A」2単位を実施する。

オ「表現探究」2学年文型対象・1単位

学校設定科目として、外国語科の中に設定する。

#### 2 探究学習

平成28年度に全校での探究型学習（ゼミ活動）が導入され、SGHは探究型学習のひとつの手段としての位置づけられてきた。そのため、海外研修者用のプログラムを除けば大きな変更や影響を受けずにこれまでの学習活動を展開できる。

### 3 事業の精選

次は平成30年度時点で実施していた事業である。二重打ち消し線で消された事業が廃止される予定である。★印はSGH予算のうち5,000円を超える事業規模であることを示す。【 】内は身につける力を表している。

- (1) 青森中央学院大留学生との交流会（1学年対象11月・希望者50名程度）  
【外国人とふれ合う契機・メンタルレジリエンスの形成】
- (2) ~~エドグレンハイスクール訪問（1学年対象1月・希望者50名程度）★~~  
~~【外国人とふれ合う契機・メンタルレジリエンスの形成・北米英語に触れる】~~
- (3) バーチャルおもてなし（2学年文型生徒対象・5月）  
【広い視野の育成・批判的思考力育成】
- (4) 海外からの修学旅行生受け入れ（2学年文型生徒対象・5月）  
【企画力・行動力・調整力育成】
- (5) ~~市内インタビュー（平成30年度年度廃止）~~  
~~【行動力・積極的態度の育成】~~
- (6) 模擬国連（2学年文型生徒対象・6月）  
【調整能力・コミュニケーション能力・広い視野の育成】
- (7) ~~ALTへのインタビュー活動（2学年文型海外研修者・6月）~~  
~~【英語によるコミュニケーション能力の育成・コミュニケーションギャップに気づく】~~
- (8) 青森県即興型英語ディベート交流会主催（2学年対象7月・希望者9名）  
~~【論理的思考力・コミュニケーション能力・英語学習のモチベーション】~~  
※平成31年度より青森県高教研外国語部会で主催
- (9) 企業訪問（平成30年度より奨励に変更）  
【行動力・広い視野の獲得・専門的知識の獲得】
- (10) ~~海外航路船乗客へのインタビュー（2学年文型海外研修者対象・8月）~~  
~~【メンタルレジリエンスの形成・行動力・コミュニケーション能力・自信の向上】~~
- (11) 海外フィールドワーク（2学年希望者対象・1月）★  
【受信力・発信力、課題発見力、課題解決力、協働力、行動力、受信力・発信力、自己実現力】  
※希望者多数の場合は選抜を実施する。
- (12) ~~SGH全国フォーラム（2学年選抜者対象・3月）★~~  
~~【コミュニケーション能力・広い視野】~~
- (13) バーチャルユースフォーラム（2学年文型生徒対象・5月～）  
【企画力・論理的思考力・調整力・コミュニケーション能力・批判的思考力】
- (14) ポスター発表（2学年全員対象・11月・1学年は見学）  
【コミュニケーション能力・論理的思考力・広い視野】
- (15) ~~SGH海外フィールドワーク(FW)事前発表会・SSH海外研修事前発表会（2学年対象12月）~~  
~~【コミュニケーション能力・論理的思考力】~~
- (16) ~~SGH海外FW事後発表会・SSH海外研修事後発表会・セミ代表発表会（2学年対象2月）~~  
【コミュニケーション能力・論理的思考力】  
トビタテ留学JAPAN、青森県の人財育成プログラム、海外研修参加者の発表の場を兼ねる。
- (17) 全国英語ディベート大会（1・2学年選抜者対象・3月）★  
【論理的思考力・批判的思考力・コミュニケーション能力】
- (18) 東北SGHフォーラム（2学年対象3月・1・2学年対象選抜15名）★  
【調整能力・コミュニケーション能力・広い視野の育成】
- (19) ~~SGH甲子園（2学年対象3月・2学年対象選抜2名）★~~  
~~【コミュニケーション能力・論理的思考力・広い視野】~~
- (20) 西東京3大学連携「高校生グローバルスクール」(SDGs勉強会)（2学年選抜者対象3月）★  
【コミュニケーション能力・論理的思考力・広い視野】



#### 4 海外研修

SGH 指定解除に伴い、19年間続く本校独自のプログラムであったニュージーランド語学研修の内容を変更し、次の形式で海外研修を実施する。

##### 青森高校海外研修実施要項（案）

#### 1 目的と目標：

目的1 文化の違いを知る

日本の文化を知る・伝える 【受信力・発信力】  
海外の文化と日本の文化を比較できる 【課題発見力】

目的2 海外で活動できる行動力を身につける

海外で自力で動き回ることができる 【課題解決力】【協働力】【行動力】  
母国語以外で意思疎通ができる 【受信力・発信力】  
海外で活動することの意義を知る 【自己実現力】

#### 2 位置づけ： 学校行事

#### 3 活動内容：

目的1に関連

現地高校生との交流

日本の文化を紹介する・現地の文化紹介を聞く。  
進学・就職に関する実情について情報交換をする。  
将来に関するビジョンについて意見交換をする。

現地大学生との意見交換

日本の習慣・マナーについての印象を調査する。  
高校生活・大学生活の違いについて情報交換をする。  
将来に関するビジョンについて意見交換をする。

在星日本人との講話・座談会

海外で生活するとは・海外生活に至った経緯について聞く。  
文化の違い・グローバル社会で生きる覚悟について聞く。

目的2に関連

自主研修

グループごとにテーマを設定する、またはミッションをクリアするフィールドワーク形式にする。※単なる物見遊山にしない

ツアーガイド

担当グループが一つのエリアの歴史・文化・風習を事前に学習し、他のグループをガイドする（例：チャイナタウン・リトルインディア・アラブストリート）。  
前夜のミーティングで訪問箇所についてブリーフィングを行う（英語）。

会議主催

足を踏み入れたことのない地で会議を開催する。  
事前に会場の予約・必要物品に関する打ち合わせを行う。

その他

その日学んだことを各自が英語で発表するミーティングを開く。

#### 4 事前学習

目的1に関連

在青森シンガポール人に対する質問会（1時間）

日本との違い（文化・社会構造等）についてシンガポール出身者に質問する。

現地のガイド準備（3時間）

歴史・風習・マナー・名所について他のグループに紹介できるよう準備する。

日本文化の説明（若者文化も含む）準備（2時間）

伝統的文化・文芸・思想・歴史について現地で紹介できるよう準備する。

目的2に関連

公共交通機関の利用方法（講座・1時間）

地下鉄・バスの利用方法についての講義

自主研修プラン策定

テーマに沿った現地活動のプランを立てる（3時間）  
サバイバルイングリッシュに関する講義・演習（1時間）  
会議開催のための準備（8時間）  
会場予約（メニュー・席次等）  
ゲスト招待  
司会

#### 5 渡航先：シンガポール

選定理由：

目的1に関連

多民族国家であり、中華系・マレー系・インド系等の民族と触れ合うことができる。  
日系企業が多数進出しており、現地の起業家からの支援が受けやすい。

SGHで培った南洋女子高校等との交流を継続できる。

目的2に関連

時差の少ないアジア国家のなかで最も安全であり、自主研修等の活動に適している。

#### 6 実施時期：1月の6日間

#### 7 対象：2学年10名程度

文理を問わない

応募者多数の場合は提出書類・面接による選抜を行う。

選抜は研修旅行委員会が行う。

次の海外研修に参加した/する生徒は対象としない。

SSH 海外研修

トビタテ留学 JAPAN

済州ユースフォーラム

グローバル人財育成事業

#### 8 引率教員：2名

次年度に引き継ぐことを考慮に入れ、研修旅行委員会が推薦する。

今後の進路（留学指導）に生かすために、英語科教員に以外も視野に入れる。

英語使用者を最低1名含む。それ以外の場合は英語に堪能なガイドを現地で1名雇用するものとする。

#### 9 経費（生徒一人あたり）：

航空運賃	80,000 円	（仁川空港経由）
宿泊費	60,000 円	（ホテル4泊・ツイン利用・朝食付）
現地貸切バス代	15,000 円	（2日間）
現地交通費	2,700 円	（地下鉄3日券）
食費	15,000 円	（昼・夕食8食分）
計	172,700 円	

#### 5 新規検討事項

JICA/内閣府等とのコラボレーション（Chapter 1 Section 4 参照）

【企画力・行動力・調整力・コミュニケーション能力・批判的思考力】

#### 6 重点校事業

本校は青森県の「青森県立高等学校教育改革推進計画」により、平成30年度より青森県の重点校に位置づけられ、「英語コミュニケーション能力の向上に関する研究会」、「グローバル教育・理数教育に関する研究成果発表会等」、「教科指導に関する研究会」、「進路指導・小論文・面接指導等に関する研究会・講演会」、「大学教員等との情報交換会」、「進路に対する意識の向上を目指した進路探究と自己理解のためのグループ協議」、「進路講演会」、「OBの大学生や社会人等との懇談会」、「医学部医学科及び難関大学進学に向けた学習会」等を主催・運営することとなっている。

SGHで培ったノウハウを今後県内各校に普及する予定である。

## Section 4

### 課題

#### 1 予算

この5年間で予算に関して次の課題があった。

教育現場において予算の流動性が低いことは事業の縮小を意味する。一般にコンテストの応募要項は当該年度の中盤に発表され、秋に審査結果発表というケースが多い。SGH 事業ではある程度の予算の流動性はあるものの、生徒の成長に合わせて事業を変更することが難しく、優秀な人材に適切な機会を与えられないことがあった。特に地方都市に位置すると、発表や研修会場までの旅費負担は大きく、臨機応変に対応できる範囲を超えている。

また、予算の縮小に関しては生徒の期待を裏切ることもあり、指定3年目まではその対応に苦慮した。外部の予算獲得というノウハウは得たが、それに伴う膨大な事務処理に時間を奪われ、担当者の負担は年々増大した。安定した事業継続には安定した財源が必要と思われる。

単年度決算の趣旨は理解するものの、教育の現場にはそぐわない。長期的な展望で教育に出資する姿勢が望まれる。

SSH の予算処理と違い、現場の負担は大きい。これに関しては文部科学省の負担も大きいものとする。今後 JST のような機関が必要と考える。

#### 2 ICT 活用の限界

ICT の活用に関しては理想と現実の乖離が大きいものとする。ネットワーク利用で海外とのやり取りを実現させるには、①施設・設備の充実、②維持管理費の確保、③相手との交渉が必要となる。③に関しては当該校の努力により達成できるが、①に関してはリースが原則、②に関してはネットワーク回線の充実と通信費の安定的供給が課題となる。関東圏の事例をもとに大手通信業者数社に通信料減免についての交渉を行ったが、事情が全く違うため実現できなかった経緯がある。幸い本校では別の財源から通信費の確保ができたが、回線の細さから全校生徒を対象とした運用は不可能である。その意味では、限定された（少人数の）生徒だけが恩恵を被ることになり、国としてのグローバル人材の育成の理念から離れることになる。無論、ICT の別の活用に関しては進展があり、プロジェクターやスクリーンの利用率の向上が見られたが、ICT 利用の本来の趣旨とはかけ離れたものである。

#### 3 大学受験とのバランス

今後、社会で必要とされる人材の育成に SGH は大きく貢献していることは疑いのない事実であると認識しているが、SGH 指定校公募の要件を考慮すると、指定校のほとんどがいわゆる「進学校」であり、出口保証は常に付きまとう課題であると言える。この点で現場では教員の意識に温度差が生じる。その温度差は広範囲に及び、「AO・推薦入試で有利に働く」という理由から、旧来の「学力をつけることが優先」という理由まで存在する。SGU と SGH の連携が強化されれば、ある程度この問題も解決に向かうと推察されるが、現段階では SGH 事業は受験とは全く別の力を育てる

活動として捉えられている。今後、大学入学後の生徒の伸びに関する情報も高校に提供されるようになれば、温度差も縮まるものと考ええる。

#### 4 ワーキングバランス

SGH が当然のものとなり、そこから派生した「ゼミ」活動に全教員が携わったため、相対的に SGH 事業にかかわる人員が減少した。本校では SGH・SSH 事業を担う「探究学習部」が設立され、教員 6 名が事業に専念できる環境が整っているが、前述の予算確保や対外折衝を含めると業務は多岐にわたり、持続可能な体制とは言い難い。

## Section 5

### SGH の有益性

SGH の有益性を生徒の感想、アンケート結果、日常の観察、事業の内容と参加者数により検証する。なお、数値指標の詳細は Chapter 4 Section 2 に記してある。

#### 1 精神力

本校の SGH 事業をとおして、「意欲」、「変化に前向きに対処する力」、「範囲を限定せずに主体的に動く力」、「チャレンジする力」、「異文化集団に飛び込み（混沌未知異文化を受け入れ）信頼を勝ち得る（周囲を巻き込む）力」、「組織に隷属せず高い志を持ちピンで立てる力」、「忍耐力」の向上が見られた。

##### ア「意欲」

<生徒の感想>

- ・この経験で私は考え方が変わりました。もっと英語で話してみたい。日本語では気持ちを伝え合うことができない人たちとも、心を通わせてみたいと強く思ったのです。
- ・やらなくて後悔することはあってもやって後悔することはないと感じた。まずは身につけた英語力や積極性、物事を深く考えて疑問を持つ姿勢を日々活かしていこう。そして大学生になったらまた海外に行きたい。

<数値指標>

- ・PROG-H「自信創出力・ポジティブな考え方やモチベーションを維持する」：高校 1 学年終了時で全国の高校 3 学年レベル。

##### イ「変化に前向きに対処する力」

<生徒の感想>

- ・仁川空港でこの研修初めてフィールドワークに挑みました。誰にどうやって話しかけようか悩んでいるうちに時間は過ぎていきます。その焦りから、腹を決めて 1 組の家族に話しかけました。快く応じてくれて嬉しかったのをよく覚えています。少し自信がついて、活動に前向きになれました。この日の活動が終わる頃には、フィールドワークが楽しくなり、翌日以降が楽しみになっていました。
- ・もし、この活動（海外フィールドワーク）に参加していなかったら、こんなに貴重な経験はすることができなかったと思います。これからも初めてのことがたくさん出てくると思うのでそのときには、びびって最初から挑戦せずに終わるのではなく、挑戦してみて初めてわかる楽しさがあると思うので何にでも挑戦していきたいです。海外研修を通して多くのことを学べたので本当に参加してよかったなと思いました。

## ウ「範囲を限定せずに主体的に動く力」

### <生徒の感想>

- ・今回の研修を終えて、自分たちのゼミでも多くの課題が見つかりました。多くの人の意見を聞くことで、自分たちが考えていなかったようなアイデアが多数見つかりました。これからのゼミではただ、ネットにある情報のみを信じてそれだけで情報を伝えるのではなく、自分たちが実際実験をしたりして、残り少ない時間を有効活用していきたいです。
- ・インタビューで得た結果だけでなく、ラジオ体操に来れば来るほど朝ごはんが安く食べられるシステムを作ったり、ラジオ体操は若者にとっては自ら進んで行きたいものではないので、もっと若者向けのものを取り入れたり、コミュニケーションを取りやすいようにカードを作るなどのアドバイスをもらったので、それも取り入れていこうと思います。
- ・今後は日本の企業に電話をするなどコストを抑える方法を調べていくほか、費用をあまりかけずに依頼できる組織を調べたい。現時点では町内会や学校行事との連携を考えている。

### <数値指標>

- ・PROG-H「行動持続力・主体的に動き、良い行動を習慣づける（学習行動を含む。主体的行動・完遂・良い行動の習慣化など）」：高校1学年終了時で全国の高校3学年レベル

## エ「異文化集団に飛び込み信頼を勝ち得る力」

### <生徒の感想>

- ・私は、積極的に自分から話しかけるのはあまり得意ではない方ですが、今回のこの活動を通してメンタルも強くなり、知らない人に話しかけることにも前よりは抵抗を感じなくなったと思います。新たな発見は、英語を使うのは楽しいと思ったことと、もっと勉強して外国の人と話せるようになりたいと思えたことです。実際にインタビューしながら外国人と会話したりナンヤン高校の生徒とおしゃべりしたり、授業を一緒に受けたりととても楽しい時間を過ごした中で英語で会話することの楽しさを改めて感じることができました。

### <数値指標>

- ・アンケート：異文化理解に対する興味・関心に対する「高まった」の回答 100.0%。
- ・アンケート：物事を国際的な視野で捉える力に対する「高まった」の回答 97.3%。
- ・アンケート：コミュニケーション能力に対する「高まった」の回答 100.0%。

## オ「組織に隷属せず高い志を持ちピンで立てる力」

### <生徒の感想>

- ・飯田さん（在シンガポール起業家）の決断力と行動力には驚かされた。お話にもあったとおり、大手の銀行での優遇を捨ててまでも、自分の夢や信念を貫いていける決断力がある。そしてそれは今までの経験が造り上げた自信からなせるものであり、見習いたいと思えた。また、行動力も同様だ。普通の人とは何かやってみたくて決めたものの、行動するまでにはなかなか時間がかかってしまうのが一般的だ。だが、これをやりたいと決まったらすぐに行動に移せる飯田さんは素晴らしいと思った。
- ・今回の研修で先生の旅行のお話を伺っている時に、今年のゴールデンウィークにでも海外に一人で行きたいと思うようになりました。一人で行くことでまた、今回と違う何か刺激を得られるかもしれないと感じたからです。まだまだ未熟な者ですが、これからも切磋琢磨して参ります。
- ・最初は、私のグループ女子3人で固まってフィールドワークを行なっていたが、徐々に慣れていき、話し合っただけで行動範囲をきめて一人で声をかけられるようになっていった。さらに、自分が話す英語に自信がなく、声が小さかったのだが、自分の言葉が相手に通じ、答えてもらえることを嬉しく感じ、最後には少しは自信をもって話せるようになった。

### <日常の観察>

例年海外フィールドワーク参加者の中に一人でも研究を続ける生徒が存在する。代表的な研究は「ハラル認証を青森へ」、「廃校を使った町おこし」など。生徒たちは独力で他県にも出向き、調査活動を行い、英語のプレゼンテーションやレポート作成を行った。安易に群れることをよしとしない生徒が少なからず存在する。

## カ「チャレンジする力」・「忍耐力」

### <生徒の感想>

- ・特に大変だったのは二日目のリトルインディアでのアンケート調査です。私たちの班は単独で調査することになったのですが、現地の方の迫力に押され、なかなか勇気が出ず時間が過ぎてしまいました。勇気を振り絞って声をかけてみましたが、幾度となく断られ、舌打ちをもされ

た時には心が折れそうになりました。ですが、日を追うごとに断られても「よし！次の人行こう！」と自分で鼓舞できるようになっていました。その時起こったことに落ち込むのではなく、次のことを考えていけるようになりました。また、最初は声をかける時緊張した表情でしたが、最後には笑顔で声をかけていたと友人に言われ嬉しかったです。コミュニケーション能力は生きていく上で重要な力なので、今回伸びた所を生かし、これからも成長していきたいです。

<数値指標>

- ・PROG-H「対自己基礎力 - 仕事場面での気持ちの揺れをコントロールする・ポジティブな考えやモチベーションを維持する・主体的に動き、よい行動を習慣づける」：5段階中 2.77点。
- ・PROG-H「構想力 - 様々な条件・制約を考慮しながら問題解決までのプロセスを構想し、その過程で想定されるリスクや対処方法を構想する力」：1学年終了時で全国の高校3学年の値を上回る。

## 2 思考力

SGH 事業を通して思考力も向上した。ここでは、「社会人基礎力」、「人間力」の中の「問題発見能力」、「見えないものが見える力」、「創造力」、「考え抜く力」の観点から検証する。

### ア 問題発見能力

<数値指標>

- ・PROG-H「情報収集力 - 課題発見・課題解決に向けて、幅広い観点から適切な情報元を見定め、適切な手段を用いて情報を収集・調査し、それらを適切に整理・保存する力」：高校1学年終了時で全国の大学3年生の数値を上回る。
- ・PROG-H「情報分析力 - 事実・情報を思い込みや憶測ではなく、客観的にかつ多角的に整理・分類し、それらを統合して隠れた構造をとらえ、本質を見極める力」：同上。
- ・PROG-H「対課題基礎力 - 問題の所在を明らかにし、必要な情報分析を行う・課題解決のための効果的な計画を立てる・効果的な計画に沿った実践行動をとる」：高校1学年終了時で全国の高校3学年の数値を上回る。

### イ 見えないものが見える力

<数値指標>

- ・PROG-H「課題発見力 - 様々な角度、広い視野から現象や事実をとらえ、その背景に隠れているメカニズムや原因について考察し、解決すべき課題を発見する力」：高校1学年終了時で全国の大学3年生の数値を上回る。

### ウ 創造力

<生徒の感想>

- ・話し合いでは、各人オリジナルのアイデアがぼんぼんと飛び交った。その中には私一人では思いつかないような意見も沢山見られた。そしてとにかく話題が進むのが早い。これも特徴の一つだ。あれよあれよと話が進むので、集中して自分でも考えを巡らせていなければ置いていかれる。自分の理解力や創造力、コミュニケーション力などを総動員して意見を出す。これだけで相当な能力を要するし、正直に言えば疲れる。しかし自分の成長も実感できるので全く苦ではなかった。むしろ文化班のメンバーの着眼点に感嘆するばかりだった。
- ・私はこのような企画に参加するのは初めてだったので、不安もあったけれど楽しかったです。方向性やテーマを決めて、当日やる内容、準備するもの、当日までの日程など、全て自分たちでやるのはとても大変でした。
- ・このプロジェクトは1からのスタートだったので、初めは何をすればよいか分からず、話し合いが全く進まないこともありました。しかし、会議を重ね、いろいろな意見を出すことで、よりよい計画を立てることができたと思います。また、本番から逆算し、すべきことや用意しなければならないものの日程を決める逆算の考えも身につきました。

<数値指標>

- ・PROG-H「統率力 - 意見を主張する・創造的な討議・意見の調整・交渉・説得など」：高校1学年終了時で全国の高校2学年の数値を上回る。

### エ 考え抜く力

<数値指標>

- ・PROG-H「情報分析力」(前掲)
- ・PROG-H「課題発見力」(前掲)

### 3 コミュニケーション能力

SGH 事業を通してコミュニケーション能力は最も向上した技能である。以下「コミュニケーションスキル」、「相手との壁を越えて多様性を活かす対話力」、「多様な人たちとの繋がり」、「協業力」、の観点で検証する。

#### ア コミュニケーションスキル

<数値指標>

- ・PROG-H「コンピテンシー総合」：1学年終了時点で全国の高校3学年の数値を上回る。
- ・PROG-H「対人基礎力・円満な人間関係を築く・協力的に仕事を進める・場を読み、目標に向かって組織を動かす」：5点満点中 2.97 点。
- ・PROG-H「親和力・円満な人間関係を築く（親しみやすさ・気配り・対人興味・多様性理解・人脈形成など）」：5点満点中 2.97 点。
- ・PROG-H「協働力・協力的に仕事を進める（役割理解、連携行動・相互支援・相談・指導・他者の動機づけなど）」：5点満点中 3.17 点 全国の高校3学年を上回る。
- ・PROG-H「統率力」（前掲）

#### イ 相手との壁を越えて多様性を活かす対話力

<生徒の感想>

- ・今回の研修ではフィールドワークや現地での交流で、自分から積極的に話しかけることが出来た。研究内容に関するだけでなく、日常的な会話も難なくすることが出来た。もちろん最初の10分程は言語の壁に悩んだが、直ぐに慣れた。この変化は日に日に実感することができ、非常に嬉しかった。英語の勉強をもっと頑張ろうと思える経験だった。
- ・研修を終えて海外に対する心の壁はかなり低くなった。今まで留学などに興味はあったが恐怖心も大きかった。今回も行く直前まで怖かった。しかし行ってみると海外にも優しい人が沢山いることがわかり安心した。
- ・今回の研修を通して、色々な国の人に話しかけて、質問を受けてもらえない時もあったが、それも含めて、外国の人に話しかけるのが苦手だったけど克服することができ、良い経験になったと思う。
- ・僕は正直言って研修に行く前は、シンガポールに行くのが怖かったです。外国に行くのは初めてでしたし、何より自分の英語が通じるのかどうかすごく不安だったからです。しかし覚悟を決めて、色々な場所で活動しているうちに英語がある程度通じることがわかってくと、不安よりも楽しさや、充実感が勝るようになっていました。
- ・私は元々英語が苦手な上にあがりやすいために、自分の英語が通じるのか、うまくコミュニケーションがとれるか不安でした。ですが、結果から言うとても楽しくて貴重な時間を過ごすことができました。この研修に参加できたこと、新しい世界に少しではあるけれど飛び込めたこと、とても嬉しく思っています。
- ・私の発音で大丈夫か、イントネーションは大丈夫か、など最初は考えていましたが、私の英語で通じました。1度通じると自信になるので会話の際に、あの話題も話してみよう、わからない単語は別の英語で表現して伝えてみよう、と挑戦心が湧いてきて、たくさん挑戦しました。それもまた上手く通じたので大きな自信になりました。

<数値指標>

- ・PROG-H「協働力」（前掲）

#### ウ 多様な人たちとの繋がり

<生徒の感想>

- ・初めての異国であり、周囲は外国人だらけで日本語が一切通じない環境下に身を置き、緊張しきりであったため、初めは声をかけるまでに相当の勇気を要した。活動の中では英語圏の方だと思って話しかけたらロシアの方で、言葉が通じずに焦ってしまったりと予想外の出来事もあった。しかし、この出来事を乗り越えたことが、それ以降の活動で声をかける際の自信に繋がったのだと思う。
- ・「シンガポールでアンケートをしたかったら英語だけじゃなく、マレー語や中国語が話せなきゃダメだよ。ここには色々な人がいるんだからね」とお叱りを受け、世界は英語だけじゃないという当たり前の事を改めて感じ、自分たちはまだまだだなと感じました。  
※実際のつながりを得るのは物理的に難しいが、上記のような意識を持てたことに価値があると判断している。
- ・アフリカ青年の受け入れに関して、6月の準備の時点で「アフリカに帰ってからも活用できること」というテーマを決め、話し合いが進んだ。

- ・今回の JICA アフリカおもてなしプロジェクトでは、アフリカの文化や、コミュニケーション力の重要性を学ぶことができた。アフリカの人達は、お茶に砂糖を入れて飲むのが当たり前であるという文化を知った事、また、「アフリカの人達は、英語が通じず、フランス語しか通じない」と聞き、自分が上手にコミュニケーションを取ることができるか心配になったが、実際は簡単な英語が通じ、意志疎通ができ、嬉しかった事が印象的だった。
- ・いくらニュースなどで知っているといっても全くの異国で遠く離れているアフリカですが、今回の経験で少し身近に感じるようになりました。アフリカの方々に少しでもわたしたちの文化の良さや思いが伝わっていたらと思います。このプロジェクトに参加することで得られた経験はとても貴重で価値のあるものだと思っています。

#### <事業の内容と参加者数>

母国語を英語としない人々との交流を通して、多様な人々とふれ合う機会を得た。

- ・「青森県青年国際交流機構主催 内閣府「国際青年育成交流事業」地方プログラム」1・2学年 13名参加 (詳細は Chapter 1 Section 4 を参照)
- ・「JICA 主催 2018 年度青年研修「アフリカ (伝語)・アグリビジネス/アグリエコツーリズム」企画・運営」1・2学年 35名参加 (詳細は Chapter 1 Section 4 を参照)

#### エ 協業力

<数値指標>

- ・PROG-H「協働力」(前掲)
- ・本校 CAN-DO リスト「協働能力」の達成度 5.67。(詳細は Chapter 4 Section 3 参照)

### 4 進路選択

#### ア 選択基準としての勤労観

<生徒の感想>

- ・海外で起業することや、ビジネスを行う目標や社会貢献など様々な面からビジネスを考えることができた。飯田さん(在シンガポール起業家)は本当に自分で道を切り開いている方であり、最終的な目標として青森に貢献するというビジョンを持っていた。青森に貢献するという点において将来どのように地元に関わり、貢献していくかということを、実際の飯田さんの例をもとに深く考えることができた。この講演は自分の将来、進路なども改めて考えさせてくれた素晴らしい機会だった。
- ・私は昨年、学校で開催された野村證券の起業セミナーに参加した時から、世の中のためになる新しい事業を自らの手で始められる起業に興味を持っていました。今回、飯田さんの話を聞き、ますます起業への興味が深まりました。また、社会のために働くことが大切だと気付かされました。

#### イ 職業観の確立

<生徒の感想>

- ・私にはまだ、将来何をしたいかという明確なビジョンがありません。周りがどんどん将来の夢を見つけていく中で、自分だけ見つけられていないことに焦りを感じるが多くなっていました。そんな中で飯田さんの起業までの経緯を聞いた時、自分に足りていなかったことに気が付きました。飯田さんは何の事業を始めようか考える時、自分がやりたいこと・自分ができること・自分がやるべきこと、という3つの条件を大切にしているとおっしゃっていました。私はいつも進路情報の雑誌を漠然と眺めているだけだったような気がします。これからは、飯田さんのように大切にしたい条件を設定して、自分が本当に将来やりたいことを考えていきたいと思っています。

#### ウ 進路の現実吟味と試行的参加

- ・飯田さんの講演を聞いて、3つの大切なことを学びました。まず、夢の実現のために順序を踏んで着実に進んでいくことです。夢があるからといって他のことを見ずに進むのではなく、一見遠回りに見える方法でも、後から役立つことがあると思いました。次に、今の状況に満足して甘えることをせず、さらに上を目指していくことの大切さを改めて感じました。
- ・飯田さんは、青森から仙台、仙台から東京、東京からインドネシア、インドネシアからシンガポールへと、次へ次へと新しいところに挑戦していて、現状に満足せずに常に向上心を持っているなと思いました。私は、積極的に自分から行動するのが得意ではないので、これからの生活の中でチャレンジできる機会があったら、失敗を恐れて行動しないのではなく、積極的にチャレンジできるような強い気持ちを持った人になりたいです。



エ SGU への進学 (3月4日現在)

<トップ型>

東北大学	法学部	法学科
東洋大学	法学部	法律学科
東洋大学	ライフデザイン学部	健康スポーツ学科
法政大学	経済学部	国際経済学科
法政大学	社会学部	メディア社会学科
法政大学	文学部	心理学科
法政大学	文学部	心理学科
法政大学	法学部	法律学科
早稲田大学	文学部	文学科
早稲田大学	法学部	

<グローバル化牽引型>

筑波大学	生命環境学部	地球学類
東北大学	医学部	医学科
東北大学	工学部	材料科学総合学科
東北大学	工学部	電気情報物理学科
東北大学	理学部	化学系
東北大学	理学部	数学系
法政大学	デザイン学部	システムデザイン科
法政大学	理工学部	経営システム工
明治大学	理工学部	機械工学科
明治大学	理工学部	数学科
早稲田大学	人間科学部	人間情報科学科

同志社大学政策学部 教授 山谷 清志氏

## 総論

### 文部科学省SGHプログラムと青森高校

青森県立青森高等学校「スーパーグローバルハイスクール」(以下「青高 SGH」)の、2014(平成 26)年からの 5 年間の取り組みは、以下のような文部科学省のねらい(文部科学省ホームページ)をもとに、試行錯誤の結果、一定の成果を出してきた(下線は筆者)。

- 高等学校等におけるグローバル・リーダー育成に資する教育を通して、生徒の社会課題に対する関心と深い教養、コミュニケーション能力、問題解決力等の国際的素養を身に付け、将来、国際的に活躍できるグローバル・リーダーの育成を図る。
- 高等学校等は、目指すべきグローバル人物像を設定し、国際化を進める国内外の大学を中心に、企業、国際機関等と連携を図り、グローバルな社会課題、ビジネス課題をテーマに横断的・総合的な学習、探究的な学習を行う。
- 学習活動において、課題研究のテーマに関する国内外のフィールドワークを実施し、高校生自身の目で見聞を広げ、挑戦すること。その際学校の目指すべき人物像や具体的な課題の設定、学習内容は、地域や学校の特性を生かしたもの。

もとよりこうした文部科学省のねらいのすべてを達成することは難しい。地域の社会経済環境、地理的事情、歴史と伝統、地域社会が期待する高校の役割、保護者が生徒たちの将来に対して抱く希望などが、高校ごとに違っているからである。また、客観的に見て、こうした文部科学省の求める項目の達成を難しくする青森高校の事情もある。

まず、旧制中学時代から、青森高校では多くの卒業生が青森県外の大学に進学している。理由は、生徒が希望する大学が身近にないか、あっても入学定員が限られているからで、その段階で高大連携は大きく制約される。また大都市圏にある進学校と違って生徒がグローバル人材をイメージし、グローバル人材と交流することについては、地理的条件が心理的距離感になりハードルは高い。また、青森県内にグローバル大企業が存在しないので、首都圏、名古屋を中心とする中京圏、京阪神地域の高校生が持つグローバルな社会課題やグローバル・ビジネス課題の「リアル感」が乏しい。あるいはグローバル化している理科系の研究も、身近に理化学研究所や宇宙航空研究開発機構のようにグローバルに活躍している研究機関が存在しないので、文部科学省が言うグローバルな課題のイメージがつかめない。

そのため、文部科学省の言う SGH のイメージと、青森県・青森高校の SGH にはかなり乖離があると予想された。文部科学省が言う「地域や学校の特性を活かすこと」が、グローバル教育の制約条件になるかも知れない。逆に、大都市圏にある大規模大学の附属高校では、上記の SGH プログラムが求める項目、すなわち高大連携、大学が提携・連携している海外著名大学での短期留学、海外フィールドワーク、グローバル人材とのふれあいを通じた自身の将来像のイメージ作り、国際機関やグローバル企業との連携は容易であろう。

ただし、こうした否定的条件や消極的な事情を列挙したのは、「それでも」青森高校の SGH が成果を出したと言いたいからである。

## 5年間のプロセスのレビュー

初年度は企業のビジネス課題の探究、そのための英会話スキルアップが中心であった。ロジスティクス戦略を視野に入れた青森県産品の販路拡大や、青森県への海外観光客誘致のためのビジネスモデルの提案は、青森高校生の生活実態から見ると難しいことは懸念された。もちろん SGH プログラムに着手したばかりではアウトプットも出ないし、その中で結果を求めるのは時期尚早であった。5年経った今から振り返ると「手探り」だったのである。

2年目以降は具体的な姿が現れた。海外研修、外国人留学生との交流、フィールドワーク、青高×JICA プロジェクトなど、多様な取り組みを展開したことの成果が具体的に現れた。たとえば実用英語技能検定、GTEC、TOEIC などで数字が出始め、外部から成果を確認できる部分が増えた。内容に関しても、授業参観では SGH 参加の生徒には意欲が感じられたし、生徒の自己評価・感想を通じて教育成果の確認もできるようになってきた。

とくにプログラム実施の途中で活動方針の修正、新たな取り組み、教育の深化・内容充実が試みられたことは注目に値する。たとえば講演会の座学だけでは学習成果が出ないのでワークショップを導入したこと、アフリカの非英語圏の人々との交流による体験（フランス語に対する良い意味での戸惑い）、東北 SGH フォーラムと SGH 甲子園への参加(2017年)、内閣府主催の「国際青年育成交流事業」(2018年)への参加は、青高 SGH が次のステップに飛躍するきっかけになったと思われる。

ここで重要なことは、こうした教育プログラムは往々にして採択時に列挙された項目すべてをクリアし、達成すべきだと考える「コンプライアンス」主義になるが、そうならなかったことである。コンプライアンス主義は、問題が多い。ともすれば減点主義になり、「あれも、これも」求めるので、結果としてすべて中途半端に終わることはままある。こうした SGH のような教育プログラムは長所を見る、よい所を伸ばす対応でなければ成功しない。そこでこうしたプログラムは、モニターを続け、褒めながら改善していく中で PDCA(Plan Do Check Act)を続ける必要がある。もちろん生徒にとっても、3年間だけを切り取ってみるのではなく、その後の人生に好インパクトを及ぼすようにすることも必要になる。求められるのは、長所や得意分野を伸ばす加点方式である。

それでは青高 SGH を観察して感じた長所は何であろう。以下でそれを考えたい。

## 各論

各論として二つの項目、すなわち目標の達成度、プログラムの有用性に分けて、青高 SGH の活動をレビューしたい。

### 1. 目標の達成度

達成すべき目標として考えられるのは、三つ考えられる。

① 社会的問題を認識し、自ら課題を設定する能力を育成することができたか。

いわゆる課題発見力であり、現実や事象の中に隠れている問題点やその要因を発見し、自分なりに解決すべき方向を設定する力である。

現在日本の 70 以上の大学にある政策系学部では、こうした問題認識力、課題設定の力に早くから着目し、入学後の初年次カリキュラムに Project Based Learning(PBL、問題解決型学習)、アカデミックスキル(AS)教育、アクティブ・ラーニング(AL)として導入している。慶應義塾大学、中央大学、立命館大学、関西学院大学、南山大学、関西大学、そして同志社大学の7大学政策系学部長懇談会では、7大学すべてで PBL、AS、AL 教育の成果は出ており、積極的に「力が良い」学生を輩出してきたと認識している。教育効果が出ているのである。そして、これらの教育を大学入学前に青森高校が SGH として実施していることは、注目して良いだろう。

この教育を受けた生徒が大学に入学すれば、高大連携が結果として実を結ぶ可能性は高いし、大学側としてもいま以上に内容の濃い講義、初年次教育が可能になるので大歓迎である。ただし、高校と大学との接触が少ないため実態を把握できないのも事実である。この点は、国立大学、公立大学、私立大学の教員が共通して持っている悩みでもある。

そこで今回、青森高校のSGH担当教員が作成した授業マニュアルに注目したい。このマニュアルは大学で実施しているPBL、AS、AL講義の教員用マニュアルとしてみると、非常に充実している。大学教員がこのマニュアルを前提に初年次教育を行えば、大学初年次教育の学習効果が高まるはずである。マニュアルが何らかの形で公表、公刊されれば、高大連携に貢献すると思われる。

## ② 企画力を育成できたか。

この問いに対する答えは青高SGHゼミの報告会で知ることができる。2015年2月10日の報告テーマは「青森経済に“いっぱい”の光 ～ラーメン“一杯”が青森を変える～」、「青森市駅前商店街活性化による地域再生」、「肥満 ～短命県とともに肥満県も脱却！？ 青森県の現状と対策」、「Blue Forest (仮) ～2人の愛で再開発～」、「カップラーメンで短命県返上」、「青森県の経済活性化～愛してます、青森～」、「青森県のゆるキャラがゆるキャラすぎる件について」であった。

それが1年後の2016年2月10日の発表会では、『12月の観光客の獲得～ビーチで冬の青森を熱く～』、『青森の観光客をツアーで増やす～君をのせて青森発、未来行き～』、『もっと熱くなれよ！高校生と学ぶ「難民」』、『グローバルアップル～安心して下さい。青森県産ですよ～』で、グローバル的思考が自発的に出ている。要するに1年で修正が見られたのである。

なお、企画力は研究テーマを発見する能力と重なり、自発的な学習と学習意欲の継続に欠かせない。そのためProject Based Learningでも不可欠の能力であると考えられている。その際、企画の持続可能性、組織(教室)内での他の生徒の承認、企画を関係者全員にプレゼンテーションする能力の開発・発展によるアカウントビリティの向上、企画の持つイノベーション創発機能が求められる。企業や行政機関、研究機関でもこの企画力が求められているのは周知のとおりであるが、高校時代からこの企画力を身につけている生徒と、従来型の教育(特に大学受験教育)の生徒との差が大きいのもまた大学教員としての実感である。それは、決まった答えを能率的に探し、与えられたテーマを効率的にこなす従来型の能力よりも、良い意味で「尖った(sharp)」アイデアを事業化したり、研究テーマに昇華したりする能力を求める、時代の最先端の要請に対応できることを物語る。

## ③ 理論と実践を融合する力を育成できたか。

理論と実践を融合する力とは、言い換えると「机上の空論」「畳の上の水練」を避ける力である。現場の制約条件に妥協しないパワーでもある。高校の教育現場だけではなく、官公庁、高等教育機関、研究開発の実験機関、医療機関、福祉施設、外交政策などでも求められる重要な力である。

2016年頃から日本の中央政府や地方自治体で流行しているEvidence Based Policy Making、Evidence Based Evaluationは、この力の一面を語る言葉である。もちろん、このエビデンスは数字に限定される情報だけではないし、数的情報を処理する能力だけでもない。たとえば、フィールドワークやインタビューによって得られる情報はとても重要になる。青高SGHがフィールドワークやインタビューを入れたのは、大切なことである。そしてフィールドワークやインタビューでは、英語や日本語でのコミュニケーション能力も必要になる。SGHで培った実践志向の学習で補強された力は、将来さまざまな場で効果を発揮するであろう。

なお、③の成果だけでなく、①課題設定力、②企画力の成果も客観的に確認できる方法として、「CAN-DOリスト」は大いに参考になった。このリストは論理的思考力、情報処理能力、批判的判断能力、発進力、協働能力の5分野に分かれているが、学びの深さを知るためのSelf-monitoringとして有益であるだけでなく、部外者が青高SGHの実態と進捗状況を知り、全体としての成果を把握する上で有効なツールになっている。青高SGHがCAN-DOリストに着目した功績は大きい。

## 2. プログラム(事業)の有用性

大都市圏とは違う社会環境におかれている青森高校の現状を前提としたこの SGH プログラムの有用性は、すでに総論の「文部科学省 SGH プログラムと青森高校」で一部触れている。そこで、以下では別の視点でプログラムの有用性を検証したい。

### ④ グローバル人材育成の観点。

日本社会、そしてアジア、さらに地球全体で経済や社会活動がグローバル化の影響を受けていることは否定できない事実である。ただし、それが見えるかどうか、理解できているかどうかが重要で、見えて理解している人をまず「グローバル人材」と呼ぼう。ただ、グローバル人材とはそれにとどまるものではなく、積極的に、前向きにグローバル化に対処できる能力を持つ人を本来の「グローバル人材」と呼ぶ。

したがって、グローバル化とは外国人留学生を招いたり、外国人観光客を招いて地域振興の梃子にしたりするだけの話ではない。たとえばスーパー・サイエンス・ハイスクール(SSH)との関係で、いまだ研究段階である新しいエネルギーの研究と実験の施設、国際熱核融合実験炉(International Thermonuclear Experimental Reactor :ITER)を考えてみたい。その建設地が、青森県六ヶ所村ではなくフランスのカダラッシュに建設されることが2005年6月決定され(ある意味で外交的敗北)、青森県の六ヶ所村にはその関連施設が建設された。このITER計画の経緯をグローバルな視点で認識し、将来に役立つ記憶として持つのも「グローバル人材」であろう。なお、ITER計画とその青森県版の青森県量子科学センターに関わり国際的な議論ができる人材は青森県庁職員に在るが(青森高校卒業生)、この人はいわゆる「文系」である。ここに文理融合型の人材をグローバル視点で育成する意義がある。改めて、この外交案件が地域(青森県)の将来構想に直結すること、そして「文系」の業務活動に「理系」のマインドが必要であることも記憶するべきかも知れない。「文理融合型グローバル教育」がなぜ必要なのか、納得できる説明ができるからである。

なお、ITER 計画とその本質が似た政策は、8000 億円を超える予算を想定し、岩手県内陸部に巨大な施設を建設する International Linear Collider 計画(岩手県)がある。「文理融合型グローバル教育」は、青森県や岩手県だからこそ必要なのかも知れない。

### ⑤ Society5.0 の社会で求められる人材育成の観点から。

周知のように Society 5.0 は、内閣府の第5期科学技術基本計画(総合科学技術・イノベーション会議)、総務省「地域力強化プラン～Society5.0 時代の地方」、そして文部科学省「Society 5.0 に向けた人材育成に係る大臣懇談会」の「Society 5.0 に向けた人材育成～ 社会が変わる、学びが変わる～」など、日本の政府中枢から発信されたキャッチフレーズである。その基本には「日本のどこからでも世界とつながる」、「日本のどこでもサービスを利用できる」と言われる発想があり、少子化と高齢化で崩壊しつつある地方のコミュニティをなんとか維持したいと Sustainable Development を考えている。そのための人材育成のヒントが Society 5.0 である。

ただし、Society 5.0 が具体的方策、施策、事業を提示しているわけではなく、目指すべき目的と方向性が示されているだけである。①社会的問題を認識し、自ら課題を設定する能力を育成することができたか、②企画力を育成できたか、③理論と実践を融合する力を育成できたか、これらの問いを導く指針、これが Society 5.0 であると言ってよい。

そこで SGH と SSH 両方の指定を受けた青森高校が注目される。ローカルな課題をグローバルに考えるキャパシティ、文系のマインドでサイエンスをマネジメントする工学的能力(PDCA : Plan Do Check Action はその代表)、これら2つを持つ若者が東京一極集中のリスク、過疎地生活サービスの確保、防災(国土強靱化)、医療、外国人対応、農業生産、交通弱者の克服、人的資源の消耗につながる働き方の改革などの課題に取り組むのである。青高 SGH から Society 5.0 はこのように再解釈できる。

Society 5.0 のイメージを良く理解できる世代がいまの高校生かも知れず、とくに SGH と SSH の両方を経験した青森高校がモデルになるはずである。何よりも、この 18 歳は有権者でもあることが大きい。

### おわりにー全体の総括

SGH とは受験のための偏差値を上げる教育プログラムではない。物事を正しく考える作法を身につける、その考えを他の人に正しく伝えるために、自ら探究し自ら成長する態度を身につけることである。それは青森高校の綱領「自律自啓・誠実勤勉・和協責任」でもある。もちろん、この姿勢は大学に進んでからも重要である。

文部科学省の SGH プログラムそのものについては、大学のアドミッション・ポリシーの実践と大学の自己点検・自己評価に関わる経験から、積極的なプラス評価をしたい。理由は SGH プログラム指定高校から受験してくる生徒が入試の面接で好印象を与えているという事実である。好印象の判断規準はまず大学の歴史、学部のカリキュラム、興味深い講義科目、大学卒業後の進路など詳細に調べていること(事前調査)、その事前調査をもとに受験を決めたこと(合理的な判断)、それを面接担当大学教員に対して明晰に伝達できること、この 3 つである。もちろん、こうした 3 つが大学入学後のカリキュラム・ポリシーに積極的に反映され、卒業後のディプロマ・ポリシーに直接結びつくことは間違いない。附属高校でなくても高大連携をうまくとる可能性が、ここに存在している。

それが最後に一点、付記したい提言につながる。大都会にある大規模私立大学附属高校との差別化を意識したらどうかという提言である。たとえば 2015 年に SGH に指定された某マンモス大学付属高校は、大学が協定を結ぶドイツ、アメリカ、EU などの海外大学への派遣と模擬講義受講、パリで開催された「OECD 東北スクール(文部科学省復興教育支援委託事業)」への参加、OECD 本部開催の国際会議で 2030 年の教育をイメージした新しい学校案の英語でのプレゼンテーション、大学教員に対する活動報告会など、積極的に行っている。しかし、青森高校がいまそれと同じことをする意味があるとは思えない。なぜならこれは、20 世紀末に流行した「国際化」「国際交流」の延長線上の思考だからである。地域に根ざした独自の視点を欠いたまま外国に出て行っても、ただの観光旅行で終わってしまう。コミュニケーションスキルとディベートの能力を身につけても、相手に話す内容がなければ語学研修で終わる。

それでは 21 世紀のいま、何が求められているのか。

この問いの答えには、東京中心の視点ではたどり着かないだろう。なぜなら、日本が直面する深刻な課題は、根源的な問題に直面した人の目、本当に困っている人の目にしか見えないため、好景気で人口が増えている大都市では顕在化しないからである。いわゆる「中央(center)と周縁(periphery)」の思想的課題である。そこでもう一つ周縁(periphery)の青森は別の視点、「青森のレンズ」でグローバルな問題とローカルな課題を見る必要がある。そして実は、青森高校 SGH は、「青森のレンズ」を作る作業だったのではないか。

5 年間見てきた結論として、21 世紀の日本を再構築するアイデアのきっかけに青高 SGH になるかも知れないと考えている。

### 城西国際大学経営情報学部 客員教授 神田 正美氏

#### 1) 目標の達成度

初年度である平成 26 年度は、「グローバル社会・グローバル時代」とは何かを生徒に認識させるために、様々な業界関係者の講演を聞くことからスタートした。前例がないだけに具体的目標は掲げられなかったのは、当然である。しかし、3 年目からは、選抜された特定の生徒でなく、学年単位での全員参加型の SGH 活動が定着して、最終年度まで遂行したという特徴がある。

学年毎の目標は、学校側が方向性を予め決めて立てるのではなく、生徒がグループに分かれて、グループ毎に地球環境を含む社会問題等を討議し、目標を立てて、解決策等を提案するために、全員が各々の役割を全うし、まとめてきた。これは称賛に価する。5 年間サポートしてきた先生方を始め関係者の苦勞の賜物である。

一方で、CAN-DO リスト等を使い生徒自身の自己評価を数値化して、目標達成の評価をしてきたが、素朴且つ純真な東北人である生徒達の自己評価は謙遜しているもので、余りあてにはできない。活動 5 年間の中で全員異動を経験している先生方には、正当な評価を求めるのは難しいと言わざるを得ない。小職を含めた SGH 運営指導委員は、幸い卒業生を含む SGH 活動を 5 年間定点観測の形で年度毎の生徒達の成長を第三者として観察してきた。

生徒達の企画力や課題解決に向けての実行力は間違いなく、年々向上しているが、各テーマ設定や解決策は、実社会に携わっていないため疑似体験型のものであり、真に行動し解決したことにはならないので、自己評価を求めるのは酷だったかもしれない。また、この活動を通して、どんな高度なスキルや能力が備わっても、行動が伴わなければ成果には結びつかないのである。

青森高校の SGH 活動は、現在様々な企業が業績等目標達成に向けて重要な能力であるコンピテンシーが身に付いたことを第一に挙げたい。コンピテンシーは目標に向けて行動していく動機付けとなる。参加した全生徒がテーマを共有し一人として欠けることなく、情報収集、対人理解、チームワーク、リーダーシップ、自信、柔軟性等の能力が身に付いた。今後、大学生を経て、社会人としてとるべき行動指針までもが自然に身に付いたのではと料する。

グローバル社会において、益々変化し複雑化していく環境の中で、行動していく動機付けとなるコンピテンシー能力が参加者全員が備わることは SGH が目指す目標を達成したと解釈したい。

## 2) プログラムの有用性

全生徒参加型を貫き通した青森高校の先生方を始め本プロジェクトサポート関係者の努力に関しては、教育者の一人として、今後こうあるべきと関心致した次第です。先生方がプログラムを事前につくるのではなく、ヒントになる資料を提供するだけで、グループ分けされた生徒達の自主性に任せたテーマ設定方式を崩さなかったのは非常に良かったと思われる。その後、グループの中で役割分担し、調査（主に聞き取り調査）、関連情報収集、分析、まとめ、発表を毎年繰り返して実行してきたわけであるが、年々準備から発表に至るプロセスの質が向上してきたと感じられた。

Society5.0 や Industry4.0 と言われる時代が到来して、我々生活者の周りにはスマホや様々なニュース媒体を通して膨大且つ大量の情報が、中にはフェイクニュースまで、正誤判断のつかない情報までもが Push 型情報として入ってくる。これらの情報の分類・分析を全て AI に任せるのは間違いである。情報活用者自身が自ら膨大な情報から必要な情報、中には対面式での聞き取り調査情報等を通して、精度の高い情報の中から分類・分析していく Pull 型情報でなければならない。AI はオールマイティではなく、手段にしか過ぎず、価値を創造するのは人間である。

今回の青森高校 SGH 活動は、情報を待ち受けて入手するのではない。自ら取りに行き、不十分ならば、更に必要な情報を取りに行くことが当たり前の作業になっている。また、新しい時代では、これまでとは異なる新たな価値創造が必要で、本活動は重要なカギとなる Communication 能力が併せ身に付いたのではと思わせる。価値創造は、過去例のない高効率性と新たな付加価値が要求される。企業活動のビジネス・プロセスは、正味作業、付帯作業、無駄な作業から成り立っている。新時代においては、先ず無駄な作業を徹底排除し、次に付加価値を直接は生まない付帯作業を最小限に絞り込み、付加価値を生む正味作業に集中することで、競争力ある価値創造へと導くことができる。無駄な作業と付帯作業を排除していく役割は AI に任せて、人間が知恵を絞り正味作業の領域を広げ深めてこそ、Society5.0 が実現する。

青森高校の SGH 活動推進に向けた数々のプログラムは、目先の 1、2 年間では効果が表れにくいと思われるが、本活動に携わった生徒たちが、社会人となり、不確定要素の多い時代において、身に付いた柔軟性、Communication、チームワーク、情報収集、発表力、説得力等がきっと役に立つと思料する。

はじめに

スーパーグローバルハイスクール（以下、SGH）制度は、変化が激しく多様な現代社会の様々な課題に関する関心をもち、コミュニケーション能力や問題解決能力等の国際的に要求される素養を身に付け、将来国際的に活躍できるグローバル・リーダーの育成を図ることを目的として設けられたものです。そこでは、先行するスーパーサイエンスハイスクール（SSH）の成功を基盤としつつ、より横断的・総合的な学習や探究的な学習が求められています。青森高校は、本制度のスタートした2014年度に応募し、第1期の指定校として認定されています。なにしろ、まったく新しい構想に基づいた研究指定校であり、この5年間は試行錯誤の連続だったと思います。私も年に2回程度ではありましたが、運営指導委員の一人としてかかわらせていただき、青森高校のSGH研究の進展に合わせて、たくさんのごことを学ばさせていただいたと感じております。

具体的な体験やリアルから立ち上がる新しい学び

本校の5年間の事業の変遷を見てみると、最初の2年間は「講演会」が中心でした。そのテーマは、分野で見ると国際理解とビジネスであり、「グローバル人材とは何か」という問題意識とビジネスの世界での仕事の仕方（ビジネスモデル）を参考にしたいという思いを読み取ることができます。3年目以降は、「講演会」はなくなり、「発表会」、「ワークショップ（以下、WS）」、「フィールドワーク（以下、FW）」が中心となってきます。2020年から年次開始される学習指導要領の基本構造の"input"、"process"、"outoput"で考えると、最初の2年間の「講演会」は、まさに"input"の期間であったのだと思います。新しい情報を、「知識」だけではなく「思考の様式」まで含めて、「学び」の段階だったのだと思います。その中で、実際に効果的だったもの、またそうでなかったものを仕分けし、「input」を積み上げていったのです。これらはやはり必要な発達の段階で、青森高校SGHの基盤をなしていると思います。

それらの積み上げの次の段階として、WSやFWが位置付けられてきます。そもそもWSは、最近こそよく聞かれるようになりましたが、昭和の時代にはほとんど聞かれなかった概念です。WSは本来、参加しながら学ぶ、体験しながら学ぶという活動と自らの学びの新しい関係構築の概念です。FWも本来、その現場（具体的な自然や現実、現象など）を実際に訪れ、直接観察を通して自ら学びを構築していくことを志向するものです。これらは、文字や記号による既に抽象的に整理された概念から学ぶのではなく、そのもっと前の概念化されていない具体や現実から概念をつくりあげていくという学びなのです。ですから、そこには「思考力」を育成することができる大きな可能性があるのです。これらは、"process"の学びであり、さらに必然的に"outoput"へつながっていく重要な契機なのです。

このような「新しい」学びの形態は、実はSGHやSSHでは多用されています。それによって、生徒の中には自然や社会の中から問題を発見（設定）する力や解決のための見通しや調査・実験の企画・計画を立てる力などがしっかりと育っていくことになります。そしてそれらは、必ずしもペーパーテスト型の学力ではなく、もっと潜在的で基盤的な学力として、長期記憶の中に養われていくものと考えられます。生徒たちには、このような新しい学び自体が21世紀型の学力であるという「メッセージ」が伝わってほしいと、私は切に思っています。

Local に立脚してはじめて成立する Global の力

青森高校の生徒の皆さんには、優しく礼儀正しい印象を持っています。別の言い方をしますとおとなしく、積極さに欠けるということになるかもしれません。しかしながら、私はこれは、この地



に生まれ育まれてきた一つの「よさ」だと感じます。無理をして、わざわざ都市部の多くの生徒の特徴にあわせる必要はありませんし、ネガティブな感情を持つ必要もありません。多様性の時代、「平均的」なものではなく、地域性を生かした、自分の個性を生かした「オリジナル」な生き方を模索していただきたいと感じています。そして、その可能性は生徒たちが自分たちで設定した「課題」の多様性にもうかがえるように思います。

それから、本校で作成した「CAN-DO リスト」で見ると、「発信力」や「協働能力」は伸張したが、「論理的思考力」、「情報処理能力」、「批判的判断能力」はあまり伸張が見られないということでしたが、これは本校の特徴というよりも、他の SGH 校も含めた大きな課題だと考えています。前者の能力を広く「表現力」、後者の能力を広く「思考力」として考えますと、IEA-TIMSS や OECD-PISA などでも弱いと指摘されてきた「表現力」に関する能力が伸張したというのは、大きな成果だと思います。この国の大きな課題への一つの「解」が提示されたということがいえるかもしれません。

次の課題は、学力の本丸である「思考」の能力育成です。もちろん両者は深く関わっておりますので、先述した WS や FW の学びを、しっかりと問題解決、探究の過程に位置づけ発展させていくということだと思います。そのために、ポスト SGH でどのような授業改善が必要か、どのようなカリキュラムの修正が必要かということがポイントとなります。これからの Society5.0 の時代は、AI や IoT が普通の時代になってきます。Global は当たり前前の時代です。しかし、だからこそ「青森」という Local を大切に、自らのよって立つ基盤として意味づけを確認し続けることがますます重要になってくるのだと思います。Think Globally には必ず Act Locally が必要なのです。そしてこのことは、実は私が青森高校と関わらせていただいて改めて確認したことでもありました。

青森高校の先生方、本当にお疲れ様でした。そして、青森高校の生徒の皆さん、郷土に誇りをもったグローバル人材として活躍されることを期待しております。

## 岩手大学 准教授 木下 幸雄氏

### 目標の達成度

「社会的問題を認識し、自ら課題を設定する能力を育成することができたか。」

生徒は SGH 事業のプログラムへの参加を通じて、ニュースをはじめ、社会的課題の解決に取り組む実践者の経験談、異文化にかかわる情報などが刺激となって、通常のカリキュラムでは気づくことのできない社会的問題に関心が向くようになったものと推察される。また、グループワークを通して、個人の発想を超えた、ユニークで深みのある課題設定ができるようになってきていると評価できる。

「企画力を育成できたか。」

各種フィールドワークや外国人の受け入れ（おもてなし）の体験などの実践的取組は、生徒自らの企画力を引き出し、それを向上させる機会として有用であったものと評価できる。企画通りに進まなかったことに直面した体験を含めて、「実際にやることで学ぶ」という学びのプロセスが顕著に現れている。

「理論と実践を融合する力を育成できたか。」

理論と実践の融合は必ずしも容易にできることではなく、これ自体が SGH 事業の目標設定として高度すぎるものではなかったかと思われる。また、本 SGH 事業で取り組むこととなった各種の実践活動に対して、適切な理論を選択することも極めて難しいことであり、生徒・教員には限界があったのではないかと考えられる。

プログラム（事業）の有用性

「グローバル人材育成の観点から」

本 SGH 事業で展開されてきたグローバル人材育成の方法論及び教員による実践性は、特筆すべきものである。PBL（Project Based Learning / Problem Based Learning）を基本とした本 SGH 事業での成果・蓄積は、グローバル人材育成が期待され、また PBL 教育の経験が乏しい地方の高等学校、大学にも極めて有用であるものと評価できる。すなわち、このような他の教育機関は、本 SGH 事業での成果・蓄積を共有し、自らに対する有用性を引き出す機会を検討すべきであろう。地方であってもグローバル人材育成を進めるのに、大きな力となることが期待される。

「Society 5.0 の社会で求められる人材育成の観点から」

本 SGH 事業では、"Society 5.0 for SDGs"を意識してプログラムの発展を図ろうとしていることがうかがえる。ただし、Society 5.0 はデジタル革新がそのベースとなるが、文科系の SGH では技術的アプローチには限界があると思われる。"Society 5.0 for SDGs"の人材育成に向かうのであれば、文理融合のプログラム、例えばデータサイエンスと人間科学、として再編成を模索することも必要であろう。

## 和歌山大学経済学部 准教授 竹内 哲治氏

近年、社会問題の解決を踏まえた実学を通じた修学が期待されている。特に、アクティブラーニングや PBL は高等教育で取り入れられようとしている。しかしながら、黎明期というのが現状であり、手探りで開発が行われていると言えよう。青森高等学校の取り組みも、地域からグローバルへとさまざまな問題について議論され問題設定やテーマの絞り込みなど課題が残るなか非常に挑戦的で、そこで学ぶ学生ばかりか教育プログラムの開発者及び運用者にとって、大変有益であり、財産となる教育投資である。これは青森高等学校ばかりでなく他校、ひいては全国に発信できると確信される。

本プログラムの目的は、自律自啓を高校の綱領とし、問題提起の時点でも謙虚に自らが無知であることを自覚し、いろいろなことの探究から始まり、周りからの制約に捕われずに解決へのプロセスを学生自らが進めること、を知るということにある。加えて、グループワークでは、和協の精神に従い責任をもって遂行する学生の姿は大学レベルでも難しく、高等学校で学ぶ機会を与えることも目的に含まれており非常に有益である。

講義形式の授業や受験勉強だけでは分からない社会問題を自らが興味を持ち探究することが必要であることが教員から提示され、探究方法やクリティカルな見方が学生に齎された。一度提示されると、その後は自らが社会的問題を認識し、課題を設定する過程を覚えたと思われる。初年度は地政学的な産業構造が議論の中心で統計を駆使した大きな意味でのサプライチェーンやマーケティングの分析がゴールに設定されたが、高等学校で制約や知識不足などから改善が行われ、模擬国連などの PBL に変更し学生の多くがイメージしやすく興味をもって取り組める内容が的を得たものとなった。その結果、闊達な議論と報告発表が行われたとも思われる。仮想ユースフォーラムの開催準備から外部団体の支援を受けての運営に至るまでを通して、企画力の涵養には非常に役立つものである。

反面、分析能力や調査方法については国際的に要求されている数値を高等学校に求めるのは限界があることが浮き彫りとなった。その点においては、実務的な問題解決の能力は養えたものの、社会

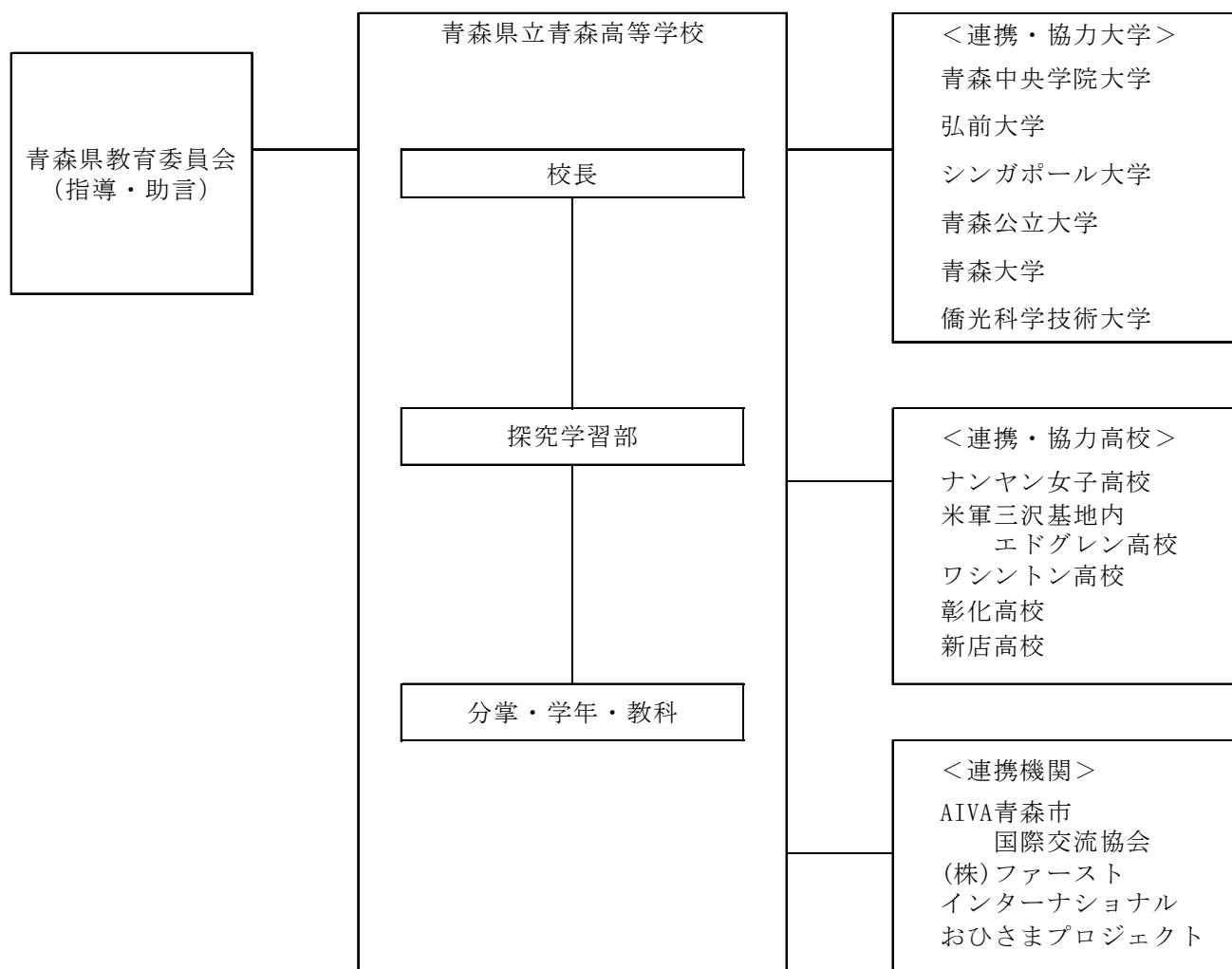
問題を理論的な側面から捕らえ分析し、実践に結び付けるには難しい一面がうかがえる。高等学校では社会問題の理論的を教える時間的な制約もあると思われる。さらに、テーマが拡がり過ぎると議論も希薄になり、範囲を決めることや対象の設定は必要と思われる。この点については、教育プログラムの運営が自由である反面、バランスをとることが難しいことが指摘されている。

最後に、本プログラムは非常に有用であり、これからも継続的に運営されることが必要であることを強調しておく。地政学的な問題から地域という見方が多くから寄せられるが、IT やより広い意味での社会へのテクノロジーの融合は現状の変革をもたらしかねない。そのためグローバルな人材育成は地域でも重要であり、都市部でなければならないというのは全く意味をなさない。その点を踏まえて、昨今の Society5.0 が話題となっているわけで、本プログラムがその趣旨に合った内容も加えてより進化することが望まれる。



## **Chapter 7**

### **資 料**



## 業務

- (1) 探究学習部…研究計画全体の企画・進行をチェックする。  
 (構成) 教頭 (委員長)、教頭、探究学習部主任及び教員 6 人、教務主任、進路指導部副主任、1～3 学年 SGH コース担当教員、事務主幹、事務職員、SGH 事務補助員、SSH 事務補助員
- (2) 探究学習部…以下の各部門について中心となって業務を行う。  
 (業務内容)
- ・企画：SGH 事業全般における企画を行う。
  - ・外部連携機関との連絡調整：大学、研究機関等との連携や折衝を行う。
  - ・新教育課程開発：教務部と連携して教育課程及び学校設定科目で使用する教材の開発、講座の企画準備、評価などを行う。また、研究授業公開などの企画も行う。
  - ・課外研究開発：課外研修の企画、準備、評価などを行う。  
 海外連携校との協働学習の計画を立案する。
  - ・広報：事業全般の広報やホームページ作成などを行う。
  - ・記録：事業全般の記録及び報告書の作成を行う。
  - ・評価：学校評価やアンケート実施による調査・分析・改善の提言を行う。
  - ・経理：事務部と連携して予算案を取りまとめ、執行、執行記録、書類の整理を行う。

## 2 生徒の研究テーマ

※ 太字はロジスティクスに直結した研究テーマである。

### 平成26年度

青森県の人口倍増計画  
未来の **ENERGY** を探せ！～青森だけのエネルギーを～  
青森の経済の発展を目指して!! ～お年寄りのたしなみは青森を救う～  
青森県の除雪問題について  
観光客倍増のための取組  
青森経済に"一杯"の光！ラーメン一杯が青森を変える!!  
青森県のごみを減らそう!! ～生まれ変わるゴミ～  
プロテオグリカンの可能性  
青森市の商業事情～駅前商店街はなぜ廃れたのか～  
青森県の観光地の PR  
青森の公共交通機関の利便性の改善  
青森県における少子化問題  
医師不足の実態とその対策  
除雪費削減と雪の有効活用について  
青森県の伝統工芸品について  
青森の商業の衰退  
浅虫の和菓子をハラル登録したらどうなるか  
治すだけじゃない！コミュニティーの場、病院  
雪を使った観光を知る  
青森県民のインスタントラーメンの消費とそれが及ぼす経済効果  
青森の子どもの肥満  
青森市の地震対策について  
B-1 グランプリで青森を活性化しよう  
自殺を減らせ～冬を満喫できる青森へ～  
青森の独立（研究中の新しい発電方法）

水素が与える幸福（水素の多様性、燃料電池車の可能性）  
青森県の魅力とは？  
青森の"入口"の活性化  
**Blue Forest** ～二人の愛で再開発～  
工藤パンのパンを他県に売り出すには  
青森の経済状況（スポンサー企業への調査）  
青森市のリサイクルの現状  
なぜ青森県は短命県なのか  
青森の人口減少を防ぐには  
青森県の観光～映画というメディアを利用した県 PR～  
天候から見る青森観光～雪の降る町青森に隠された秘密～  
新青森駅周辺に造るべき施設と観光への取組  
各所の観光客を増やすための取組  
青森県の過疎化  
青森県内の経済活性化法  
青森県の人口～なぜ青森県の人口は減少し続けているか～  
青森県の米問題について  
私たちの方言について  
震災に対する青森県の対応と人命救助  
青森の食を日本全国・世界に広めよう！  
青森県の観光産業～外国に向けたアピール～  
フィールドワークで得た課題の改善（観光について）  
青森の食の発信に向けて  
どうして青森県は短命県なのか  
冬に除雪する費用について  
青森県が短命である原因  
ゆるキャラ・ご当地キャラのもたらす経済効果

### 平成27年度

青森の冬を盛りあげようースキー場の盛上げによる観光客の誘致ー  
お土産開発大作戦ー外国人観光客誘致を目指してー  
青森県のごみを減らすためにーできることから始めようー  
駄菓子を売り込むー小さな魔法、子供の笑顔ー  
日本のゴミ問題ーゴミを減らすためにー  
駅弁による新青森駅の活性化  
リンゴで青森を元気にしよう  
青天の霹靂を売り出そう  
アウガの復興策についてー一人が来てくれるアウガにするにはー  
青森県の外国人観光客を増やそう

12月の観光客の獲得ービーチで冬の青森を熱くー  
運動不足を解消しようー健康寿命を延ばすにはストレス解消で短命県返上  
今後期待できる発電方法ー青森県のこれからー青森から全国へー青天の霹靂を知ってもらうためにー  
発展途上国への支援ー私たちにできることー  
自転車の交通安全ー未成年の自転車事故件数を減らそうー  
災害復興  
青森の観光の未来について考える  
青森県の観光についてー君をのせて 青森発、未来行きー  
青森を広告するーDo you know Aomori?ー

原発のこれから  
 短命県って本当に悪いことなの？—青森県の今と未来—  
 青森市と青森市の姉妹都市—姉妹都市との交流を深めるには—  
 青森県でグローバル高校生を育てるには  
 英語はSV マップもSV  
 青森の防災について考えよう—自助・共助・公助—  
 繋げよう—青森リンクネットワーク—  
 青森のお土産を全国へ—魅力を効果的に伝えるには—  
 青森県に観光客をもっと増やすには—経済活性化のために—  
 青森県の活性化—広告を用いて—  
 青森クリーンモデル都市計画  
 少子化の原因と私たちが考える解決策—日本とスウェーデン・フランスの違いから解決策を見出そう！—  
 青森県への観光客をどう増やすか—宣伝の大切さ—  
 いじめとマスコミの関連性—いじめを減らす報道とは—  
 日本の学力向上のために—現状と打開策—  
 難民支援への様々なかたち—高校生による、難民への支援—  
 観光客を増やすために—ねぶたをプロデュース。—  
 青森県の観光客を増加させるには—北海道新幹線開業によるこれからの青森県—  
 スポーツを通じた青森県の経済の活性化  
 「短命県は青森！」から脱却—青森県民の意識を変えるため—  
 シリア難民を救え！—私たちに何ができるか？—  
 青森県の地熱利用—火力依存の脱却に向けて—  
 世界の飢餓—私達ができる飢餓支援—

## 平成28年度

- 青森発グローバルビジネスモデルゼミ
- KAWAII文化×津軽こぎん刺し**
- 十和田湖冬物語を利用して外国人観光客を呼び込む
- 津軽塗りを海外に発信するための商品開発
- 県産品で海外進出
- 青森の民家にホームステイ。農村体験してみませんか？
- 古民家再生による地域の活性化
- 外国人観光客向けの日本旅館の提供について
- あおもりカシスをアジアへ
- 青森の珍味をシンガポールへ
- Incense stick of Aomori HIBA**
- あおもりの誇り～日本一のカシス～

永遠のごみ0—青森県のごみ問題について—  
 自然災害時に最善を尽くすために  
 SNSを利用した青森県の情報発信  
 自然を活かした観光業—一人が出ていく街から集まる場所へ—  
 呼び覚ませ青森の力—青森県の豊富な食べ物を活かして外国人観光客を増やすには？—  
 安心！クリーン！未来のエネルギー—青森だからできること—  
 現代の労働問題—ニートのいない社会を目指して—  
 日本の医療問題と解決策  
 短命県返上—食から健康寿命を延ばそう—  
 無農薬りんごの安全性—農薬は本当に危険なのか—  
 現代の日本の食事  
 世界へ日本を発信—クールジャパンで世界をホットに！—  
 飢餓から人々を救う—飢餓について考える—  
 地球再建プロジェクト—地球温暖化防止活動—  
 青森県から故郷県へ—田舎人の暮らしぶりを訪ねる旅—  
 けっばれ津軽弁  
 食で短命県返上—健康になるために—  
 学びの地「青森」—県に修学旅行生を呼び込むには？—  
 雪で健康づくり—Let's enjoy winter—  
 温泉で心も体もポッカポカ!!—まず日本国内から客を呼び込むためには—  
 鉄道むすめに萌えよう—下北地方の活性化—  
 高齢者の楽園へようこそ—第二の人生を青森で—  
 グローバルアップル—安心してください。青森県産ですよ。—  
 どんだんず？青森県！！—わんどの店でイメチェンすべし—

海外から見た青森県の観光地と外国人との交流について  
 世界に羽ばたく青森県産品！  
 青森伝統工芸品を世界に発信する世界に羽ばたく青森県産品！  
 青森の自然について  
 「津軽弁の魅力と可能性について  
 旅館・海扇閣でのおもてなし・和の魅力  
 祭りやイベントを通して青森を盛り上げる  
 工藤パンを海外に広めよう！！

- 情報工学・数理研究の世界ゼミ
- 天体に関連する未発見物や特徴についての研究

本当はおもしろい宇宙の理論について  
地学について掘り下げてみよう！！  
よりよい睡眠をするために  
頭脳王の考察ゲーム(NIM)の必勝法  
素数とそれに関する問題の思考

#### ■ 科学技術と社会・人間ゼミ

学校の IT 化  
軍用無人機を民間用に転用する  
生活支援ロボットの現状と展望  
学校の IT 化  
目覚ましロボット  
スマートフォンのソフトウェア開発について  
VR の活用方法について  
青森市の冬の雪の処理と利用について  
軍用無人機を民間用に転用する  
生活支援ロボットの現状と展望  
学校の IT 化  
目覚ましロボット  
スマートフォンのソフトウェア開発について  
VR の活用方法について  
青森市の冬の雪の処理と利用について

#### ■ 医療と生命ゼミ

献血の現状・問題点とそれらを打破する為の  
研究  
iPS 細胞の実用化と今後の期待について  
患者にとって安心な薬とは  
よりよい睡眠をするために  
医療のあり方と日本問題について  
青森の短命県の現状と解決策について  
県産食品の健康食を広めよう  
認知症について  
視力低下の原因と視力回復法の実践  
現在、死亡原因 1 位のガンについて  
りんごの成分のガンに対する効果的な影響に  
ついて  
私達が考える認知症の予防策  
青森県における生活習慣病の改善とその方法  
について  
健康意識向上で生活習慣病を予防しよう  
青森県の薬剤師事情  
青森県民の生活習慣と発ガン率の関係につ  
いて  
青森県の平均寿命を延ばす取り組みについて  
がんから生活習慣病改善のヒントを得る  
魚の栄養 DHA と脳について  
どうして出生前検査が結果的に中絶の増加に  
つながるのか？  
青森の子供の肥満率改善→生活習慣病予防→  
短命県返上！  
青森の生活習慣病と若者の予防策  
年代別のダイエット法の提案

美容と健康  
災害時救急医療の現状と課題について  
災害医療における患者のケアについて

#### ■ エネルギーと環境・共生ゼミ

最強の家を考える～省エネで快適に暮らすに  
は～  
最強の家を考える～木造建築と耐久性の向上  
エネルギーと共生～青森県の環境に合った発  
電～  
バイナリー発電と地熱発電  
地熱発電によって生じる熱水の利用について

#### ■ 農林水産業と自然環境ゼミ

じゃがいもを用いた燃料置換計画  
森林整備を基盤とした地球温暖化の対策  
植物の匂いがヒトに与える影響について  
植物の匂いが人体にもたらす効果  
植物を多方面に活用する方法  
昆虫食の普及とそれによる食糧危機の回避

#### ■ グローバル化する社会・政治・経済ゼミ

県経済活性・ロックフェスティバルの開催  
青森の特産品の販売方法について  
農業体験を通しての青森経済の活性化  
青森経済を活性化するためのプロジェクト研  
究  
出張型ねぶた祭りの開催に向けて  
資金の調達方法  
冬の青森を活性化させよう！  
雪を使った青森の活性化  
青森経済を活性化するためのプロジェクト研  
究  
ベイエリアの拡充～ウルトラマンを添えて～

#### ■ 都市と地方ローカルに生きるゼミ

バス交通の改善による青森の活性化を目指し  
て  
地域バスによる経済の活発化を促進させるた  
めに  
観光客を増やすための弘前城のあり方につ  
いて  
若者が持つ新町商店街に対するイメージの改  
善方法  
青森駅前に市民を呼び込む PR 方法について  
都市と比較した青森の「あたたかさ」の由来  
と展望

#### ■ 他文化共生と日本人ゼミ

日本人から見た宗教とは  
多文化共生について  
日本JPと中国CNの関係の変遷について  
グローバル化が進む中での青森県の在り方



- 教育と子ども・社会ゼミ
  - 現代の保育労働問題と待機児童について
  - あの日見た教育格差の現象を僕たちはまだ知らない。
  - 教室環境とその効果（仮）
  - 物質的環境と心理
  - いじめの実態といじめを予防する方法について
  - 不登校の現状を知り、不登校の生徒を減らそう
  - ゆとり教育について
  - これからの教育方法
  - 子どもの運動不足の解消のためには…
  - 子供の遊びが与える学力、体力への影響
  - 電子教材の実用化にあたっての問題解決案について
  - 青森県のキャリア教育の実態
  - 教育革新～世界との比較で向上を目指す～

## 平成29年度

- 青森発グローバルビジネスモデルゼミゼミ
  - Let's go go Aomori Cassis
  - 1/20 時間テレビ藍は地球を救う
  - りんご酢で health&beauty
  - 青森ヒバが持つシンガポールへのメリットについて
  - イギリストーストパッケージデザインについて
  - Tsugaru Vidro will protect you!
  - 外国産がのさばるさば市場に青森のブランドサバを！
  - B級グルメをシンガポールへ～黒石つゆ焼きそば～
  - 青森ねぶた祭りの囃子方を体験しよう！
  - 青森の外国人観光客数の増加のために
  - 健康志向女子のための自然・美容ツアー
  - 弘前雪灯籠まつりへの外国人誘客について
  - 弘前城雪灯籠まつりで冬の青森を活性化
  - SNSを使ったツアーで青森県の観光客増加を図ろう
  - 青森冬ツアーin 旅館について
  - 白神山地に観光客を呼び込む
  - 下北の活性化について
- 情報工学・数理研究の世界ゼミ
  - 宇宙移民とスペースデブリ
  - 量子力学と反物質～その利用法
  - ワームホールとタイムトラベル
  - 日常とかけ離れた物理学～特殊相対性理論～
  - 多方面から地震へアプローチ!!
  - 重力波観測と宇宙望遠鏡

## 他国の教育方法を取り入れて日本の学力向上を図る

- 人間と芸術・スポーツ・生活ゼミ
  - 日本色装飾の可能性 with 青森
  - インパクトのあるパッケージデザインを作ろう
  - 空き家を減少させるためのリノベーション方法
  - 青森県の小・中学生のスポーツ離れへの対策
  - 青森の運動・健康を盛り上げるためには
  - 青森県産食品で短命県返上
  - 県産食品×けの汁＝みんな幸せ
  - 音楽教育～教育番組における音楽の影響から考える～
- 超高齢化社会を生きるゼミ
  - 高齢者と地域のつながりについて
  - 運動面から健康寿命を延ばそう
  - 健康寿命を延ばして Paradise!!!!

## 黄金比について

### 比と角の"美"について

- ポアソン分布からみる商品開発
- 確率論を用いた人工知能の研究
- 確率微分方程式を用いて、株価予想をする

## ■ 科学技術と社会・人間ゼミ

- VR技術による空間の再現
- 新素材の利用方法について セルロースナノファイバー
- 新素材の利用方法について～LIMEX～
- 紙書籍と電子書籍の違い
- ヒューマンインターフェイスについて
- 生活に役立つアプリ開発

## ■ 医療と生命ゼミ

- iPS細胞の実用例と今後の展開について
- インフルエンザについて
- iPS細胞を用いた再生医療に関する研究
- 生活習慣病の対策とその認識について
- 医療技術の進歩と問題について
- 運動とストレスの関係について
- 生物を改変できる遺伝学とゲノム編集の現状
- アレルギーの実態
- 身体の硬さとけがの関わりについて
- 青森県の医師の充足状況と対策案について
- 医学部合格への道
- コーヒーを飲んで勉強すると、翌日の試験は点数が伸びる!?
- 生活習慣と髪の関係
- 体重の増加・減少
- シンメトリーとミラーリングによる効果

人の性格

「新世代が見つめる青森市の医療の今と未来」  
青森県の医療政策～他県・海外と比べて～  
青森県の糖尿病患者減少による平均寿命<sup>UP</sup>  
子どもの食習慣改善で生活習慣予防  
「青森県の医療状況について」  
グットヘルスダイエットプロジェクト  
内側からキレイを作るには  
認知症予防～記憶力 UP でできること～  
ダイエットにおける腸内フローラの役割  
ミドリムシの生態  
高校生の目と歯の健康について  
災害医療のあり方～多くの人を救うために～

■ エネルギーと環境・共生ゼミ

空き家を減らそう！  
発電フレンズ  
青森県における雪の活用と環境について

■ 農林水産業と自然環境ゼミ

芋を用いた燃料置換計画  
ミドリムシの水質浄化と最適濃度について  
Let's 家庭菜園  
ベジブロスの活用法とその効果  
身近な植物を利用した農作物の害虫対策

■ グローバル化する社会・政治・経済ゼミ

経済だけではない青森の人口減少  
りんごを使った経済の活性化  
スポーツ事業を開催して青森経済活性化  
農業体験を通しての青森経済の活性化  
青森・函館ツインシティについて  
弘前の歴史を生かした観光戦略について  
青森県産ヒバの全国・世界進出させよう  
八甲田の紅葉による経済活性化について  
青森駅の商店街の活性化  
冬の青森経済を活性化  
「♡青森新町活性化 Project ♡」

■ 都市と地方ローカルに生きる一ゼミ

地域バスの改善による青森の経済活性化を目指して  
もしも青森で民泊をしたら  
『しんまち商店街』に人を呼び込む為には  
青森市駅前商店街の活性化について

平成30年度

■ Global ゼミ

ダンボールの防音壁  
再配達問題  
災害時の対処  
青森の小麦の生産量の向上

■ 他文化共生と日本人ゼミ

別の観点から覗く宗教  
韓国が反日感情を持つようになった経緯について  
各国の親日政策をもとに親日について考える

■ 教育と子ども・社会ゼミ

幼少期の教育について  
習い事が学力に与える影響  
幼児教育における絵本と習い事の効果について  
他国の授業を取り入れて日本の学力向上  
FWの結果とそれをもとにした考察（学習意欲を高めるには）  
学習意欲を高めるには  
中学・高校時代における教育によるニートの減少  
収入の格差が教育格差に結びついているのではないか  
こどもの運動意欲と体力向上について  
理想の板書について  
学力面と生活面から不登校を考える  
不登校の原因と種類別の対処法  
小・中学校の不登校を解決するためには  
SNSにおけるいじめの現状とその予防  
被害者から最も遠いいじめ加担者の存在感  
感じ方や置かれる立場の違いによって生じるいじめ  
傍観者をいじめを止められる人に変える  
教育から見た、やる気

■ 人間と芸術・スポーツ・生活ゼミ

眠くならない学校改造計画  
音楽が人に与える影響について  
スポーツでのパフォーマンスを向上させるために  
油の吸収を抑えよう  
無添加・減塩で平均寿命 UP!  
日常の中の音楽

■ 超高齢化社会を生きるゼミ

高齢化とそれに伴う弊害  
介護士の労働状況と高齢者への虐待について

介護職員が夜勤時に感じるストレスの軽減について

青森を訪れる観光客を増やす方法

地域コミュニティの活性化

Stay in Aomori

生まれ変わる余剰

カラスによるゴミ散乱問題～回収方法の検討  
出張子ども食堂  
新町商店街の広告活動について  
あおもりカシスを広め隊！  
青森の木の特徴と活用  
ねぶたステイ  
多文化共生と宗教  
民泊で繋ぐ空き家と観光  
英語教育

#### ■ Miso Power in NZ

企業のスポーツチームによる青森企業の活性化  
あおもりチルドレン発育プロジェクト  
女性の労働格差  
青森と比較した世界各国の文化  
人類 VS AI  
青森県の観光と紅葉の関係について  
苔について

#### ■ ECOLOGY, ENERGY & ENVIRONMENT

ゼミ

セルロースナノファイバーの利用方法  
カメムシの研究  
シロツメクサの掃除用具としての可能性  
磁石の性質について  
物の回転  
原子力への正しい知識とイメージの関連について  
スターリングエンジンの改良  
身近なものでろ過しよう  
よく飛ぶグライダーについて  
透過性コンクリートの利用法について  
マイクロプラスチックに関する研究  
調味料で人工イクラを作ろう！  
ドロメの色覚について  
食用貝とマイクロプラスチックの関係について  
クマムシの採集と耐性の実験について  
生ごみを利用した家庭菜園について  
錯視による“ヤセ見え効果”について  
河川に関するシミュレーションについて

#### ■ MATHEMATICS, INFORMATION & INTELLIGENCE ゼミ

ビュフォンの針  
合同式 mod p  
微分方程式について  
カジノ法案設立による、ブラックジャックの勝率に関する研究  
トランプを使った確率  
スマートフォンアプリの研究  
特殊相対性理論について

#### ■ GOOD HEALTH & WELL-BEING ゼミ

現代人 vs ロコモ  
高校生が考える新しい「介護」～海外と比較してみる～  
陸上競技における怪我の予防とケア  
ダークチョコレート  
Let's 献血！  
音楽が胎児と妊婦に及ぼす影響  
少子化対策  
炭酸とスポーツパフォーマンス  
protect the body from UV rays  
熱中症対策  
視力回復  
Ke：ゼロから始める育毛生活  
ストレスの軽減について  
僕らの肩こり解消戦争  
睡眠の追求  
イヤホン難聴対策  
足が臭い人へ  
花粉症と身近な食品  
姿勢と肩こり

#### ■ Quality Education ゼミ

武道について  
地域とバスケットボール  
部活動と生活  
部活動が学力へ与える影響  
不登校を未然に防ぐには  
地方と都会の学習環境  
より良い授業とは何か  
家庭環境が及ぼす学力への影響  
アフリカに学校を建てよう  
性格に合った勉強方法

3 バーチャルユースフォーラム生徒成果物  
Chapter 3 Section 2 イ (2) の成果物の抜粋を次に掲載する。  
生徒は教員からの指示なしでこれらの資料を作り上げた。



# Youth Forum In Aomori

～Staff Manual～

2019.5.4(Sat)~5.8(Wed)

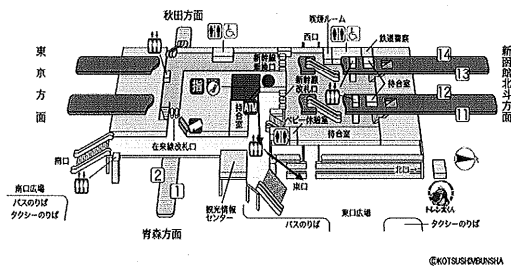
2-3

## 目次

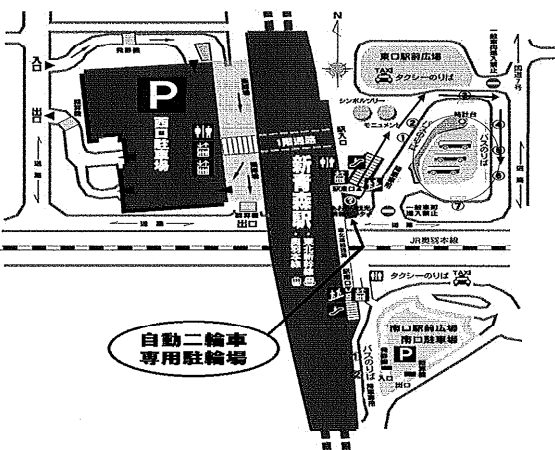
- ・ 全体日程表
- ・ 各部署マニュアル
  - 送迎バス、受付について
  - オープニングセレモニー
  - アイスプレイキング
  - ウェルカムディナー・フェアウェルディナー
  - ワークショップ
  - 自由外食のスタッフの動き
  - レクリエーションナイト
  - 遠足
  - 結果発表会
  - クロージングセレモニー
- ・ 緊急連絡先
- ・ 館内図
- ・ ホテルの部屋割り
- ・ 予算書
- ・ 外部発注書
- ・ 諸注意

### 送迎バスについて

【新青森駅構内図】

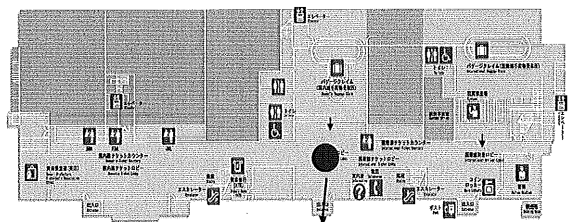


【新青森駅駐車場】

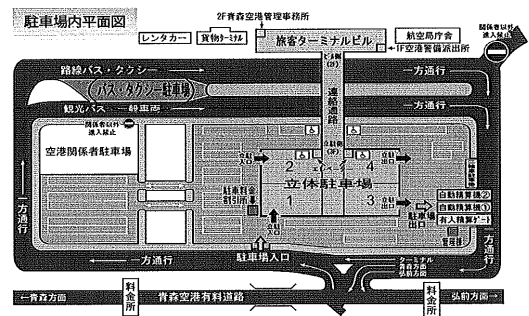


### 送迎バスについて

【青森空港構内図】



【青森空港駐車場】



(→) は誘導路、●は集合位置、○はバス地位者位置

- ・ 15～20分前には、集合位置(新青森駅は新幹線改札口、青森空港は国際線到着ロビー 上図参照)に集合すること
- ・ ユースフォーラム参加者を待つ人員を1人か2人を残し、最低一人はバスの停車場(上図参照)で、バスを待つこと
- ・ 誘導路を事前に確認しておくこと
- ・ お手洗いの確認をすること

## 送迎バスについて

- ・参加者を順次下記のシートにて確認し、そそい次第誘導を開始すること
- 【緊急時の対応について】
- ・電車、もしくは飛行機の遅延・欠航や、遅れがあった場合本部電話番号に連絡すること
- ・事故などが起こった場合も本部電話番号へ連絡すること(本部電話 017-742-223)

### 【参加者名簿】

5月4日青森空港 8:51		
Laos	Pradal Serey	
Malaysia	Abdul Razak Hussein	
Malaysia	Adnan Yaakob	
South Korea	Lee Kyung-sik	
South Korea	Kimsooja	
South Korea	Kim Yik-yung	
5月4日青森空港 13:15		
China (PRC)	Ran Geng	
China (PRC)	Beatrice Marshall	
India	Akbar	
India	Indira Gandhi	
Indonesia	Yvonne Chan	
Indonesia	Mariana Renata	
Philippines	Jose P. Laurel	
Philippines	Cora Almerino	
Viet Nam	Lan Cao	
Viet Nam	Duong Thu Huong	
Singapore	Mdm Heng Boey Hong	
5月4日新青森駅 19:24		
Mongolia	Chuluuny Khulan	
5月4日新青森駅 10:42		
South Korea	Kim Yik-yung	
Bhutan	Jigme Singye Wangchuck	
Bhutan	Allen Yu	
Brunei	Wu Chun	
Myanmar	Aung San Suu Kyi	
Russian Fed.	Mikhail Gorbachev	
Russian Fed.	Leo Tolstoy	
Russian Fed.	Raisa Gorbacheva	

## 送迎バスについて

USA	Isaac Asimov	
Japan	Osamu Dazai	
Japan	Yuichiro Miura	
USA	Andrew Wyeth	
USA	Condoleezza Rice	
USA	Isadora Duncan	

## ホテル受付スタッフの動きについて

5月4日9:00から1Fロビーにて受付スタッフ2人は順次受付を開始する。尚この際に、オープニングセレモニーの集合時間・会場を確認し、各自で参加者のしおりを持参してもらうよう伝える。ロビーが混雑しないよう常時列を整備し、ホテル側に迷惑をかけるないように注意を払うこと。到着が遅れている生徒について随時連絡を欠かさず、状況を本部に連絡すること。

## オープニングセレモニー

日程 5月4日 2F 双鶴の間

16:00 セレモニースタート

青森県知事挨拶

海外青年 代表挨拶

ワークショップ講師紹介、挨拶

全体の日程確認

### 司会

皆様、本日はこのコースフォーラムに参加いただき、ありがとうございます。ただいま16:00よりオープニングセレモニーを始めさせていただきます。まず始めに青森県知事、三村伸吾様からご挨拶頂きます。お願いいたします。

—ありがとうございます。

次に海外青年代表者からご挨拶を頂きます。お願いいたします。

—ありがとうございます。

次にワークショップの講師の紹介をいたします。京都大学名誉教授の松下和夫様と慶應義塾大学商学部教授の樋口美男様でございます。松下教授の専門は環境政策論で、国連気候変動枠組み条約や京都議定書の交渉に参加されました。樋口教授の専門は労働経済学と計量経済学で、第42回エコノミスト賞や平成28年秋の紫綬褒章を受賞されました。それでは松下教授からご挨拶頂きます。お願いいたします。

—ありがとうございます。

それでは最後に全体の日程確認に移ります。

本日はこの後17:00よりアイスブレイキングを行いますので双鶴の間にお集まりください。19:00からウェルカムディナーでございます。飛龍の間で行われますので、お間違えの無いようお願いいたします。食べ終わりましたら1日目は終了でございます。お部屋でしっかり休んでください。

2日目は7:00から8:30までの間朝食会場を利用できます。9:00から12:00までワークショップでございます。各自選んだ会場へ向かってください。昼食は12:00から14:00の間自由外食となっております。17:00から19:00までレクリエーションナイトでございます。双鶴の間にお集まり下さい。19:00から21:00までの間昼食と同様、自由外食となっております。夕食から戻り次第2日目の日程は終了となります。

3日目は7:00から8:30までの間朝食会場を利用できます。9:00からアグリ農園、下田公園キャンプ場、世増ダムをまわって18:00にホテルに到着予定でございます。移動のバスの中では皆様楽しんでもらえるようなゲームをご用意しております。19:00から20:30までの間は夕食会場を利用できます。遠足で体も疲れていると思われるのでお早めにお休みください。

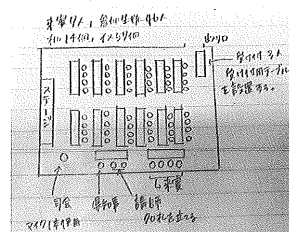
4日目は7:00から8:30までの間朝食会場を利用できます。9:00から12:00までワークショップでございます。各自選んだ会場へ向かってください。昼食は12:00から14:00の間自由外食となっております。17:00からは2回目のレクリエーションナイトですので、双鶴の間にお集まりください。19:00からはフェアウェルディナーですので飛龍の間にお集まりください。フェアウェルディナーが終了し次4日目の日程は終了でございます。翌日は最終日ですので各自の荷物をまとめておくようにしてください。

最終日5日目は7:00から8:30までの間朝食会場を利用できます。9:00から発表会、続けて10:00からクロージングセレモニーを行います。詳しくはしおりをお読み下さい。何か質問ございましたらスタッフにお気軽に尋ね下さい。

以上をもちましてオープニングセレモニーを終了させていただきます。

### スタッフマニュアル

- ・来賓と講師を双鶴の間まで案内する
- ・会場のテーブル、マイク、ネームプレート設置。下の画像参照。
- ・クロージングセレモニーも同じ配置。
- ・司会にマイクを2本渡す。司会は発表者に片方渡す
- ・終了し次第出口へ誘導する。



※スタッフ全員で、オープニングセレモニーで用いた椅子やテーブル等を部屋の端に寄せて片付ける。

17:00 スタート

スタッフA「みなさん、青森へようこそ。私は司会を務めさせていただく〇〇、〇〇、〇〇です。今日から始まる4泊5日間のプログラムを思い切り楽しんでいきましょう。さて、みなさん、少し緊張しているように見えますがどうでしょう。私たちは、皆さんがこれから寝食を共にする仲間たちと仲良くなれるように、アイスブレイキング企画をご用意しました。リラックスして、これから始まるに時間を楽しんでほしいと思います。まずは、じゃんけんゲームをしましょう！→じゃんけんゲームの説明に移る」

<じゃんけんゲーム>

- ①音楽をかけ、音楽がかかっている間は自由に歩き回る（スタッフはCDの操作を行う）。
- ②音楽が止まったら、ペアを見つけてじゃんけんをする。
- ③負けたほうが、名前を名乗る。
- ④じゃんけんした2人はチームとなり、音楽の間チームで自由に動き回る。
- ⑤音楽が止まったら、近くにいるチームと②で勝った人同士がじゃんけんを行う。
- ⑥負けたほうが、チーム全員の名を言う。
- ⑦これを繰り返し、全員がひとつのチームにまとまったらワンサイクル終了。

17:10 じゃんけんゲームスタート

なお、30分の間にこのゲームを何度か行うが、3回目からは名乗る際（チームのメンバーの名前を言う際）に「△△が好きな〇〇です」となにかひとつ情報を付け加える。  
※困っている人や具合の悪い人がいないか、スタッフ全員で見守る。

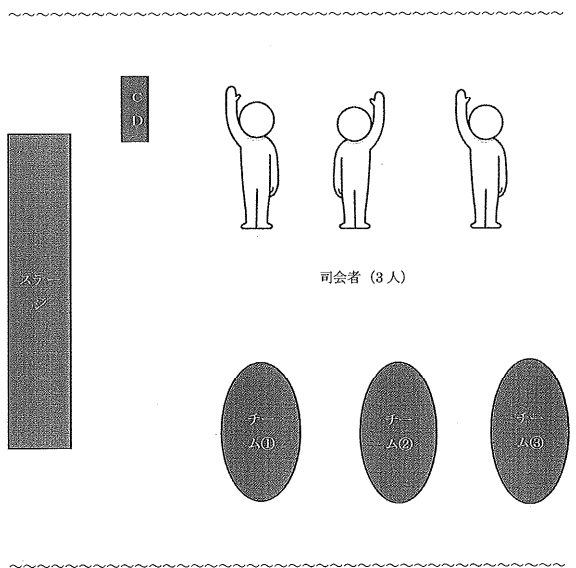
17:40 じゃんけんゲーム終了

スタッフB「いかがでしたか？少し、みんなと打ち解けられたでしょうか。ここで、15分間の休憩とします。お手洗い等は、ここで済ませてください。アイスブレイキングの再開は18:00としますので、17:55までに集合してください」  
※スタッフも休憩しつつ、リズムパーカッションに向けて打ち合わせをする。

17:55 集合

スタッフB「それでは、アイスブレイキングを再開します。次は、みんなでリズムパーカッションをしましょう！リズムパーカッションでは、みなさんが手や足を使ってリズムを刻

《リズムパーカッション時会場図》



※じゃんけんゲームは、自由に動き回る形式で行うので周りのスタッフは適宜サポートを行うこととする

み、素敵な音楽を作り出します」

18:00 リズムパーカッションスタート

スタッフC「これから、みなさんを3チームにパートわけします。オーストラリア、ブータン、ブルネイ、ミャンマー、カンボジア、中国、インド、中国のみなさんはチーム①です。イラン、日本、ラオス、マレーシア、モンゴル、ネパール、フィリピン、ロシアのみなさんはチーム②です。シンガポール、韓国、スリランカ、台湾、タイ、アメリカ、ベトナムのみなさんはチーム③です。チーム①のみなさんは右側にいるスタッフ（右側にいるスタッフAは手を振ってアピール）、チーム②のみなさんは真ん中にいるスタッフ（真ん中にいるスタッフBは手を振ってアピール）、チーム③のみなさんは私のところに、集合してください！」

※集まり次第、それぞれのリズムを伝授する。

※リズムは各々のスタッフに任せるが、車いすの方がいるチーム③のスタッフCは足を使わなくてもできるリズム（手拍子など）とする。

18:15 各パートでの練習終了

スタッフC「それでは、全体で合わせてみたいと思います。チーム①、用意はいいですか（スタッフA拍手）！チーム②、用意はいいですか（スタッフB拍手）！チーム③、用意はいいですか（スタッフC拍手）！それでは、いきます。せーの」  
※音楽なしで全体で合わせてみる。

18:25 音楽なしの合わせ終了

スタッフC「それでは、いよいよ音楽をかけてみたいと思います。楽しく、みんなでひとつになって音楽を作りましょう！」

スタッフBは「上を向いて歩こう」をかける。  
※みんなで、歌いながらリズムを刻んでもよし！

18:40 リズムパーカッション終了

スタッフA「いかがでしたか？みなさん、お互いに打ち解けられましたか？この広い世界の中で、同じ場所に集まり、同じ時間を共有できていることは奇跡です。この出会いを大切に、今日から始まる日程の中でかけがえない思い出を手にかけてください。今日は、ありがとうございました！」※スタッフは参加者たちを見送ったのち、会場の片付け

19:00 完全終了

<ウエルカムディナーのスタッフの動き>

・日時 5月4日 19:00~22:00

・場所 2F 飛龍の間

・スタッフ (4人)  
会場の入り口に立ち、参加者にネームプレートを渡す。名列表にチェックする。  
→すべての参加者に渡し終え次第会場へ待機し、参加者のサポートを行う。

<フェアウエルディナーのスタッフの動き>

・日時 5月7日 19:00~22:00

・場所 2F 飛龍の間

・スタッフ (4人)  
会場へ待機し、参加者のサポートを行う。

<その他の食事時のスタッフの動き>

5月5日~5月8日 朝食 (2F レストラン) 7:00~ 8:30  
5月6日 夕食 (2F 豊後の間) 19:00~20:30

※なお食事スタッフ4人の動きはオープニング・フェアウエルディナーに準じて行う。

# ワークショップ スタッフ用日程

## 開催場所

1日目 豊樹の間(No Poverty)  
青松の間(Responsible Consumption and Production)

2日目 青松の間(Responsible Consumption and Production)  
豊樹の間(No Poverty)

時刻	5月5日	
7:40	会場設営	・青松の間、豊樹の間を会場設営 ・資料作成のPCを用意
8:50	開場	・参加者を席へ案内
9:00	開始	・別室にいる講師を呼んでくる
:15	講師紹介	
:20	講演	
10:55	休憩	・講師に降壇してもら
11:10	参加者による 課題についての話し合い	
11:45	終了	

時刻	5月7日	
8:50	開場	・席への案内に4人
9:00	開始	
:05	参加者による 課題についての話し合い	
10:30	休憩	
10:45	再開	
11:45	終了	・青松の間、豊樹の間で 会場撤去

Theme	Group	Nationality	Name	Gender	Age
No poverty	A	Australia	Julia Gillard	F	17
		Bhutan	Jigme Singye Wangchuck	M	17
		Brunei	Wu Chun	M	17
		Myanmar	Aung San Suu Kyi	F	17
		China (PRC)	Ran Geng	M	16
	B	Iran	Ali Mosaffa	M	17
		Japan	Yuichiro Miura	M	17
		Laos	Pradal Serey	M	17
		Malaysia	Adnan Yaakob	M	16
		Russian Fed.	Mikhail Gorbachev	M	16
	C	Russian Fed.	Leo Tolstoy	M	17
		Singapore	Christina Chuang	F	16
		South Korea	Kimsooja	F	18
		South Korea	Kim Yik-yung	F	17
		Taiwan	Yin Haiguang	M	17
	D	Indonesia	Mariana Renata	F	16
		Taiwan	Xu Fuguan	M	16
		Thailand	Ajahn Sumedho	M	17
		USA	Andrew Wyeth	M	17
		USA	Isadora Duncan	F	16
USA	Isaac Asimov	M	18		
Responsible Consumption and Productio	A	Australia	Charles Kingsfor Smith	M	17
		Cambodia	Vichara Dany	F	16
		China (PRC)	Jiang Qing	F	18
		India	Akbar	M	17
		India	Indira Gandhi	F	17
	B	Japan	Osamu Dazai	M	16
		Japan	Kyoichi Sawada	F	17
		Malaysia	Abdul Razak Hussein	M	17
		Mongolia	Chuluuny Khulan	F	18
		Philippines	Jose P. Laurel	M	17
	C	Nepal	Tara Devi Tuladhar	F	18
		Philippines	Cora Almerino	F	16
		Russian Fed.	Raisa Gorbacheva	F	16
		Singapore	Anita Ho	F	17
		Sri Lanka	Leslie Goonewardena	F	16
	D	Taiwan	Jade Y. Chen	F	16
		USA	Condoleezza Rice	F	18
		Viet Nam	Lan Cao	F	17
		Viet Nam	Duong Thu Huong	F	17

## 《自由外食時のスタッフの動き》

・日時 2日目 昼食 12:00~14:00  
夕食 19:00~21:00

4日目 昼食 12:00~14:00

・スタッフ 11人

### ① 受付 (2人)

ロビーに座り、自由外食へ行く参加者を名列表にチェックする。  
ホテルに帰ってきた参加者も同様に名列表にチェックする。

### ② ホテル待機 (1人)

ホテルの入り口に待機し、参加者のサポートを行う。また、緊急時の対応に準じて対応する。なお、ハラル食事の希望調査を参加者該当8名に自由外食前日に行い、ホテル厨房へ事前に連絡しておく。

### ③ 駅前待機 (1人)

青森駅前に待機し、参加者のサポートを行う。また、緊急時の誘導などを行う。

### 各店舗前待機 (7人)

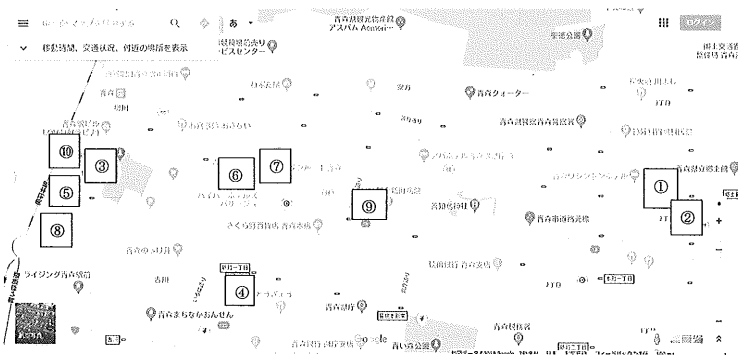
参加者のしおりに掲載した④「Pent house」⑤「ITALIAN TOMATO」⑥「いきなりステーキ」⑦「味の札幌 あさり」⑧「長尾」⑨「あすか」⑩「STAR BUCKS」の店舗前に一人ずつ待機し、参加者のサポートを行う。また、緊急時の対応を行う。(地図参照)

### 緊急時の対応について

自分の担当区域で緊急事態が発生した場合、すぐに本部に連絡する。

本部連絡先→(017-732-224)

※急病人が出た場合はスタッフマニュアルの緊急時の対応に準じて行動する。



場所：2F 双鶴の間  
 (スタッフでレクリエーションナイトで使うプロジェクター等の準備)

※スタッフが各国に発表で使う道具の準備を呼びかける

司会： みなさん、レクリエーションナイトの日目は、  
 <1日目>  
 オーストラリア、ブータン、ブルネイ、ミャンマー、カンボジア、中国、インド、  
 インドネシア、イラン、日本、ラオス  
 <2日目>  
 マレーシア、モンゴル、ネパール、フィリピン、ロシア、シンガポール、韓国、  
 スリランカ、台湾、タイ、アメリカ、ベトナムの順で、今流行ってる歌、ダンス、  
 観光名所など、それぞれの国の特色について発表してもらいたいと思います。各  
 国発表と質疑応答含めて7分で発表してもらいます。まずは、(オーストラリア  
 or マレーシア)の皆さんです。  
 (オーストラリア or マレーシア)の皆さん、お願いします。

(ここまで司会が話している間に準備が完了し、発表)

(各国7〜8分で発表)

(発表間の進行)

司会： ○○の皆さんありがとうございました。  
 次に○○の皆さん、お願いします。

(ベトナム終了後)

司会： (2か国目)の皆さん、ありがとうございました。  
 これですべての国の発表が終了しました。

※ここで時間があれば参加者に感想を求める

司会：私は〜(司会が感想を述べる)今回のレクリエーションナイトを通して、皆  
 さんそれぞれ自分の国の魅力を再発見し、また、他国の文化の魅力や自国との違  
 いなど、たくさんの知識を得ることができたと思います。この経験を糧に、今後、  
 ディスカッションの際には、視点を広げて取り組みましょう。

## エクサカーション (遠足)

日程：2019年5月6日 月曜日

- 8:00〜 スタッフはホテルのロビーに集合し、当日の最終確認をする。
- 9:00〜 ホテル出発  
 バス移動 (1時間30分間)  
 レクリエーションを行う。  
 英語版マジカルバナナ (○○is△△といったように)  
 食事の班をくじ引きで決める。
- 10:30〜11:35 参加者はアグリのおいらせへ  
 スタッフ3人を残し他のスタッフは参加せず、イオンモール下田へ行き発注し  
 ていた食材を受け取り、下田公園キャンプ場へ向かう。到着し次第各班への食材  
 の分配を行い、既に業者が設営しているキャンプセットの微調整や最終確認を  
 して参加者の到着を待つ。  
 残留スタッフは参加者や農園の従業員のサポート(通訳など)に回る。緊急時は最  
 寄りの避難所への誘導や救急車の手配を行う。
- 11:35〜13:40 参加者到着  
 調理の手伝いや火加減の確認など安全に気を配る。キャンプセットの撤収は業  
 者がしてくれるので、スタッフと参加者はある程度まとめて置いておく。その後  
 スタッフは業者に物品の受け渡しをする。
- 13:40〜 下田公園キャンプ場出発  
 バス移動 (40分間)  
 バスガイドによる説明を聞く
- 14:20〜16:00 世増ダム  
 参加者がはぐれないように注意を払う。もし所用で離れる参加者がいれば付き  
 添う。
- 16:00〜 世増ダム出発  
 バス移動 (2時間)  
 参加者の疲労も考え、軽めのレクリエーションを行う。  
 ビンゴ (景品は青森に因んだ物です：スタッフお手製金魚ねぶた、  
 こぎん刺しコースター)

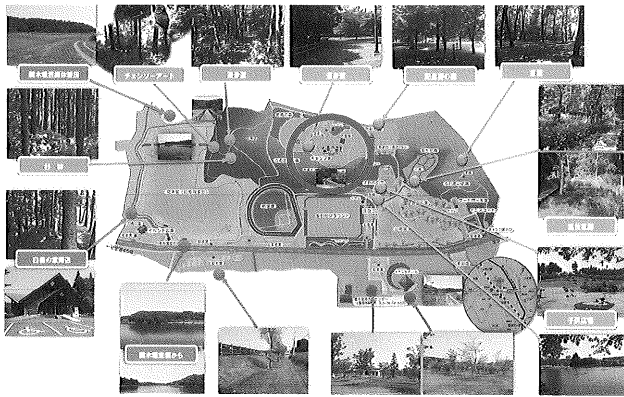
## エクサカーション (遠足)

- 18:00 ホテル到着  
 スタッフは参加者の体調を確認した後、業務終了とする。  
 ※何かトラブルがあった場合や、時間の遅れが見られた際は本部に連絡する。  
 ※スタッフは各場所を出発する前にトイレの見回りをし、汚れていた場合は清掃する。
- 最寄りの病院
  - ・国民健康保険おいらせ病院  
 (青森県上北郡おいらせ町上明堂1-1 ℡0178-52-3111)
  - ・八戸市立市民病院  
 (八戸市田向3丁目1-1 ℡0178-72-5115)
- 最寄り避難所
  - ・曙集会所  
 (上北郡おいらせ町中下田145)
  - ・八戸市南郷公民館  
 (八戸市南郷大字島守字馳下り14-1 ℡0178-83-2757)
- 必要物品<スタッフ各自で前日までに準備する>
  - ・飲み物
  - ・雨具
  - ・敷物
  - ・エチケット袋
  - ・ウェットティッシュ
  - ・ごみ袋 (分別用のため多めに)
  - ・財布 (緊急時対応のため)
  - ・救急セット (救護室のものを持っていく)
  - ・タオル (多めに)
  - ・予備の服
  - ・カメラ (スタッフ1人)



# エクスカージョン (遠足)

下田公園キャンプ場見取り図



## 結果発表会の要綱

司会：Aグループの皆さんありがとうございました。続いて「No Poverty」Bグループは発表準備を開始してください。

～P 補はAグループの片づけとBグループの準備の手伝い&待機～

司会：準備が整いました。「No Poverty」Bグループは発表を開始してください。

↓Bグループ発表

司会：質疑応答に移ります。質問がある方はいらっしゃいますか。

↓質疑応答

司会：Bグループの皆さんありがとうございました。続いて「No Poverty」Cグループは発表準備を開始してください。

～P 補は先ほどと同様に片付けと準備の手伝い&待機～

司会：準備が整いました。「No Poverty」Cグループは発表を開始してください。

↓Cグループ発表

司会：質疑応答に移ります。質問がある方はいらっしゃいますか。

↓質疑応答

司会：Cグループの皆さんありがとうございました。続いて「No Poverty」Dグループは発表準備を開始してください。

～P 補は先ほどと同様に片付けと準備の手伝い&待機～

司会：準備が整いました。「No Poverty」Dグループは発表を開始してください。

↓Dグループ発表

司会：質疑応答に移ります。質問がある方はいらっしゃいますか。

↓質疑応答

司会：Dグループの皆さんありがとうございました。続いて「Responsible Consumption and Production」Aグループは発表準備を開始してください。

～P 補は先ほどと同様に片付けと準備の手伝い&待機～

司会：準備が整いました。「Responsible Consumption and Production」Aグループは発表を開始してください。

↓Aグループ発表

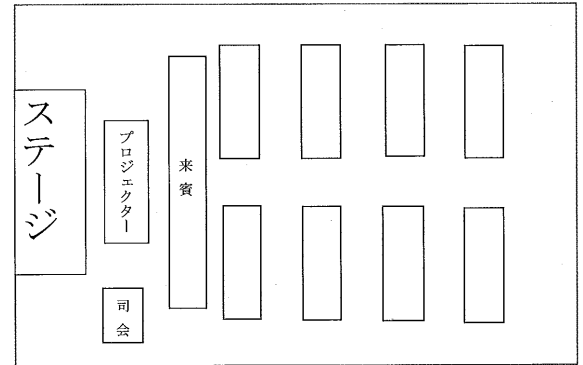
司会：質疑応答に移ります。質問がある方はいらっしゃいますか。

↓質疑応答

# 結果発表会の要綱

日時 5月8日 午前9時～10時

場所 双鶏の間



スタッフがやること

- ・司会
- ・プロジェクター操作の補助(以下、P 補)

流れ

司会：ただいま9:00をもちまして結果発表会を始めます。各班発表時間は設置時間を除き、質疑応答を合わせ6分間です。それでは、「No Poverty」Aグループは発表準備を開始してください。

～ここでP 補はAグループのプロジェクター準備を手伝い、以降アクシデント発生時に備え、近くで待機する。～

司会：準備が整いました。「No Poverty」Aグループは発表を開始してください。

↓Aグループ発表

司会：質疑応答に移ります。質問がある方はいらっしゃいますか。

↓質疑応答

## 結果発表会の要綱

司会：Aグループの皆さんありがとうございました。続いて「Responsible Consumption and Production」Bグループは発表準備を開始してください。

～P 補は先ほどと同様に片付けと準備の手伝い&待機～

司会：準備が整いました。「Responsible Consumption and Production」Bグループは発表を開始してください。

↓Bグループ発表

司会：質疑応答に移ります。質問がある方はいらっしゃいますか。

↓質疑応答

司会：Bグループの皆さんありがとうございました。続いて「Responsible Consumption and Production」Cグループは発表準備を開始してください。

～P 補は先ほどと同様に片付け準備の手伝い&待機～

司会：準備が整いました。「Responsible Consumption and Production」Cグループは発表を開始してください。

↓Cグループ発表

司会：質疑応答に移ります。質問がある方はいらっしゃいますか。

↓質疑応答

司会：Cグループの皆さんありがとうございました。続いて「Responsible Consumption and Production」Dグループは発表準備を開始してください。

～P 補は先ほどと同様に片付けと準備の手伝い&待機～

司会：準備が整いました。「Responsible Consumption and Production」Dグループは発表を開始してください。

↓Dグループ発表

司会：質疑応答に移ります。質問がある方はいらっしゃいますか。

↓質疑応答

司会：Dグループの皆さんありがとうございました。以上をもちまして結果発表会を終ります。続いて、感想発表に移ります。発表者は「No Poverty」「Responsible Consumption and Production」ともに1人ずつです。代表者は前に出てきてください。それでは、「No Poverty」代表〇〇さんをお願いします。

↓感想発表 1分

# クロージングセレモニー

日程 5月8日 2F 双鶴の間

10:00 セレモニースタート

- 青森市長挨拶
- 海外青年代表者 感想発表
- 青森高校校長挨拶
- 発表の表彰
- 集合写真撮影

## 司会

ただいまよりクロージングセレモニーに移ります。

まず初めに、青森市長の小野寺晃彦様にご挨拶を頂きます。よろしくお願いたします。

—ありがとうございました。

では次に、海外青年代表者から全体の感想発表をしていただきます。よろしくお願いたします。

—ありがとうございました。

次に、青森高校校長共倉慎次様にご挨拶を頂きます。よろしくお願いたします。

—ありがとうございました。

それでは先程の発表会の表彰へと移らせていただきます。

最後に集合写真を撮りますので皆様はスタッフの指示に従い、ステージにお並び下さい。

—席にお戻りください。

これにてクロージングセレモニーを終了させていただきます。皆様4日間お疲れ様でした。気を付けてお帰りください。

## スタッフマニュアル

- ・発表会が終わり次第クロージングセレモニーに移る。
  - 司会にマイクを二本わたし、司会は片方を発表者にわたす。
- ・発表の評価が終わったらすぐ賞状作成。
- ・集合写真撮影時にステージに並ぶ誘導をする。3列ほどにする。
  - 1列目はしゃがむ。2列目は中腰。3列目はたったまま。と指示を出す。
- ・終わった後出口で来賓、教員にお土産（検印ボールペン）を渡す。
- ・災害時はホテルのスタッフの指示に従い避難誘導を行う。

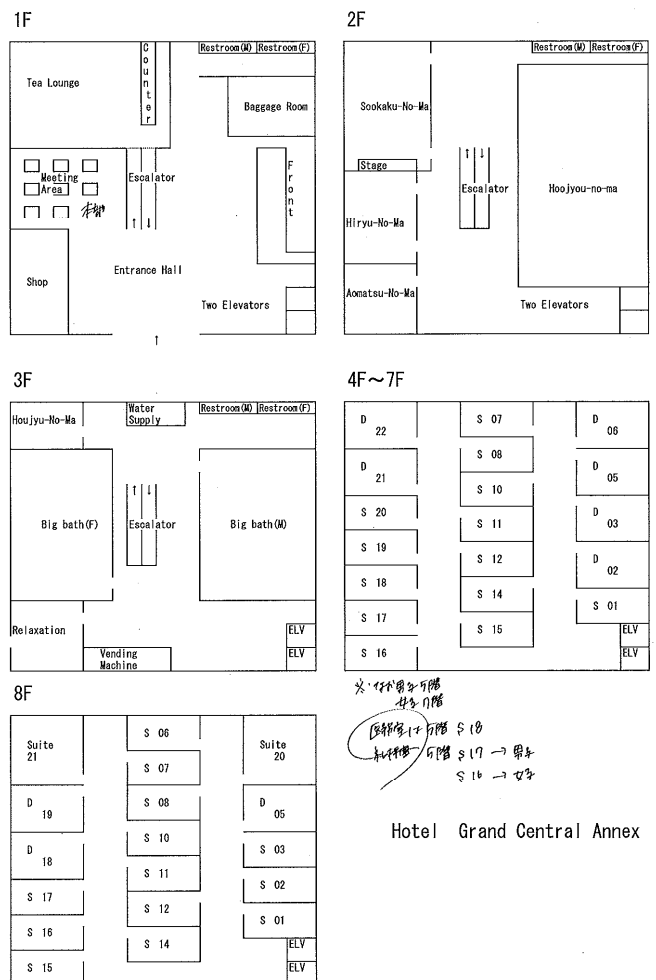
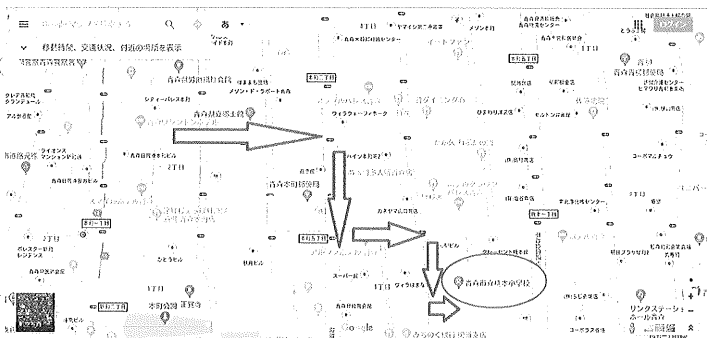
# 緊急時の対応について

地震等災害が発生し避難が必要な場合

- ①スタッフが館内見回りを行い、参加者全員をロビーへ集合させる。
  - 点呼をとり、全員がいるか確認する。
- ②スタッフが誘導し、青森市立橋本小学校（青森市橋本1丁目9-17）へ避難する。
  - 到着したらもう一度点呼を行う。
- ③避難先の指示に従い臨機応変に動く。

参加者及びスタッフが体調不良になる又はけがをした場合

- I. 比較的軽度であるとき
    - 必ずスタッフ同伴で救護室へ行き、適切な処置（応急処置・休養をとらせる等）を行う。
  - II. 重症である又は判断に迷うとき
    - ＃7119（救急相談センター）へ電話する。音声ガイダンスが流れるので「2」を選ぶ。症状を詳しく説明し、助言をもらう。緊急性がある場合は相談員が救急車を手配してくれるので、指示に従うこと。
- I・IIいずれのときも一番先に本部（017-742-223）へ連絡すること。



支出予定伝票

(会計担当へ)

請求者 3組氏名 島山袖月  
 発注先: Hotel Grand Central Annex

利用・消費予定日: 5月 4~8日

名称	単価	数	小計	使用目的・仕様・備考
飛騨の間借用	4,000円	520	2,080,000円	
豊松の間借用	3,000円	927	2,781,000円	
豊松の間借用	2,000円	918	1,836,000円	
受付用椅子	500円	735	367,500円	
シングルルーム35部屋	24,500円	51	1,249,500円	
ツインルーム12部屋	14,400円	57	820,800円	
合計			2,598,500円	

備考

支出予定伝票

(会計担当へ)

請求者 3組氏名 島山袖月  
 発注先: Hotel Grand Central Annex

利用・消費予定日: 5月 4~8日

名称	単価	数	小計	使用目的・仕様・備考
受付用テーブル(大)クロス付	1,000円	8	8,000円	
会議入り口立て看板	8,000円	8	64,000円	
会議内横看板	1,500円	81	120,000円	
相上名札2個	2,000円	2	4,000円	
相上名札4個	4,000円	4	16,000円	
立て看板	8,000円	1	8,000円	
合計			202,000円	

備考

支出予定伝票

(会計担当へ)

請求者 3組氏名 島山袖月  
 発注先: 株式会社XYZバス

利用・消費予定日: 5月 4~8日

名称	単価	数	小計	使用目的・仕様・備考
シャボン1台	390円+90円/34.0m	17	17,149.7円	
大鍋1台	600円	211	126,600円	
中鍋1台	500円	187	93,500円	
小鍋1台	400円	229	93,480円	
バスガイド	1,000円	9	9,000円	
軽便現金	400円	9	3,600円	
大鍋1台糊塗	300円	13	3,900円	
中鍋1台糊塗	300円	11	3,300円	
小鍋1台糊塗	200円	11	2,200円	
合計			258,537円	

備考

支出予定伝票

別紙⑥

(会計担当へ)

請求者

3組氏名 島山袖月

発注先: Hotel Grand Central Annex

利用・消費予定日:

5月

4~8日

名称	単価	数	小計	使用目的・仕様・備考
お食事(朝食)60人分	8,000円	432	3,456,000円	
お食事(夕食)60人分	4,200円	242	1,008,000円	ビュッフェ(松)形式
お食事(夕食)60人分	3,000円	130	390,000円	ビュッフェ(梅)形式
双鶴の間借用	6,000円	95	570,000円	
ワイヤレスマイク2本	2,000円	27	54,000円	
プロジェクター	4,000円	20	80,000円	
スクリーン	2,000円	20	40,000円	
CD・DVDプレイヤー	1,000円	20	20,000円	
ホワイトボード	500円	4	2,000円	
合計			1,753,800円	

備考

模擬発注・相談仕様書

別紙③

担当教員に提出 →相談→価格等決定

作成者： 2年 3組 氏名 島山柚月

会社名（正式名称）：イオンモール下田

担当部署： 食品

先方担当者氏名（フルネーム）：

電話番号： 0176 50 3200 様

FAX番号：

利用日：平成 30年 5月 6日

名 称	数 量	回 数	使用目的・仕 様・備 考
玉ねぎ、ピーマン、人参	13		
トウモロコシ	4		
キャベツ	2		

備考・相談内容

スタッフの諸注意

持ち物

- ・携帯電話やスマートフォン等の連絡器具
- ・スタッフ本人の保険証
- ・昼食と飲み物（必要に応じて）
- ・スタッフマニュアル等の事前に配布された資料
- ・筆記用具
- ・普通救命講習1の修了証
- ・3日目は雨天時に備えた雨具（カッパが好ましい）
- ・腕時計等の、時間が分かるもの
- ・必要な者は各自が服用している薬

事前の準備事項

- ・各自スタッフマニュアル及びスタッフの諸注意、全体日程を熟読しておくこと。
- ・貴重品は各自で厳重に管理すること。運営側は紛失や破損等の責任は一切負わない。
- ・救命講習（普通救命講習1）の受講を義務付ける。  
なお救命講習は、消防合同庁舎（毎月第二水曜日午前9時～12時まで）または浪岡消防署（奇数月第三日曜日午前9時～12時まで）で行っている。  
申し込みは消防本部警防課（017-775-0854）、浪岡消防署（0172-62-3119）へ各自で電話し受講すること。受講後普通救命講習1の修了証を受け取る。

基本的な行動・服装について

- ・集合時間10分前には指定された場所に待機していること。
- ・ユースフォーラムが行われる5日間は配布されたTシャツを着用すること。やむを得ない場合は私服のTシャツでもいいが、出来る限り配布されたものを着用する。
- ・配布されたスタッフのネームプレートは常に首にかけていること。
- ・ホテルからの外出や別行動はしないこと。
- ・ロビーの売店は使用しないこと。
- ・本ユースフォーラムのスタッフであることを自覚し、軽率な態度や行動によってトラブルを起こしたり被害にあたりたくないよう気をつけること。
- ・緊急時やトラブル発生時は本部に連絡し、臨機応変に対応すること。

新町、青森駅周辺店舗様へ

ユースフォーラムの開催に伴う  
混雑についてお願い

青森県立青森高校 島山柚月

5月4日～5月8日に、Hotel Grand Central Annexでユースフォーラムを開催いたします。その際、5月5日と5月7日の12:00～14:00、19:00～21:00に自由外食を予定しております。参加者に貴店を紹介させて頂いたため、その時間帯に外国人が増えると思われ、ご迷惑をおかけしますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

また、ユースフォーラム参加者と思われる生徒が何かトラブルに巻き込まれていると判断された場合には、下記の本部電話番号までご連絡ください。速やかに当スタッフが店舗までお伺いさせて頂きます。ご理解ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

緊急連絡先（ユースフォーラム本部） 017-742-223

2019年2月22日

Hotel Grand Central Annex 調理スタッフの皆様

青森高校

2-3 島山柚月

ハラール食事提供依頼書

拝啓

貴社、ますますご隆盛のことと、お喜び申し上げます。

さて、貴社において5月4日～8日に行われますユースフォーラムにおきましてハラール食品を用いた昼食、夕食の申し込みがあり、皆様のお力をお借りしご連絡させていただきました。なお、別紙の方にメニューの例を掲載させていただきますのでご参考にいただければ幸いです。

敬具

記

ハラール料理

2日目 昼食・夕食

4日目 昼食

※なお、希望人数は前日に調査しお伝えさせていただきます（最大8人）

単価 昼食 1300円

夕食 700円

支払 ユースフォーラム終了時ホテルの方にお支払

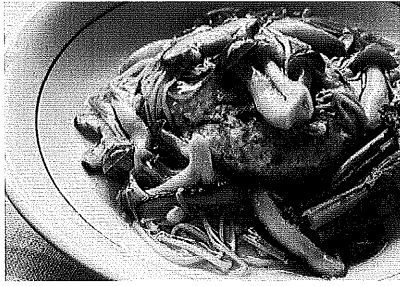
以上

■ハンバーグ(分量2人分)

- ・鶏ひき肉 80g
- ・冷ごはん 20g
- ・木綿豆腐 100g
- ・卵白 1/2個
- ・ひじき 5g

■餡かけ(分量2人分)

- ・しめじ 1/2パック
- ・えのき 1/2パック
- ・干しシイタケ 1枚
- ・出し汁 60g
- ・塩 少々
- ・醤油 小さじ1/2
- ・片栗粉 小さじ1/2
- ・水 大さじ1/2



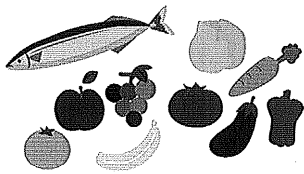
ハラム (禁じられている) なもの

豚・犬

酒

その他、かぎづめのある動物など

ハラル (許されている) 食品の例



野菜、果物、魚、卵、牛乳

禁止されている動物以外の食肉

ワークショップ スタッフ用日程

開催場所

1日目 豊樹の間(No Poverty)  
青松の間(Responsible Consumption and Production)

2日目 青松の間(Responsible Consumption and Production)  
豊樹の間(No Poverty)

時刻	5月5日	
7:40	会場設営	・青松の間、豊樹の間を会場設営 ・資料作成のPCを用意
8:50	開場	・参加者を席へ案内
9:00	開始	・別室にいる講師を呼んでくる
:15	講師紹介	
:20	講演	
10:55	休憩	・講師に降壇してもらう
11:10	参加者による 課題についての話し合い	
11:45	終了	

時刻	5月7日	
8:50	開場	・席への案内に4人
9:00	開始	
:05	参加者による 課題についての話し合い	
10:30	休憩	
10:45	再開	
11:45	終了	・青松の間、豊樹の間で 会場撤去

# WORKSHOP

The venue First day  
 Aomatsu-no-ma (No poverty)  
 Hoojyou-no-ma (Responsible Consumption and Production)

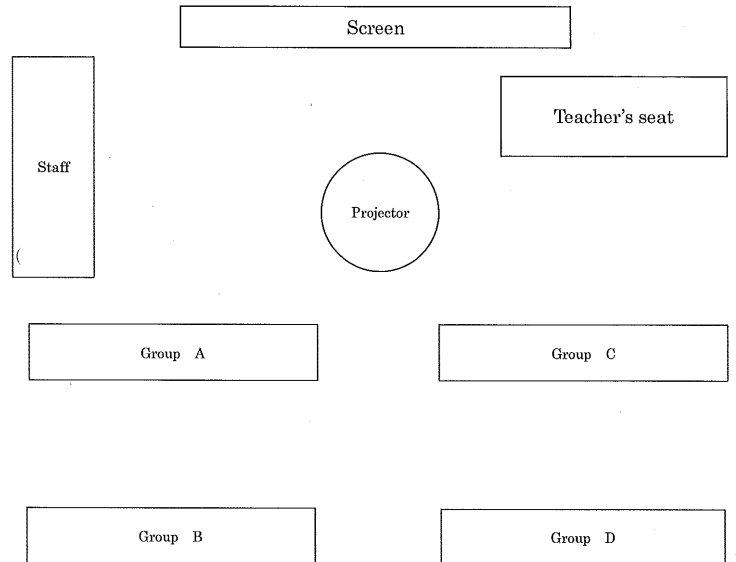
Second day  
 Aomatsu-no-ma (Responsible Consumption and Production)  
 Hoojyou-no-ma (No poverty)

time table	May 5th	May 7th
8:50	opening	opening
9:00	start	start
9:15	introduction of lecturers	discussion about the theme by participants
9:20	lecture	
10:30		rest break
:45		restart
:55	rest break	
11:10	discussion about the theme by participants	
11:45	finish	finish

# Venue Map at Workshop

First day  
 Aomatsu-no-ma (No poverty)  
 Hoojyou-no-ma (Responsible Consumption and Production)

Second day  
 Aomatsu-no-ma (Responsible Consumption and Production)  
 Hoojyou-no-ma (No poverty)



全て車対対応  
補助席有り7.55席

B 先生  
(18人)  
2-3 席

## 運行相談書

¥ 270,707 268537

年 月 日 作成

月日	バス種別	行先 (乗客)	料 金
5/4	大座席人 中座席人 小座席11人 ジャンボ座席人	8:01 新青森駅, 13:15 小形駅 新青森駅 → 青森市街 2701-1	八ッ場乗降時間: 大400円/中300円/小200円 乗車料: 大600円・中500円・小400円 予約費 200円/席/200円 5.7 Km 4179 円 バスガイド 1000円× 1 席 駐車料金 1000円× 1 席 1000 円
5/6	大座席人 中座席人 小座席11人 ジャンボ座席人	大形駅, 小形駅 青森市本町 2701-1 → 79'の里かいと → 新青森駅 下田公園キャナル 8月通 → 世増サム → 青森市本町 2701-1	八ッ場乗降時間: 大400円/中300円/小200円 乗車料: 大600円・中500円・小400円 予約費 200円/席/200円 2.11 Km 21100 円 バスガイド 1000円× 9 席 9000 円 駐車料金 1000円× 3 席 3000 円
5/4	大座席人 中座席人 小座席11人 ジャンボ座席人	10:42 小形駅 新青森駅 → 青森市本町 空席	八ッ場乗降時間: 大400円/中300円/小200円 乗車料: 大600円・中500円・小400円 予約費 200円/席/200円 13 Km 5200 円 バスガイド 1000円× 1 席 1000 円 駐車料金 1000円× 1 席 1000 円
5/5	大座席人 中座席人 小座席11人 ジャンボ座席人	11:24 小形駅 新青森駅 → 青森市本町 2701-1	八ッ場乗降時間: 大400円/中300円/小200円 乗車料: 大600円・中500円・小400円 予約費 200円/席/200円 5.7 Km 1879 円 バスガイド 1000円× 1 席 1000 円 駐車料金 1000円× 1 席 1000 円
5/8	大座席人 中座席人 小座席11人 ジャンボ座席人	14:51 小形駅 青森市本町 2701-1 → 新青森駅	八ッ場乗降時間: 大400円/中300円/小200円 乗車料: 大600円・中500円・小400円 予約費 200円/席/200円 0.3 Km 300 円 バスガイド 1000円× 1 席 1000 円 駐車料金 1000円× 1 席 1000 円
5/8	大座席人 中座席人 小座席11人 ジャンボ座席人	14:55 小形駅 青森市本町 2701-1 → 青森空港 空席	八ッ場乗降時間: 大400円/中300円/小200円 乗車料: 大600円・中500円・小400円 予約費 200円/席/200円 13 Km 6500 円 バスガイド 1000円× 1 席 1000 円 駐車料金 1000円× 1 席 1000 円
5/10	大座席人 中座席人 小座席11人 ジャンボ座席人	14:51 小形駅 青森市本町 2701-1 → 新青森駅	八ッ場乗降時間: 大400円/中300円/小200円 乗車料: 大600円・中500円・小400円 予約費 200円/席/200円 5.7 Km 1879 円 バスガイド 1000円× 1 席 1000 円 駐車料金 1000円× 1 席 1000 円
1	大座席人 中座席人 小座席11人 ジャンボ座席人		八ッ場乗降時間: 大400円/中300円/小200円 乗車料: 大600円・中500円・小400円 予約費 200円/席/200円 Km バスガイド 1000円× 1 席 1000 円 駐車料金 1000円× 1 席 1000 円

ホテル (新青森2丁目1-1) からの距離・時間 <一般道利用>

新青森駅: 5.7 Km (20分)	立役多の館: 41Km (55分)	大形町: 150 Km (2時間30分)
新青森空港: 13.0 Km (45分)	新青森: 47 Km (1時間10分)	碓氷神社: 120 Km (2時間40分)
三内丸山遺跡: 8.6 Km (25分)	田舎館村: 37 Km (1時間)	十和田湖: 76 Km (1時間50分)
浅水水鏡: 16 Km (35分)	弘前城: 46 Km (1時間15分)	雄略: 83 Km (2時間10分)
津和野: 8.8 Km (25分)	若木山神社: 55 Km (1時間30分)	種彦海岸: 110 Km (2時間20分)
後藤長坂: 16 Km (45分)	千賀敷海岸: 78 Km (1時間50分)	

有料道路 空港有料道路 (大・中座: 750円 / 小座: 210円)  
 みちのく有料道路 (大・中座: 3020円 / 小座: 850円) 40時間  
 東北自動車道 青森中央一大形弘前 (大・中座: 1910円 / 小座: 220円) 25分  
 八戸道 青森中央一(碓氷橋) 八戸 (大・中座: 7110円 / 小座: 430円) 2時間10分  
 駐車料金: 一律1000円

株式会社XYZ バス





# -INTERNATIONAL- YOUTH FORUM

<Recruiting students>

Let's create the world with our hands

[Date] 5/4/8/2019 ( 4 nights 5days)

**[Eligible person]**

- ✔ English is at a conversation level.
- ✔ You are high school 1~3 as of 4/1/2019.
- ✔ The number of people recruited is up to 40.

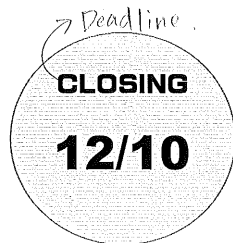
**[Cost]** About 200,000~300,000 yen to transport from your home country. Travel expenses will be borne by you. However, we will bear the move to Aomori Airport・Shin Aomori Station~Hotel at arrival and departure by hope.

<Address> Aomori High School

8-1-2, Sakuragawa, Aomori City, AOMORI 030-0945 JAPAN

TEL: +81-17-742-2411 MAIL: seikousgh@gmail.com

Staff: Hatakeyama Yuzuki



**○Purpose**

Through various activities,  
I will learn cross-cultural adaptability and communication skills indispensable for global leaders.

**<Program>**

**○Workshop**

- ・ No Poverty
- ・ Responsible Consumption and Production

**○Excursion**

Please write the information

described below and send it to Aomori High School by E-mail.

・Name

・Phone number

**バーチャルユースフォーラム**

～ワークショップにおける講師プロフィールと選定理由～

講師名：樋口 美雄(みぐち よしお)氏

慶應義塾大学 商学部 教授/独立行政法人経済産業研究所 (RIETI) 上席研究員  
専門は労働経済学、計量経済学。

1975年慶應義塾大学商学部卒、80年同大学博士課程商学研究科単位取得後退学。米国のペンシルベニア大学経済学部客員研究員(1985-1987)を経て、1991年より現職。1993年一橋大学経済研究所客員教授、米国のスタンフォード大学経済政策研究所客員研究員慶應義塾大学商学部助教授(1995-1996)、オハイオ州立大学経済学部客員教授、国民生活金融公庫総合研究所長を経て、現在、日本学術会議会員、内閣府・統計委員会、財務省財務総合政策研究所特別研究官などを兼任。第42回エコノミスト賞を受賞。平成28年秋の紫綬褒章受賞。

著書に「雇用と失業の経済学」(日本経済新聞社)、「日本経済と就業構造」(東洋経済新報社)など。

**選定理由**

今回のワークショップのテーマは「No Poverty」である。

現在、貧困には二つの定義が存在している。「絶対的貧困」と「相対的貧困」である。

絶対的貧困とは、人間が人間として必要最低限の生活を営むことができない状態を指し、一日1.90ドル以下、日本円にすると約200円以下で生活する人たちが絶対的貧困者と定義されている。

相対的貧困では、全世界の所得の中央値の半分未満の世帯員を相対的貧困者と定義している。単純な購買力よりも国内の所得格差に注目する指標であるため、日本など比較的豊かな先進国でも高い割合が示される。日本の場合、日本の所得の中央値は概ね年収250万円である。その半分にあたる年収125万円以下は、日本では貧困と定義されるということだ。

樋口美雄氏は労働経済学、計量経済学を専門としている。樋口氏が執筆した「日本の所得格差と所得変動」では、格差が生み出す貧困(相対的貧困)について書いている。

国内外の貧困問題に造詣が深い樋口氏にご教授いただき、講師として招きたいと思っている。

## 2018 Aomori High School Youthforum Registration Form

**バーチャルユースフォーラム**

～ワークショップにおける講師プロフィールと選定理由～

講師名：松下和夫(まつした かずお)氏

京都大学名誉教授/地球環境戦略研究機関 (IGES) シニアフェロー  
専門は環境政策論、気候変動政策、環境ガバナンス論。

1948年生まれ。1972年に環境庁入庁後、大気規制課長、環境保全対策課長等を歴任、OECD 環境局、国連地球サミット(UNCED)事務局(上級環境計画官)勤務。2001～13年京都大学大学院地球環境学教授(地球環境政策論)を務める。

環境行政、特に地球環境・国際協力に長く関わり、国連気候変動枠組条約や京都議定書の交渉に参画。現在、公益財団法人地球環境戦略研究機関シニアフェロー、国際協力機構環境ガイドライン異議申立審査役。

著書に『東アジア連携の道をひらく：脱炭素社会・エネルギー・食糧』(17年、花伝社)、『地球環境学への旅』(11年、文化科学高等研究院出版局)、『環境政策学のすすめ』(07年、丸善)、『環境ガバナンス論』(07年、京都大学学術出版会)、『環境ガバナンス』(02年、岩波書店)、『環境政治入門』(00年、平凡社)など。

**選定理由**

今回のワークショップのテーマは「Responsible Consumption and Production」だ。これはSDGsの目標12「つくる責任、つかう責任」である。

SDGs(持続可能な開発目標)とは、2015年9月の国連サミットで採択されたもので、国連加盟193か国が2016年～2030年の15年間で達成するために掲げた目標であり、その中でも目標12はすべての廃棄物の環境に配慮した管理を達成し、持続可能な消費と生産のパターンを確保することを挙げている。

松下和夫氏は環境政策論などを専門としており、国連気候変動枠組条約等の交渉にも関わっている。SDGsを実現するための政策に精通しており、数多くの著書もある。

SDGsを実現するために第一線で活躍してきた先生からご教授頂くため、講師として招きたいと思っている。

Name	Family name	First name
Date of Birth		
Age		
Gender	Male	Female
Nationality		
Address		
TEL		
E-mail		
School name		
Class year		
Religion		
Past medical history		
Allergies		
Dietary restriction		
Chronic disease		
Height and weight		
Leader's name		
Remarks column		

Prior Knowledge

Definition

There are two definitions of 'No Poverty'. They are [Extreme Poverty] and [Relative Poverty]. [Extreme Poverty] points the condition which people cannot make living that the lowest level as a human and people who are living by 1.90 dollars (about 200 yen) or less per day are defined (the extreme poor people). On the other hand, regarding [Relative Poverty], people who get less than half of income median in all household are defined (the relative poor people). Even in developed country, this index is relative so the index is high. In Japan, half of income median is about 2.5 million per year so people who get 1.25 million or less per year are defined (the relative poor people).

Relative Poverty

In two terms, we want to focus on [Relative Poverty] in the workshop. Generally, it is said that the problem of [Relative Poverty] is the point which isn't kept equity of society. The organization that is researching [Relative Poverty] is OECD. Legal name of OECD is [Organization for Economic Cooperation and Development]. The purpose of this organization is Economic growth and Development and Trade. The reason why the organization which has the purpose of Economic growth is researching [Relative Poverty] is that they think that [Relative Poverty] is related to Economic growth.

SDGs

Please look at next paper figure. This is SDGs. In late years, SDGs(Sustainable Development Goals) is announced as clear international goals. In 2015, 193 countries persuanted this goals.

At this point, let's take a look at the first goal of SDGs.

1 No Poverty Terminate poverty of any form of all over the place Moreover, this goal has some point about poverty. For example,
1.2 Until 2030, reduce the half of people who are in the condition of poverty all over the world.

Responsible Consumption and Production

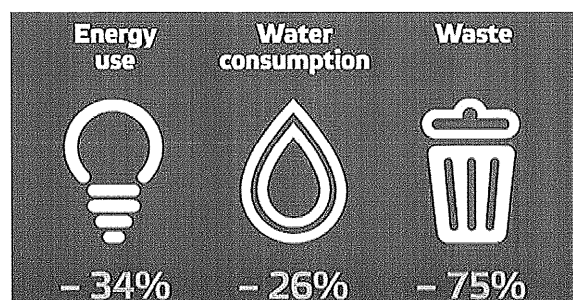
Definition

The term 'Responsible Consumption and Production' is for the cycling and sustainable society. This term is 12<sup>th</sup> objective on the SDGs, which was set at UN summit on September 2015, to confirm all countries are going to search for ways to realize the sustainable development.

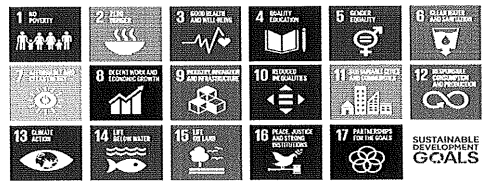
SDGs (Sustainable Developing goals)

SDGs are international goals, and in 2015, 193 countries persuanted this goals. In SDGs, Responsible Consumption and Production is explained as follows.

To achieve sustainable development, we urgently need to reduce our ecological footprint\* by changing the way we produce and consume goods and resources. Agriculture is the biggest user of water worldwide, and irrigation now claims close to 70 percent of all freshwater for human use. The efficient management of our shared natural resources, and the way we dispose of toxic waste and pollutants, are important targets to achieve this goal. Encouraging industries, businesses and consumers to recycle and reduce waste is important, as is supporting a shift to more sustainable patterns of consumption. Halving the global food waste at the retailer and consumer levels is al-so key for creating more efficient production and supply chains. ecological footprint (burden on the environment caused by human's everyday lives)



SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS  
17 GOALS TO TRANSFORM OUR WORLD



In this way, not only developing countries but also developed countries are working on reducing poverty because it is our duty.

Virtual Youth Forum

We think that the participants of virtual youth forum are students who are in developed country (because of the traveling expenses or etc.).

Therefore, we think that we should focus on [Relative Poverty] because [Relative Poverty] is created by social polarization and often seen in developed country. We want you to think about your country and discuss with other countries students.

This time, we invite 'Kazuo Matsushita'. He is working on [Relative Poverty] and has worked in OECD environmental center. So we will be able to ask him about poverty so much.

But most important thing is to enjoy this forum and make use of this forum very much.

At the end, thank you for reading the paper which are written by us. Please come to Japan with big hope in your eyes.

From Aomori high school.

The status quo

In spite of these activities, however, the status on now is not efficient enough to feed all the people on the earth and to stop the temperature's rise. For example, 8 billion people are suffering from lacking food supplies, while 1.3 billion tons of food are wasted per year. And nearly all of food wasted in wealthy area is actually edible, ironically.

Wasting food means wasting available food resources, of course, but it means wasting the energy and water to grow the products and to transport them, labor. America and Australia have not ratified Kyoto protocol that force the countries to reduce production of Greenhouse Gas (carbon dioxide, methane, etc...)

About 70 billion people are living on earth currently. By 2030, the number is estimated to increase up to 84 billion, by 2050, it's up to 96 billion. Do you think today's circulation system can last till 2050?

To realize sustainable development, all countries have to endeavor to reduce the waste and Greenhouse Gas. And it is said wealthy, developed countries` help is the crucial key to improve this situation effectively.

Maybe, you all are the students of developed country. This time, you are especially going to talk about the way to reduce Greenhouse Gas. And I guess, regarding this area, support from developed country to developing country can change this situation dramatically. I hope you pay attention to this point.

You mightn't make good idea or conclusion, but enjoying The Virtual Youth Forum is the most important thing.

We are looking forward to seeing you at Hotel Grand Central Annex

From Aomori high school



Table with columns for room types (シングル, ツイン, スイート) and their respective counts and prices.

Table for breakfast (朝食) with columns for room type and price.

Table for room rates (お客室料金) with columns for room type and price.

お食事会場: 2F 楽園の間

Hotel Grand Central Annex 青森市本町1丁目1

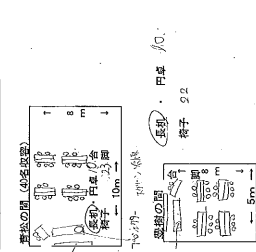
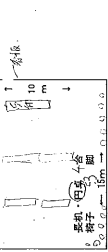
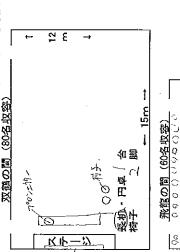
Table with columns for room types and their respective counts and prices.

Table for breakfast (朝食) with columns for room type and price.

Table for room rates (お客室料金) with columns for room type and price.

お食事会場: 2F 楽園の間

Hotel Grand Central Annex 青森市本町1丁目1



お食事会場: 2F 楽園の間

Hotel Grand Central Annex 青森市本町1丁目1

Table with columns for room types and their respective counts and prices.

Table for breakfast (朝食) with columns for room type and price.

Table for room rates (お客室料金) with columns for room type and price.

お食事会場: 2F 楽園の間

Hotel Grand Central Annex 青森市本町1丁目1

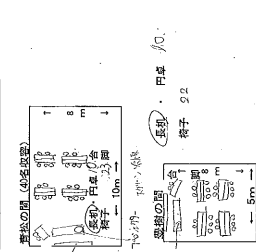
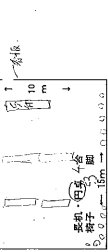
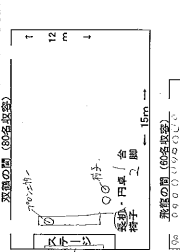
Table with columns for room types and their respective counts and prices.

Table for breakfast (朝食) with columns for room type and price.

Table for room rates (お客室料金) with columns for room type and price.

お食事会場: 2F 楽園の間

Hotel Grand Central Annex 青森市本町1丁目1



お食事会場: 2F 楽園の間

Hotel Grand Central Annex 青森市本町1丁目1

Table with columns for room types and their respective counts and prices.

Table for breakfast (朝食) with columns for room type and price.

Table for room rates (お客室料金) with columns for room type and price.

お食事会場: 2F 楽園の間

Hotel Grand Central Annex 青森市本町1丁目1

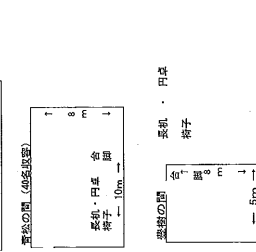
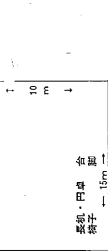
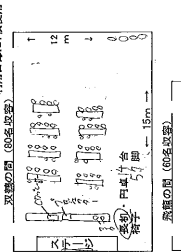
Table with columns for room types and their respective counts and prices.

Table for breakfast (朝食) with columns for room type and price.

Table for room rates (お客室料金) with columns for room type and price.

お食事会場: 2F 楽園の間

Hotel Grand Central Annex 青森市本町1丁目1



お食事会場: 2F 楽園の間

Hotel Grand Central Annex 青森市本町1丁目1

Table with columns for room types and their respective counts and prices.

Table for breakfast (朝食) with columns for room type and price.

Table for room rates (お客室料金) with columns for room type and price.

お食事会場: 2F 楽園の間

Hotel Grand Central Annex 青森市本町1丁目1

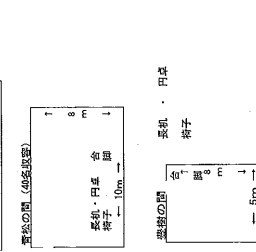
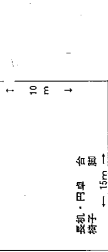
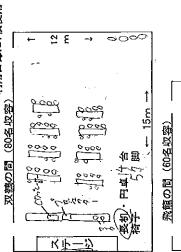
Table with columns for room types and their respective counts and prices.

Table for breakfast (朝食) with columns for room type and price.

Table for room rates (お客室料金) with columns for room type and price.

お食事会場: 2F 楽園の間

Hotel Grand Central Annex 青森市本町1丁目1



お食事会場: 2F 楽園の間

Hotel Grand Central Annex 青森市本町1丁目1

## 4 安全対策

海外研修実施に当たり、平成 28 年度より、以下の緊急時対応策綱領が整備された。

(図表 71)

### 青森高等学校海外研修緊急時対応策綱領

#### 事故・病気・怪我への対応

##### ■ 事故・病気発見者

- ・事故現場に居合わせた(到着した)引率者は、怪我の程度、意識の有無などの状況を迅速に把握する。
- ・状況に応じ、救急車を要請する。
- ・救急車到着まで心肺蘇生(AEDの使用を含む)や応急手当などを行う。
- ・事故発生時の状況及び発生直後の対応状況を正確かつ迅速に把握する。
- ・引率責任者に連絡する。

※大きな事故などの現場で生徒氏名などを確認した場合  
速やかに事故現場から保護者に連絡をする。

##### ※事故現場から通報を受けた場合

引率者が生徒名簿を持ち事故現場に向かい当該生徒の氏名などの確認を行う。

##### ※救急車が到着していない場合

現場状況に応じ当該生徒の様子を観察すると同時に、2次災害を防ぐ。  
必要に応じて迅速に救急車を要請し、応急措置を取ったのち、  
引率責任者に連絡する。

消防・救急車：995

警察：999

生命に係わらない場合の救急車要請電話番号：1777

私的有料サービス

ポリスホットライン：1800-225-0000

##### ■ 引率責任者

- ・怪我・病気の度合い(別表参照)により学校責任者(管理職)に連絡する。

##### ■ 引率者全員

- ・事故を目撃した生徒や事故の発生によりショックを受けている生徒がいる場合、できうる限り心のケアを行う。

##### ■ 管理職

- ・保護者に速やかに状況の報告を行い、現地から直接連絡を入れる必要があるかどうかについて指示をする。
- ・事故の概要について、速やかに教育庁へ報告し、対応策などについて指導・助言を受けるとともに、状況の変化に応じ適宜報告する。
- ・混乱を避けるため、報道機関や関係機関などとの対応は管理職が当たり、窓口を一本化する。

#### 災害時の対応

##### ■ 集合場所

- ・班行動をさせる場合は災害時の集合場所を事前に指定するとともに、電話による連絡が可能な場合は迅速に安否の連絡を入れる旨、指示する。
- ・広範囲に及ぶ災害があり、かつ電話等によるお互いの連絡が付かない場合、活動拠点に応じて次のように集合場所を定める。(①、②は優先順位を表す)

チャイナタウン周辺 ① スリマリアマン寺院前

② マックスウェルフードセンター

ラウパサフェスティバル周辺

- ① ラウパサフェスティバル
- ② SGX Centre 2 (JR支店のビル)

リトルインディア周辺

- ① スリ・ヴィーラマカリアマン寺院前
- ② リトル・インディア駅

オーチャードロード周辺

- ① 高島屋前
- ② 伊勢丹 Scotts 前

・上記以外の場所で同様の事態が起きた場合、集合場所は以下のとおりとする。

- ① ラベンダーホテル
- ② 在シンガポール日本大使館

16 Nassim Road・オーチャード通りの伊勢丹スコッツから高島屋と反対方向へ約 800m。  
電話：6235 8855)

(集合場所は 生徒のしおりにも記載)

■ 対応

ア 安全確保

- ・生徒を安全な場所へ誘導する。
- ・二次災害の起こらない場所に留まる。必要に応じて移動させる。
- ・全員の安否確認ができない場合は、引率者 1 名が予め指定された集合場所で身の安全を確保しながら待機する。他の引率教員は安否が確認できた生徒を、必要に応じて更に安全な場所に移動させる。

イ 状況把握

- ・生徒の負傷の有無や程度を確認する。

ウ 連絡

- ・連絡手段が確保でき次第、引率責任者は学校あるいは管理職に状況報告をし、指示を仰ぐ。
- ・日本国大使館 (6235 8855) に連絡を取る。  
旅行前に「たびレジ」への登録、県教委・文科省を通じて安全確保の要請をしておく。

緊急時対応一覧表

(図表 72)

- 応急処置で研修継続
- △ 経過観察 (引率者帯同)・研修継続
- ▲ 研修中断・ホテルで経過観察 (引率者帯同)
- × 病院へ搬送 (引率者同行) / 管理職・保護者に連絡
- 医師と相談し、保護者を現地へ要請 (引率者が引き渡し)

病気等

	嘔吐	下痢
12h~17h	■	■
6h~11h	×	×
3h~5h	▲※	▲※
1h~2h	△※	△※
1h未満	△※	△※

※ 37.5度以上なら×

熱のみの症状

	対処
40度以上	■
39度	×
38度 水分補給不可	×
38度 水分補給可	▲
37度(6h)	△

感染症

症 状	対 処
感染症にかかっている生徒	■
感染症にかかっている疑いのある生徒 (発熱・症状は上の表参照)	▲ 別室確保
感染症の疑いのある者との濃厚接触のあった者	△ マスク着用・体温は測る

熱中症

基本的対処

首、わきの下、足のつけ根を冷たいタオルや水で冷やす。/うちわなどで扇ぎ、体内の熱を放散させる。/体温と脈拍を測る。/心臓の方へ向けて手足のマッサージをする。

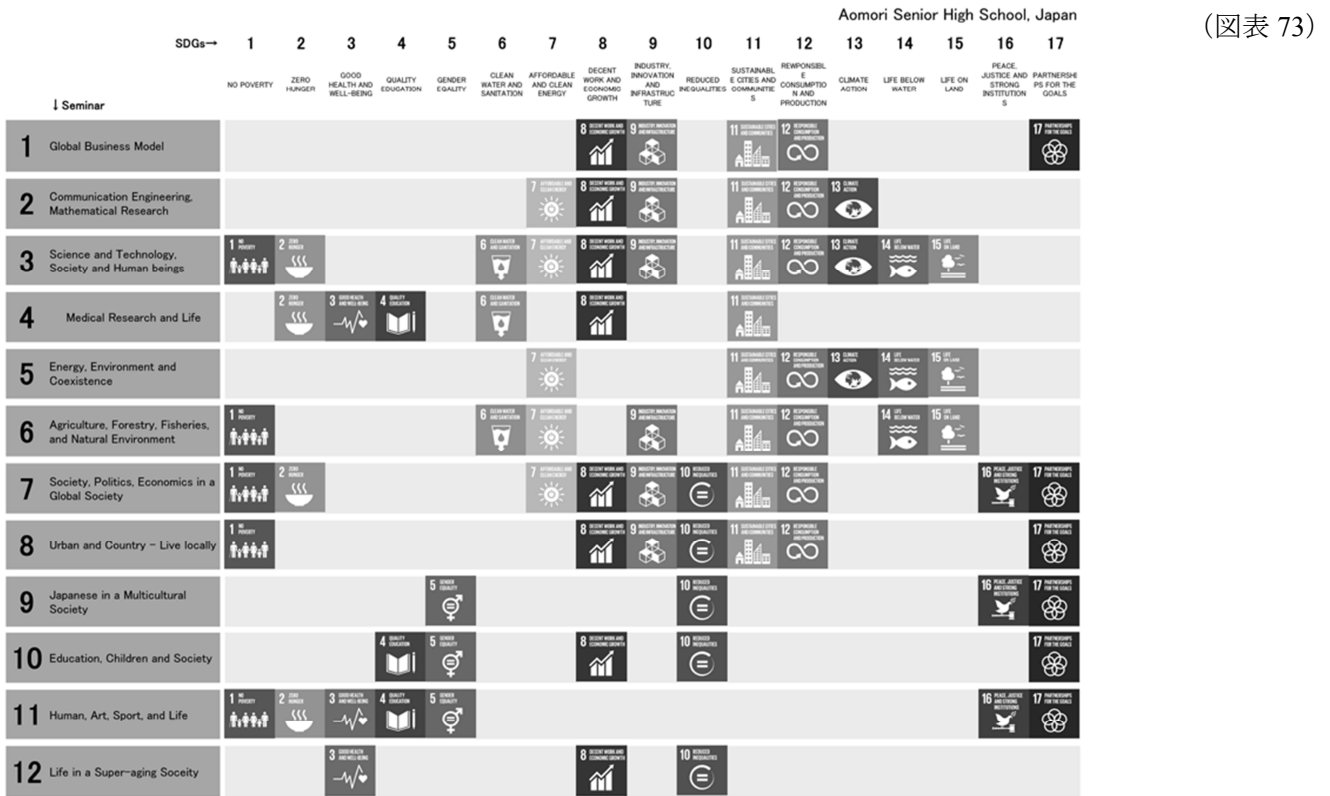
症 状	対 処
意識障害、けいれん / 呼びかけや刺激への反応がない / 高体温	■ 救急車の要請
自力で水分補給ができない / 吐き気・嘔吐 / 体がぐったりする	×
力が入らない / 倦怠感がある / 大量の発汗	▲
めまい、立ちくらみ / 筋肉の「こむら返り」 / 軽い頭痛	△ 水分・塩分の補給 冷却

怪我等

症 状	対 処
重度の出血、交通事故等による怪我、意識不明等	■
骨折・頭部、頸部の打撲や損傷による意識障害	× 救急車要請
重度のねんざ (靭帯損傷の疑い)・重度の打撲	×
※骨折・頭部、頸部の打撲や損傷で 24時間頭痛と吐き気が続く場合	×
ねんざ、打撲	△
軽いねんざ	△
突き指、切り傷、擦り傷、軽い打撲等	○

## 5 外部連携のための資料

本校のゼミ活動では、生徒の興味関心に基づき毎年 80 を超えるグループが結成される。学校として一つのテーマに絞り込めば連携先も固定できるが、生徒の自主性を重んじているため学校としての共通テーマは設定していない。統一テーマに代わり、海外の学校との共通言語として SDGs を採用している。各グループの研究が何らかの形で SDGs 結びついているため、連携先の生徒・学生とのマッチングがしやすくなっている。以下は平成 29 年度時点での SDGS とゼミの関連図である。



## 6 外部講師リスト

外部講師招聘のために平成 28 年度にリストを作成した。今後生徒の興味関心に合わせてゼミで活用されれば、予算のない中でも活動が活性化されると考える。

(図表 74)

大学名	専攻名称	所属名称	住所 (〒)	電話番号	FAX	窓口担当	担当者メールアドレス	講師名	所属先	所属職	講師経歴	HPアドレス	講師内容	備考
各種	教育工学上プロジェクト (教育工学プロジェクト)	弘前大学	〒036-8500 弘前県弘前市大森町1番地	0172-39-2029						准教	准教	<a href="http://www.hiroaki.ac.jp/">http://www.hiroaki.ac.jp/</a>	各種ゼミ対応	
各種	高大連携	筑波大学	〒305-8577 茨城県つくば市南1-1-4	03-853-2216		教育連携推進 社会連携課	<a href="mailto:kaodai@uniteda.ac.jp">kaodai@uniteda.ac.jp</a>			准教	准教	<a href="http://www.uniteda.ac.jp/">http://www.uniteda.ac.jp/</a>	各種ゼミ対応	
各種	CoopE 大学連携研究部 コンソーシアム推進課	東京大学	〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 新大塚	03-5941-2000 03-5941-2204		大学連携推進センター 連携推進課	<a href="mailto:info@coop-e.t.u-tokyo.ac.jp">info@coop-e.t.u-tokyo.ac.jp</a>			准教	准教	<a href="http://coop-e.t.u-tokyo.ac.jp/">http://coop-e.t.u-tokyo.ac.jp/</a>	各種ゼミ対応	
各種	海洋フロンティアセンター	東京大学	〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 新大塚1号館1号館1号館	03-5941-4000 03-5941-4400		東京大学 海洋フロンティアセンター	<a href="http://www.marine.t.u-tokyo.ac.jp">www.marine.t.u-tokyo.ac.jp</a>			准教	准教	<a href="http://www.marine.t.u-tokyo.ac.jp/">http://www.marine.t.u-tokyo.ac.jp/</a>	各種ゼミ対応	
各種	出前授業	宇都宮大学	〒319-8505 栃木県宇都宮市桜木2-150	033-849-0040		宇都宮大学 総合教育センター 出前授業課	<a href="http://www.utsunomiya.ac.jp/">http://www.utsunomiya.ac.jp/</a>			准教	准教	<a href="http://www.utsunomiya.ac.jp/">http://www.utsunomiya.ac.jp/</a>	各種ゼミ対応	
応用経済	日本経済大学 国際経営学部 経営学系	日本経済大学	〒252-0292 静岡県静岡市清水区1-6-35 清水駅前ビル3階	03-323-7000 03-323-5555			<a href="mailto:glp@jpu.ac.jp">glp@jpu.ac.jp</a>		東京経済大学 上野区長崎 奥田 謙	准教	准教	<a href="http://www.jpu.ac.jp/">http://www.jpu.ac.jp/</a>	各専攻で協定を結んでいるゼミにのみ対応。各ゼミのHPを参照してください。	
海外	IBC (TOEIC)	IBC (TOEIC)	〒100-0014 東京都千代田区千代田1-4-1 千代田ビル10F	03-5521-2911 03-5521-5515			<a href="http://www.ibc.jp/">http://www.ibc.jp/</a>	1級英検 2級英検 TOEICスコア 英語講師 英語講師		准教	准教	<a href="http://www.ibc.jp/">http://www.ibc.jp/</a>	海外出張講師による各種授業 各ゼミのHPを参照してください。	
国際研究	内閣府国際平和協力本部 事務局長就任式	内閣府	〒100-8570 東京都千代田区千代田1-1-1 国会中野ビル4階 国際課 国際協力課 （7階事務室から4階事務室まで移動してください）	03-3591-7240 03-3591-12540						准教	准教	<a href="http://www.kofa.go.jp/">http://www.kofa.go.jp/</a>	各種ゼミ対応	原則、請求書は毎月請求書に 加算し込みが必要。
外国語科	弘前大学	弘前大学 外国語センター	〒036-8501 弘前県弘前市大森町2-1 2号館 2号館2号館	0172-39-2000 0172-35-1259			<a href="mailto:off@lang.ac.jp">off@lang.ac.jp</a>			准教	准教		日本語科の協定 (協定締結しているゼミ)に 限って、外国語科の協定 (一斉実施の授業)は 「協定締結 外国語科」を参照	
専攻 経済学	経済学系 経済学系 経済学系	東京大学	〒100-0012 東京都千代田区千代田1-4-1 千代田ビル10F 経済学系 経済学系 経済学系	03-5521-2911 03-5521-5515						准教	准教		各ゼミで協定を結んでいる。	

SGH研究報告書  
(平成26年度指定)  
発行日 平成31年3月23日

発行所 青森県立青森高等学校  
(校長 宍倉 慎次)  
〒030-0945  
青森市桜川8丁目1-2  
電話 017-742-2411  
FAX 017-742-6074

印刷所 株式会社 アート企画  
〒030-0013  
青森市港町二丁目10番1号  
電話 017741-1931

表紙題字 相内 菜摘